

一六夜もねてまつけも長し白妙の衣手とかじ君にあふ迄
 一七沖つ波高師の濱の濱松の名にこそ人を待ち渡りつれ
 一八雨降らむ日ぞ思ほゆる久方の月にだに來ぬ人の心を
 一九宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つ如君を社まて
 二〇君をのみあき臥待の月影は八千代も爰に有明をせよ
 二一淺茅生の小野の印の空言をいか也と云て君をば待たむ
 二二斯のみや君をば待たむ山端に更けて出くる月待が如
 二三道のべの草を冬野に踏枯し我立待つと妹に告たべ
 二四花見つゝ人待つ時は白妙の袖かとのみぞ誤たれける
 二五とならば間にもあらなむ夏夜は照月影ぞ人頼めなる
 二六住吉の待つ程久に成ぬれば蘆鶴の音に泣ぬ日ぞなき
 二七山高ま出すいざよふ月待と人には云ひて君待つ我ぞ
 二八今來むと云ひて計りに長月の有明の月を待ち出る哉
 二九松風の聞えむ時はいつもつれなき涙袖や濡さむ
 三〇月夜には來ぬ人またる掻き曇り雨も降らなむ侘つ哉
 三一五月雨のたそがれ時の月影の朧げにやは我人をまつ
 三二今々我待つ妹は鈴鹿山吹さこす風の早も來なむ
 三三行水の影やはみゆる片岸の松は苦しき物にざりける
 三四來ぬ人を月に倣ばやぬは玉の夜毎に我は影をだに見む
 三五まだず
 三六來むと云て來ぬ夜も有をこじと云を來むとは待て
 三七來むと云て來ざりし夜も有しかば待ぬしも社待に
 三八住吉のさしもせじとや思らむ待てよとの見えずも有哉
 三九夕げにもうらにもつける今宵だに來まぬ君をば待たむ
 四〇夕されば野べの秋萩うら若み露に枯かね君待兼ねつ
 四一君がゆきけ長く成ぬ山たづの迎を行む待らには待じ
 四二人をよぶ
 四二我宿の萩の花咲けり見に望ませ今二日計あらば散なむ

一六月讀の光にきませ足曳の山かさなりて遠からなく
 一七月讀の光は清くてらせども心ぞ感ふ堪へぬおもひに
 一八月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり
 一九打群し來む人は猶こがの森木々の紅葉のまた散ぬまに
 二〇我宿の萩咲に鳥散らぬ間に早來て見べし奈良の里人
 二一雁首の初聲聞てたつ宿の秋萩咲けり見にこわが背子
 二二月影に道惑ひして我宿に久しく見えぬ人も見えなむ
 二三暗き夜は宜も來まらず梅花咲る月夜に出まきじとや
 二四道のたより
 二五過難に人は止れど山の井の便も聞けば淺くぞ有ける
 二六年をへて花の便に來て問はゞ最どあだなる名をや
 二七若菜摘む春の便りに春日野の花の心は知にしものを
 二八問るゝもあだにはあれど此春は花の便ぞ嬉しかりける
 二九玉鉾の道行ぶりに思はずも妹に逢見て戀ふる頃かも
 三〇味氣なく花の便に問るれば我さへあだに成ぬべら也
 三一長月のその初雁のたよりに思ふ心は聞えてぬかも
 三二ふみたがへ
 三三玉鉾の道は常にも惑はなむ人をとふ共我がかと思はむ
 三四濱千鳥跡絶ぬれば逢坂をふみ惑はせる心地こそすれ
 三五定なく數多にかくる武藏鎧いかに乗ればか踏は違ふる
 三六孰こと踏惑はせる玉章ぞ爰はたなへの磯ならなくに
 三七人づて
 三八古郷のならしの岡の時鳥言づてやりきいかに告さや
 三九大和べに狩も行しか斯しつゝ我せがと通はしやるを
 四〇波にのみ濡れつる物を吹風の便嬉しき海士のつり舟
 四一三千年に花咲く桃の珍しく誰か言傳ぞ我にはあらじ

一春はまづ東路よりぞ若草の言の葉つけよ武藏野の原
 二忘なむ物とは兼て思ひにき心の占ぞまさしかりける
 三唐衣かきたえ君が忘るれば返してもさす戀しけれ共
 四打返し思ひいづれば石上ふりにし戀は忘れにけり
 五忘らるゝ身を秋懸てくる雁の數多つらげに見ゆる君哉
 六三輪の山いかに待見む年ふ共尋る人も有じと思へば
 七雁音のまつに年ふる君故に我は歎きとなりぬべら也
 八今更に思出じと忍ぶれど戀しきにこそ忍びわびぬれ
 九忘れても有べき物を芦原に思ひ出るのなくぞ侘しき
 一〇岩くさり落くる水の波間にも人を忘るゝ我が心かは
 一一秋の夜は春日忘るゝ物なれや霞に霧や千重増らむ
 一二つらくとも我忘れめや秋山に鳴く鹿計り契りし物を
 一三秋山の霜降覆ひ木の葉ちる年はへ行けど我忘れめや
 一四きえ人の額髪ゆふありそ海のゆふそみ心我忘れめや
 一五わすられぬ心ぞ今は恨めしきかつは限と思ふものから
 一六限とは思ふ物からしかすがに忘れぬるをば侘しき
 一七笹の葉にはだれ降覆ひけなばかも忘れむと云へば
 一八面忘いかなる人のする物ぞ我はし兼つきてし思へば
 一九久方の天照る月の雲間にも君を忘れて我思はなくに
 二〇大名兒を遠方野邊に刈草の束のあひだも我忘れめや
 二一つらき人忘なむとて祓ふれば禊ぐかひなく戀社増れ
 二二或妻書云此間有心變之願而無戀社古本正
 二三あどろかす
 二四足曳の山田のひたのひたふるに忘るゝ人を驚すかな
 二五ともべき程は無れど片時も問ぬはつらき物にざりける

一六櫻花今は盛になりぬらむたのためし人の音づれもせぬ
 一七暮果つる年の心も恥かしく問てや君が春になしつる
 一八月影に我をみしまの芥河あくや君が音づれもせぬ
 一九思ひ出で戀しき時は初雁の鳴て渡ると人は知らずや
 二〇あめのみかど
 二一道に逢てゑみせしからに降雪の消えはけぬがに
 二二忘れにし人をそ更に近江なる老曾の杜と思出でつる
 二三露霜に衣手濡れて今だにも妹がかり行かむ夜 更ぬ共
 二四朝な／＼草の葉繁く置露の消果てむと云し君かも
 二五打返し見まぐぞほしき故郷の大和撫子色やかはれる
 二六昔をこよ
 二七岩代の野中に立てる結び松心もとけず昔をぞおもふ
 二八三吉野の瀧の白玉知らねども語りしつげば昔思はゆ
 二九常磐なる岩やは今も有けれど住ける人ぞ常無りける
 三〇ありまのみこ
 三一岩代の濱松が枝を引結びまさきくあらば又返りこむ
 三二ながのいきまろ
 三三岩代の岸の松が枝結びけむ人は返りて又も見むかも
 三四人
 三五後見むと君が結べる岩代の小松がうれな又も見むかも
 三六貫
 三七年ひきに咲たる宿の花見れば昔戀しき物思ひぞつく
 三八業
 三九年ひきに咲たる宿の花見れば昔戀しき物思ひぞつく
 四〇平
 四一月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一は元の身にして
 四一人
 四二今のみには非ず古の人ぞ優りてなきさへなきし
 四三玉匣三室の山を行きしかばおもしらくして昔思ほゆ
 四四貫
 四五古になほ立ち歸る心かな戀しきごとにも忘れして

女郎花見心に心はなぐさまでいと昔の秋ぞ戀しき
 時鳥去年のふる聲聞くからにあはれ昔の思ほゆる哉
 昔あへる人
 眉根かき下いぶかしみ思へるに古人をあひ見つる哉
 窟戸に立てる松の木なれ見れば昔の人を逢見るが如
 昔見し人は宜しも老にけり松の木高くなりける哉
 住吉の里にこしかば春花のまじ珍しく我逢へかも
 大凡に我思ほえは下にきて穢れし衣を取てきめやは
 古の人我なれやさ波のふるき都の見ればかなしき
 現にも夢にも我は思ざりき舊にし君に今宵逢むとは
 今迄に忘ぬ人は世にもあらじ己が穢々年のへぬれば
 石上よるのやしらの其のかみの古き心は今も忘れじ
 獨寝の夜はだの寒さしり初めて昔の人ぞ今も戀しき
 大嶋に水をはこびし早舟の早くも人に相見てしがな
 石上よるの道の草わけて清水汲みには父も歸らむ
 古の野中の清水ぬるければもとの心をしる人ぞ汲む
 大伴のみより
 我妹子は常世の國に住けらし昔見しより若をまじ鳥
 伊勢
 古の心も絶えずゆく水に我まつ影もけふこそはみめ
 あつらふ 人 鷹
 春來れば先さき草の幸有し後も逢見む戀ふな我妹子
 人 鷹
 三輪川の水泡逆巻き行水のこと返すなよ思初めたり
 君と我人ぞさくなるいで君は人のなかつ事聞立つなゆめ
 七いる間ちのおほやが原のいはむづら引かばぬるぬる
 ちぎる
 かち人の渡れど濡れぬ江にあれば又逢坂の關は
 六間とを長くと思はし時鳥いむさ月をば過しやはせぬ
 七露を重み靡くな柳あれ二人結びしとを人知るらめや
 君もあれも生れば斯て未にも枝別せぬ木とも成なむ

白菅の女の、萩原心よりおもはぬ君が衣にすらるゝ
 三輪山の山下とよみ行水のみをし絶ずは後も我つま
 一みつなへの浦潮満つな鹿島なる釣する蟹を見て歸來む
 人 鷹
 千早振うどの渡りの早き瀬に逢す有とも後も我つま
 大伴のかたみ
 一瀬に波千重さらす行水の後にも逢むけふならず共
 人をたづぬ たづふさ
 君を思ひ興津の島に鳴たづの尋來ればぞ有とだにきく
 三輪の山印の杉はかれずとも誰かは人の我を尋ねむ
 難波江の堀江にあさる蘆鶴の尋ねや行かむ君が隨に
 遠妻し高きありせば知す共たづの濱の尋なきまじ
 めづらし
 一稀にこむ君見むと社左手の弓取る方の眉根かきつれ
 一十年をへて音信もせぬ伊勢の海の蟹のかるてふ珍しき哉
 一待人の今見えたらば疾き花を押し折取れる心地社せめ
 一十年ふれどかくもありけり春雨に萌る柳の珍しきかな
 一難波女の蘆火焚屋はすしたれど己が妻社常珍ならなれ
 一山高み深に生ひたる山あるもてすれる衣の珍しな君
 一潮みたば舟はやよそへ我が妻の常珍しき行て早見む
 一唐衣龍田の山の萩よりも妹をぞ我はめづらしみせむ
 一少女子が玉匣なる玉櫛の見るごと今はめづらしや君
 たのむる
 一鶉の荒磯浪に袖濡れて誰が爲拾ふいけるかひども
 一十年ふれど色も褪らぬ言の葉は茂さぞ増るなほ頼め君
 一忘れじと頼めしものを年ふとも變る心と疑ふなきみ
 かさの女郎
 一我命あらむ限は忘れめやいや日毎には思ひますとも
 一倍のやすとき
 一我方に見つゝ忍ばせ新玉の年のを長く我もおもはむ
 一我背子は物な思事しめらば火にも水にも我なげなく

いましはと侘にし物を小蟹の衣にかゝり我を頼むる
 人 鷹
 云ひし云は物思し飛彈人の打つ墨繩の唯一道に
 千早振神のたもたる命をも誰誰とかは我は思はむ
 秋とくは中は徒まじ水無瀬川たゆふとを有こす
 秋とてや今は限も立ぬらむ思にあへぬ物ならなくに
 大船の舳にもへにも寄する波寄るとも我は君が隨に
 ちかふ
 一思はぬを思ふと云はく大野なる三笠の山の神思知れ
 一今宵より我も思はむ君も思へ後忘れじとまづ誓へ君
 一我を君云ひし穢さば袖川のおろす筏のあみて誓はむ
 一天地の中に出で立ち誓ひてし我や今更つま二人ねむ
 一忘らるゝ身をは思はず誓てし人の命の惜くもある哉
 一陽炎の岩垣沼の隠れには伏して死ぬ共なが名は云じ
 一惜からぬ命なりせば世中の人の儂になりもしなまし
 み つ ね
 一まことなき物と思ひせば偽に涙は兼て落さざらまし
 くらがたむ
 一君が名も我名も立てじ難波なるみつとも云ふな
 かもの女王
 一大伴のみつとも云な茜さしてれる月夜に逢きたり共
 一是をだに思ふこととて我宿をみきと云そ人の聞かくに
 一隠沼に思ふことある鳩鳥のしづめる水ぞ人に語るな
 一新玉の年のへゆけば今しはと夢より我背子我名つめな
 一津國のみつとし見れば難波なる蘆刈きとも人に語な
 伊勢
 一夢とても人に語るな知と云へば手枕ならぬ枕だにせず
 人づま
 一二人妻は杜か社かから國のとらふす野べか寝て心みむ
 一ま玉つくこしの菅原我列らで人のからまく惜き菅原
 一蘆の屋のこやの篠屋の忍びにも否々まろは人の妻也

一紫に匂へる妹をにくゝあらば人妻故に我こひめやも
 大伴のやすまろ
 一神にも手は觸るなるをうつたへに人妻にしあれ
 一紅葉の過難ぬ子を人妻と見つゝやをらむ戀しき物を
 一誰ぞこの主ある人を呼子鳥聲のまにゝ鳴渡るらむ
 家とうじを思ふ
 一 大伴のみつの濱なる忘具家にある妹を忘れかねつる
 人 鷹
 一伊勢の海の蟹の釣繩くる時も妹は待つらむ歩め我駒
 一いであが駒早く行こせ待乳山待らむ妹を行て早みむ
 家 持
 一 一重山重なる物を月夜よみ門に立出て妹やまつらむ
 一潮風にけさひえに鳥出でこし蘆火焚屋ぞ戀しかりける
 一狭筵に衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫
 一久方の天の露霜置にけり家にある妹も待戀ひぬらし
 一天雲の行き返りなむ物故に思ぞ我がする別れ悲しみ
 一ぬは玉の夜は更ぬれど月しあればされと君が待つらむ
 一いつとも思ざらねどみちかけて家戀しきは旅にぞ
 思ひ瘦す
 一戀すれば我身は影と成にけりさりとて人に添ぬ物故
 一我宿にかくもを植てかくも草斯のみ戀ば我瘠ぬべし
 家 持
 一 一重のみ妹が結びし帯帯を三重にゆふく成ぬ我身は
 一初まきのをふの下草蔭茂み有か無かに侘つゝぞふる
 一櫻をのをふの下草やせたれど誓ふ計もあらず我身は
 一君戀ふと衣の裙をくだら野の山の小川の瘦こそ渡れ
 一蟬の鳴く雲の上なる蔭草の蔭にや蟬は戀瘦せぬらむ
 一朝影に我身は成ぬ白雲の絶えて聞えぬ人を戀ふとて
 ゆげのわうじ
 一 大船の泊る泊のたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の子故に
 一朝影に我身は成ぬ陽炎の仄に見えていにし子ゆるに

一 二なき戀をしすれば常の帯三重にゆふべく我身は成ぬ
 二 戀にもぞ人は死する水無瀬川下に我やす月に日毎に
 三 梓弓引かば心にかなはれど後の心を知りかぬか
 四 あだ人のをこづり棹の危きにうけ引との難くも有哉
 五 割なくて思ひ亂るゝ刈萱のあだなる君が後めたさよ
 六 伊勢の海に釣する蟹のうけなれや心一を定め兼つる
 七 最上川上れば下る船舟のいなには非ずこの月ばかり
 八 世中を思ひ定むる程ばかり我心ちにも任せたらなむ
 九 うたかたの思へば悲し世中を誰愛物と知せ初けむ
 一〇 淵は瀬に成變るてふ世中は渡り見て社知べかりけれ
 一一 とき衣の思ひ亂てこふれどもなぞ何故と問人もなし
 一二 黒髪は白くするまでといふ君が心の中を今しらめやも
 一三 今更に問べき人も思はえず八重葎して門させりてへ
 一四 園原や伏屋に生る帯木のありとてゆけど逢はぬ君哉
 一五 さ波のなみ倉山に雲ゐれば雨ぞ降てふ返れ我背子
 一六 戀々て逢たる物を月しあれば夜は籠らむ暫は有待て
 一七 美作や糸のさら山いび野の舌々君は更にならさじ
 一八 鳥玉のよは返せり今宵さへ我を歸すな道の長手を
 一九 いれ紐のさしてきつれど唐衣辛く云ても歸しつる哉
 二〇 仰ふ霧に衣は濡れて草枕旅寝するかもあはぬ君ゆゑ
 二一 君が爲出てこざりし月だにも入では唯に返る物かは
 二二 月夜にはこのぬだにも社待ときけくるをも返す物には
 二三 ぬば玉の其夜の梅を手に取てをらで來に見思し物を
 二四 有明の月の光にある物を宵の間をなまださうらみそ
 二五 獨して物を思へば術をなみ行けども妹に逢時もなし

比明難き外山の雲の脈はれて返りし程は怪しかりきや
 比あはれずして今宵明なば春の日の長くや人をつら
 比みるめなき我身を浦と知らねばや枯なで蟹の足た
 比有明のつれなく見えし別より曉ばかりうき物はなし
 比徒に行てはきぬる物故に見まく欲しさに誘はれつゝ
 比梅の花咲て散ぬとしらぬかも今迄妹が出て逢ひ見ぬ
 比秋野に笹分し朝の袖よりも逢でぬる夜ぞひち増ける
 比住の江の松に立よる白波の返る時にや音をば鳴らむ
 比あき柏ぬるや川への東雲に人も逢見すつまなし勝に
 比行きゆけど逢はぬ妹故久方の天の露霜濡にけるかも
 比うはへなき物かは人は然計遠き家路を返すと思へば
 比人をとまむ
 比我背子をならしの山の呼子鳥君呼返せ夜の更けぬ時
 比待てと云はよまた夜は深し長月の有明の月ぞ人は惑す
 比水の面に浮べる舟の君ならば爰ぞ泊と云はまし物を
 比まてと云はたえて畏しにはたづみ堰放ぬ迄雨も
 比戀々て逢たる物を月しあれば夜深かる覽暫逢ひまて
 比打はぶき鶏は鳴くとも斯計ふる白雪に君いまさめや
 比まてと云はよ最も畏し花の山暫と鳴む鳥の音もがな
 比鳴神をとよます計さし曇り雨も降らなむ君を留めむ

今日計り止れ我背子増鏡朝毎にしも見れど飽なくに
 待てといはれども行けかし強て行駒の足をれ前の棚橋
 といまらす
 大江原千古
 紅葉も時雨もつらし稀にきて返らむ人を降や留めぬ
 出て暫人知ぬべき我妹子を留兼てそ手間と名けし
 出て行人を留めむ由なきに隣の方にはなもぬかな
 まな鶴の葦毛の駒やながぬしの我門過ば歩み留まれ
 名を惜む
 岩の上に立る小松の名を惜み言には出ず戀つゝぞふる
 争でなほ有りとし知せじ高砂の松の思はむとも恥かし
 争で無き名すゝがむ蘆鶴の騒ぐ入江は水も濁れり
 いかなれば千尋の舟もかゝる覽風の先にも騒ぐ波哉
 津國の難波たゝまく惜み社すくも焚火の下に焦るれ
 あめのみかど
 犬上や床の山なるいさゝ川いさと答へて我名洩すな
 きの女郎
 我名はもちなほのいほなに立ぬ共君が名立たば惜と
 玉匣覆ふを易み明ゆかば我名は有とも君が名惜しも
 をします
 白河の知ずとも云じ底清み流て世々に住むと思へば
 何か其名の立つとの惜からむ知りて惑ふは我獨かは
 あらがへば神も憎みすをしゑやし装ふる人の憎か
 今よりはなな惜けくも我はなし妹に依てば千重に立共
 同じ名を立ちと立なば唐衣きて社馴めうらぶるゝ迄
 なき名
 一のの、油の、音を笠に縫して人の遠名を立べき物を
 無名立つとは空蟬世にも有じ灰にしても有と社さけ
 元 方
 一人はいさ我は無名の惜ければ昔も今も知ずとを云む

一 立田山なげの紅葉も有物を無名をさへも流しつる哉
 二 幾何も降らぬ雨故我背子が皆のこゝだく瀧も轟るに
 三 吹風の下の塵にもあらなくにさも立やすき我無名哉
 四 大空に我名の種も蒔なくに孰くの無名こゝら生けむ
 五 綾無てまだなき無名の立田川渡で止まぬ物ならなくに
 六 無名立身は味氣なし花もみし事無草を折て翳さむ
 七 翳す共立と立なむ無名には事無草のかひやなからむ
 八 わざもこ
 九 沖つ鳥かもつく鳥に我率ねし妹は忘れず世の悉々に
 十 天雲のよそより見えし我妹子に心もそへよりにし物を
 十一 古にありけむ人も我如く妹に戀つゝいねがてにけむ
 十二 家は持
 十三 思はずに妹がえまひを夢に見て心の内に戀ふる此頃
 十四 草枕旅に久しく成ぬれば君をこそ思へ戀ふな我妹子
 十五 花とに折むには非ず我妹子が宿の櫻をえこそ忘れぬ
 十六 妹があたり我袖ふらむ木間より出こむ月を雲な疑き
 十七 今更に妹に逢て曙や春霞たなびく野べの花と散なむ
 十八 垂乳根の親の飼子の藪籠いぶせくも有か妹に逢ずて
 十九 人 磨
 二十 百世よも千世よも生て有のやも我思妹を置 歎かむ
 二十一 渡つみの沖の白波立田山いつか越出て妹があたり見む
 二十二 山端も月も出ぬべし今だにも妹許行かむ親に申すな
 二十三 人 磨
 二十四 後遂に逢ずも成ね妹を置て妻は定めじ戀て死ぬとも
 二十五 玉銚の道行ぶりに思はずに妹を逢見て後戀ひむかも
 二十六 只管に我行なくに門にはとら戀しらに妹立てる見ゆ
 二十七 白妙の袖は迷ひぬ我妹子が家のあたりを歌す振しに
 二十八 梯ひれの白濱波のよも放ず荒ぶる妹に戀つゝぞをる
 二十九 妹があたり今ぞ我行目のみに我のみ見つゝ事問す共
 三十 東路の荷向の箱の荷のをにも妹が心に乘にけるかも

唯今も見まぐぞ欲き秋萩のしなひにあらむ妹が姿を
 我がせこ 衣通 姫
 我背子が来べき宵なりさ、蟹の蜘蛛の振舞兼て著しも
 我背子し遂むと云は、人言は繁く有共出て逢ましを
 我背子が面影山の逆さまに我のみ戀て見ぬは妬しも
 同し 人
 我背子に我が戀をれば我宿の草さへ思ひうら枯に鳥
 我のみぞ君をば思我背子がこふと云とは言の名草に
 我兄子が衣ありせば秋風の寒きこの頃下にさましを
 かくれづま

色に出で戀ひば人みて知ぬべみ心の内の隠れ妻か
 三しなが鳥のな山響き行水の名をのみせし隠れ妻はも
 四あめとふや神の社のいはひ規幾世迄有む隠れ妻はも
 五増鏡みつといはめや玉きはる岩垣ぶちの隠れたる妻
 六秋野にさ躍る雉のいちじく鳴しも鳴かむ隠れ妻はも
 七足曳の山下とよみ鳴く鹿のこともがもな我隠れ妻
 八秋萩の花野の薄穂に出で、我戀ひわたる隠れ妻はも
 九神なびに打まふ鷲の岩淵に隠れてのみや我戀をらむ
 になき思ひ
 六おふなく、思はずしなぞへ無く高き卑き苦かり鳥
 六奥山の岩に若生ひ畏こみと思ふ心をいかにかもせむ
 六笹の葉のこ葉や若葉や畏くも聞をつる哉しならすして
 六岩たゝみ畏き山と知つとも我は戀るか友ならなくに
 六しづ環敷にもあらぬ命もてなぞ斯く計り我戀ひ渡る
 伊 勢
 六放ち鳥翼の無さをとふからに雲路を争で思ひかく覽
 かさの女郎
 六伊勢の海の磯も轟ろによる波の畏き人を戀ひ渡る哉

麓さへ熱くぞありける高砂の峯の思ひの燃る時には
 貫 之
 六照る月も影水底に映りけり似たる物なき戀もする哉
 今をかひなし
 六蛙鳴く井出の山吹散りにけりあはまし物を花の盛に
 あつた
 六伊勢海の千尋の濱に拾ふ共今はかひなく思ほゆる哉
 七山城の井出の玉水手に汲て頼めしかひも無世也けり
 七春の夜の夢は我社頼みしか人の上にて見るが侘しさ
 七こむよ
 七此世には人こと繁しこむ世にも逢む必ず今ならず共
 七こむ世にも早成なむ目の前に難面き人を昔と思ひ
 七空蟬の世の又の世に生れても思はむ中は絶じとぞ思
 七此世にて君を見目の難からばこむ世は蟻と成て潜かむ
 たふた
 七此世にて逢ずなりなばこむ世にも逢む必西の浄土に
 かたみ
 七我形見見つ、忍ばせ新玉の年の緒長くあれも思はむ
 七結び置し形見のこだに微りせば何に葱の草を摘まし
 七雪の上の跡を形見と頼め共且々消えてとむる方なし
 七今はとて返す言の葉拾ひ置て我物からや形見と思はむ
 よしありの大臣
 七あふ迄の形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑也けり
 七あふ迄の形見も今は何せむに見ても心の慰まなくに
 七限なき君が形見と折る花は時しも分ぬ物にぞ有ける
 七櫻花色は等しき枝なれどかたみに見れば慰まなくに
 伊 勢
 七見ぬ人の形見がてらは折ざりさ身になづらふる色に
 貫 之
 七忘貝拾ひしもせじ白玉を戀るをだにも形見と思はむ
 七梅が香を袖にこき入てとめたらば春は過とも形見思

六愛事を折々毎に忍ぶればつらさも人の形見なりけり
 の色によりぬぐには非ず唐衣馴にし妻のかたみ也けり
 伊 勢
 六最まだき過ぎぬる秋の形見には枝に紅葉ぞ散りさ
 貫 之
 六玉鉾の道の山風寒からば形見がてらにさなむとぞ思
 たましくけ
 六我戀を人知るらめや玉匣開き明つと夢にし見ゆる
 六玉匣掩ふを易み明たらば我名はあり共君が名をしも
 六水の江の浦島の子が玉匣明ざらせば妹に逢なまし
 六句ひありと人に知らるな鶯の心見えぬる花の櫛笥に
 六水江の形見と思へど鶯の花の櫛笥は明けてだにみず
 六白玉の立別れにし其日より玉の櫛笥の明暮ればこふ
 ゆはらの大君
 六あきつばの袖ふる妹を玉匣おくに思ふをみたべ我君
 六玉匣明ば君が名立ぬべみねで我こしを人見けむかも
 貫 之
 六別てもけふより後は玉匣あけくれ見べき形見也けり
 み つ ね
 六玉くしげ明方になる秋の夜の心一つを定めかねつる
 伊 勢
 六君にもし思ひかくれば鶯の花の櫛笥も惜まざりけり
 玉かづら
 六打はへてくるを見共玉蔓手にだに懸じ結び知ぬば
 伊 勢
 六へても見じ長き心を玉蔓つら乍らにし絶むと思へば
 伊 勢
 六度をへてかげに見ゆるは玉蔓つらき渾身に絶る也見
 七丈夫のふしむ歎きて作りたるしだり柳の鬘せ我妹子
 坂上の大娘
 六我まける早稲田の穂立作たる鬘を見つゝ忍ばせ我背

家 持
 六我妹子が業と作れる秋の田の初穂の鬘くれどあかぬかも
 かみ
 六ぬば玉の妹が黒髪今宵もや我なき床に靡きてぬらむ
 一有つとも君をば待たむ打靡き我黒髪に霜のあくまで
 二ぬば玉の黒髪敷て長き夜を手枕の上に妹まつらむか
 人 麿
 三後途に君をばまたむ打靡き我が黒髪に雪はふるとも
 一六よそは誰か見むかもぬば玉の我黒髪を靡てをらむ
 一ぬぐたれの髪梳 夜も逢ざれば戀しき物なけふは暮しつ
 み つ ね
 一黒髪の白くなり行身にしあれば先白雪を哀とぞ見る
 一出ていなば妹戀むかも敷妙の黒髪しきて長き此夜を
 一ぬば玉の我黒髪を泣ぬらし亂れて歸り戀渡るかも
 一朝な／＼梳ればいと亂れつゝ我黒髪のとけぬ心を
 一たげばぬれたがねば長し妹が髪此頃見ぬに亂つ覺か
 一朝寝髪我はけづらじ美しき人の手枕ふれてしものを
 元結
 二歎きつゝ丈夫かけをこふれ社我元結の漬きて濡けれ
 二君こずば閨へも入らじ濃紫我が元結に霜はおくとも
 くし
 二君こずばなぞ身装はむ箱にあるつげの小櫛も取むと思す
 二少女子が玉匣なる玉櫛のいぶかし今も妹に逢ざれば
 二蘆のやの灘の鹽焼暇なみつげの小櫛もさす来に身
 二我兄子が劍にあらなむ左手の奥手に巻て我行ましを
 人 麿
 二朝附日むかふつげ櫛なるれ共何ぞも君がいや珍しき
 二難波濁何にもあらぬ落標ふかき心のしるしばかりは
 玉
 二一日には千重しき波に思へ共なぞ其玉の手に巻難き
 二包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙也けり

三人との繁き此頃玉ならば手に巻もちて戀ざらましを
 河原の大臣
 三主や誰問へど白玉知なくにさらばなべてや哀と思む
 三片糸もて我貫く玉の緒を弱み亂れて戀む人な咎めそ
 三蘆の根のねむごろ思て結てし玉の緒と云は人解語
 文武天皇
 三妹が爲われ玉拾ふ沖べなる白玉奉てこ沖つしらなみ
 三白玉を包む袖のみ泣るは春は涙のたえぬなりけり
 三貫止たる人社有らば白玉のまなくも散か袖のせばきに
 三君と我疑ふ中にあらばこそ袖いたづらに玉も拾はめ
 三卿の糸を片糸によりて白玉の緒にしたり共我絶めやは
 三まるぶ玉あけ方遂に有物を打はへ戀ひばなごかと思
 人 鷹
 三渡つ海の手にも巻もたる玉故に磯の浦わを潜さつる哉
 人 鷹
 三渡つみのもたる白玉見まく欲し千返告つ潜さする蟹
 三草枕旅にも妹はゐたれども箱の内なる玉とこそ思へ
 三磯の上に爪木折焚き譯妹が爲我かづきこし沖つ白玉
 玉の緒
 三玉緒の間もおかずみ欲し我思ふ妹は家遠くして
 三玉緒の絶たる戀の亂るればしまくのみぞ又も逢ずして
 貫 之
 三玉緒を争でなしけむ夏引の糸にし非ねばよらじと思
 三玉の緒の絶て亂む心もてうらぶれ渡る月のふるまで
 三片戀と且は知りつゝ玉の緒の絶すぞ思ふ長き此日を
 三逢事は玉の緒計名の立つは吉野の河のたぎつせの如
 貫 之
 三玉の緒の絶て短き夏の夜のよほに成まで待人のこぬ
 興 風
 三死ぬる命生きもやすると心みに玉緒計逢見てしかな
 紀 女 郎

玉緒を泡緒によりて結べらば有ての後も逢ざらめやは
 玉の緒のしま心にや年月の行變るまで妹に逢ざらむ
 片糸を彼方此方によりかけて逢ずば何を玉緒にせむ
 玉の緒に思へば苦し玉緒の絶て亂れ知らば知とも
 玉の緒の括りよせつゝ末遂にゆきは別じ同緒に有む
 哀てふとを緒によりぬく玉はあはで忍ぶる涙也けり
 戀繁く増りて今は玉の緒の絶て死ねべく思ほゆ
 友 則
 下にのみ思へば苦し玉の緒の絶て亂れむ人な咎めそ
 玉だすき
 六思はずば思はずとやは云ひ果ぬなぞ世中の玉擲なる
 六おもすばわれ従はむ玉擲うたてかけたる我が心かな
 六玉擲かけねばくるし懸けたればあな煩はし人の心や
 六思餘りいとも術なみ玉擲雲居る山に我しめ結ぶ
 かきみ
 六増鏡唯にし妹を逢見ねば我が戀やます年はふれども
 坂上の郎女
 六増鏡ときし心をゆるぶれば後にいふとも印あらめや
 人 鷹
 六増鏡手に取待ちて朝な見む時さへや戀の繁けむ
 六影見れば昔に似ずぞ老にける思ふ心はふりぬ物から
 六かく計戀しくあらば増鏡見ぬ日時置かなく有まし物を
 六身をわくる事の難きに増鏡影ばかりをぞ君に添つる
 六ふたご山共に越ねば増鏡そなる影を尋ねてぞやる
 六花のかたを移し留めよ増鏡春よりの影やみゆると
 六里遠み戀わびにけり増鏡おも影去らす夢にこそみめ
 六斯とだに鏡にみゆる物ならば忘るゝ程も有まし物を
 まくら
 六我戀を人知らめやも敷妙の枕のみ社知らばしるらめ
 六枕より又知る人もなき戀を涙せきあへす洩しつる哉
 するがうねべ

敷妙の枕をくぐる涙にぞ浮寝をしつる戀のしげきに
 いか計り思ふ妹も敷妙の枕かたさ夢にみえこし
 夕されば枕定めむ方もなしに寝し夜か夢にみえけむ
 玉ぬしに玉は授けてかつゝも枕と我はいさ二人ねむ
 人 鷹
 三妹を戀ひわが泣く涙敷妙の枕とほりて袖さへぬれぬ
 三陸奥のくりこま山のほの木の枕はあれど君が手枕
 三敷妙の枕動きていねられず物思ふ今宵早あけむかよ
 三獨ぬる心は今もわすれずとつげの枕は君にしらせよ
 三人戀てぬる春の夜は敷妙の枕寢覺に流れ出でぬべし
 三獨寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり
 三枕として草引結ぶともせじ秋の夜とだに頼まれなくに
 三葦待ち喜べる秋の夜をぬるしるしなし枕とわれは
 三旅にしてあたねするよの戀くば我家の方に枕せよ君
 三結しひも解く日を遠み敷妙の我小枕に若生ひにけり
 たまくら
 三紅のやしほの衣なるよ迄いかで手枕まかむとぞ思ふ
 三験なき戀もするかな夕されば人の手枕巻かむ子故に
 三今更に君が手枕まき寝めや我下紐のとけつゝもとな
 三美しき人の巻きてし敷妙の我手枕を巻く人あらめや
 三關なくば返りにだにも打行て君が手枕巻 寝ましを
 三我妹子が来ざりし宵は打侘て我手枕を我ぞしてねし
 人 鷹
 三斯計り戀む物ぞと思はねば妹が手枕巻ぬ夜もありき
 はた
 三足玉も手玉もゆらに織機は君が衣にたゝむとぞ思ふ
 三さは姫の織かけさらす薄機の霞たちきる春の野を哉
 三水引の白糸はへておる機は旅の衣にたちやかさねむ
 三秋風のふきたよははす白雲は七夕つめの天の衣かも
 三七夕の五百機たてゝある布の秋さり衣誰かとりみむ
 三經緯に身をばうむ共麻機の織ては君に逢じとぞ思ふ

幾千機織ればか秋の山ごとく風に亂るゝ錦なるらむ
 たいそ機に思ふ心ぞ亂れぬる人をつらしと恨きぬれば
 ころも
 三紅の濃染の衣下にて上にとりきざしるからむかも
 三今作る斑らの衣のあもつきに我思はゆ未だきね共
 三知衣しも多くあらむ取替てきてはや君が面忘れせむ
 三橘の島にしをれば河とほみ晒さでぬひし我がした衣
 三唐藍のやしほの衣朝々なるとはすれどまし珍らしみ
 三日暮しに鳴とも綾な唐衣袖こそひちめ戀はさめじを
 三古衣拾つる人は秋風のふきたつ時にも思ふものを
 三筑波嶺の新桑の衣は有ぞ君が御衣しあやにきましを
 三秋風の寒き日頃は下にきて妹が形見とかつは忍ばせ
 三いと早も鳴ぬる雁の古衣改めさせむ妹もあらなくに
 三さ夜中の寢覺くゝに起るつゝ返す衣のうらぶれに身
 小 町
 三いと責て戀しき時はぬば玉の夜の衣を返してぞきる
 三戀むと誰か云ひけむ唐衣かへすに戀の増りける身を
 たいふさ
 三偽のなみだなりせば唐衣しのびに袖は絞らざらまし
 貫 之
 三敷嶋の大和には非ぬ唐衣頃もへずしてあふ由もがな
 三嬉しきを何に包まむ唐衣袂豊かに裁てといはましを
 三白妙の衣の袖を打ち返し獨さねけむしるしあらばや
 友 則
 三宵々にぬぎて我ぬる唐衣かけて思はぬ時の間もなし
 人 鷹
 三白妙の袖の片はし見るからに斯る戀をも我はする哉
 三玉藻かる蟹とはなしに君戀る我衣手は乾く夜もなし
 三朝な夕けをたと幣にきりぬ我衣手は又ぞ織べき
 三宮人のすれる衣にゆふ擲かけて心をたれによすらむ
 三橡の衣きる人はとなしと云し時よりきま欲み思ほゆ

○様のあはせの衣の裏にせば我戀めやは君がきまきぬ
鹽やき衣

伊勢の蟹の鹽焼衣を荒み間遠にあれや未きまきぬ
志賀の蟹の鹽焼衣なれ行けば戀てふ物は忘れ兼つも
伊勢 蟹の鹽焼衣馴てこそ人の戀しきとも知らるれ
馴行くは憂世なればや須磨の蟹の鹽焼衣間遠なる覽
伊勢の海鹽焼く蟹の藤衣なるとはすれど逢ぬ君かな
貫 之

伊勢の蟹の鹽焼衣の馴なばか一日も君を忘れて思はむ
夏衣

なつぐさの露分衣きもせぬに我が衣手の乾く時なき
夏衣薄き心と聞からに言の葉さへや洩れむとぞ思ふ
夏衣薄き乍らぞ頼まるゝ一重なるしも身に近ければ
貫 之

夏衣暫しなたちそ郭公なくともいまだ聞えざりけり
我が爲に薄き心のたくれせば夏の衣にたまし物を
秋の衣

我兄子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風
秋風を寒みにはあらず返して戀慰む衣かせきみ
秋夜の月の影こそ木の間より落葉衣と身に移りぬれ
波の綾を痛くな風の織よせそ衣にたむ我妻もなし
我妹子が衣なりせば秋風の寒きこの頃下にきましを
衣うつ

風寒み我が唐衣うつときぞ萩の下葉も移ろひにける
素 性

誰が爲にうつとかは聞 大空に衣雁が鳴渡るなり
唐衣うつ聲さけば月清みまだぬぬ人を空にこそきけ
貫 之

草枕夕風さむくなりぬるを衣うつなり宿やからまし
雁鳴て吹く風寒み唐衣君待ちがてらうたぬ日ぞなき
あ な じ

かり衣

吹風に散らずもあらなむ櫻花我かり衣ひとよ宿さむ
あきなきび人な咎めそ侍衣今日計とぞたづも鳴なる
右芹川の行幸に在中納言かり衣に鶴すれり
貫 之

狩衣心のうちにほさなくになどか亂て物おもひする
すり衣

春日野の若紫の摺りごろもしのぶの亂れ限知られず
すり衣きると夢みつ現には孰の人のことかしげむ
住吉の遠里小野の眞萩もてする衣のさかり過行く
陸奥の信夫もぢずり誰れ故に亂初にし我ならなくに
あさごろも

あさりする蟹少女子が袖なれや濡にし衣ほせど乾す
千名にはも人は云ともありつがむ我機物の白き麻衣
今年行く新島守の麻衣かたのまよひを誰かとりみむ
乙 麿 卿

麻衣きればなつかし紀國の妹背の山は苧蒔け我妹子
かはごろも

こしへに夏冬行けや寒あふきはなたず山に住む人
ぬれぎぬ

君により蟹の濡衣我きたり思にはせどひる由もなし
猶きたれ蟹の濡衣我ほさむよそふる人の憎からなくに
憎からぬ人のさすなる濡衣は厭ひ難くも思ほゆる哉
とひ絞る人も無身の濡衣は天の下にぞ降てきせける
濡衣と人に云はす菊の露齡のふとぞ我をばちつゝ
あよそにても憎からずだにあらば社絞るくも濡衣をさめ
世と共に我濡衣となる物は侘る涙のきするなるべし
雜の衣

都出て今日みかのはら泉川かは風さむし衣かせやま
今更にこふとも君に逢むかも衣返す夜夢に見えつゝ
白妙の妹が衣に梅の花香にも色にもわきぞかねつる

空に飛ぶ天の羽衣えてしがな浮世の中に骸も残さじ
梅の花香を吹つくる春風に衣をそめば人やとがめむ
ふすま

あつ衾なごやが下に寝たれ共妹とし寝ねば膚寒しも
庭にたつあさて小衾今宵だに妻よびこそぬ麻手小衾
きへ人のまたら衾に綿さはに寝入りなまし物を妹が
裳

立て思ひぬてもぞ思ふ紅の赤裳たれひきいにし姿を
山吹の匂へる妹がはねず色の赤裳の夢に見えつゝ
一人めもる君が隨に我とも早く起き居て裳の裾濡す
人 麻 呂

はしきやしあはぬ子故に徒に此川の瀬に裳の裾濡す
いかならむ日の時にかも我妹子が裳引の姿朝明にみむ
何せむにへたのみを思けむ浦つ玉藻を潜く身にして
ひも

思ふ共こふ共逢む物なれやゆふてもたゆく解る下紐
ささうらがた錦の紐を解けて許多はねす唯一夜の
下紐を夕さり懸て解つれば君がみそ縫ふ糸の島みゆ
あよそにして戀ふれば苦しけれ紐の同心にいさ結てむ
ぬば玉の夜の下紐ときてねよ我魂はゆめにてもこむ
人 麻 呂

奥山のしげ入て立ち迷ふ共妹が結びし紐をとかめや
下紐はとけてやつけぬ玉鉾の朶も知らぬ空に侘れば
なぞ人の枯て難面き下紐の解けはむと云てし物を
垣はなす人はいへ共こ錦紐解あくる君も有なくに
戀しとは更にも云じ下紐のとけむを人は其と知なくに
下紐の印とするも解けなくに語るかとは戀ぞ有べき
草枕結ぶとしけむ宵々はとけざりきやは下の入れ紐
我衣の紐とけ渡る眉根かく馴にし君はこふと知すも
珍しき人を見むとやしりもせぬ我下紐の解つゝ有む
人 ま ろ

我兄子が結てし紐を解めやは絶ばたゆとも唯に逢迄
思へ共夢かも見えぬ我妹子ぞ今宵見えける人もきまきむ
けふの日に如何及ばむ筑波嶺の昔の人のきけむ其日も
右一首家持

山里に一目見しより我戀ふる花の下紐いかにとく覽
つらゆき

明立てば先さす紐の絲弱み絶て逢すばなぞいけるかひ
おび

契りけむとやはたがふ下帯の廻りてあへる妻や何也
友 則

下の帯の道は方々分るとも行廻りても逢むとぞ思ふ
東路の道の果なる常陸帯のかごと計も逢見てしがな
家 持

右の賤機帯をむすびたれ唯といふとも君にはまさじ
瑞垣の久しき世より戀すれば我帯ゆるふ朝夕ごとに
ひとり

たきものゝか計り思ふ此頃の獨はいかで君に知せむ
たき物の木の下煙ふすぶ共我獨をばしなすまじやは
一樹下に獨や侘びしたき物の其も思ひに堪てとか聞く
我爲はねぶたき物を獨しも起き明さじと思ほゆる哉
ことの葉

露計り頼め置かなむ言の葉に暫もとまる命ありやと
消果し身よりも増る言葉涙ならや何にかはせむ
頼めこし言の葉今は返してむ我みふるれば置所なし
秋社は紅葉も散め立田山春とてもなど言の葉のなき
契置し言の葉變る憂世にはふみも心もやらで社ふれ
ふみ

世中に絶えて偽なかりせば頼みぬべくも見ゆる玉章
玉章ももてこの物を秋風の吹きくる毎に人ぞ戀しき
打寄する波やけつ覽演衛踏こし跡のうらみれどなき

一人知れぬ道と思はずば玉章の打類ひつゝ行べき物を
二やれば惜しやれば人に見えぬべし泣々も猶返す増れり
三やれと云む我後見むも思ほえず心とめて唯にけなむ
四花散す枝やあるとて鶯のふみみてからに露ぞ置ける
五かひなしと思なけちそ水莖の跡ぞ千年の形見ともなる
六玉章の有か無きかに行水の絶せぬ君を逢見てしがな
七忘られむ時忍べとぞ濱千鳥行へも知らぬ路を留むる
勢

水莖の通ふ計をすくせにて開し乍にはてねとや聞く
貫 之
荒小田を打返すとて濱千鳥猶ふみつけて跡は留めよ
伊 勢

春霞たち乍見し花なれど踏みとめてける跡ぞ嬉しき
太政大臣貞信公

君か爲祝ふ心の深ければ聖の御代のあとならへとぞ
右天曆皇帝皇子時貞信公の家に御往還給奉御手
本歌

御かへし
三教へおく事たがはずば行末の道遠くとも跡は惑はじ
こと

山のをの蔓は絶てなければも聲は残せりきく人の爲
二ひびにふす玉の小琴の事なくばいと斯計我戀むかも
三秋風に揺きなす琴の聲にさへ憐く人の戀しかるらむ
四大和琴人に有せばいか計こと懐かしき事ときかまし
五誰ぞこの聲懐かしき大和琴寢覺悟しき人のきかくに
六琴の音を聞知人の有ければ今ぞ立出て緒をもすぐべき
貫 之
三足引の山下水は行き通ひ琴の音さへにがかるべら也
四六の緒のよりめとぞ香は匂ふ引少女子が袖や觸たる
五都まで響き通へる唐琴は波のよりにて風ぞひきける
六波の音のけさ唐琴に聞ゆるは春の調べや改まるらむ

梓弓引けば本末我方によるこそまされ戀しきことは
六あづさ弓はるかなれ共忘られて君思ひつゝの絶む物かは
貫 之

梓弓春の山べに入る時はかざしにのみぞ花は散ける
梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにし物を
人 麿

梓弓引はりもちてゆるさずと我思ふ妹は知や知ずや
梓弓弦とりはげてひく人はのちの心をしる人ぞひく
梓弓ゆづる巻かへてみてば更に引くとも君が隨に
貫 之

手も觸で月日へにける白真弓起臥し夜は物を社思へ
人 麿

かく戀む物と知せばあづさ弓末のちかごろ逢見くまし
七天原振さければ白真弓張て懸たる夜道はよけむらさ
三奥山に立つ一つきの白真弓まるや割なく人を恨むる
四み菰刈信濃の真弓我がひかばうま寂て否と云むかも
五陸奥の安達の真弓嬌れ共心こはさにやますざりける
矢

丈夫の弓末振たていつる矢を後みむ人は語つぐがに
たち

七劍たちな惜けくも我はなし君に逢すて年のへれば
八劍たち身に取そふる丈夫ぞ戀の亂のもとには有ける
九打歎き鼻をぞひつる劍太刀身にそふ妹が思けらしも
〇劍太刀身に佩添ふる丈夫や戀てふ物は忍び兼ねてむ
一劍太刀諸刃の上に行觸れて死かもしなむ戀つゝ有すは
かさの女郎
二劍太刀身に取添と夢にみつ何の諭しども君に逢む爲
三太刀の尻玉巻田ぬにいつ迄か妹を逢みず我戀をらむ
かたな
四逢事の刀さしたる七つこのさかかに人の戀らるゝ哉
さや

三琴の音に峯の松風通ふらし孰の緒より調べ初めけむ
四琴取れば歎き先だつ蓋しくも琴の下樋に妻やかくれ
貫 之
五ひく琴の音の打つけに月影を秋の雪かと驚かれつゝ
おなじ
六長き夜の秋の調とひく琴は緒毎に君を千年とぞなる
七あづさ琴春の調をかりしかば返し物とは思はざり鳥
返し
八返しても飽ぬ心を添つれば常より聲の優るなるらむ
九松の音を琴に調ぶる秋風は瀧の糸を引やすげて引覽
大和琴の夢に女になりてよめる
〇いかならむ日の時にかも聲しらむ人の膝の上我が枕せむ
此の歌と琴とに歌をよみそへて中衛大將藤原の總
前蜀に筑紫よりおくれ
かへし

五と問ぬ木にも有とも我兄子が手馴のみ琴土に置めやも
管

二唐竹のこちくの聲も聞せなむあな嬉しとも思知べく
三笛竹の己が音吐は悲しけれ一節にしてよのみ過れば
四獨ふしいとかく竹の音なれ共こちくの聲は聞じとぞ思
五いへばえに深く悲き笛竹のよ聲や誰ととふ人もがな
六こま笛の駒に我乗慰めむみきとも云じあな惜けども
七笛竹の一よ空しき聲にだによそに吹けとも思ざりしを
八笛竹の池の堤は遠く共こちくふ名は忘れざらなむ
弓
九葛城のそつ彦真弓荒きにもよらじや君が我名告かね
奈良のみかど
〇梓弓引野のつら末つひに我が思ふ人に事の繁けむ
一梓弓いそべの小松たが世にも萬代かねて種を蒔けむ
きの女郎
二梓弓引み緩べみ來ずば社こば社をなごよそに祀みめ

八人言を聞きみよや君に二さやの家を隔て戀しかる覽
六七つこのさやの口々つどひつゝ我を刀にさして行也
はかり

七かけつれば千々の金も數知りぬなぞ我戀の逢計なき
八今こむと云し計に掛られて人のつらさの數は知にき
九吳衛を我をなぐめに頼めつゝさやかに君が懸てはか
〇我つめる徒ら稻の數ならば合ふ衛なし何にか掛まし
あふぎ

一名にし負はば頼ぬべきをなぞも斯扇ゆしと名け初けむ
二世の人のいみける物を我爲になしといはぬは誰がうき也
三舟出する君に手向くと吹風はなれて年へし扇也けり
四添てやる扇の風し心あらば思はむ人の手をな離れそ
五ゆしとていむ共今はかひ有よのうき事は是に附ても
六今はとて漕ぎつる舟の障なみ扇の風はへにも懸なむ
七あふぎとも盡せぬ風は君が爲我が心さす扇なりけり
八銀河扇の風に霧晴れて空すみわたるかさゝぎのはし
九かはほりに我はりこむる涼さを思ふが方の風と厭ふな
かさ

〇久方の天照月を網にさし躍る我が大君は笠に作れり
〇久方の雨には濡れずふるがと落る涙はさす笠ぞなき
〇杜若さくぬの菅を笠に縫ひきむ日を待に年ぞへにける
〇押照や難波すが笠置ふるし後は誰さむ笠ならなくに
〇我兄子が笠のかりてのわさみ野に我は入ぬと妹に告こせ
〇笠取の山を頼みしかひもなく時雨に袖を濡してぞ行
〇散まではきても見るべし春雨に我を濡すな梅の花笠
〇笠なしと人には云て雨づゝみとまりし君が姿思はゆ
〇我兄子が袖を頼て眞野の浦の小管の笠をさすてきに鳥
〇君がさる三笠の山にゐる雲の絶て別るゝ戀もする哉
一我妹子が使を待と笠もさきで出つゝぞみし雨のふらくに
みの
一久方の雨のふる日を我門に簑笠もさきでくる人やたれ

かたみ
 一花筐めならぶ人の數多あれば忘られぬ覽數ならぬ身は
 二君を又現にみめや逢事のかたみにもらぬ水は有とも
 三飽でこそ思はむ中は別れなめそをだに後の忘形見に
 四伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家苞にせむ
 五みてのみや人に語らむ櫻花手毎に折て家づとにせむ
 六玉津島みれ共飽ずいかにして包持たらむみぬ人の爲
 七宇治河に生る菅藻を河早み取ず來に烏苞にせましや
 八足引の山行きしかば山人の我にせしめし山苞ぞこれ
 九女郎花秋の萩をれ玉鉾の道行きづとこはむ子の爲
 一吹風の我袂にし包まれば思ふ人にはつとにしてまし
 いろ
 二哀とも憂しとも思ふ色なれや落る涙に袖のしむらむ
 三色みえて移ろふ物は世中の人の心の花にぞありける
 四染めばこそ色ともみえめ墨染の覺束なくも立我名哉
 五年ふれど色も變らぬ君をしもいかなる色に思染けむ
 六世の中の人の心は花染の移ろひやすき物にぞ有ける
 七色なしと人やみらむ昔より深き心に染てしものを
 八覺束な何の色とは知らねども唯深くのみ思染めけむ
 くれなる
 九唯が蒔きし紅なれば三輪山をひた紅に句はせららむ
 一〇隠らくのと文せの山をすそへらと豊すめ神の蒔し紅
 一一紅のやしほの衣かくしあらば思染ずぞ有べかりける
 一二斯ばかり戀し渡らば紅の未つむ花の色にいでのぬべし
 貫 之
 一三立田川いろ紅になりけり山の紅葉も今はちるらし
 一四いかにして戀を隠さむ紅のやしほの衣捲り手にして

三三 くれなるの初花染めの色衣思ひしころ我は忘れず
 三三 紅の花にあらば衣手に染めつけ持て行へき物を
 三三 白妙の我衣手にくれなるのしみなむ心移ろはむやは
 三三 紅に染めし衣も頼まれず人をあくにし返ると思へば
 三三 人知れず思へば若し紅の末つむはなの色に出でなむ
 三三 よそのにのみ見つゝを戀む紅の末摘花の色に出でなむ
 三三 思ふにも今はあまりぬ紅の色に出なむ人のしるべく
 三三 紅に袖そそ秋はすぎにしを春さへ何の色まさるらむ
 三三 紅にそめてし衣雨ふりて句ひはすとも移ろはむやも
 三三 紅の色には出でじ隠れ沼の下に通ひて戀はしぬとも
 三三 秋の野は唐紅になりけり幾しは時雨降りて染けむ
 三三 紫の一もと故に武藏野の草はなべてもなつかしき哉
 三三 紫の色こそ時は目もはるに野なる草木も哀なりけり
 三三 紫の根はふよこ野の春の野は君をこひつゝ鶯ぞ鳴く
 三三 唐人のころも染むて紫の心にしみて思はゆるかも
 三三 濃紫はす日は暮ぬ執くにかたま宿からむ人さとはは
 三三 思ふとも下にや逢む紫のぬずりの衣色に出づなゆめ
 三三 つくまのに生ふる紫衣にすり未きなくに色に出に鳥
 三三 知ね共武藏野と云へば聊たれぬよしやこそは紫の故
 三三 思ふともこふとも云はじ梶の色に衣を染てこそきめ
 三三 素 性
 三三 山吹の花色衣ぬしや誰とへど答へずくちなしにして
 三三 梶子の色に心をそめしよりいはで心に物をこそ思へ
 三三 常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり
 三三 下紅葉ありけるものを松の葉の上は緑を頼みける哉
 伊 勢

九海にのみひぢたる松の深緑幾しほとかは知べかる覽
 〇あさみどり野への霞は包めどもこぼれて匂ふ花櫻哉
 にしき
 一思ふぞち圓居せる夜は唐錦立まく惜き物にざりける
 二霜の經露の緯こそもろからし山の錦の織れば且散る
 三なぞ更に秋かと思はむ唐錦立田の山の紅葉しるきを
 四猶更に秋の野山を分け行けば錦を衣にきぬ人ぞなき
 忠 岑
 五神なびの三室の山を分行ば錦たちきる心地こそすれ
 貫 之
 六立寄りてみるべき人のあれば社秋の林に錦しくらめ
 七紅葉を惜き錦とみしかども時雨と共に降でてぞこし
 忠 岑
 八秋風の打吹くからに野も山もなべて錦に織り返り哉
 伊 勢
 九紅葉を分つゝ行けば錦きて家に歸ると人やみららむ
 貫 之
 一〇木のもとに織らぬ錦の積れるは雲の林の紅葉也けり
 人 麿
 一唐錦紐ときあげて結べども知ぬ命に戀つゝやあらむ
 貫 之
 二秋風に散るもみぢ葉は女郎花宿におりきる錦也けり
 三立田川紅葉落ちて流るなり渡らば錦なやかや絶えなむ
 四紅葉の降しく秋の山べこそたもて悔しき錦也けり哉
 貫 之
 五紅葉の流るゝ秋は河ごとに錦あらふと人やみららむ
 人 麿
 六かきほなす人はいへ共唐錦紐ときあぐる人もなき哉
 或真書云此間有綾之題而無歌體古本耳
 暮ばかりあやに戀しくありしかば二村山も越す成にき

三三 夏引の手引の糸を繰返しこと繁くとも絶むと思ふな
 三三 片糸の此彼よそによられつゝ逢なむ後は何か絶べき
 三三 河内女の手染の糸を繰返し片糸に有とも絶むと思ふ
 三三 但馬糸のよれ共逢ぬ思をば何のたゝりに附て祓へむ
 三三 斯計やめにかくてふ但馬糸眉めかきては嬉しかり鳥
 三三 亂糸の我には解けず有しかど尋てよらむと思心有り
 三三 不知火の筑紫の綿は身に附てまだき着ね共暖にみゆ
 三三 布
 三三 玉川にさらす調布さら／＼に昔の人の戀しきやなぞ
 三三 陸奥のけふのさのの程せばみまだ胸台ぬ戀もする哉
 三三 たち縫はぬ衣きる人もなき物を何山姫の布晒すらむ
 三三 誰爲に懸て晒せる布なれやよをへて見れと着人もなき
 三三 主なくて晒せる布を七夕に我心とや今日はかさまじ
 三三 白河に晒す布にも非なくになぞ我戀のこゝら悲き
 古今和歌六帖第六
 春の草
 〇春草の繁き我戀大海のかた行く波のちへにつもりぬ
 貫 之
 一野べみれば若菜摘身宜し社垣ほの草も春めきにけれ
 躬 恒
 二今は早枯果なまし草の根の萌ても終に春に逢るかも
 三春日野の雪間を分て生出來る草の僅にみえし君かも
 業 平
 四うら若みねよげにみゆる若草を人の結むとをしぞ思
 五春くれば野のまに／＼生繁る千種に物を思ふ頃哉
 忠 見

燒ず其草は萌なむ春日野を唯春の日に任せたらなむ
夏草
人言は夏野の草の茂くとも妹と我とし携さはりなば
此頃の戀の繁くて夏草の刈とくれども生ひしくが如
足引の山下しげき夏草のふかくも君を思ふころかな
貫之

繁さのみ日毎に増る夏草の假初にだに訪ふ人のなき
枯果てむとをば知らで夏草の深くも人を頼みける哉
人知れず我より外に夏草の茂りあふれれば妬けれ
夏草の上には茂れる沼水の行く方もなきわが心かな
忠
徒然と詠めせし間に夏草の哀れ屋毎に茂り合にけり
しげゆき

夏草は結ぶ計に成に鳥野飼し駒もあくがれぬらむ
夏草のかりの世人は佗しくも我に秋風吹初めつるか
父母に知せぬ子故御宅路の夏草の草をなづみ來かも
秋の草
石上ふるの草も秋はなほ色ことにこそ改まりけれ
心なき身は草木にも非なくに秋くる風に疑はれぬる
元方

孰をか分きて忍ばむ秋の野に移ろはむとて色變る草
秋の野に千種に咲ける花の色を亂れて物を思ふ頃哉
神さぶと許さずは非し秋草の結し紐を解くは悲しも
思ふども有だに秋は佗しきを草の枯々なるぞ悲しき
冬の草
草枯の野をばうしと思へばや冬野の草と人の刈覽
躬恒

我待たぬ年はきぬれど冬草の枯にし人は音信もせず
山里は冬ぞ寂しき増りける人目も草も枯ぬと思へば
忘れぬ心の内は冬草のかれにし人をこふる也けり

つれなし草
三年をへて何頼む勝間田の池に生てふつれなしの草
しりぐさ
潮あしにまじれる草のしり草の人皆知りぬわが下思
ねづら草
しづきの三浦崎なるねづら草逢見ざれば我戀めやも
紅のあさはの野らに刈る草のつかの間も我を忘るな
山吹

今もかも咲き匂ふらむ橋のこじまの崎の山吹のはな
山吹は綾な、咲そ花見むと植てし君が今宵こなくに
千早振神なび河に影見えて今や咲くらむ山吹のはな
折ても見折らずとも見む吉野川水底照て咲ける山吹
貫之

映る影有と思ずば水底にありとぞ見まし山吹の花
蛙鳴く井手の山吹散にけり花の盛にあはましものを
八重乍あだなる見れば山吹の下に社なけ井手の蛙は
貫之

流れくる蛙なくなり足引の山吹の花にほふべらなり
ゆかりとも聞えぬ物を山吹の蛙が聲に匂ひけるかな
山吹の花は千歳も咲べきを暮ぬる春の惜くもある哉
貫之

吉野川岸の山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり
みつね
春深み枝さしひちて神なびの河べに咲ける山吹の花
足曳の山の山吹山ならば咲く盛には逢ふ人もあらじ
みつね

春深き色はなけれど山吹の花に心をまづぞ染めつる
獨のみ見つゝぞしのぶ山吹の花の盛に逢ふ人もなし
争で我が逢はむと思ひし山吹の花の盛に逢にける哉
諸共に井手の里こそ戀しけれ獨りうき山ぶきの花
我宿の八重山吹の散るを見て春過行くと見るぞ悲き

下草
我宿の軒の下草生ふれども戀忘草みれどまだ生ひず
柏木のもりの下草年ふとも光をいつかみむと頼みし
大荒木の杜の下草老ぬれば駒もすさめず刈人もなし
我が宿の夕蔭草の白露のけぬがにもと思ほゆる哉
かき郎の女郎
二人につく便だになし大荒木の杜の下なる草の身なれば
櫻麻のをふの下草露しあらば明して行む親は知共
言痛くさたにしもせむ岩代の野への下草我し刈てば
にこぐさ

鹿のとむる河べのにこ草のみわかきが上に
蘆垣の中のにこ草にこまに我とをみして人に知らるな
秋風に靡く河べのにこ草のにこまにしも思ほゆる哉
雜の草
潮満てば入ぬる磯の草なれやみらく少く戀らくの多き
ねなし草
我世しもちよに有めや根無草戯れやせまし身の若い時
もよ草
父母が家のしりへの百世草百世出ませわが到るまで
手向草

白波の濱松が枝の手向草幾世までにか年のへぬらむ
さし草
味氣なや伊吹の山のさしも草己が思に身を焦しつゝ
契りけむ心からこそさしも草己が思に燃え渡りけれ
等閑に伊吹の山のさしも草さしも思ぬとにやは非ぬ
下野やしめつゝの原のさしも草己が思に身をや焼らむ
おほ草
かんつけのいならの沼の大草よそにみしよは今社増れ
かくも草
うかりける汀隠のかくも草葉末もみえず行隠れなむ

春の雨に匂へる色も飽なくに香さへ懐かし山吹の花
名にし負へば八重山吹ぞ憂かりける隔てをれ
山吹の其に飽事なくしあらば人の知べく我戀めやは
なでしこ
我宿の撫子の花咲にけり手折て一目見せむ子もがも
家持
我宿に咲し撫子早晩も花に咲かなむよそへつゝ見む
我兄子が宿の撫子散めやも彌初花に咲きは増すとも
撫子の其花にもが朝な／＼手に折持て戀ぬ日なけむ
貫之

床夏の花をしみれば打はへて過す月日の數も知れず
つらゆき
ながけくの色を染つゝ春秋を知でのみ咲く床夏の花
貫之
變る時なき宿なれど花といへば常夏をのみ植て社みめ
素性
我のみや哀とは思ふ葦なくゆふかけの人和なでしこ
座をだに据じとぞ思ふ植しより妹と我ぬる床夏の花
躬恒

妹と我とぬる床夏の花なればなべて人には見せむ勢
伊勢
孰こにも咲はすらめど我宿の大和撫子誰にみせまし
いせ
こき眼籠には涙滴入て撫子に移れる袖の色ぞみせまし
むねゆき

我袖に移らば移れ手もやます摘や入れまし撫子の花
あな戀し今も見てしが山賤の垣はに咲ける大和撫子
涼しや／＼草むら毎に立よればあつさぞ増る床夏の花
美しくと見る度毎に撫子の花の名残は惜くやは非ぬ
秋萩
秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらむ
敏行

秋萩
秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらむ
敏行

素性
 〇白妙の波かもたつと見る迄に亂て咲ける山の萩はら哉
女のつらきにやれる
 一秋萩の下葉につけてめに近くよそなる人の心をぞ知
 二わが宿のはぎの花咲く夕影に今も見てしが妹が姿を
家持
 三我宿の一村萩を思子に見せでほと散しつるかも
やかもち
 四玉に貫きけきたばらむ秋萩の上はらはに置ける白露
ゆはらの大君
 五夜を寒み衣雁音鳴くなべに萩の下葉も色づきにけり
人の鹿
 六萩の露玉に貫むと取ればけぬ見ぬ人は猶よそ乍見よ
ならの帝
 七花の色は数多見ゆれど人知れず秋萩の下葉ぞ眺られけり
貫之
 八妻こふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となる覽あはれ
 九秋萩をみつ今日社暮しつれ下葉は戀の妻にぞ有ける
あはれ
 〇さを鹿のいか云けむ秋萩の匂ふ時しも人の戀しき
 一置く物は久しき物を秋はぎの下葉の露の程もなき哉
躬恒
 二秋はぎの古枝に咲ける花みれば元の心は變らざり鳥
ゆはらの大君
 三我兄子に戀つ有ずは秋萩の咲て散ぬる花ならましな
大伴坂上郎女
 四妹がめを見せめの崎の秋萩は此月頃は散らすなゆめ
ふかやぶ
 五幾世へて後か忘れぬ散ぬべき野への秋萩亂れき世を
あはれ
 六宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つ如君を社まで
これひらの宰相
 七白露は上より置をいかなれば秋の下葉の先もみづ覽

躬恒
 八さを鹿の柵みふする秋はぎは下葉や上に成替るらむ
忠岑
 九秋萩の下葉隠れて鳴く鹿の涙や花の色をそむらむ
興風
 〇秋萩は先さずえ頭より紅葉るを露の心の分けるとなみそ
貫之
 一秋萩の下葉よりしも紅葉るは元より物を思へら也
素性
 二秋萩の匂へる枝にめでたらばいと空蟬に人や思はむ
伊勢
 三移はむとだに惜しき秋萩にをれぬ計りも置ける露哉
女郎花
 四手にとれば袖さへ匂ふ女郎花木下露に散まくをしも
左大臣
 五秋の野に艶き立てる女郎花あなかしかまし花も一時
大
 六女郎花秋の野風にうち靡き心一つをたれによすらむ
としゆき
 七秋野に宿りはすべし女郎花名を睡しみ旅ならなくに
三條右大臣
 八秋ならで逢ふこと難き女郎花天の河原に生ひぬ物故
小野のよしき
 九女郎花多かる野べに宿りせば綾なくあだの名をや
かねみの大君
 〇女郎花後めたくも見ゆる哉あれたる宿に獨たれば
遍昭
 一名にめで折れる計ぞ女郎花我落にきと人に語るな
貫之
 二女郎花生たる秋の武藏野は常よりも猶むつましき哉
つらゆき
 三たが秋に非ぬ物から女郎花など色に出てまだき移ふ

貫之
 一名におはし強て頼まむ女郎花花の心の秋はうくとも
 二白妙の衣片しき女郎花咲ける野べにぞ今宵ねにける
おなじ人
 三女郎花移ろひ方になる時は狩にのみこそ人は訪けれ
おなじ人
 四狩にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける
おなじ人
 五女郎花匂を袖に移してばあやなく我を人やとがめむ
躬恒
 六女郎花一本故に秋の野の千ぐさながらに花を思ふ哉
女郎花吹き過ぎて来る秋風は日に見えぬぞ香こそ著けれ
 七妻戀る鹿ぞ鳴なる女郎花己がすむのゝ花と知らずや
躬恒
 八七夕に似たる花かな女郎花秋より外に逢ふこと難し
躬恒
 九明ぬればつれなく成ぬ女郎花人知らず社つまむとは思へ
忠岑
 〇人の見るとや苦しき女郎花霧のまがきに立隠るらむ
あきかせ
 一折るからに我名は立ぬ女郎花いざ同くは花乍らみむ
素性
 二花に飽て何返る覽女郎花多かる野べにねなまし物を
平のまれよ
 三女郎花色にもあるか松蟲を下に宿して誰をよぶらむ
伊勢
 四枝もなく人に折らるゝ女郎花根をだに残せ植し我爲
勢
 五女郎花折れる枝の節ごとに過にし君は思ひ出やせし
女郎花折りも折らずも古は更にとふべき事ならぬ哉
 六女郎花折りも折らずも古は更にとふべき事ならぬ哉
我宿に今咲く花の女郎花堪へぬ心に猶戀ひにけり
 七女郎花うしと見つゝぞ行過る男山にしたりき思へば
ふるのいまち

貫之
 一白露の置ける朝の女郎花花にも葉にも玉ぞかゝれる
貫之
 二小倉山峰立ち馴し鳴鹿のへにけむ秋を知る人ぞなき
興風
 三秋の野の露に置るゝ女郎花拂ふ人なみ濡つゝやへむ
女郎花花の心のあだなれば秋にのみこそ逢渡りけれ
すいき
 四さを鹿の入野の薄はつ尾花いつしか君が手枕をせむ
人鹿
 五我宿の尾花が上の白露をけたすて玉にぬく物にもが
かなむら
 六いかご山のべに咲たる花を見れば君が家なる尾花思ほゆ
貫之
 七野べみれば生ふる薄の秋若みまだほに出ぬ戀もする哉
おなじ人
 八花薄にははおけども初霜の色はみえずて消ぬべら也
おなじ人
 九目止てぞ見べかりける花薄招く方にや秋のいぬ覽
おなじ人
 〇招くとて來つるかひなし花薄ほに出て風の計る也鳥
おなじ人
 一いつとても人やはからす花薄などか秋しも穂には出覽
躬恒
 二過がてに野べはへぬべし花薄此彼招く袖の見ゆれば
君とはむ人には逢て秋風に靡く尾花をみてや歸らむ
在原のむねやな
 三秋の野の草の袂か花薄穂に出で招く袖とみゆらむ
伊勢
 四秋の野に出でぬとならば花薄夢き空を招きたてらむ
花薄我こそ下に頼みしかほに出て人に結ばれにけり
君が植し一村薄蟲の音の繁き野べともなりにける哉
いか計風のつらさに花薄吹きくる方をまづ背くらむ

○小倉山麓の野への花薄ほのかに見ゆる秋のゆふぐれ
 深 養 父
 一花薄風に靡きて亂るゝは結び置きてし露やとくらむ
 貞 文
 二今よりは植てだに見じ花薄穂に出る秋は侘しかり鳥
 口置長枝が娘
 三秋づけば尾花が上に置露のけぬべく我は思ほゆる哉
 石河のひろなり
 四珍しき君が家なる篠薄ほに出る秋の過ぐらくをしも
 人 麿
 五妹がりとわが通路のしの薄我し通はゞ靡けしのはら
 六年ふとも我忘れめや逢坂の篠の小薄老いはてぬとも
 七秋風の稍吹野への篠薄穂に出でぬ戀は苦しかりけり
 八篠薄ほに出ずとも行秋を招くといはゞそよと答へよ
 貫 之
 九いつも聞く風とはきけぞ萩の葉の戦ぐ音にぞ秋はけ
 おなじ人
 一萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝ始也けれ
 躬 恒
 二萩の葉に吹くる風ぞ秋きぬと人に知らるゝ印也けれ
 三秋風の吹に附ても訪ぬ哉萩の葉ならば音はしまし
 四朝夕に撫ておほし、草なればおいて見ゆるぞ我宿の萩
 五最とわりや恨むるとも秋風のそよぐ萩の葉にぞ驚く
 六最としく物思ふ宿の萩の葉に秋と告つる風の侘しき
 七秋風の萩の葉を吹く音きけば愈我もものをこそ思へ
 八に
 九昔人の其香に匂ふふお袴君の御のたをわたるけふ天
 ならのみかど
 一折人の心のまゝに藤袴うべも色こく咲きて見えけり
 敏 行

何人かきてぬぎかけし藤袴くる秋毎に野べを匂はず
 つらゆき
 一宿りせし人の形見か藤袴忘れがたき香は匂ひつゝ
 素 性
 二主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱懸し藤袴をも
 おなじ人
 三女郎花なが藤袴織つれば秋の紅葉を染つつけにして
 四秋かせにはころびぬらし藤袴つゞりさせてふ萎なく
 五濡れてはず山路の菊の露のまにいか千を我は詠
 業 平
 六植しうるば秋無時や咲ざらむ花社散め根さへ枯めや
 敏 行
 七久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞ誤またれける
 菅原のおと
 八秋風の吹上り立てる白菊は花か非ぬか波のよするか
 貫 之
 九故郷を別て咲ける菊の花平らかにこそ匂ふべらなれ
 おなじ人
 一咲初し宿し變れば菊の花色さへにこそ移ろひにけれ
 おなじ人
 二月影も花も一にみゆる夜は孰を分きて折むとぞ思ふ
 貫 之
 三色そむる物ならねども月影にうつれる宿の白菊の花
 四移ふと見ゆる物から菊の花さけりし枝ぞ變ざりける
 五孰れをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊
 つらゆき
 六薄く濃く色ぞ見えける菊の花露や心を分きて置らむ
 七置露の染め惑はせる菊の花孰か元の色には有るらむ
 貫 之
 八水にさへ流れて深き我宿の菊の淵とぞ成ぬべらなる

一緒をよりてぬく物にもが朝毎に菊の上なる露の白玉
 躬 恒
 二心あてに折ばや折らむ初霜の置き惑はせる白菊の花
 おなじ人
 三菊花疾きも遅きも今迄に霜の置かずば色と見まじや
 おなじ人
 四初時雨降初しより菊の花なかりし枝ぞ又そはりぬる
 五月影に色わき難く白菊は折てもをらぬ心ちこそすれ
 六朝毎に露はあけども菊の花人の齡はくれずぞ有ける
 躬 恒
 七菊の花千種の色をみる人の心さへにぞ移ろひぬべき
 八元よりの色にはあれど菊の花片枝は移す所からかも
 友 則
 九波とのみ打こそ見つれ住の江の岸に残れる白菊の花
 おなじ人
 一もと思ひし菊を大澤の池の底にも誰か植えけむ
 千 里
 二植し時花待遠にありし菊移ろふ秋に逢はむとやみし
 おなじ人
 三秋を置て時こそ有けれ菊の花移ふからに色の優れば
 九なにしきく色染返し匂ふ覽花もて囁す君もこなくに
 伊 勢
 四秋夜も深く成やと菊の花影さへそひとて君に見ゆ覽
 五菊ならぬ菊こそ我は思ほゆれ君に逢つゝ人し無れば
 かねすけ
 六けふ引て雲居に移す菊花天つ星とやあすよりはみむ
 おなじ人
 七新しき物にざりける神無月時雨降にし菊にはあれ共
 是 則
 八菊の花冬野の風に散もせでけふ迄とてや霜は置らむ
 おなじ人

我背子がひも夕暮の菊の花飽すぞ秋の色は見えける
 これひら
 一草に咲くはかひなし百敷に移して後は色かふな菊
 二斯ばかり深き色にも移ろふを猶君菊の花といはなむ
 三匂ひけむ盛はみねぞ菊の花名惜くも思ほゆるかな
 四色も香も匂ふ菊とも成てしが我よりは又非じと思はむ
 よ つ な
 一白雲の上にし移る菊なれば痛くを匂へ花と見るべく
 二色變る秋の菊をば一年にふたゝ匂ふ花とこそみれ
 伊 勢
 三草の斯う色變りぬる白露は心おきても思ふべきかな
 きちかう
 四秋近う野はなりに見白露のおける草葉も色變りゆく
 五秋の月近う照すとみえつるは露に移ろふ光なりけり
 りうたむ
 六我宿の花踏散す鳥うたむ野は無ければや爰にしもくる
 貫 之
 七花しあらば且來て折む秋風に波立返りうたむ中にも
 伊 勢
 八色深き露のかきりうたむれども紫深き秋のはなかな
 おなじ人
 九風寒み鳴雁音の聲によりうたむ衣をまづやからまし
 しをに
 一秋の野の草葉を人も折りきしを錦の如も見え渡る哉
 二散ぬ共みつる色をば忘れじを俄に移る花の色ぞ
 伊 勢
 三受溜むる袖をし緒にて貫止ば涙の瀧の数はみてまし
 貫 之
 四咲果て今は有じと思ひしをにはがくても匂ける哉
 おなじ人
 五菊も猶咲出ぬればこと花はそれに非じを匂ひける哉

振はへていざ故郷の花見むとこしを句ぞ移ひにける
 紫の花ゆひしつとつけし緒に思は深く結びこめてき
 散ぬれば後はあきたなる花を思知ずも感ふ今日哉
 水上を山にて落る瀧つせの雫の絶えずそく谷かげ
 我はけさうひにぞみつる花の色をあだなる物と云可り身
 かるかや
 秋風に亂初にし刈萱を我ぞつかねてゆふまに
 刈萱のはに出て物を云はね共靡く草葉は哀とぞみし
 河上の根白高萱綾にくさねさねて社とに出にしか
 萱の野へ最もかるくか峰の上の松が枝共に久き物を
 七日刈る萱は我身の上なれや人に思を告げやみぬる
 はちす
 久方の雨も降らぬか蓮葉に溜れる水の玉に似むみむ
 蓮葉に置きある露の玉水はうかべる人の心とぞみむ
 緑也と思ふ計に蓮葉の香は身にさへもしみにける哉
 濁江は片深く社あせにけれ身を運さへ見れば生鳥
 蓮葉の濁にしまぬ心もて何かはつゆを玉とあざむく
 吹く風は香をのみ添ふる我宿の池の蓮を取な盡しそ
 露をだに玉となしつる蓮葉に思ふ心を入て見せばや
 かきつばた
 住の江の淺澤小野の杜若衣にすりつけきむ日知ずも
 良岑よしかた
 云ひそめし昔の人の杜若色ばかりこそ形見なりけれ
 我のみや斯戀すらむ杜若匂へる妹はいかにかあらむ

杜若匂へる妹をいさなみに思ひ出つゝ歎きけるかな
 君がやと我やと分くる杜若移ろはぬ時見む人もがな
 返事 興 風
 又 貫 之
 直ちにて君が越來む杜若をほかに移りて移ひぬべし
 常ならぬ人々に山秋津野の杜若をし夢に見哉
 唐衣きつゝ馴にし妻しあれば遙々きぬる旅をしぞ思
 こも 業 平
 我せ子に戀つゝあらずば刈萱の思亂て死ぬべき物を
 春駒のあさる澤への眞菰草まことに我を思ふやは君
 我せ子が老ゆるか惜ささだの池の菰にもがもや
 菰枕高瀬の淀に刈る菰の刈るとも我は知らで頼まむ
 大伴のかたみ
 我妹子にかけてな云を刈菰の亂て思ふ君があたりぞ
 貫 之
 駒にかふ澤の若菰刈にきていかで淀のよとを知けむ
 三熊野の刈やみ菰の編懸てゆふてに思我ならなくに
 五月まつ沼に生たる若菰のそよ／＼我も争でとぞ思
 はながつみ
 女郎花さく澤に生ふる花がつみ都も知ぬ戀もする哉
 君がをる八重山吹の花がつみ且見人ぞ戀しかりける
 陸奥の淺香の沼の花がつみ且見る人の戀しきやなぞ
 あし
 蘆づのゝ生ひ出し時に天地と人の品は定りにけり
 津國の難波の蘆のめもはるに繁き我戀人しるらめや
 人知す物思時は難波なる蘆の白根の知られやはする
 貫 之
 白波のよすれば靡く蘆の根の浮世の中は短からなむ

押照や難波堀江の蘆べには雁ぞれたら霜の降れるに
 難波女の衣ほすとて刈てたく蘆火の烟立ぬ日ぞなき
 君が爲浮ぬの池に菱とると我染し袖の濡にけるかも
 あすてへば心細みの池に生る菱の下根の泣れ社すれ
 豊國のさく池なる菱のうれを取とや妹がみ袖濡覽
 ぬなは 人 磨
 我心ゆたのたゆたに浮草へにも沖にもよりや兼さし
 こりすまの籠り江に生る浮草憂き身に物と思ふ頃哉
 ねぬなは 忠 岑
 隠沼の底より生る根草のねぬなはたてじくるな厭そ
 暮果るとや遅きと根草のねぬれば人の來るも知れず
 山水に君はあひねど根草のくるまにまにも思増す哉
 戀をのみ益田の池の根草のくればぞ物の亂ともなる
 あさ 伊 勢
 見からに思益田の池に生るあさの浮て世をばへよとや
 浮くさ 人 磨
 ととき衣の思亂れて浮草の浮ても我はありわたるかな
 伊 勢
 根を絶えて水に浮べる萍は池の深きを頼むるべし
 小野小町
 侘ぬれば身を萍の根を絶て誘水あらばいなむとぞ思
 躬 恒
 水の面に生ふる五月の浮草の波の上には種を蒔けむ
 龍江に隙なく浮ける萍のま無くぞ人は戀しかりける
 つさぐさ
 月草に衣はすらむ朝露に濡れての後は移ろひぬとも
 月草の徒らにある心哉我が思ふ人のことも告げぬ
 昔より打見る人につさぐさの花心とは君をこそ見れ
 月草の移ろふ色に思ひせば今まで君をまたまし物か

月草に衣色どりすらめども移ろふ色といふが若しさ
 世中の人の心は月草の移ろひやすき色にぞありける
 風に咲き夕は消ゆる月草のけぬべき戀も我はする哉
 朝夕に咲すさびたる月草の引きへ共にけねく思ほゆ
 わすれ草 貫 之
 道しらば橋にも行かむ住の江の岸に生ふてふ戀忘草
 住江に生ふとぞ聞きし忘草人の心にかで生ひけむ
 おなじ人
 住の江に舟さしよせよ忘草驗有りやと摘みに行べき
 おなじ人
 打忍びいざ住の江へ忘草忘れて人のまたや摘まぬと
 躬 恒
 住吉と海士は云とも長居すな人忘ぐさ岸におふなる
 我爲は見るかひもなし忘ぐさ忘る計の戀にし非ねば
 忘草たねの限は果てなむ人の心に蒔かせざるべく
 しのぶ草
 獨のみ詠め古やのつまなれば人を惹のぐさぞ生ける
 伊 勢
 はな薄穂に出穂に出すなき宿の昔葱の草をこそみれ
 戀しとも云はで古やの忍草繁さ増れば今ぞ穂に出る
 貫 之
 山高み峯の嵐の吹く里は匂ひもあへず花ぞちりける
 ことなし草
 こりすまの松には最ど年ふれど事無草ぞ生添りける
 貫 之
 人にのみいはれの池の綾なくに事無草の宿に誘はむ
 君見てし程の古屋の底には逢事なしの草ぞ生ひける
 左大臣橋諸兄
 茜さす晝は只あくぬば玉の夜のいとまに摘める芹是
 かへし 命 婦
 大夫と思へる物を太刀佩てかにはの田むに芹ぞ摘ける

人知す沼に生てふ深芹の我だに引かばねも見ざらめや
春雨の振はへて行く人よりは我先摘まむ八瀬川の芹
春霞春日の里に植しなご苗也と云しえはさしにけり
苗代のこなきが花を衣にすり馴るゝ隨にあせか悲き
かむつけのいかほの沼に植しなご斯戀むとや種求けむ
たて

我宿の穂蓼ふるから摘はやしみに成迄に君をし待む
みな月の河原に生ふる八穂蓼の辛しや人に逢ぬ心は
春はふ賤しき宿も大君のこむと知せば玉しかましを
何しにか賢き妹が春生のけがしき宿に入はますらむ
貫之

八重葎心の内に繁ければ花見に行かむ出たちもせず
おなじ人
八重葎繁くのみ社なり増れ人目ぞ宿の草にならまし
何せむに玉の臺も八重葎はへらむ中に二人こそねめ
春生ひて荒たる宿の戀しきに玉と作れる宿も忘れぬ
玉かづら 貫之

玉蔓葛城山のもみぢ葉の面影にのみ見えわたるかな
おなじ人
二かけて思ふ人もなけれど夕されば面影絶ぬ玉葛かな
二いか様に生る物ぞと玉蔓争で忍びにねも見てしがな
くす 兼之

秋風に吹き返さるゝ葛の葉の恨みても獨恨めしき哉
兼之
足曳の山下しげくはふ葛の尋ねて戀ふる我と知すや
貫之

千早振神の忌垣にはふ葛も秋にはあへず色附にけり
枯兼て霜に移ふ葛の葉の恨みやせまし風につけつゝ
風早み峯の葛の葉ともすればあやかり易き君か心か
兼之

君が爲我手もすまに春の野に扱る芽花ぞ食て肥ませ
我君にけぬは物戀らし給たふつ花なくも彌腹にやす
つばなつむ淺茅が原の壺董今盛なり我が戀ふらくは
かにび 兼之
渡つ海の沖中に火の離れ出で燃と見えしは蟹の漁火
片岡に火の遙々と見えつるは此面彼面に誰か附けむ
あぢさゝか
紫陽花の八重咲如くやつよにもいませ我背子見つゝ忍ばむ
茜さす晝は言痛し紫陽花の花の宵らに逢見てしがな
さこく
春はきて昨日計を淺綠色はけさこく野はなりにけり
春雨にしめぞ結らし花にけさ濃くは色えて咲満に鳥
秋の野は根こじこじてもてぬ其巖の種は残しやはせぬ
すみれ

春の野に莖摘にとこし我ぞ野を懐しみ一夜寝にける
我宿に董の花の多かればきやどる人やあると待つ哉
山吹の吹きたる野の壺董此の春雨にさかり也けり
あはぎ
春日野に煙立ちみゆ少女子し春野のおほき摘て煮くらし
わらび
三吉野の山の霞を今朝見れば蕨のもゆる煙なりけり
我爲に歎きこるとも知なくに何に蕨を焼てつけまし
煙たちもゆとも見えぬ草の葉を誰か蕨と名け初けむ
あはぎ
足曳の山田の澤にゑぐ摘むと雪げの水に裳の裾濡す
足曳の山澤をぐを取に行む日だにも逢む親はせむ共
ゆり
夏の野の茂みに咲る姫百合の知られぬ戀は苦かり鳥
道のべの草深百合の後にてふ妹がみとを我は知めや
道のべの草深百合の花笑にゑみせしからに妻と云はせむ

我が宿の葛は日毎に色づきぬ來まざる君は何心ぞも
女郎花生ふる澤への眞葛原いつかも繰て我衣にきむ
足柄の箱根の山に這ふ葛のひかば寄來ね忍びくりに
さねかづら 三條右大臣
玉匣みまとの山のさね蔓さねば遂に有がてましも内大臣
名にしおは逢坂山のさね蔓人に知られざる由もがな
無名のみ立田の山のさね蔓くる人有と誰かいふらむ
難面きを思ひ忍ぶのさね蔓果はくるをも厭ふべら也
あをつら
山高み谷へにはへる青つら絶る時なく逢由もがな
山賤の垣にはへる青つら尋れども逢ふ由もなし
絶ぬとは云てし物を青つら又繰返し山人のうさね
あさがほ 兼之

春日野の野の面影にみえつゝ妹は忘れかねつも
覺束な誰とかしらむ秋霧の絶間に見ゆる朝顔のはな
朝顔は朝露おきて咲といへど夕影にこそ咲増りけれ
貫之
此山の人間にもあはで櫻の花をのみみて我や返らむ
あさがほ 兼之
淺茅生の小野の篠原忍とも今は知じな訪人なしに
むしまろ 兼之
けさ鳴きて行きし雁音寒みかも此頃淺茅色附にけり
あめのみかど

けさの朝け秋風寒く聞しなべ野の淺茅は色附に鳥
山高み夕日隠れの淺茅原後見む爲にしめゆはましを
思ふふよりいかにせよと秋風に靡く淺茅の色殊になる
時雨のみまなくし降は春日野の淺茅の色も移ひに鳥
ほづみの皇子
秋萩は咲ぬべからし我宿の淺茅が花の色づくみれば
眞葛はふ小野の淺茅を心より人引めやも我ならなくに
あふひ

人知す戀はしぬ共御園生の唐藍の花のいろに出めや
まさかづら
すすべらぎの神の宮人まさきづら彌常しきに我省みむ
ひかけ 兼之
足曳の山下日蔭かつらける上や更に梅をしのびむ
少女子が日蔭の上以降る雪は花の挿頭に何れ遠へり
常磐なる日蔭の蔓けふしこそ心の色に深く見えけれ
人しれぬ心を君に奥山の思ひかけてふ草に生ひけり
朝日影句へる山に照月の美しく妻を山越しにおきて
山たちばな 友 則

我戀を忍び兼ては足引の山たちばなの色に出ぬべし
かけのこりの雪にあひたる足引の山橋を苞に摘めらな
足引の山橋の色に出で、我こひなむをやむむ方なし
すげ
三吉野の三熊が菅を編なくに刈のみ刈て亂なむとや
足引の山に生たる菅の根のねむごろ見まく欲き君哉
女郎花咲く野に生ふる白菅の知ぬともて云れし我背
しほの根に根さす小菅の忍びすて君に戀つゝ有が
見渡せば三室の山の岩は菅忍びに我は片思ひぞする
大君のみ笠にぬへる有馬菅有つゝ見れど事無き我妹子
菅の根のねむごろ妹に戀せましうら思心思はえりかも
奥山の岩もと菅の根深くも思はゆるかも我思ふ妻は
奥山の岩に生ふる菅の根のねむごろ我も相思はせむ
妹が爲すがのみ取ると行く我は山路迷て此日暮しつ
皆人の笠に縫ふてふ有馬菅有ての後もあはざらめやは
ささ

笹の葉も近つるなべに足曳の山には雪ぞ降積にける
玉笹の葉わきに置る白露の今幾世へむ我ならなくに
あふひ
千早振神の卯月になりけりいざ打群れて妻鬪さむ

三吉野の山に生たる菅の根のねむごろ見まく欲き君哉
女郎花咲く野に生ふる白菅の知ぬともて云れし我背
しほの根に根さす小菅の忍びすて君に戀つゝ有が
見渡せば三室の山の岩は菅忍びに我は片思ひぞする
大君のみ笠にぬへる有馬菅有つゝ見れど事無き我妹子
菅の根のねむごろ妹に戀せましうら思心思はえりかも
奥山の岩もと菅の根深くも思はゆるかも我思ふ妻は
奥山の岩に生ふる菅の根のねむごろ我も相思はせむ
妹が爲すがのみ取ると行く我は山路迷て此日暮しつ
皆人の笠に縫ふてふ有馬菅有ての後もあはざらめやは
ささ

思ふ中酒に酔にし我なれば逢日ならではやむ樂なし
 九逢事の酔葉草も摘なくに下種など我袖のこゝら露けき
 十筑摩江に生るみくりの水早みまだねも見ぬに人の戀
 十一戀すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶すれ我や
 十二我もふり逢も宿に茂りにし門に音する人はたれぞも
 十三故郷となるぞわびしき夏衣蓬のうへの露見ること
 十四秋風や蓬のやどに吹きぬらむこゑなつかしく鳴く葦
 十五常磐なる松に懸れる苔見れば年の緒長き知べとぞ思
 十六石の上に出る苔のねも入らずな物と思ふ頃哉
 十七奥山の巖の苔の年久に見れども飽かぬ君にもある哉
 十八逢ふとをいつか其日と松の木の苔の亂て戀ふる此頃
 十九道のべのいちしの花の逸じろく人皆知ぬ妹に戀すと
 二十大原の此いち柴のいつしかと我思ふ妹に今宵逢るかも
 二十一疊み菰隔てあむ敷に通ひせば道の芝草生ざらましを
 二十二道の邊のいつ柴原のいつも人の許さむ時をし待む
 二十三秋の夜の明も知ず鳴蟲は我ごと物や悲しかるらむ
 二十四秋風の稍吹きしけば山寒み侘しき聲に蟲ぞ鳴くなる
 二十五我爲にくる秋にしも非なくに蟲の音きけば物ぞ悲き
 二十六秋くれば野もせに蟲の織つめる聲の綾をば誰かきる覽
 二十七秋の夜の露こそ殊に寒からし業ごとと蟲のわぶれば
 二十八秋早み蟬の鳴つゝ歎かれぬ難面き人の住む山は遠み
 二十九蟬の聲きけば悲しな夏衣薄くや人のならむとすらむ

七岩走る瀧もとやろに鳴く蟬の聲をし聞けば都思はゆ
 八咲花は年に替ねど空蟬のよの例にも散るにざりける
 九今も猶わけてぞ人の恨しきかるさ如なかの中に流て
 十空蟬の空しき骸になる迄に忘れむと思我ならなくに
 十一哀てふ人はなくとも空蟬のからになる迄泣むとぞ思
 十二秋より離れて玉を包まめや是なむ其と移せ見むかし
 十三波のうつけみれば玉ぞ亂ける拾はと袖に儂からむや
 十四夏蟲
 十五宵の間も儂くみゆる夏蟲に惑ひ増れる戀にもある哉
 十六夏蟲を何か云ひけむ心から我も思にもえぬべらなり
 十七優りては我ぞ燃ける夏蟲の火にかゝるとてなども
 十八夏蟲の身を徒になすことも一つ思によりてなりけり
 十九燃る火に思入りにし夏蟲は何しか更に飛び返るべき
 二十夏蟲のしるゝ惑ふ思をばこりぬ悲しと誰か見ざらむ
 二十一きりんとす
 二十二養いたくな鳴きそ秋の夜のながき思は我ぞまされる
 二十三なが爲に荒せる宿か蟋蟀夜長き人のもとにしもくる
 二十四秋風の吹きつる宵は菘くさむらごととこゑ亂るなり
 二十五我がごとく物や悲しき菘枕つどへに夜もすがら鳴く
 二十六秋風のやゝ吹きしけば菘むべも蓬のやどをかるらし
 二十七まつむし
 二十八秋の野の露に濡つゝ誰くとか人松蟲のこゝら鳴らむ
 二十九こむと見し程も過にし秋の野に人松蟲の聲の悲しき
 三十秋の野に來宿る人も思はえず誰を松蟲こゝら鳴らむ

夕されば人松蟲の鳴なべに獨ある身ぞ戀ひ増りける
 二瀧つ瀬の中に玉つむ白波は流るゝ水脈を緒にや貫覽
 三秋の野に我松蟲の鳴と云はゞ折で根乍花は見てまし
 四君忍ぶ草にやつるゝ故郷は松蟲の音ぞ悲しかりける
 五すむし
 六邂逅にけふ逢見れば鈴蟲は昔乍らの思ひ聲ぞ聞ゆる
 七人の妹かると聞くまで女郎花もと毎に鳴く鈴蟲の聲
 八狩にきて野べにぞ惑ふ鈴蟲の聲はさやけき知べなれ共
 九ひぐらし
 十夕陰にきなく蝸いくそばく日毎に聞けどあかぬ聲哉
 十一今こむと云て別し朝より思ひ暮しの音をのみぞ鳴く
 十二蝸の聲に山の端近ければ鳴つるなべに入日さしけむ
 十三蝸の聲もいとなく鳴くなるは秋の夕になれば也けり
 十四秋風の稻葉をよぎて吹くなべに仄かにしつる蝸の聲
 十五蝸の鳴つるなべに日は暮れとみえしは山の陰にぞ有ける
 十六柚人は宮木引くらし足曳の山の山人よび響むなり
 十七又もあらむ折もなかなむ蝸の物思ふ時に鳴つゝ綾な
 十八斯しのみあれば物思ひ慰むと出立ちきけばきなく蝸
 十九ほたる
 二十行く雲の上迄いぬべくば秋風ふくと雁に告げこせ
 二十一夏の夜は燈す螢の胸の火を緒しも絶たる玉とみる哉
 二十二夕されば螢よりけに燃れども光みねばや人の難面き
 二十三さよふけて我が待つ人や今くると驚く迄に照す螢か
 二十四晝はなき夜は燃てぞ長らふる螢も蟬も我身なりけり

しげはる
 一住途む庵たる可も見えなくになど程も無き身を焦す覽
 二はたありめ
 三雁音の羽風を寒み機織め管まく聲のきりゝとなく
 四秋來れば機織る蟲の有なべに唐錦にも見ゆる野べ哉
 五くも
 六今しはと侘にし物をさゝがにの衣に懸て我を頼むる
 七衣通 姫
 八秋の野に置く白露は玉なれや貫きとむるくもの糸條
 九常ならぬ身は篠蟹の糸なれや天つ空なる頼かくらむ
 十てふ
 十一大えてらは是は誰ぞも世中にあだなる蝶にみゆる花かは
 十二云へばえに云ねば更に怪くも陰なる色の蝶にも有哉
 十三木
 十四冬なれば春べを戀て植し木のみになる迄に片待我ぞ
 十五躬 恒
 十六言とはぬ草木なれ共嬉しとや此秋よりは云で思はむ
 十七枯果てぬ埋木あるを春は猶花の便によくなとぞ思ふ
 十八櫻花匂ふともなく春くればなごか歎の茂りのみする
 十九伊 勢
 二十誰爲にこれる歎を打附に句ち知ぬ我におほする
 二十一今よでになどは花の咲かすして四十年餘年ざりはする
 二十二春々の数は忘れず有ながら花咲かぬ木を何に植けむ
 二十三しをり
 二十四東路のさやの中山繁く共君きまされば面影もせじ
 二十五行通ふ山の細道いかなれば菜も見えて踏はたゆらむ
 二十六花
 二十七難波津に咲やこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花
 二十八友 則

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
 貫之
 行水に亂て花の散れるをば消す流るゝ雪かゝる見る
 おなじし人
 散花に家路まどひて此里に我は稀にぞ長居しにける
 おなじし人
 梓弓春の山べを越くれば道もさりあへず花ぞ散ける
 おなじし人
 谷川の流れてこずば思ほえず山隠の花を見ましや
 おなじし人
 朝ばらけ下行水は淺けれど深くぞ花の色は見えける
 貫之
 春くれば咲と云事を濡衣にきする計の花にぞ有ける
 躬恒
 花見れば心さへ社移りぬれ色には出じと思ひし物を
 起臥に惜むかひなく現にも夢にも花の散をいかにせむ
 我宿の花がてらに來人は散なむ後ぞ戀しかるべき
 舟岡に花摘人のつみ果てゝさして行らむ方や孰くぞ
 鶯は痛くな鳴そ匂ひ香にめでゝ我摘む花ならなくに
 躬恒
 花見れば移る心は色に出てあだには綾な人に知るゝ
 惜め共花の散らむ人憎く物も云はでぞ見べかりける
 みつね
 久方の空も曇らで降雪は風に散りくる花にぞ有ける
 伊勢
 戀しくばいかにせよとか斯計あだな花の許にねぬ覽
 おなじし人
 年を経て花の鏡となる水は散懸るをや曇ると云らむ
 素性
 春毎に花の匂はありなめど逢ひ見むとぞ命なりける
 吹風に眺へつくる物ならば此一枝はよきよと云まし
 おなじし人

素性
 惜と思ふ心ぞ糸によらねむ散花毎に貫てとむべく
 木傳へば己が羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴覽
 素性
 花の木も今は掘植じあぢきなく移ふ色に人習ひけり
 おなじし人
 花の色を願はにめでは色めきぬいざくら間に折て取てむ
 花のごと世の常ならば過して昔は今も返りきたまし
 秋花
 貫之
 見人もなき野べなれば毎毎に外へ移ふ花にぞ有ける
 伊勢
 宿もせに植並べてぞ我は見る招く尾花に人や止ると
 紅葉
 妹が袖巻もく山の朝霧に匂ふ紅葉の散らまくをしも
 貫之十一首
 色もまだ見えぬ紅葉は足引の山水よりや流來つらむ
 心もみち葉の流るゝ時は立田川湊よりこそ秋は行らぬ
 心とて散らむだに社惜からめなどか紅葉を風の吹覽
 見る人も無くて散ぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり
 唐錦立田の山のもみぢ葉は紅ながら常磐ならなむ囉
 山風のふきのまにゝ紅葉も己が散々散りぬべら也
 打群れていざ我妹子が鏡山越て紅葉の散らむ影みむ
 吹風に散ぬと思ふを紅葉の流るゝ瀧の本に落ちむ
 紅葉の散りし時は行通ふ跡だに見えぬ山路也けり
 足引の山かき曇りしぐれど紅葉計ぞ照り増りける
 流來るもみぢ葉見れば唐錦瀧の糸して織れる也けり
 貫之
 山近き所ならずば行く水も紅葉せりとぞ驚かれまし
 立田川秋にしなければ山近み流るゝ水も紅葉しにけり
 水底に影し移ればもみぢ葉の色も深くや成増るらむ
 おなじし人

唐衣立田の山のもみぢ葉ははた物もなき錦なりけり
 おなじし人
 秋風の吹きにし日より音羽山峰の梢も色づきにけり
 かもる山の峰の紅葉も散にけり儂き色の惜しくも有哉
 躬恒
 立止り見てを渡らむ紅葉は雨と降るとも水は増らじ
 秋夜の長居をせむ歩なくて紅葉の蔭に目を暮しつゝ
 風に散木々の紅葉は後終に瀧の水こそ落し果けれ
 風吹けば落る紅葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ
 惜めども終に散ぬる紅葉故ふる雨風に物をこそ思へ
 忠岑
 白露も時雨も痛くもる山は下葉焼らす紅葉しにけり
 秋風にさほ山よりや散來つる色見えぬべき日陰尋て
 せあだなりと我は見なく紅葉を色の變れる秋し無れば
 友則
 遅くとく色づく秋の紅葉は後れ先だつ露や置くらむ
 木葉ちる浦に波立つ秋なれば紅葉に花も咲紛ひけり
 宗子
 連もなく成行く人の言の葉ぞ秋より先の紅葉也ける
 是則
 紅葉の流れざりせば立田川水の秋をば誰か知らまし
 人鷹
 立田川もみぢ葉流る神なびの三室の山に時雨降らし
 雁音の鳴くなるなべに唐衣立田の山は紅葉しにけり
 經もなく緯も定めぬ少女らがおれる紅葉に霜降なゆめ
 はこそ
 奈良の帝
 佐保山の柞の紅葉散ぬべき夜さへ見よと照す月影
 式部卿宇合
 山城の岩田の森の柞原みつゝや君がひとり越ゆらむ
 是則
 佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにける哉

秋霧は立ずもあらなむ佐保山の柞の紅葉よそ乍みむ
 まゆみ
 移ろふも嬉しかりけり我爲に深き檀の色をみすれば
 貫之
 引ふせてみれど他ぬは紅にぬれる真弓の紅葉也けり
 かへで
 我宿にもみづる楓見る毎に妹を懸つゝ戀ぬ日ぞなき
 素性
 今更に心はかへで世はへむと云し言葉に欺かれつゝ
 たいふさ
 吉野やま峯の紅葉心あらば稀の御幸を色かへで待て
 子持山若蛙手のもみづ迄ねむと思ふを妹はいかにぞ
 又、ねむとわは思ふ汝はあぞか思ふ
 貫之六首
 幾世へし磯の松ぞも昔より立よる波ぞかすは知らむ
 色のみぞ増るべらなる磯の松影みる水も緑なりけり
 我のみや陰とは頼む白波もたえずたちよる峰の姫松
 花の色は散らぬ間ばかり故郷に常には松の緑也けり
 世中に久しき物は雪の内に元の色變ぬ松にぞ有ける
 大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千世の蔭みむ
 友則
 打はへて蔭とぞ頼む嶺の松色どる秋の風にうつるな
 深緑常磐の松の蔭にゐて移ろふ花をよそにこそ見ぬ
 敏行
 春深き色にもあるかな住の江の底も緑にみゆる濱松
 興風
 誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
 我せこが使こむかと出立し此松原を今日か過なむ
 人鷹
 風吹けば波こそ磯の磯馴松に顯れて鳴きぬべら也
 貫之

色變ぬかへの葉のみぞ秋なれど紅葉すると習ざりける
 松かへの常磐に似べき心かは亂む戀もあやなかり鳥
 我宿のいさゝむら竹吹く風に音のさやけき此の夕哉
 千世もたる竹の生ひたる宿なれば千種の物は物なき
 三吉野の山より雪は降來れどいつとも分ぬ我宿の竹
 紅葉する草木にも似ぬ竹の葉ぞ變らぬ物の例也ける
 今更に何生ひ出らむ竹の子の憂節繁き世は知ずや
 憂節も有じとぞ思ふ吳竹の世を憐しと思ひにしかば
 時雨する音はすれ共弱竹のなど世と共に色も變らぬ
 竹の葉に降懸らなむ梅花雪の中なる句と見るべく
 鶯のしだかむ中に梅の花散り残らなむ春のかたみに
 袖たれていざ我園へ鶯の木づたひ散らす梅の花見に
 等閑に思つる物を梅花濃香に我とししみなむ
 鶯の笠に縫ふてふ梅の花をりて翳さむ老かくるやと
 くるさあく目枯ぬ物を梅花いつの人まに移ひにけむ
 今年より春知初る梅の花散るてふとは習はざらなむ
 梅の花咲ぬ時は倉部山間に越ゆれど著くぞ有ける
 梅の花咲と知ずや三吉野の山に友まつ雪のふるらむ

梅の香の限無れば折人の手にも袖にもしみ嚙にける哉
 我宿にありと云ひながら梅花哀と思ふに飽時もなし
 梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなる
 數ふれば覺束なきを我宿の梅こそ春の知べなりけれ
 春の夜の闇は綾なし梅花色こそ見えぬ香やは隠る
 孰をか分きて折らまし梅花枝もとをんに降れる白雪
 降雪に色も紛ひぬ梅花香にこそなる物なかりけれ
 香をとめて誰折ざらむ梅花あやなく霞立ちな隠しそ
 梅の花咲にけらしな今年より萬代ふべき春に逢むと
 月夜には其とも見えず梅花香を尋てぞ知べかりける
 梅の花折ればこぼれぬ我袖に匂ふ香移せ家苞にせむ
 散と見て有べき物を梅の花うたて句の袖にとまれる
 よそにのみ哀とぞ見し梅の花飽の色香は折て也けり
 盃に梅の花うけて思ふぞら飲ての後は散ぬともよし
 思出て見にこそざりせば梅の花誰に匂の香を移さまし
 君ならで誰にか見せむ梅花色をも香をも知人ぞ知る
 かつしかも此夜あけなむ鶯の木傳ひ散す梅の花みむ

我宿の梅のそのへに風吹けば匂はよそに成やしぬ覽
 震たつかすがの里の梅の花山下風にちりこすなゆめ
 こをばい
 雪とのみあやまたれしを梅の花紅にさへ匂漂ける哉
 紅と雪とは遠き色なれど梅のはなにはなほ通ひけり
 紅の色をば變て梅の花香ぞことごとくに匂はざりける
 鶯の鼻くへる枝を折たらば子をば争でか生まむとす覽
 柳
 いな筵河添柳水ゆけば起ふしすれど其の根絶えせず
 糸をのみ絶ちより出す青柳を年の緒長き印とぞ思ふ
 春毎に絶せぬ物は青柳の風に繰出す糸にぞありける
 よる人もなき青柳の糸なれば吹來る風にかつ亂つゝ
 青柳の枝に懸れる白露を糸もてぬける玉かとぞみる
 春雨のふり初しより青柳の糸のはなごぞ色増りける
 目に見えて風は吹け共青柳の靡方にぞ花は見えける
 遍 昭
 青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける
 青柳の糸よりかけて織る機はいづれの山の鶯かさる
 へんせう
 花見にも行べき物を青柳の糸手に懸てけふは暮しつ
 伊 勢
 青柳の糸に懸れる春雨を糸もてぬける玉かとぞみる
 春の雨の打ちふる毎に我宿の柳の末は色づきにけり
 春くればしだり柳のとをにも妹が心によりにける哉
 一水の上に影打靡く青柳を波のあやおる糸かとぞみる
 さくら

岩ばしる瀧なくもがな櫻花手折もてこむみぬ人の爲
 我宿の物也ながら櫻花散るをばえこそ留めざりけれ
 貫 之
 百千鳥木傳ひちらす櫻花孰れの春かきつゝ見ざらむ
 惜みにときつるかひなく櫻花見れば且散増れ
 玉鉢の道は猶まだ遠けれど櫻を見れば長居しぬべし
 多かりと思ふ物から櫻花みる所にはやすくやはゆく
 且見つゝ飽かす思へば櫻花散なむ後ぞかねて戀しき
 春立てば里にたなびく白雲は咲ける櫻の遠の也けり
 櫻花ふりにふる共見る人の衣濡るべき雪ならなくに
 とならば咲ずやはあらぬ櫻花見る我さへに静心なし
 人をよぶ物ならなくに櫻花咲けるを見れば心社ゆけ
 人を見えつる物を櫻花今はちるとや色ことなる
 白雲と見えつる物を櫻花今はちるとや色ことなる
 櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降ける
 散るが上にも散る哉櫻花斯てぞ去年の春も過次し
 櫻に如く散りし紛へば櫻花ふりにし雪の形見とぞみる
 櫻には心のみこそ苦しけれ飽て散せる春しなければ
 貫 恒六首
 今迄に散らずはあれど櫻花なき物とのみ思ほゆる哉
 一つの間に散果てにけむ櫻花俤にのみ色を見せつゝ
 櫻花我宿にのみ有りとみばなき物草は思はざらまし
 雪とのみ降るだに有を櫻花いかにせよとか風の吹覽
 風ふかぬ程に折てむ櫻花我手からこそちらば散さめ
 現には更にも云じ櫻花夢にも散ると見えばうからむ
 惜ますよ我が老らくも櫻花かざして後ぞ老忘れける
 貫 恒
 我如や人もみるらむ櫻花あくぞ知らぬ色にもある哉
 櫻花夜間散なむ後やいかにつ社行て折らば折てめ
 おなじ

友 則
 色も香も昔ながらに咲くらめど年ふる人ぞ改りける
 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ
 待てと云に散でし止る物ならば何を櫻に思増さまし
 いざ櫻我も散なむ一盛ありなば人にうきめ見えなむ
 見てのみや人に語らむ櫻花手毎に折りて家苞にせむ
 櫻色に衣は深く染てきむ花のちりなむ後のかたみに
 櫻花散らば散らむ散すとて故郷人のさても見なくに
 春霞なに隠すらむ櫻花散る間をだにも見るべき物を
 垂籠めて春の行へも知らぬ間に待し櫻は移ひにけり
 枝にてもだに散ぬる花れば落ても水の泡と社なれ
 春雨のふるは涙か櫻花散るをしまぬ人しなれば
 櫻花春くはれる年だにも人の心に飽かれやはせぬ
 見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞさかまし
 程もなく散りなむ物を櫻花こゝら久にも待せつる哉
 風さへももて騒かな櫻花心にだにも春をまかせて
 今日こずばあすは雪とぞ降なまし消すは有りとも
 櫻花木傳ひ散らす鶯のうつし心も我がおもはなくに

おなじ人
 春霞たなびく山の櫻花うつろはむとや色かはりゆく
 世中に絶て櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし
 妹が名にかけたる櫻花散らば常にぞ戀む彌年のには
 春雨に争ひ咲ける櫻花常に散さで見ざる由もがな
 かにばざくら
 潜けども波の中には探られて風吹く毎に浮き沈む玉
 はなざくら
 花櫻いかでか人の折りてみぬ後こそ儂る色も出来ぬ
 花櫻をるに袂のひぢぬれば露に懸れる色にぞ有ける
 花櫻今盛也思ひこし挿頭にしてば散らばちる共
 山ざくら
 山もせ罪に咲る櫻の憎からぬ妹に逢見て戀る頃かも
 櫻花咲きにけらしな足曳の山のかひより見ゆる白雲
 おなじ
 山高み見つゝ我が行く櫻花風は心にまかすべらなり
 誰しかもとめてをりつる春霞立ち隠すらむ山の櫻を
 おなじ
 こえぬ間は吉野の山の櫻花人傳にのみ聞き渡るかな
 躬 恒三首
 散るとのみ見てや返らむ山櫻花の思はむ心ある物を
 山櫻ふきくる風の濡衣は花のこゝろをしる人ぞほす
 散るにばだに逢まし物を山櫻待ぬは花のつらき也鳥
 三吉野の山べに咲ける櫻花白雲とのみ誤またれつゝ
 これひら
 我が戀に倉部の山の櫻花まなく散るとも數は増らじ
 遍 昭
 石上ふるの山べの櫻花植えけむときを知る人ぞなき

素 性
 山守は云はと云はなむ高砂の尾上の櫻折りて翳さむ
 山高み雲居に見ゆる櫻花心のゆきて折らぬ日ぞなき
 足曳の山櫻花日並べて斯咲きたらばいと戀ひめやは
 にはざくら
 朝毎に我がはく宿の庭櫻花ちる程は手も觸れでみむ
 にはざくら
 梓弓春の山べに煙立ち燃ゆとも見えぬ緋ざくらの花
 人 鷹
 我が宿の池の藤なみ咲きにけり山時鳥今やきなかむ
 赤 人
 戀しくば形見にもせむと我宿に植し藤波今咲にけり
 藤波の影なる海の底清み沈む石をも花とこそみれ
 たこの浦の底さへ匂ふ藤波を翳して行む見ぬ人の爲
 水底に影をうつして濃紫とめて懸けたる岸の藤はみ
 移はぬ松の名立にあやなくも宿れる藤の咲て散る哉
 貫 之
 水にさへ春やくるゝと立返り池の藤波折つゝぞ見る
 おなじ
 藤の花もとより見ずば紫にさける松とぞ驚かれまし
 おなじ
 縁なる松に懸れる藤なれど己が頃とぞ花はさきける
 躬 恒
 かけてのみ見つゝぞ忍ぶ唐衣うす紫に咲ける藤なみ
 おなじ
 世にも似ず誰か咲けてふ紫の色故にこそ花も咲けれ
 おなじ
 我宿に咲ける藤波立返り過がてにのみ人の見らむ
 遍 昭
 よそみて歸む人に藤花這まつはれよとかむまをだに

おなじ人
 我宿の蔭とも頼む藤の花立よりくとも波にをらるな
 たちばな
 橋は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれ増て常磐木
 貫 之
 常磐なる花と思へばや時鳥はな橋にこゑのかはらぬ
 おなじ
 年毎にきつゝ聲する時鳥はな橋やつまにはあるらむ
 み つ ね
 時鳥などかきなかぬ我が宿の花橋の實になるまで
 家 持
 本くだち清き月夜に我妹子に見せむと思ひし宿の橋
 い せ せ
 五月待つはな橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする
 千 里
 宿りせし花橋も枯れなくなると時鳥きながさるらむ
 今朝きなきいまだ旅なる時鳥はな橋に宿はからなむ
 たかはしのやす丸
 橋の蔭む道のやちまたに物をぞ思ふ人に知られず
 我こそは憎くもあらめ我宿の花橋を見にはこじとや
 あへたらばな
 我妹子に逢で久しくうましたのあへ橋の苦生ふる迄
 人 丸
 片岡の向の峰に推詩かば今年の夏の蔭にならむかも
 遅早も君をば待むむかつをの椎のこやでのあひは違はじ
 我が宿に君こし榎の中絶て罪の報や逢ひ見ざるらむ
 ざくら
 足曳の山柘榴咲く八峰越し鹿まつ君が祝ひ妻もかも
 なし
 学生の浦に片枝さし覆ひなる梨のなりも成らず
 紅葉の句は繁し然はあれど妻も梨の木を折て翳さむ

○露霜の寒き夕にたへかねて移ろひにけり妻梨の木は
 山中をうしと云ても孰こにか身をば隠さむ山梨の花
 一我が宿の毛桃の下に月よさし下心よしうたて此の頃
 一はしきやし我家の毛桃本繁み花のみ咲て成ざらめも
 一春の園紅にはふ桃の花したてる道に出で立てるいも
 一我園の李の花か庭にちるはだれの未だ残りたるかも
 一今いくか春しなれば鶯も物は詠めて思ふべらなり
 一あふからも物は猶社悲しけれ別れむとを兼て思へば
 一鶯に花しられげは無れども春くる道の物にぞ有ける
 一我庵は三輪の山本戀しくばとふくきませ杉立る門
 一孰をか知べともせむ三輪の山見えと見ゆるは杉に
 一忘れずば尋ねもしてむ三輪の山印に植し杉はなく共
 一石上ふるの神杉かみさびて我や更々戀に逢ひにける
 一神南備の神より板にする杉の思ひも過す戀の繁きに
 一我背子を大和へ遣てまつしたす足柄山の杉の木間か
 一岩屋戸に根這ふむろの木汝見れば昔の人を逢見が如
 一離れそに立るむろの木泡沫も久き時を過にけらしも
 一打靡き春さきくらし山邊の楨の梢のさき行く見れば
 一千鳥鳴く佐保の河霧立ちぬらし楨の梢も色附にけり
 一あたへゆく小鹽の山の楨の葉も久く見ねば昔生に鬼

○春霞たなびきにけり久方の月の桂も花やさくらむ
 一目には見て手には取られぬ月の内の桂の如き妹に
 一晝は咲き夜は戀ひぬるがふかの木君のみ見むや
 一我妹子が形見のがふか花にのみ咲きて蓋し
 一我宿に櫻の花は咲たれど名にしもおほ物にぞ有ける
 一梅雨に戀すと云名は立たばたて君に櫻の花し咲なば
 一五月雨ととなしびつる時しもぞ人に櫻の花は咲ける
 一我妹子にあふちの花は散過て今咲る如あらむ妹かも
 一足曳の山に生たる白樫の知らしな人の朽木なりとも
 一白樫の雪も消にし足曳の山路を誰か踏みまどふべき
 一佐保河の岸に生ひたる若櫟それなかりそ有りつゝも
 一春きたらば立ち隠るがに
 一あなし山椿咲たるやつをこえ鹿待つ君が祝ひ妻かも
 一河上の列々椿つらへに見れ共飽かずこせの春野は
 一奥山のやつをの椿つばらかに今日は暮さね丈夫の友
 一足曳のやつをの椿つらへに見る共飽めや植てける君
 一いなび野の赤ら柏の時は有ぞ君に戀せぬ時はさねなし
 一奈良山の兒手柏の二面にもかくにもねぢけ人かも
 一石上ふるから小野のものと柏もとの心は忘れなくに
 一我背子が捧げてもたるほく柏恰も似るか青き笠には

○すべらぎの遠きみよくはやふせり酒飲むと云
 一なながめ柏
 一○人戀るながめ柏は故郷の浮葉ねにのみぞ繁く見えける
 一玉藻刈おほくの浦の浦風に躑躅の花は散ぬらむかも
 一ほそひれの鶯坂山の白躑躅我に匂はね妹にしめさむ
 一瀧走るをしひの山の岩躑躅岩間を分ていや珍らかに
 一山越て遠津の濱の岩躑躅我來る迄にふみみて有待て
 一種しあれば生にけらしな岩躑躅花咲園に逢むまみし
 一波間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ妹に逢ずて
 一こそささし楸今さく徒に土にや落ちむみる人なしに
 一垂乳根の親の園なる桑も猶願へば衣にきると云物を
 一引繭の斯ふた籠りせま欲し桑こき垂て泣くをみせばや
 一我戀はみ山に生るはたつもり積りにけらし逢由も無し
 一奥山の楸の花の名のごとやしくく君に戀渡りなむ
 一蛙鳴吉野の河の瀧の上のあせみの花ぞ手な觸そゆめ
 一我背子に我こふらくは奥山のあせみの花の今盛なり
 一春山のあせみの花の憎からぬ君に寄はしるや寄りぬ
 一息のをに思へる我を山ちさの花にか君が移ひにけむ
 一山ちさの白露重みうらぶれて心に深きわが戀やます
 一わが如く人のめまれらに思ふら白雲深き山ちさの花
 一あともへか阿自久麻山の讓葉のふまざる時に風吹

○かたかし
 一武士の八十少女らが踏響む寺井の上のかたかしの花
 一岩の上のつま、なみれば根をはひて年深からし神寂に鬼
 一青柳のさねきの花は今もかも散ら亂るらむ見人無に
 一古を戀る鳥かもゆづるはのみるの上より鳴渡り行く
 一三村鳥の立にし我名今更にとなしぶともしるし有めや
 一冬山に獨ぬる鳥夜を寒み人は絶えける木をぞ求むる
 一鳥ならばあたり木々の木々に隠居てほれたる聲に我泣
 一夏そ引うなづみの方の沖つ洲に鳥はすだけぞ君は
 一夏刈の玉江の蘆を踏しだき群居る鳥の立つ空ぞなき
 一繪にかけける鳥とも人を見てしがな同所に常に訪べく
 一妹が手をとりの池の波間より鳥の聲聞ゆ明けぞ
 一放鳥行へも知すなりぬれば放れしとぞ悔しかりける
 一雛鳥の風切弱みとはれねば巢籠り乍音をのみぞ鳴く
 一三春の野に朝鳴く雛の妻こふと身を徒になしにける哉
 一蘆鶴のかひ籠め朽る巢籠りの途に歸らぬ身とや成なむ
 一鳥の子は解て後ぞ鳴れける身のかひ無きを思知つゝ
 一河風になびく蘆鶴己が世を波と共にや君によすらむ
 一千年ふと我が聞なべに芦鶴の鳴渡るなる聲の遙けさ
 一葦鶴の立てる河べを吹風よせて返らぬ波かぞぞ見
 一群てるる葦べのたづを忘つゝ水にも消ぬ雪かぞぞ見

○千年まで命保てる鶴なれば君がゆきを慕ふ也けり
 一逢事の海にあり居る葦鶴のすに鳴聲は聞えやはする
 二たづの立つ澤べに波や騒らむ葦の汀の長閑からぬは
 三天雲に羽打附て飛たづのたづしかも君來まされば
 四たづなき葦べをさして飛渡りあなたづし獨り
 五葦鶴のすむ澤に生ふる菅の根の懸に見ぬ君は頼ます
 六若の浦に潮満來れば海をなみ葦べを指てたづ鳴渡る
 七葦鶴のすまふ入江の白菅の知ずや君は我戀ふらくを
 八いよ早も鳴つる雁か白露に彩る木々も紅葉あへぬを
 九春霞かすみていにし雁音は今ぞ鳴くなる秋霧の上に
 〇怪しくも來鳴ぬ雁か白露のおきにし秋は久しき物を
 一葦べなる萩の葉そよぎ秋風の吹來るなべに雁鳴渡る
 二秋風に聲をほに揚てくる舟は天戸渡る雁にざりける
 三久方の天まも置かず雲隠れなきぞ行なるわさ田雁音
 四事繁き里に住ずは今朝鳴し雁に類ひていなまし物を
 五雁音の高く名のりし身なれ共秋の聲とぞ人は云てし
 六秋の山霧立ちわけてくる雁の千世に變らず聲聞ゆ也
 七其々と思ひきつれど雁音は同じ里へも歸らざりけり
 八物思ふと月日の行も知ざりつ雁こそ鳴て秋と告つれ
 九言つてとふべき物を初雁の聞ゆる聲は遙なりけり
 〇初雁の鳴こぞ渡れ世の中の人心の秋し愛ければ
 一春霞飛分けぬる聲さよて雁さぬ也とはかは云らむ
 伊勢
 赤
 人
 九三首
 躬恒五首

二年ごとに雲路感はし來る雁は心づからや秋を知る覽
 三天のはら雁ぞと渡る遠山の梢はむべぞ色づきにける
 四故郷に霞とびわけ行く雁は旅の空にや春をすぐらむ
 五憂きとを思連ねて雁音の鳴きこぞ渡れ秋の夜な
 六初雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物おもふ哉
 七春霞立つを見捨て行く雁は花なき里に住や習へる
 八只管に我きかなくに雲分けて雁ぞと告渡るらむ
 九秋風に山飛越ゆる雁がねのいや遠ざかり雲隠れつ
 〇待つ人にあらぬ物から初雁の今朝なく聲の珍しき哉
 一鳴雁の音をのみぞなく小倉山霧立はる折し無れば
 二春まけて雁歸るとも秋風に紅葉の山を越ざらめやは
 三三吉野のたのむの雁も一向に君が方にぞ寄と鳴なる
 四我方に寄と鳴なる三吉野のたのむの雁をいつか忘む
 五月みればわけても人の戀しきにいと雲居に鳴渡る雁
 六打靡き春ざりくれば笹の葉に尾羽打ふれて鶯ぞなく
 七くだら野の萩の古枝に春待つと住し鶯鳴にけむかも
 八梅の花さける岡べに家しあれば乏しくも非ず鶯の聲
 九打ち靡き春ざりくれば青柳の枝くひもちて鶯なくも
 〇打きらし雪は降つししかすがに我家の園に鶯鳴きつ
 一春の日に霞たなびきうら悲し此の夕かげに鶯鳴くも
 二鶯の谷のそにて鳴く聲は峰にこたふる山彦もなし
 三吹く風を鳴て恨みよ鶯は我やは花に手だにふれたる
 四微なき音をも鳴く哉鶯は今年のみ散る花ならぬに
 赤
 人
 大伴書持
 大伴四綱
 素性二首

二待つ人はこの物故に鶯の鳴きつる枝ををりてける哉
 三春立てば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく
 四花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯誘ふ知べこはやる
 五頼まれぬ花の心と思へばや散らぬさきより鶯の鳴く
 六鶯の谷より出づる聲なくば春くるを誰か告げまし
 七梅の花ちるてふなべに春雨の降りてつゝ鳴く鶯の聲
 八竹近く夜床寝はせじ鶯のなく聲きけば朝いせられず
 九鶯の己が羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴らむ
 〇春ながら心もゆかぬ鶯は花を見乍らねをのみぞ鳴く
 一梅が枝に來る鶯春かけて鳴けども未だ雪は降つ
 二梅の花見にこそ來つれ鶯の人くくゝと厭ひしもをる
 三鶯のなきつる聲に誘はれて花の本にぞ我は來にける
 四我宿にきゐる鶯羽を弱み訪ぬはつらき物にぞ有ける
 五雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらむ
 六春さればまづなく鳥の鶯のと先だてゝ君を待たむ
 七春なれば妻をもとむる鶯の梢をつたひなきわたる哉
 八冬がくれ春ざりくれば足曳の山にも野にも鶯なくも
 九御園生の竹の林に鶯はしばなかしを雪は降りつゝ
 〇村々の木傳ふ春になりぬらし山のまに鶯なくも
 一ほととぎす
 二我背子をうら待兼つ時鳥痛く鳴をね戀も歌むやと
 三我如く君に戀ふるや郭公此夜すがらに寝がてにする
 四時鳥聲きく小野の秋風に淺茅さけけられや音の乏しき
 五武士のいはせの森の時鳥今もなかねか山の木かげに
 六時鳥なき響ます卯花の曙友にやこしと問まし物を

太宰帥大伴卿
 大伴書持
 大伴四綱
 素性二首
 〇我宿に月押し照れり時鳥心あり今宵なきとよませ
 一事繁き君は來まきす時鳥汝だに來なけ朝戸あくべく
 二搔昏し雨のふるよるを時鳥なきていぬめり哀その鳥
 三久米のひろなは
 四家にいきて何を語らむあしびきの山郭公一聲もがな
 五時鳥花たちはな枝にゐてなくは昔の人やこひしき
 六神なびの磐瀬の杜の時鳥ならし岡にいつか來鳴む
 七時鳥痛くな鳴きそなが聲を五月の玉にあひぬく迄に
 八夏の夜のふすかとすれば郭公なく一聲にあくる東雲
 九此里にいかなる人か家ゐして山郭公つねに聞くらむ
 〇五月雨の空もとろに時鳥何をうしとか夜唯鳴らむ
 一あしびきの山の梢し高ければなく郭公聲はるかなり
 二昔よりなきふるしつゝ時鳥幾十の夏を聲に立つらむ
 三月をだに飽かず思ひて寝ぬ物を時鳥さへなき渡る哉
 四花もちり時鳥さへいぬる迄君にも行すなりにける哉
 以上七首貫之
 伊勢
 勢三首
 躬恒
 躬恒
 躬恒
 忠
 素
 性

〇石上ふるき都のほととぎす聲ばかりこそ昔なりけれ
 一時鳥なく聲きけば味氣なく主定まらぬ戀せらるはた
 友則
 〇夜や暗き道や惑へる時鳥我が宿にしも過かてにた
 〇五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴て孰ち行くらむ
 〇音羽山けさ越來ればほととぎす梢遙に今ぞなくなる
 公忠朝臣
 〇行きやらで山路暮しつ時鳥今一聲の聞かまほしさに
 〇臥すからに先ぞ侘しき郭公なく一聲に明る夜なれば
 〇我如く物や悲しき郭公時ぞともなく夜々になくらむ
 〇やよや待て山時鳥言つてむ我れ世中に住侘びぬべし
 〇夏山に戀しき人や入りぬらむ聲ふり立てなく郭公
 〇筑波嶺に我ゆけりせば閑山産響み鳴ましやそれれ
 〇時鳥夜深き聲は月待つと起てもねぬ人ぞ聞きける
 〇誰が里に夜枯をしてか時鳥唯愛にのみねたる聲する
 〇あひ難き君にあへるよ時鳥異時よりも今こそなかも
 〇五月まつ山時鳥うち羽ぶき今もかなむこそぞ古聲
 〇打解けていも寝られねば郭公夜深き聲は我のみぞ聞
 〇千鳥
 〇山には雲を舞きあけにけり河の瀬毎に衝しげなく
 〇秋くれば佐保の河原の川霧に友惑はせる千鳥啼く也
 〇大空に渡る衝の我ならばをふの渡りをいかに鳴まし
 〇川衝住河の上に立つ霧の紛れにだにも逢見てしかな

〇山河の石間隠れに住む千鳥人知ればや聲の聞えぬ
 〇衝なく佐保の河原の小ら波やむ時もなし我戀らくは
 〇さよ中に友呼衝物思ふと侘つゝ有るに啼つゝあやな
 〇最ぞしく物思ひをれば川千鳥野にも山にも啼亂れ鳥
 〇思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なく也
 〇呼子鳥
 〇答へぬに呼な響めそ呼子鳥さほの山をを上り下りに
 〇常とはに聞けば苦しと喚子鳥聲懐しき時にはなりぬ
 〇遠近のたづきも知らぬ山中に覺束なくも喚子鳥かな
 〇我宿の花にな啼を喚子鳥よふかひ有て君もこなくに
 〇神なびの磐瀬の森の喚子鳥痛くななき我戀ひ増る
 〇瀧の上の御舟山より秋つべに來なき渡るは誰喚子鳥
 〇早晩も越えむと思ふ足曳の山になく喚子鳥かも
 〇朝霞やへの山とし喚子鳥吹やながくる宿は有なくに
 〇曉の鳴の羽根かき百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく
 〇あき原にさよ打更て立鳴の羽社知るらめ獨ぬる夜は
 〇曉に羽根かく鳴のうち頻り幾夜か君に戀ひ渡らむ
 〇曉の鳴のはねがき百羽がき揺集めてぞ侘しかりける
 〇春まけて物悲きさよ更て羽振啼鳴誰か田にかなく
 〇からす
 〇曉と夜がらすなげど此の山の梢の上はいまだ静けし
 〇夏の夜の子持鴉のさがぞかし夜深く啼て君を遣つる
 〇朝鴉いたくななき我背子が朝けの姿みれば悲しも
 〇鴉とふ大をそ鳥のまさでにも來まらぬ君をこらく

〇高鳥やゆるぎの森の鶯すらも獨は寝じと争ふものを
 〇水増る流の川瀬に立鶯の立ても居ても鳴ぬ日ぞなき
 〇書よりも柀木の森に住鶯の安きいも寝ず戀明しつる
 〇はごぢり
 〇み山木に夜はきて鳴箱鳥のあけは歸らむむを社思へ
 〇春立てば野べに先なく箱鳥のめにも見えずて聲の悲き
 〇取返す物にもがもや箱鳥の明て愴しき物をこそ思へ
 〇かほぞり
 〇貌鳥のまなく屢なく春の野の草のね繁き戀もする哉
 〇朝みでに來なく貌鳥汝だにも君に戀ふれや時をへす鳴
 〇夕されば野べになくてふ貌鳥の顔に見えつゝ忘らぬ
 〇かさきぎ
 〇夜や寒き衣や薄き鶴のゆきあひの橋に霜やおくらむ
 〇鶯の峰とび越えてなき行けば夏の夜渡る月ぞ隠るゝ
 〇もす
 〇春さればも草の草々き見えず共我は見やらむ君が
 〇秋の野の尾花が末に鳴もすの聲聞らむか片きく我妹
 〇くひな
 〇水雞だにたいけは明る夏之夜を心短き人や歸りし
 〇つばくらめ
 〇燕くるる時々に成ぬと雁音は古郷こひて雲隠れ啼く

〇はるの野にともあへぬ胸なれば我とふしみのさやあれぬ
 〇春四 花 源信明朝臣
 〇いつしかともあへて見れば若さくらさかも春の過ぎぬべきかな
 〇同春六 山吹 讀人しらす
 〇あなによし奈真もちかちやましろの井出の山吹見に我がせこ
 〇同春六 雛花 同
 〇うなな子が髪ふりしつるふぢのはな袖なつかしくおもほゆるかな
 〇同夏一 早苗 たゞみね
 〇蛙なく井出のやまだにまさしたねきまつなべに生つちけり
 〇同夏二 子規 讀人しらす
 〇かたなかの小松の森のほととぎすはのかげぞなくこひしかるべみ
 〇同秋二 菖堂 同
 〇秋かぜにおもひみだれてくやしきはきみとならびの岡のかるかや
 〇同秋二 權花 同
 〇やまの井の底あきほの花なればかげを見しまにうつろひにけり
 〇同秋三 鹿 讀人しらす
 〇うだの野の秋はきしのぎなく鹿のつまにこらくわれにばまさじ
 〇同秋三 秋田 同
 〇秋かぜにあたる船葉のくだけつゝしののおもふこのしげき頃かな
 〇秋風のふけばかたよるいのちの葉のくだけてもをおもふころかな
 〇同秋三 かりほ 同
 〇うちばへて守るつななのみひく時は船葉につゆぞたまらざりける
 〇同冬二 千鳥 同
 〇人しらすのねはするがうど濱にあそぶ千鳥のこゑのわりなき
 〇同雜二 山 同
 〇逢坂のやまのみねにて鳴くこゑはましろのみこそあはれなりけれ
 〇むかし見し人をぞわればよそにみし朝くらやまのくもほるかに
 〇同雜三 橋 讀人しらす
 〇たづねれば杉の葉きえて三輪の山すみこすまつぞ生ひかほりける
 〇同雜四 野 讀人しらす
 〇あはれともおもひながらの橋をなみかよひがたきけすみよしの里
 〇同雜五 池 讀人しらす
 〇かづらきや久米のつぎはしつき／＼にわたしほてじ葛城のかみ
 〇旅びとにやどかすが野のゆるる葉のみみぢせむやや君をわすれむ
 〇武蔵野にしかもあかねの多かるはたむらさきの名のみなりけり
 〇同雜五 池 同

古今和歌六帖拾遺

夫木抄春二 鶯 讀人しらす
 〇君に逢はむとしをば人にかがすが野のあさちか原にうくひすぞなく

嘉祿二年仲春下旬之候以^八民部卿^六源朝臣本^一書寫訖此本有^一
 傳事^二之由被^レ申之間又以^三他本^二手自校^了全^了
 寛喜二年十二月十九日以^レ入道右大臣兼^二左大臣^一重校了件
 本者家長朝臣本云々
 前和歌所開闢從四位上源朝臣在列

ラ みづびきの池にとりぬしむかしより懸ふる縁をぞ今日いまに見
 ナ ながれては立田のかはのそこに住む鶴の斯うともさかばたのまむ
 ウ たまつし藤江のうらのまつ風に絶えずもかくるなみのおとかな
 イ 雨降れけ三笠のやまの木のもとも濡れぬいはりは無しとこそ聞け
 ノ 君ばかりおぼゆるものはなし原のうまや出てこむたぐれ無きかな
 オ わざも子が袖をたのみてあしびきの山すげのみ取らできにけり
 カ ながらかに白きはなぞいななきのかひの手古名の晒すづくり
 コ 童叟抄九 蟲
 ク つつめどもかくれぬものは夏むしの身よりあまれる思ひなりけり
 ケ さされ石の上もかくれぬさは水のおさましくのみ見ゆるきみかな
 コ 同下末
 ケ 行く人はそのかみこむと云ふものをこころ細しや今日のわかれは
 フ 袖中抄卷十五
 フ 仰しとて思ひける物を我がために無しと云はぬはつらき世けり
 コ 河海抄深標 井手左大臣
 コ ぼり江には玉敷かましかたきみのみふね澄むとかねてしりせば
 同 同 同
 エ 秋の野に行きて見るべき花のいろを誰さかしらに折りてきつらむ
 同 同 同
 ナ 人よりもおもひのぼれるきみなればうべ山ぢらばしるくざりける
 ア ひな鶴のしろたへころも今日よりは千年のあきにたちやかかねむ
 ナ 同 同 同
 ナ 戀ひわびぬおほ田の松のおほ方は色に出でや逢はむと云はまし
 ナ 同 同 同
 ナ 寝ぐたれの朝顔のはなあきよりにおもかくしつゝ見えぬきみかな
 ナ 同 同 同
 ナ 如何にかと思ふころの有るときは我が身を置きて人ぞかなしき
 ナ 身を捨て、山に入りしわれなれば熊のくらはむとも知られず
 同 同 同
 ナ 如何にし 如何によらむせの山のうへより落つる音なしのたき

同御注
 ナ しも枯れの野をば憂しと思へばやかきほの草とひとの荒らむ
 ナ 紅梅
 ナ 宿木
 ナ 戀しさのかぎりだにある世なりせばつらきなして嘆かざらまし
 ナ 歌林真材下
 ナ ひるはきてよるはわかるゝ山どりのかげ見ると時ぞ音は泣かれける
 ナ かさぎのちがふる橋のまどほにてへだつるなかに霜や置くらむ
 ナ ねばたまの夜んべはかへる今宵さへ我をかへすな宇治のたまひめ

寛平御時后宮歌合

春歌 二十番

紀 友 則
 ナ 花の香を風の便にたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる
 源 當 純
 ナ 谷風にとくる氷のひま毎に打ち出づる波や春の初花
 素 性
 ナ ちると見てあるべき物を梅花うたて匂の袖に止れる
 藤原興風
 ナ 聲絶えずなげや鶯一年に二たびとだにくべき春かは
 左 右
 ナ 梅花著き香ならで移ろはゞ雪降止まぬ春とこそきけ
 左 右
 ナ 春の日に霞分けつゝ飛鷹の見えみ見えすみ雲隠行く
 素 性
 ナ 花の木も今は堀植じ春立てば移ろふ花に人習ひけり
 左 右
 ナ 春の野に若菜摘まむとこし我を散かふ花に道は惑ぬ
 左 右
 ナ 鶯はむべも鳴らむ花櫻さくと見し間に移ろひにけり
 興 風
 ナ 春霞舞く野邊の若菜にも成見てしがな人も摘むやと
 左 右
 ナ 浅緑野邊の霞はつゝめどもこぼれて匂ふはな櫻かな
 左 右
 ナ 春立てけ花を見むてふ心社野邊の霞と共に立ぬれ
 左 右
 ナ 三吉野の山にさきたる櫻花雪かとのみぞ誤たれける
 左 右

○年の内は皆春乍ら果なむ花を見てだに心やるべく
 左 春霞あみにはりこめ花ちらば移ろひぬべし鶯とめよ
 右 春雨の色は濃くしも見えなくに野邊の緑を争で染らむ
 左 春なれど花もにははぬ山里は物うつる音に鶯ぞなく
 右 咲花は千種ながらにあだなれど誰かは春を恨果たる
 左 水の上に綾織り亂る春雨や山の緑をなべてそむらむ
 右 色深くみる野邊だにも常ならば春は行共形見ならまし
 左 駒なべて目も春の野に交りなむ若菜摘つる人は有や
 右 鶯の谷より出づる聲なくば春くるとを誰かつげまし
 左 春ながら年は暮なむちる花を惜しとなくなる鶯の聲
 右 大空を覆ふばかりの袖もがな春さく花を風に任せじ
 左 霞立つのはるの山邊に櫻ばなあかずちるとや鶯のなく
 右 天の原春は殊にも見ゆる哉雲の立てるも色こかり鳥
 左 卷もくの檜原の霞立かへりみれども花の驚かれつゝ
 右 白妙の波路分てや春はくる風吹くからに花も咲けり
 左 霞立つ春の山べは遠けれど吹來る風に花の香ぞする

散花のまててふとを聞かませば春降雪とふらせざらまし
 斯る時有りと思へば一年を凡ては春に思はず由もがな
 まててふに止らぬ物と知乍ら強てぞ惜しき春の別を
 梅花香をば留めて色をのみ年ふる人の袖にそむらむ
 飽ずして過行春の人ならばとく返りこと云まし物を
 梅が香を袖に移して留てば春は過ぐ共形見ならまし
 行春の跡だに有と見ましかば野への隨に止まし物を
 春霞色の千種に見えつるは豈びく山の花のかげかも
 日暮るれば且散花を可惜しみ春の形見に摘ぞ入つる
 常磐なる松の緑も春來れば今一しほの色まさりけり
 くる春に逢むこと社難からぬ過行方に後れずもがな
 夏歌 二十番
 蟬の聲さけば悲しな夏衣薄くや人のならむと思へば
 匂ひつゝ散にし花を思はゆる夏は緑の葉のみ茂りて
 空蟬の倦しき物を夏草の露にかゝれる身に社有けれ
 夏の夜の月は程なく明ながら旦の間をぞ卿寄せける

宵の間は倦くみゆる夏虫に感ひまされる戀もする哉
 夏の夜は臥すかとすれば郭公なく一聲に明くる東雲
 假初の身や頼まれぬ夏の日をなど空蟬の鳴暮しつる
 はかもなき夏の草葉に置く露を命と頼む虫の渉なき
 古郷を思ひやれども郭公下
 夏の夜の霜や置けると見る迄に荒たる宿を照す月影
 夏の風秋袂にし包まれば思はぬ人のつとにしてまし
 夏草の繁き思は蚊遣火の下にのみこそを渡りけれ
 草繁み下葉枯行夏の日もわくとしわけば袖や湿なむ
 梅雨に物思ひをれば郭公夜深く鳴ていづちゆくらむ
 夏の夜の露な留めそ蓮葉の誠の玉となりし果てすば
 夏山に戀しき人やいりにけむ聲ふりたてゝなく郭公
 吹風の我宿にくる夏の夜は月の影こそ涼しかりけれ
 夕されば螢よりけに燃れ共光見えねば人ぞつれなき
 夏の日を暮し倦ぬる口まに我泣き添ふる聲は聞ゆや

恨みつゝ留むる人のなければや山郭公浮れでなく
 夏の夜は水や増れる天の河流るゝ月の影もとどめぬ
 去年の夏啼きふるしてし郭公共か非ぬか聲の變らぬ
 夏蟲に非ぬ我身のつれもなき人を思ひに燃ゆる頃哉
 夏の夜の松葉もそよと吹く風は孰か雨の聲に變れる
 夜や暗き道や感へる郭公我宿をしも過ぎがてにする
 いつの間に花枯にけむ長くだに有せば夏の影とみましを
 いく千度なきかへるらむ足引の山郭公聲はわすれで
 夏の日を天雲暫隠さなむぬる程もなく明る夜にせむ
 郭公鳴つる夏の山邊にはくつていたさぬ人や住らむ
 夏の日の暮るゝも知らず蟬をとりもしてしが何
 菖蒲草幾らの五月逢ひくらむ來る年毎に若く見ゆ覽
 押しなべて五月の空を渡せば草葉も水も緑也けり
 くるゝかと思れば明ぬる夏の夜を飽すとや啼山郭公
 風の月光惜まず照る時は流るゝ水にかげろふぞたつ

琴の音に響き通へる松風は調べてもなく蟬の聲かな
 夏草も夜の間は露に息ふらむ常に焦るゝ我ぞ悲しき
 眺めつゝ人まつ折に呼子鳥孰方へとかたち歸りなく
 秋歌 二十番
 秋風に初鴈音ぞ響くなるたが玉章をかけて來つらむ
 浦近く立秋霧はもしほやく煙とのみぞ見え渡りける
 我のみや哀と思はむきりゝすなく夕蔭の大和撫子
 秋の野の草は糸とは見えなくに置白露の玉と連なる
 奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲さく時ぞ秋は悲しき
 我爲にくる秋にしも非なくに蟲の音聞けば先ぞ悲き
 日暮しに秋の野山を分來れば心にも非ぬ錦をぞさる
 秋と云へば天雲迄に燃にしを空さへ著くなどか見ゆ覽
 秋の野の草の袂か花薄ほに出てまねく神とみゆらむ
 山の井は水なきとぞ見え渡る秋の紅葉の散て隠せば
 女郎花匂へる野邊に宿りせば綾なくあだのなやたらむ
 秋風に誘はれきつる鴈音の雲居遙かにけふぞ聞ゆる

白露に風の吹きしく秋の野け貫き止めぬ玉ぞ散ける
 右 左
 秋の間に秋穂垂らむ草と見し程幾日とも隔らなくに
 左 右
 鴈の音は風にきほひて渡れども我待人の言傳ぞなき
 右 左
 大空を取返すとも見えなくに星かと見ゆる秋の草哉
 左 右
 秋風にはろこびぬらむ藤袴つやりさせてふ蟋蟀なく
 右 左
 秋の夜の雨と聞えて降つるは風に散つる紅葉也けり
 左 右
 ちられども兼てぞ惜き紅葉は今に限の色とみつれば
 右 左
 白波に秋の木葉の浮べるは蟹の流せる舟かとぞ見る
 左 右
 秋の夜の天てる月の光にはおく白露を玉とこそみれ
 右 左
 秋の野における露をば獨ぬる我涙とも思ひしれかし
 左 右
 鴈音は風を寒みや機械め管巻く音のさりとす
 右 左
 植ゑし時花待遠に有りし菊移ふ秋に逢はむとやみし
 左 右
 白露の染めいさ萩の下紅葉衣に移す秋はきにけり
 右 左
 風寒み啼く秋蟲の涙こそ草にいろどる露とおくらめ
 左 右
 花薄そよともすれば秋風の吹かどぞき衣なき身は
 右 左

音にさく花見にくれは秋の野の
 右 左
 鴈が音に驚く秋の夜を寒み蟲の織りだす衣をぞきる
 右 左
 秋風はたが手向とか紅葉を幣にきりつゝ吹散すらむ
 左 右
 唐衣ほせど袂の露けきは我身の秋になればなりけり
 右 左
 秋の露色の殊々置けばこそ山も紅葉も千種なるらめ
 左 右
 秋風に聲を帆に揚て行舟は天の戸渡る鴈にざりける
 右 左
 紅葉の散來む時は袖に受む土に落なば疵もこそつけ
 左 右
 秋の蟬寒き聲にぞ聞ゆる木葉の衣を風やぬきつる
 右 左
 秋の夜の月の影こそ木の間より
 左 右
 秋の月草村分かす照せばや宿せる露を玉と見すらむ
 右 左
 等閑に秋の深山に入りぬれば錦の色の衣をこそきれ
 左 右
 秋山に戀する鹿の聲立て鳴ぞしぬべき君がこぬ夜は
 右 左
 契りけむ心ぞつらき七夕の年に一度あふは逢ふかは
 左 右
 年毎に逢ふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞ少かりける
 冬歌 二十首
 左 右
 かき曇り散降りけ白玉をしける庭も人の見るがに
 右 左

天の河冬は空まで凍るらし石間に漏つ音だにもせず
 左 右
 篠の葉に置霜よりも獨ぬる我衣手ぞさまざりける
 右 左
 流れ行く水凍りぬる冬さへや猶うき草の跡は定めぬ
 左 右
 雪降て年の暮ゆく時にこそ遂に紅葉ぬ松も見えけれ
 右 左
 我宿は雪ふる野邊に道なし何處はかとか人のとめこむ
 左 右
 神無月時雨ふるらし佐保山の正木の蔓色まさり行く
 右 左
 冬くれれば梅に雪社降かゝれ孰の枝をか花とはをらむ
 左 右
 堀て置し池は鏡と凍れ共影にも見えぬ年ぞ經にける
 右 左
 降雪の積れる峰は白雲の立ちも騒ずをるかどぞみる
 左 右
 三吉野の山の白雪踏みわけて入にし人の音信もせぬ
 右 左
 吹風は色も見えぬ冬くれれば獨ぬる夜の身にぞしめける
 左 右
 霜枯の枝とな侘を白雪を花に履ひて見れども飽かず
 右 左
 嵐ふく山下里にふる雪はとく梅の花さくかとぞ見る
 左 右
 雪のみそ枝に降しき花も葉もいにけむ方もみえずも有哉
 右 左
 白雪の八重降敷ける歸山歸るくも老いにけるかな
 左 右
 草も木も枯行冬の宿なれば雪ならずして訪人ぞなき

降雪は枝に暫しも止らなむ花も紅葉も絶てなきまは
 右 左
 冬の上は凍りて閉たるを争でか月の底に澄らむ
 右 左
 冬寒みみものもにかくる増鏡とくもわれなむ老感べく
 左 右
 ちらね共兼てぞ惜しき紅葉は今に限の色と見つれば
 右 左
 白雲のおりゐる宿とみえつるは降來る雪の解ぬ也鳥
 左 右
 霜の上に跡踏つくる濱衛行へも無しと鳴のみぞふる
 右 左
 涙川みなぐ計りの淵はあれど氷解ければ影も宿らぬ
 左 右
 浦ちかく降くる雪は白波の末の松山こそかとぞみる
 右 左
 光まつ枝に懸れる雪をこそ冬の花とは云べかりけれ
 右 左
 少女子が日蔭の上に降る雪は花の紛ふに何れ遠へり
 右 左
 かさ暮し散花とのみ降る雪は冬の都の雲のちるか
 左 右
 足曳の山のかげ橋冬くれれば氷の上をよきぞかねつる
 右 左
 冬見れば雪降り積る高き峰立つ白雲に見え紛ふかな
 左 右

簪に入れてもたせたり左のかたの宮に右のかきりたて
まつれ給ひける白がね 壺の大きな二つに沉合せ
たき物を入れたり方々に皆さう束給ひけり
題は二月三月四月なり
初春 二十首

○青柳の枝に懸れる春雨は糸もてぬける玉かとぞみる
右 是 則
○淺緑そめてみだる、青柳の糸をば春の風やよるらむ
此の歌とも此 彼もよければ持なり
左 持 躬 恒
○咲ざらむ物とはなしに櫻花俤にのみまなきみゆらむ
右 興 風
○山櫻ささぬる時は常よりも峰の白雲立ちまきりけり
左はらむ二つあり右は山櫻又有りとてぢになす
左 持 躬 恒
○きつゝのみなく鶯の故郷は散にし梅の花にぞ有ける
右 是 則
○三千年に成てふ桃は今年より花咲春に成れぞしける
年と云ふ事をよといへりとて右さく
左 持 伊 勢
○程もなく散なむ物を櫻花こゝら久しく待たせつる哉
右 是 則
○石上ふるのやしろの櫻花こそみし春の色やのこれる
こそをのみにて今年の心なしとてまぐ
左 持 興 風
○頼まれぬ花の心と思へばや散らぬさきより鶯のなく
右 貫 之
○春霞たちし隠せば櫻花人知れずこそ散りぬべらなれ
うちの御歌なりとて左かつ

○春風の吹ぬ世にだに有ませば心長閑に花は見たまし
右 貫 之
○散ぬとてありと頼まむ櫻花春は過ぬと我にきかすな
これもかれもなほありとてちとさだむ
左 持 躬 恒

○我心春の山邊にあくがれて長々し日を今日も暮しつ
右 貫 之
○櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降ける
左歌は長々しと云ふとにくしくらしとめてかたす
えたるやうにてつぶやけりとてまぐるなり
左 持 躬 恒
○花櫻いかでか人の折て見ぬ後にぞ優る色もいでこめ
右 興 風
○轉寝の夢にやあるらむ櫻花儚く見てぞ止ぬべらなる
左 持 興 風
○振はへて花見に來れば小倉山いと霞の立隠すらむ
右 興 風
○いも安く寝られざり鳥春夜は花の散るのみ夢にみえつゝ
何れもよしとてぢなり
左 持 躬 恒
○故郷に霞飛び分けゆく鴈は旅の空にや春をすぐさむ
右 興 風
○散花を貫し止ねば青柳の糸はよるともかひなかる覽
季春 二十首
左 持 興 風
○見て歸る心飽ねば櫻花咲けるあたりに宿やからまじ
右 貫 之
○東雲に起て見れば櫻花まだ夜こめても散にける哉
の右の歌をみかどの仰せられるやうねのをす

る、花を見けむとあ行かへ云ふにやとのたまは
すれば定方の朝臣のぼるの朝臣あのとよとすかた
にと覺ゆれと奏しければ御こきよにてさらばとて
ぢになさせ給ふなり
左 持 躬 恒
○現をば更にもいはじ櫻花夢にも散とみえばうからむ
右 是 則
○花の色を寫留め、鏡山春より後の影やみゆると
左 持 躬 恒
○目に見えて風は吹けども青柳の靡く方にぞ花は散ける
右 興 風
○足引の山吹の花ちりにけり井手の蛙は今やなくらむ
右ふるめきたりとてまぐるなり
左 持 躬 恒
○散て行方をだに見む春霞花のあたりに立もやらなむ
右 兼 覽 王
○澤水に蛙鳴なり山吹のうつろふ影やそこに見ゆらむ
左 持 興 風
○あかすして過行方を呼子鳥呼返しつゝきても告なむ
右 兼 覽 王
○武藏野に色やかよへる藤の花若紫にそめて見ゆらむ
左 持 躬 恒
○深き色はなけれど山吹の花の心をまづぞそめつる
右 兼 覽 王
○風吹けば思ほゆる哉住の江の岸の藤浪今やさくらむ
左 持 躬 恒
○懸てのみ見つゝぞ忍ぶ紫にひとしほ染し藤の花ぞも
右 兼 覽 王
○水底に沈める藤の影見れば春の深くもなりにける哉
左 持 興 風
○吹風に惜みも敢て散る時は八重山吹の色もかひなし

○惜め共立も止らで行春をならしの山の堰も止なむ
左 持 御 製
○水底に春や暮るらむ三吉野の吉野の河に蛙なくなり
右 貫 之
○櫻花散ぬる風のなごりには水無き空に波ぞたちける
左 持 躬 恒
○今日のみと春を思はぬ時だにも立と易き花の影かは
右 貫 之
○花見つゝ惜むかひなく今日暮て外の春とやあすは成なむ
これもかれもをかしとてちとなむ
夏 二十首
左 持 源 元 方
○けふよりは夏の衣に成ぬれどさる人さへは變ざり見
右 貫 之
○片岡のあしたの原を打くば山郭公けふぞなくなる
あぢきなしとてまぐる
左 持 興 風
○山里に知人もがな郭公鳴きぬと聞かば告もくるかに
右 貫 之
○夏さぬと人も告げこの我宿に山時鳥はやもなからむ
左 持 躬 恒
○我にして人にかはつげむ郭公思ふも著く我宿になけ
右 持 興 風
○時鳥聲のみするは吹く風の音羽の山に嘆くなりけり
左 持 興 風
○夏池によるべ定めぬ浮草は水より外に住む方ぞなき
右 持 興 風
○山を踏出て先初聲は郭公夜深く待たむまつこゝはなけ

左持
紫にあふみづなれや杜若その色さへ遠はざるらむ
右
さよ更て孰くなるらむ郭公寢覺の宿はかす人もなし
左
孰をかそれともわかむ卯花の吹ける垣根を照す月影
右
此の夏も變らざりけり初聲はならしの岡になく郭公
左
夏夜のまだもねなくに明ぬれば昨日今日とも思惑ぬ
右
卯花の咲ける垣根は白雲のおりあると社誤たれけれ
左
さく花の散つゝ浮ぶ水の面に争で萍根ざし初めけむ
右
待つ人は常ならなくに郭公思の外になかばうからむ
左
玉くしげ二かみ山の郭公今ぞ明くれなきわたるなる
右
郭公後の五月もありとてや長く卯月を過しはてつる
左
夏なれば深草山の郭公なくこゑ繁くなりまざるなり
右
戀 二十首
左勝 躬 恒
身をも且思ひし能く戀といへば燃る中にもいれる心は
右
涙河いかなる水か流るらむなど我戀をけつ由もなき
左
誰故に思亂るゝ心には知らぬぞ人のつらきなりける
躬 恒

右
はづかしの森の僅かに見し物をなご 草の繁き思ぞ
左持 躬 恒
人の上と思し物を我戀になしてや君がたどりに止な
右 貫 之
蘆きよふ難波の浦に漕舟の綱手ながらも戀渡るかな
左 躬 恒
現にも夢にも人に夜し思へば新許り嬉しさはなし
右
玉藻刈る髪とはなしによと共到我衣手の乾く時なき
左 伊 勢
逢ふとの君に絶にし我身より幾らの涙流出でぬらむ
右勝 躬
行き歸り千鳥なくなり濱ゆふに心隔てゝ思ふ物かは
左
逢ふして至らむ事の難ければ妹は我身を有とやは思ふ
右
逢との方の知べか涙河戀しと思へばまづさきに立つ
左
人戀ふと修き死を我やせむ身のあらば社後も逢見め
右
夕されば山端に出る月草のうつし心は君に染めてき
左
露計り頼めおかなむ言の葉に暫しも止る命ありやと
右
春雨のよにふる空も思ほえず雲居乍らに人戀る身は
左 貫 之
身に戀の餘にしかば忍ぶれど人の知らむとぞ怪しき
右
君戀ふる我身久しく成ぬれば年々に涙も降ぬべら也
左

天徳四年内裡歌合

御記
天徳四年三月卅日己巳此日有女房歌合事者去年秋
八月殿上侍臣關詩合時典侍命婦等相語云男已關
文章女宜合和歌及今年二月定左右方人
中以更衣藤原侑子同等爲左右頭各令排讀
蓋此爲惜風騷之道徒以廢絶也後代之不知意者
恐成好浮華專内寵之誘仍具記之其儀暫撤却
清涼後涼殿中渡殿北葎公卿座同渡殿之内鋪
左右方人座於後涼殿東右在北女房又相分候清涼
殿西庇簾中第五間立侑子子此間上侍申剋就
子良久右方入自北方獻和歌洲濱洗押物花足淺香下
文機覆地敷更衣之童女四人身之進御前波殿暫左方經侍
算洲濱北小庭算刺小舎人圓座之前云々
所自南方獻和歌洲濱機覆地敷更衣之童女六人昇出
如右算洲濱又置南小庭之小舎仰令召殿上公卿即左
大臣實賴大納言源朝臣高明右大將藤原朝臣尹參議雅

信朝臣朝成朝臣參來候座次各方人侍臣着座于時
日已昏供燈架立篝火於南北小庭令召可讀歌
人左方左兵衛督延光朝臣右方右中將博雅朝臣進就
洲濱下讀其和歌左作金山吹花枝其左近少將伊沙右
近少將助信等取脂燭照之殿上舍人着小庭座刺
算左大臣評定干時各方賜饌於公卿及方人讀歌之
中左詠爲歌二首而右誤讀柳歌仰依失次爲
負惣廿首讀合已畢左勝員九比讀歌終令召音樂所
人相分南北小庭遞奏歌曲大臣彈等大納言源朝
臣彈琵琶此間盃酒頻巡絃歌無斷大臣起座獻酒
及運明賜大臣以下祿有差大臣夏裝束一襲大納言白合
給定平旦起座入内侍臣退出此曉霜降近臣云果霜
氣寒人惟時序乖違云々四月三日未剋之飛香舍以
歌合洲濱給中宮還來西剋左洲濱給昌子内親
王

殿上日記
天徳四年三月卅日女房有歌合之事此事始自今月
上旬先被書分左右人以更衣爲左右頭相分
典侍掌侍命婦藏人等爲三方人矣同月十九日相分侍
臣點定方人御前裝束其儀西廂皆懸新御簾納也
下參上供奉御裝束其儀西廂皆懸新御簾納也
第五間立御侑子御前南方立御几帳立置物
機覆地敷更衣之童女四人身之進御前波殿暫左方經侍
爲公卿座也後涼殿東小簀子敷從渡殿南北相
分敷長疊爲左右侍臣座也南北小庭各敷長疊三枚
爲樂所召人座此等鋪設申剋出御召左右歌於
是右方侍臣等持洲濱二机一置歌應召參上從
御路殿西邊獻御前童女一人執地敷機物出進
鋪御座乾角高欄下還却之後同童女四人其裝束皆昇
洲濱立三地敷花枝機物未進加明折枝之機文机四角以金銀

作「柳枝川堂」... 人取「鳥歌水樹」... 紙「書」小字「詠」... 分置「次小舍人藤原實正執金銀花柳枝」... 實正前「頃之左方從殿上侍方參上童女一人先執地敷」... 於「御下」取傳置「員指座前」次殿上公卿依「召參入」... 光朝臣右方博雅朝臣「令講」各方獻歌「延光朝臣手執花枝」... 坏酌「互勸今日之事左方多慰又御厨子所供御菓子干物等」... 也「左則大臣彈箏朝成朝臣吹笙方人侍臣樂所召人陪御下」... 信朝臣拍子侍臣并召人「同左方」占部方座等同侍... 庭「絃歌如左唱絃管箏瑟曲調」侍臣等密語曰「每萬機之暇景」... 者也「快醉雜興難禁左大臣賜夏御衣一襲」... 大納言已下侍臣召人等給「祿有差」... 以下歌舞退出之

題 霞 鶯 柳 櫻 款冬 藤 暮春 首夏 卯花 郭公 夏草 戀 歌人 左 右 朝忠卿 坂上望城 平兼盛 藤原元真 大中臣能宣 中務 藤原博古 少貳命婦 藤原博古 壬生忠見 清原元輔 源順 本院侍從 講師 延光朝臣 博雅朝臣 左大臣 念人 右 中將更衣 辨更衣 宰相更衣 按察更衣 藤原朝臣 少貳命婦 右衛門命婦 右近命婦 左衛門命婦 近衛命婦 美濃命婦 兵衛藏人 越後命婦 備前藏人 美柞藏人 兵部藏人 木工藏人 御負藏人 木工藏人 侍從藏人 宮內藏人

源爲明 源重信 源重光 藤延光 藤伊尼 源保光 藤忠君 平時經 源伊涉 藤爲光 藤守仁 藤濟時 平珍材 藤重輔 源時仲 左 童 平保遠 源時明 藤道隆 藤爲時 藤景舒 藤惟賢 藤信賴 一番 霞 右 源盛明 藤博古 藤賴忠 藤文範 清原元輔 藤國光 藤兼家 藤助信 藤清遠 大江齊光 藤安親 秦清主 藤永保 藤雅材 藤忠光 右 藤元明 實正 藤朝光 藤保名 義理 能正 延正 朝 忠 倉橋の山のかひより春霞年をつみてや立ち渡るらむ 古里は春めきにけりみ吉野の三垣が原を霞こめたり 左右歌讀合勅小臣曰可定奏勝劣者遂巡奏云 小臣雖備三十一字全難辨勝劣之義伏請 天裁勅云若不定勝劣已失今日與兼結後代

爵 歎猶速可定申者遇天氣之不許表空虛之拙而已左歌くらはし山に年をつむといへる事よろし又橋にわたるなどいふもさもありなむ歌のふるまひもさてありなむ右歌なごかふるさとにしも春めかしむ霞こめたらむもおそろしげにや此間只在勅定小臣屢候天氣遂無左右仰因以左爲勝 二番 鶯 左 順 一氷だにとまらぬはるの谷風にまだうちとけぬ鶯の聲 右 兼 盛 一我宿に鶯啼くなくなるは庭もはだらに花やちるらむ 左歌心はへいとをかし右歌よしなき花ちらすもことなる興なく詞もよろしからす以左爲勝 三番 朝 忠 一わが宿の梅が枝になく鶯は風の便に香をやとめこし 右 兼 盛 一佐保姫の絲そめかくる青柳をふきな亂りそ春の山風 鶯をいたすべきに柳をよみてまし 一白妙の雪ふりやまぬ梅が枝に今ぞ鶯はるとなくなる だがへてよみたれど本歌をのしだして講せらる 右講師博雅朝臣誤讀「柳歌」左方論云「須讀申鶯歌」而誤讀「申柳歌」於今者不可讀申歎者以左方論申旨「奏聞仰云可據定申者小臣奏云左方之所申非無謂如此之事只隨時之議但依人之誤何留其歌依令讀申其時博雅朝臣頗變色速不讀之幾雖讀揚其音振被爲左人笑又歌の詞に鶯春となくことそらごとなり仍遂爲負 四番 柳 望 城

荒玉の年をへつゝも青柳の糸は孰れの春かたゆべき
左勝 兼 盛
佐保姫の糸めかくる青柳をふきな亂りそ春の山風
欲讀右哥之間左方人申云件柳歌違濫次第讀
事先畢而重欲讀之似忘首尾者小臣答云鶯歌
之時隨左申已有裁許重不可申者左歌あらた
まの年をへむ青柳よしなし右歌させることなけれ
ど難は見えず仍以右爲勝
五番 櫻

あだなりと常は知にき櫻花惜む程だに長閑からなむ
左勝 兼 忠
よと共に散すもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絶べき
左歌さてもありなむさせる難はなし言葉はいとよ
からねどもくせなくさこゆ右哥はす忍あはぬこゝ
ちぞする又歌がらも劣れり以左爲勝
六番

櫻花風にしちらぬ物ならば思ふ事なき春にぞ有まし
左勝 兼 宜
櫻花色見る程によをしへば年の行方を知で己みなむ
左右ともによくつかまつれり仍爲勝
七番

足びきの山隠れなる櫻花ちり残りりと風にしらすな
左勝 兼 少貳命婦
二年毎に来つゝわが見る櫻花霞も今はたちなかくしそ
左歌いとをかしくてさてもありなむ右歌はいづこ
にきつゝ見るぞ頗荒涼なりいまはといふことはよ
しなきことなり仍以左爲勝
八番 款冬

春深み井手の川浪たち歸り見てこそゆかめ山吹の花
左勝 兼 順
一重づゝ八重山吹は開けなむ程へて匂ふ花と頼まむ
左歌いとをかしざることなりときこゆ右歌八重山
吹の一重づゝひらけむは一重なる山吹にてこそあ
らめ心はあるに似たれども八重さかずば本意なく
やあらむ又上の句のはて下の句のはてとおなじ文
字あり仍以左爲勝
九番 藤

紫に匂ふ藤波打ちはへて松にぞ千代の色はかゝれる
左勝 兼 忠
われゆきて色見るばかり住吉の岸の藤波折な盡しそ
左歌水なくて藤波といふことはふるき歌にをりを
りありされども尋ぬる人なればとゞまれるなる
べし歌合にはいかゞあらむことによせぬはあるま
じいはれなし猶水池岸なぞぞよすべかりける歌が
らはきよげなり右歌おなじ浪あるに岸によせられ
ばたよりありかくぞふるきにもある藤波とおしな
なべていふことにもあらず御氣色もさやうにぞ見
ゆる小臣問源大納言云尤艶也しばらく特に擬
之間右方人申云左歌の藤波水によらずはいかゞと
愁事無理可然仍以右爲勝
十番 暮春

花だにもちらで別るゝ春ならば最新今日は惜ざらまし
左勝 兼 朝 忠
行春の泊し著き物ならば我も舟出をおくれざらまし
左歌首尾相叶ひふるまひもありてをかし右歌詞だ
みたるやうなり歌がらもとおとれり仍以左爲勝

十一番 首夏

鳴聲はまだ聞ね共蟬の羽の薄き衣を裁ちぞきてける
左勝 兼 宜
夏衣立出づるけふは花櫻形見の色もぬぎやかふらむ
左の歌は夏の初とおほゆれど右の歌はたち出づる
今日とはあれば年とぞおほゆる又ぬぎかふともあ
めれば左の歌よりはとくぞ聞ゆるされど歌の品お
なじほどなれば持にぞ定め申す
十二番 卯花

道遠み人も通はぬ奥山にさける卯花たれか折らまし
左勝 兼 忠 見
嵐のみ寒きみ山のうの花は消えぬ雪と誤またれつゝ
左の歌山の卯花をしも思ひ出でけむこそいかゞ右
の歌同じ山なれどをかしまされり依以右爲勝
十三番 郭公

仄にぞなき渡るなる時鳥み山をいづるよはのはつ聲
左勝 兼 望 城
み山出でゝ夜半にやきつる郭公曉かけて聲の聞ゆる
左右ともに興ありていとをかし仍爲勝
十四番

夜更て寝覺ざりせば郭公人傳にこそ聞べかりけれ
左勝 兼 忠 見
人ならばまてと云べきを時鳥二聲とだに聞で過ぬる
左の歌をかむとも思はでねざめしけむぞ怪しきさ
れど歌がらをか右の歌人なりとも今一聲さかむ
とて待とはいかゞいひはむとするしばしまてなご
いふべき心かことたらぬ心地ぞするいづれもあな

十五番 夏草

夏草の中を露けみ播分けてかる人なしに繁る野邊哉
左勝 兼 忠 見
夏深く成ぞしにける大荒木の森の下草なべて人かる
右の歌なべて人かるなどわろし左におとりたり仍
以左爲勝
十六番 戀

人傳に知せてしがな隠れぬの水籠にのみ戀や渡らむ
左勝 兼 朝 忠
むは玉の夜の夢だにまきくば我思事を人に見せばや
左の歌いとをかしつよきことなれどさてもありな
む右の歌むはたまとかけり夜といふ事はぬばたま
とぞいふかし歌は同じやうなれど書き過ちたるな
めればそのよし奏すればあやまちあらむにはいか
でかと仰せらる仍以左爲勝
十七番

戀しきを何に附てか慰めむ夢だに見えずぬる夜無れば
左勝 兼 能 宜
君こふる心や空に天の原かひなくてふる月日也けり
左歌頗有情仍爲勝
十八番

人知れず逢を待まに戀死なば何に替たる命とか云む
左勝 兼 本院侍従
とならば雲居の月と成なむ戀しき影や空にみゆる
左右共にさてもありなむ右の歌の上下の句のかみ
に同じ文字ぞあめる憎さげにぞ候ふべきと奏すれ

は左右の仰なし左の人申す左はさる文字さふらは
ずと申すめれどさせる難にはあらぬにぞ仍爲持
十九番

左 朝 忠
逢事の絶てしなくば中々に人をも身をも恨ざらまし
右 元 眞
君こふと且は消つゝる物を斯てもいける身とや見覽
左右の歌いとをかしされど左の歌は詞清げなりと
て以て左爲勝
二十番

見
思すてふ我名はまだき立にけり人知すこそ思初しか
兼 盛

忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふ迄
小臣奏云左右歌俱以優也不能定申勝劣勅云各
尤可歎美但猶可定申者小臣讓大納言源朝臣納
言敬屈不奏此間相互詠揚各似請我方之勝小臣
頻候天氣未給勅判令密詠右方歌源朝臣密
語云天氣若在右歌右歌甚好矣因之遂以右爲勝
三月一日歌の題を定めてかた／＼に給ふ同じ月の十
八日のこども左右にわかせ給ふその日になりて清
涼殿の西面のみす一間あげさせ給ひて後涼殿の渡殿
におましを女房方によそはせ給ふおましより南には
左の人侍ふ北には右の人さぶらふ左も右もわづらふ
事ありてのばらす左の方は内侍のすけ赤色に櫻裝の
唐衣羅の褶裳命婦くらんどは赤色に櫻裝紫のすそご
の裳着たり燻物は黒方をなく右は青色に青き裳
は同じ紫の裾濃なり燻物は侍従をたかくて日の氣
色はれて見ゆる程に歌も遅しと召す左の遅けれ
ばまづ右の奉る洲濱は沈を山につくりて鏡を水に
して沈の舟うけたり銀のかは龜二つ甲の裏に色紙に

琵琶右近中將博雅の朝臣和琴雅樂頭しげひらの朝臣
筆のこものりたの朝臣さうのふえ右近少將きよと
はたかみつんまさは歌うたふかち方雙調をふきて
あなたふとうたふ次に右さくら人うたふ左うたへば
右はやみぬかたみにぞあそぶ左あしがきうたふ右や
ましろのこまのわたりうたふ心あるべしかくあそぶ
程に夜あけぬあけぼのになみわたるになかきがあそ
がほを左大臣みな人の笑ふをききもいれでこと
ひきわたる顔いとわりなし右の人かはらけとらすと
てめすにくにてりの朝臣なつきなむとてかくれぬ左
のうたよむ人にとりての更衣女裝束一くだりとらす又
上達部にはうへより給ふ左大臣には夏の裝束一くだ
り大納言には白きあやの細長一重ね宰さうにはひと
へがさねの細長殿上樂所の人々には腰ざし左には春
の鶯の囀りといふあそびけれぬる春を惜むにより右
には柳の花のちらみといふ樂を奏すかずのつるをも
おもふなるべし

殿上日記難取分方人之由依無其名就他日記書入
三月二日左右方人のかきわけを内侍のすけしてかた
／＼の頭のさうじに給へりこれ二月廿九日にうへへ
みづから書き出させ給へるなり三日の日題を給ふこ
れは内侍のすけの御前にてかき出せるなり
霞一 鶯二 柳一 さくら三
山吹一 ふぢ一 春の暮一 初初夏一
時鳥二 うの花一 なつ草一 戀五
かく三十日の日のひつじの時清涼殿の西面のみす
一間あげさせ給ひて後涼殿のわた殿にあたりて西む
きにいしのおましよそひておはしますわた殿をわけ
て南の坪に前栽植させ給ひて南には左藤の花北に
は右山吹の花うささせ給へりかた／＼の藏人命婦は
あましの北南にみすの内に左右とさぶらふ裝束はれ

歌は書いていれたり花足には沈を作りてこがねのす
ぢやれり浅香のあしゆひのくみ裾濃のふさしたり青
朽葉薄ものゝおほひに柳鳥のかたを縫ひたりだいに
は柳の枝をつくれり淺瀬の打敷したりうなる四人青
色に柳装にて北の方よりかきたつ同じ方の殿上人そ
ひて出したつ數さしの洲濱は北の際におく數さしは
うへの童左の歌たがそれ時に奉る其洲濱は沈の山鏡
を水にして洲にも銀の鶴二つたて金の山吹に銀の
葉に歌は書いて鶴にくはせたり花足は紫檀を作りて
銀のすぢやりて下机はすはうにしてこがねのすぢや
れりあしゆひのくみ裾濃の末濃蘆手を縫物にした
り履のさいはしろがねを竹のかたに作りてうちしき
にはえびぞめらなる六人赤色に櫻裝着て南の方より
御前にかきたつ數さしの洲濱南の際におく宜旨に左
大臣大納言源朝臣右の殿上人後涼殿のかたにさぶら
てさぶらふ左右の方の殿上人後涼殿のかたにさぶら
ふおはします間の御簾はあげたりあげぬ間御几帳た
て渡して女房侍ふかゝる程に日暮れぬ北南の庭には
かやりとす仰せ言にて左右の歌よむべき人をめす
左延光の朝臣右博雅の朝臣洲濱のもとによりて歌と
りて讀むおほせごにて左大臣して歌の勝負のわざ
せさせたまふかすおほく左まさるまくにくにてりの
朝臣いはむかたなしとおもへり又左のおとを恨め
しと見やる歌ども見はて樂所のをのこどもをめす
左右とりわかれておの／＼庭にさぶらふ左のとうの
かちはおこらかしと思ひてさうの笛ふく左の大内侍
の琴ひく圖その頭をさむ琵琶大せんのしんながき琴
伊豫の掾もりとき和琴左衛門志富門笛修理の大夫し
げのぶの朝臣左京權大夫さねとしとのもりの頭橋の
よりたゞなどは歌うたひにさぶらふ右には源大納言

いの赤く青しかく皆とゝのひてまづ右の洲濱奉ると
て童打敷とりて御前にしきていりぬ又童四人洲濱か
きて參る裝束はあを色に柳がさねたけのほど髪長
さよくとゝのひてかたほならず洲濱の覆をあきすそ
濃にてぬひものしたり打敷は浅きはなだすはまのさ
まはうへのには沈にこがねのすぢやれり下のは淺
香にしろがねのすぢやれり歌はしろがねこがねをつ
くり花にして歌にしたがひつゝ枝につけたり戀の歌
は鶴舟にしてかやりに火にいらたり花の歌は舟につみ
たりうぐひすのは鶯くひたりさま／＼につけてした
り日のうち傾きて物の色みゆるほどにていともでた
しかる程に左におそくまるとて主殿頭平のこ
れつねをめしとおそしめさせ給ふ猶遅ければ藏人
平のよしきをめしせめさせ給ふたゞいままならす
と奏すかゝるほどにいといたうくれぬ又藏人藤原し
げすけをめしおそき由仰せ給ふ物のさまも見えぬ
程に洲濱奉る童うちしきとりてまゐるかへりて又四
人洲濱かきてまゐる裝束あかいろに櫻がさねなるべ
しされど見えねばかひなし數さしのすはま又童もた
りすべと六人わらわはありおほきさすのほらはずとい
ふよしき童の中にまじりてさわぐ大きにてかたはに
もあらじとおもひたるなるべし右の數さしの洲濱は
方の殿上童とりてつぼせざいにたてよさぶらふ左の
洲濱をさ／＼しく見えすくらくてすなはちおほほと
ぶらまゐる左源少將とれり打敷は左兵衛佐とれり右
藏人少將おはとなぶらとれりうちしきは後少將とれ
り渡殿の左右にうたの上達部つけり左おとゞ實朝右
大將師尹藤原朝成源大納言高源宰相相輔上人は後涼
殿のすのこに北南につきなみなりかた／＼の男女
房にあるじしたりかくて左の講師右兵衛の督源延光
よりて洲濱の覆を少し引きあけて山吹の花の枝の一

尺ばかりあるがねしてつくれるをとりてさしげてよいとよむたり花びらに歌はかきたるなるべしともかくもせでさしげてよみときるなりかうろさしげたるに似たり右の講師源中将博雅洲濱の覆は藏人少將すけのふもたり後少將たかみつよりてとるかて歌ども合するにいかありけん右負けにけり合せはてて御遊び仕うまつるめし人は左右の壺前裁にさぶらふ左は左のおとや筆の琴勘解由長官笙のふえ圖書頭をさむ琵琶大膳進ながき琴伊豫掾もとき和琴左衛門志富門笛修理大夫しげの朝臣左京大夫さねとし主殿頭これつね橋のよりたやなどは歌唱ひにぞさぶらふ右は源大納言琵琶右近中将ひろまさの朝臣笙の笛治部卿雅信大藏卿もあきららの朝臣右近衛少將きよとはたかみつ備前掾きんまさなども歌うたひにさぶらふこれが中に左のうたひだしは右京大夫さねとし地下の人にて其の座にさぶらふ右のうたひだしは治部卿渡殿にさぶらふ皆勢拍子とれりまづかちかた雙調ふきてあなたふとあそぶ次に右おなじ調子ふきてさくら人あそぶ次々これよりはじめてたがひに左右ひまなくあそびあかし給ふつとめてうへよりかづけものたまふ左のおとやには御ぞくたり源大納言には白きうちき一かさね宰相たちひとへの組長を給ふこと人々には皆腰ざしをたまふ二日といふ日きさいの宮安子には洲濱ども御らんせさせに奉れ給ふかきてまゐる人々藏人ためみつまさき二人まゐる御覽じてかづけ物給ふさて右の洲濱はとめさせ給ひて左のはかへしまゐらせ給へり洲濱の有様はうへはしろがねのすぢやれり下にはすはうに白らふのすぢやれりけりおほひすはうの裾濃打敷はこきさび染の黄なりけりこれは若宮に奉らせ給ひてけりかくてあ

はする日は三月のつごもりの日なればすはまとりいづる日は四月朔日つとめてになりて左は夏のかざみにていでたり右はおなじ冬のなからにてとりいるその左の洲濱の覆蘆手を縫物にしたる歌
千代にちよ加たり見ゆる哉松の蔭なる聲の齡は立ち歸りなげや鶯あすよりは時鳥てふ聲ぞ聞えむ
君か代は天の羽衣稀にきて撫づ共壺ぬ巖ならむ
藤の花色深けれやかげみれば池の水さへ濃紫なる
名残をば夏にかけつゝ百年の春の港にさける藤浪
天徳四年三月卅日歌合左右假名日記
歌合の又のつとめて左からぬときとて大貳好古の宰相右兵衛督朝臣におこせたり
白浪の立よる方の方人はかつに由てや心ゆくらむかへし、朝忠宰相
諸共に見て、内侍のすけ
これをみて、白浪のそこのかひある心地社すれ
常磐にも立勝りにし白浪は君が方よりかひと社みれ
歌合明日とて宰相の更衣につかはす
上
言の葉を暗部の山のおぼつかない深き心の執勝れる御かへし
道しれる暗部の山に非ぬ身は深さをよそに聞計也
又弁の更衣につかはす
吹風によるべ定めぬ白浪は孰のかたに心よせまし御かへし
定なき心也とも白浪のよりては如何あると社みめ
右天徳歌合以信州大英寺空同和尚所持本校合之件
本十市遺忠蹟也

高陽院七番歌合

寛治八年

題 櫻 時鳥 月 雪 祝

作者 左 右

- 大納言通俊 藤中納言通俊
- 四條宮筑前君康實王母 江中納言匡房
- 周防内侍 顯綱朝臣
- 右大臣家讃岐君 正家朝臣
- 一宮紀伊君 行家朝臣
- 信濃君 頼綱朝臣
- 齋院攝津君 左京權大夫俊頼朝臣
- 講師 講師

右大辨基綱朝臣 右中辨宗忠朝臣

判者 帥大納言經信卿

一番 櫻

大 殿 中 納 言 君
山 櫻 句 ぶ あ た り の 春 霞 風 を ば よ そ に た ち へ だ て な む
春 風 は ふ く と も ち る な 櫻 ば な 花 の 心 を 我 に な し つ
此 の 左 の 歌 い と う ら は し う よ ま れ た り 右 の 歌 は 花
の 心 を と よ ま れ た ら 花 の 心 や は 侍 ら む と 思 ひ た ま
ふ れ ば 左 は ま さ り た り と や 申 す べ か ら む
二 番
左 持 紅 の う す 花 櫻 に ほ ば ず ば み な 白 雲 と 見 て や 過 ぎ ま し
右 四 條 宮 筑 前 君 江 中 納 言 匡 房

白雲とみゆるにしるし三吉野の吉野の山は花盛かも
左の歌はめづらしきやうによまれたれども歌の心
はとほくて雲と見つれどちかくて見れば紅に句ふ
櫻なりけりとよまれたるなりさらば山などかけて
とほきことなどやあるべからむ右の歌はめづらし
からねど別に難もなければ持とや申すべからむ
三番
左 周防内侍
山櫻惜む心のいくたびかちる木の本に行き歸らむ
右 顯綱朝臣
花故にかゝらぬ山ぞなかりける心は春の霞ならねど
右かゝらぬ山といふことは中頃の歌にてみなり
たる歌なり霞かゝるとやよまれてあるべからずお
ぼつかなければ左勝とや申すべからむ
四番
左 右大臣家讃岐君
八千代へむ宿に句へる八重櫻八十氏人も散で社見の
右 正家朝臣
風の音の長閑き春の宿なれば句ふ櫻をあく迄ぞみる
左八十氏人もちらでこそ見めとよまれたるは命ち
らぬ心かちらでとあれば俄に花のちらぬにやとお
ぼゆるうへに句の上ごとや文字やおほからむ又
右の歌はおくまでといふことはよむことにてはあ
れど花をあかむはいかゝ侍るべからむとおぼゆれ
ば持とや申すべからむ
五番
左 一宮紀伊君
朝未明霞なこめそ山櫻尋ねゆくまのよそ目にも見む
右 行家朝臣
思ふこと露だになきは山櫻花見るほどの心なりけり
左の歌はいと花びやかによまれ侍りもしふること

にやあらむ右の歌の思ふこと露だになしとはまこと
との歌の詞には見ずこそ思ひ給ふれ左の勝とこそ
申さめ

信濃君

尋ねくる心もしるく山櫻今こそ花のさかりなりけれ
右勝 頼綱朝臣

山櫻にはふ盛に風ふけばあたりの松も花さきにけり
左の歌は殿上の花の歌などに常に侍る歌又わざとの
難にはあらねど目なれたるやうにて右の歌は風
ぞかしけるといふ古うたのすぢにてめづらしから
ねぞすこしまさりたりとみ給ふる

七番

左持

ちり積る庭をぞみまし山櫻風より先に尋ねざりせば
齋院攝津君

右

山櫻さきそめしより久方の雲居に見ゆる瀧のしら糸
左の歌はいと心ばへをかしう侍り右の歌はさらび
やかによまれたるやうに侍れど持とこそ申さめ

一番 郭公

左

五月雨のはれぬ空にも郭公聲はさやかにき渡る哉
中納言君

右勝

時鳥心のまゝになづねつゝ生田の森にひと聲ぞきく
此の左のつゞきはまたくだりつかぬやうに覺え侍
るはひがごとくやされどいくたの森にて聞くなど
歌めきたれば右勝とや申すべからむ

二番 筑前君
左勝 筑前君
山近くうらこぐ舟は時鳥なくわたりこそ泊なりけれ
右 匡房朝臣

郭公雲居遙かに名のればや朝倉山のよそになくらむ
此の左の歌いとをかしくよまれて侍るめりかゝる
古ごとあるやうにはの覺え侍れど確ならねば一定
申しがたし右の歌は心ふかき歌と見給ふれ上句も
との句も本歌とも侍らむもし朝倉や木丸殿に我を
れば名のりをしつゝといふ事をよめるにや侍らむ
下句はもし昔みし人をぞ今はよそにきく朝倉山の
雲居はるかにといふ歌にや侍らむさらば朝倉山に
名のりをしたらむを聞くとあらむは適ひなむ此の
ことのおぼつかなく侍れば左勝とや申すべからむ

三番 周防内侍
左勝 周防内侍
一夜を重ねまちなか山の時鳥雲のよそにて一聲ぞきく
右 顯綱朝臣

明る迄待兼山の郭公今日もきかてやくれむとすらむ
此の歌 同じやうにのみ申し侍るを左は時鳥を聞
きたる歌右の歌はまたさかねばさきくも聞きた
るをば勝とぞ申すめ

四番

左勝

郭公夏の夜な〜待々て去年もことしも一聲ぞきく
右 正家朝臣

聞きつともいかゞ語らむ時鳥覺東なしや夜半の一聲
右の歌問ふ人もなきにいかゞ語らむと侍ることつ
ゝかぬやうにきこゆれば左の勝にや

左勝 紀伊君
ききつても猶ぞまたるゝ時鳥なく一聲にあかぬ心は
右 行家朝臣

時鳥とづれしより音羽山麓の里をかれずとふかな
右の歌由しりたるやうに聞き給ふるに右のかれず
とふとはなくてよみたるにや事たらのやうにこそ

見給ふれ左の勝にや

六番

左勝

郭公雲居の聲をきく人は心さへこそそらになりけれ
信濃君

右

郭公今ぞなくなる隣にもふきつる笛の音を留めて
頼綱朝臣

右の歌笛の音とめつといふことおもひかけぬこ
となれば左珍らしからねども勝りたりとこそは申
さめ

七番

左勝

夢かどぞ驚かれぬる時鳥又もおとせぬ夜半のこゑ
攝津君

右

待兼てぬる夜もあらば郭公他別の名をやたしまし
俊頼朝臣

左の歌は今すこし思ひや入りて侍らむ
一番 月 中納言君
雲なき雲の上まで照る月はいと光を研くなりけり
通俊朝臣

右 月みれば晝と思ふ秋の夜を長き春日と思ふしつゝ
右の歌に晝と日といふ事又是同じ事にやと申し
かば中納言は晝と日とはみな又言變りたれば同じ
心にはあらずとのたまひしを詞かはりたれど同じ
やうなれば猶さる心なしと聞き給ふ内に櫻花咲き
ぬる時は常よりも峯の白雲立ちまさりけりと云ふ
歌合の歌いとよき歌なりそれに猶さるべしとこ
そ申しかども斯ものべ申されざれば左の歌
いとよきと申しかば例などはいかゞと仰せられしか
ゝる時は持などとは定めたるよし申して持と定め
られぬ

二番

左

君みると空にすればや秋月曇らぬ影の代々に澄らむ
筑前君

右勝

逢坂の關の杉原下はれて月のもるにぞ任せたりける
匡房

左の歌は君みると空に知ればやとよまれて末にす
むらむとよまれたるは末の代はさもやよまれむは
じめを代々といふ事はあまり久しうこそ思ひ給ふ
れ右の歌杉原下晴れてと侍る月のさし入りて後侍
らむまだしきに晴れたりといはむこと先だちてな
む思ひ給ふると申したりしにもかくものべ申さ
りしところにもなどかいはれざらむと思ふ給ふれ
ば右勝にや

三番

左勝

つねよりも三笠の山の月影は光さしそふ天の下かな
周防内侍

右 顯綱朝臣
岩橋の神の契れるかひもなし隈なく照す秋の夜の月
右の歌岩橋の神の契れるとよまれたるは葛城の神
にや侍らむさらば此の橋をばえわたさずとこそい
ひつたへたれ月にはえ渡さじとやはあらむ月のあ
かきが晝のやうなればこそさもみえぬさこそ月の
くまをよまれたれば神さやはいひしとよぼさむ
と思ふ給ふれば左の勝にや

四番 讚岐
左勝 讚岐
秋の夜は最ぞ長くぞ成ぬべき明るもしらぬ月の光に
正家

常磐山下葉の露の数ごとに影さしそふる秋の夜の月
左めづらしきことのみ見えて右の歌のときは山と
よめるは山にのみやがて露はおかぬ下葉といふこ

とはいかなるにかあらむと見給ふれば左の勝にや
五番 左勝 紀 伊
鏡山峯より出る月なれば曇るよもなき影をこそ見れ
右 行 家
水ならで人にも月や映るらむ見れば心の澄み渡る哉
右の歌人にも月やと侍るはいかなるまにや左の勝
にや
六番 左勝 信 濃
曇なき玉のうてなの研けるに光をそふる秋の夜の月
右 頼 綱
秋夜の月に心の隙ぞなき出るを待つといるを惜むと
左右の歌させるとみえ侍らねば持とや申べからむ
七番 左勝 攝 津
てる月の光泣行く宿なれば秋の水にも氷柱の
右勝 俊 頼 けり
山の端に雲の衣をぬぎすて、獨や月の立ち昇るらむ
右勝に侍るにや
一番 雪 中 納 言
岩代の結べる松に降雪は春もとけずやあらむとす覽
右 通 俊 卿
あしなべて山の白雪積れども著きは越の高嶺也けり
左の歌をかしくよまれ侍り右もうるはしく侍り持
にや
二番 左勝 筑 前
おふみける鴉の跡さへをしき哉氷の上にふれる白雪
右勝 匡 房

左の歌かかしくよまれ侍り右もうるはしく侍り持にや
二番 左勝 筑 前
おふみける鴉の跡さへをしき哉氷の上にふれる白雪
右勝 匡 房

おみ狩野は且ふる雪に埋れて鳥立もみえず草隠れつゝ
左の歌鴉鳥ふみけるといふ事は人こそみ見め
鴉の心はしりがたし又跡さへ惜しきとは跡を惜み
たるにや古くはをしきと云ふことは雪を惜みたり
とこそみゆれ右草がくれつゝとよまれたるは鷹狩
に草隠れといふことは鳥の草にかくれたる事を申
すにやあらむこれは雪を詠みたるにこそされど雪
の草がくれたるにやあらむ右の勝にや侍らむ
三番 左勝 周防内侍
雪も皆ふるかひ有て積ればや白雪懸る山とみゆらむ
右勝 顯 綱
外山には柴の下葉も散果て、遠の高嶺に雪降にけり
左の歌は白雪かゝるといふ言葉ふるきことこそ
覺ゆれ右の歌下葉もちりはつといふことはいかに
あらむ
四番 左勝 讚 岐
近江路は民の笠のみ見ゆる哉越にも優る雪にぞ有ける
右勝 正 家
旅人のねずりの衣うち拂ひ拂ひもあへすけさの初雪
左の歌近江路といふと何事にかたみの笠といふこ
とを思ひてよまれ侍るにやそれはさいはれて聞ゆ
る物をさらば右の勝にや
五番 左勝 紀 伊
天の原空掻き暮しふる雪に思ひこそやれみ吉野の山
右 行 家
雪ふれば野原を行も分やらす萱が下折最どしみたれ
左の歌思ひこそやれ神なびの森といふ同じ心にや
侍らむ右かやが下をれ雪にみだるともみえねば同

左の歌思ひこそやれ神なびの森といふ同じ心にや侍らむ右かやが下をれ雪にみだるともみえねば同
二天の原空掻き暮しふる雪に思ひこそやれみ吉野の山
右 行 家
雪ふれば野原を行も分やらす萱が下折最どしみたれ
左の歌思ひこそやれ神なびの森といふ同じ心にや侍らむ右かやが下をれ雪にみだるともみえねば同

ほとにや
六番 左勝 信 濃
遠近の嶺の續きもみえぬ迄天ざる雪も降しきにけり
右 頼 綱
衣手によごの浦風さえく／＼て木高見山に雪降にけり
左の歌勝にや
七番 左勝 攝 津
ふる雪に杉の青葉も埋れて印もみえぬ三輪の山もと
右 俊 頼
ふる雪に谷のかけはし埋れて梢ぞ冬の山路なりける
左の歌いとをかしく侍る勝にや
一番 祝 中 納 言
君が代は萬代までにさしてけり三笠の山の神の恵に
右 通 俊
君が代は天の兒屋根の命より祝を初し久しかれとは
左右やんごとなき神をかけたれば申しがたし持に
侍るめり
二番 左勝 筑 前
君が代は眞砂の数も飽すとて瀬々の衝も猶そふる哉
右勝 匡 房
君が代は曇もあらし三笠山峰の朝日のさゝむ限りは
左勝 周防内侍
君が代は龜の尾山に住鶴の毛衣さへや千代を重ねむ
右勝 顯 綱
君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄

君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄
二君が代は龜の尾山に住鶴の毛衣さへや千代を重ねむ
右勝 顯 綱
君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄

右はまさりてこそ見給ふれ
四番 左勝 讚 岐
萬代と祈りぞつむる君が代は山田の原の下つ岩根に
右 正 家
君が代は兼てぞ著き春日山二葉の松の神さぶるまで
左の歌萬代とよみて又君が代とよみたるもいか
あらむと申すべからむ
五番 左勝 紀 伊
萬代を松の尾山の蔭しげみ君をぞ祈る常磐かきはに
右 行 家
天の下久しき御代の印にはみかさの山の神をぞさす
六番 左勝 信 濃
萬代をまた萬代をます鏡蔭をならべてしるぞ嬉しき
右 頼 綱
百年も重ねく／＼て君が代はつきじとぞ思ふ萬代迄に
七番 左勝 攝 津
千代ふべき君を護れば三笠山神の心も長閑かるらむ
右勝 俊 頼
落たざる八十氏川の早き瀬に岩越波は千代の數かも
中納言 筑前君 勝一頁持一
周防内侍 勝二頁持二
紀 伊 勝三頁持三
攝津 勝四頁持四
顯 綱 勝五頁持五
行 家 勝六頁持六
頼 綱 勝七頁持七
正 家 勝八頁持八
顯 綱 勝九頁持九
頼 綱 勝一頁持一
正 家 勝二頁持二
顯 綱 勝三頁持三
頼 綱 勝四頁持四
正 家 勝五頁持五
顯 綱 勝六頁持六
頼 綱 勝七頁持七
正 家 勝八頁持八
顯 綱 勝九頁持九

君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄
二君が代は龜の尾山に住鶴の毛衣さへや千代を重ねむ
右勝 顯 綱
君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄

千五百番歌合

百首歌合 建仁元年 土御門院御宇
題
春 廿首 夏 十五首 秋 廿首
冬 十五首 祝 五首 戀 十五首
雜 十首
作者
左方

女房 後鳥羽院
左大臣正二位藤原朝臣 後京極攝政
前權僧正慈圓
從二位行權中納言藤原朝臣公繼 德大寺野宮左大臣
參議正三位行左近衛權中將兼越前守藤原朝臣公經
正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣季能
宮内卿 後鳥羽院女房
讚岐 二條院女房賴政女
小侍從 待賢

散位正四位下藤原朝臣隆信
散位正四位下藤原朝臣有家
散位從四位上藤原朝臣保季
正五位下行左近衛權少將藤原朝臣良平 醍醐入道
從五位下行左兵衛佐臣源朝臣具親
僧顯昭
右方
三宮
內大臣正二位兼右近衛大將皇太弟源朝臣
正二位行權中納言藤原朝臣忠良
從二位行權中納言藤原朝臣兼宗
從三位行右近衛權中將源朝臣通光

千五百番歌合卷第一

春一判者忠良

春二十首
一番 左勝女房 右 三宮
三春立てば變らぬ空ぞ戀り行く昨日の雲か今日の霞か
早晩と雲居に春や立ちぬらむ雪げをこめて霞む空哉
(判詞者略之以下同)
二番 左勝左大臣 右 内大臣
三おしなべて今朝は霞の敷島や大和諸人春を知るらし
夜をこめて竹にさへづる鶯のこゑの色にや春の緑は
三番 左勝前權僧正慈圓 右 權中納言忠良
雪の内に春は來に鳥吉野山雲とや云む霞とや云はむ
さきのよまでさえし嵐の音羽山霞むや春に逢坂のせき

四番 左持權中納言公繼 右 權中納言兼宗
九右巢出る鶯の音に著き哉谷より春はたつにぞ有ける
○春さぬと誰に岩間の水なればけさは氷の解始むらむ
五番 左 參議公經 右勝右近衛權中將通光
杉の葉のかすむにしるしあふ坂や關の岩戸の春の曙
今朝よりは雪げの雲の跡はれて縁にかへる春の初空
六番 左 太皇太后宮大夫季能 右勝釋阿
けさよりや澤べの氷とけぬらむ春風かよふ鶯のこゑ
八重霞八十島かけて立ちにけり千代の始のはるの曙
七番 左持宮内卿 右 俊成女
いつしかと春の日影に雪消て聲たて初むる庭の松風
出る日の光もしるし天つ空くもりなき世の春の始は
八番 左持讚岐 右 丹後
雲居より春や立つらむ天の戸を推明方の霞初めぬる
昨日迄こやも顯はに見えしかどけさぞ難波の浦に霞める
九番 左 小侍待 右勝越前
去年といふ昨日にけふは變らぬをいかに知てか鶯の鳴
○いつしかと春のけしきを眺むれば霞にくもる曙の空
十番 左持散位藤原朝臣隆信 右 藤原朝臣定家
逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
一逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
二逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
三逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
四逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
五逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
六逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
七逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
八逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
九逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
十逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
十一逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
十二逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
十三逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは
十四逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは

五年の内の春とは空に三吉野の山も霞みて雪の降つゝ
○卷向のあなしの梅原春くれば霞を懸て山かづらせり
十五番 左 僧顯昭 右勝右馬助源家長
一夜の程に雪ふる年を引かへて空も心も春めきにけり
六氷吹く山風さむみけふも猶ぞ打ち出でぬ水の白浪
十六番 左勝女房 右 内大臣
冬と春と行きあふ坂の杉がえに霞を凌ぎ泡雪ぞふる
七おちたざつ岩間打出づる泊瀬川初春風や氷とくらむ
八けふよりや木芽も春の山風に櫻が枝も花を待つらむ
十九番 左勝前權僧正 右 兼宗卿
春風の結ぶ氷を吹解けば更にやけふは袖もぢなむ
廿君が爲子日の松を引添へて千代の蔭をも頼みつる哉
廿一年を思ひ暮してまどろめば夢よりあくる空の初春
廿二番 左 季能卿 右勝俊成卿女
七ゆく末の梢をこめよ姫小松けふこそよそに嶺の白雲
八麓迄霞みにけりな深山には松の葉白き雪もけなくに
廿三番 左勝讚岐 右 越前
七春風をさらし雪けに吹きかへて峯の霞を雲隠れゆく
八春さぬといふ計りには霞め共まだ雪深し三吉野の山
廿四番 左 小侍從 右勝定家朝臣
七たゞ霞む空とやけさを思はまし谷の鶯音せざりせば

○^八春といへば花やは遅き吉野山さえあへぬ雪の霞む曙
 廿五番 左持隆信朝臣 右 通具朝臣
 一^八春きては人もとふべき三吉野に雪より深き朝霞かな
 二^八たれにまたけふと契を志賀の浦花の小波春風ぞふく
 廿六番 左持有家朝臣 右 家隆朝臣
 三^八春風の立田の川やまさるらむ三むろの岸の雪の下水
 四^八春たちてけふ三日月の山のはに霞初めたる夕暮の空
 廿七番 左 保季朝臣 右 雅經
 五^八凍りせし嵐を春に吹きかへて昨日はさかぬ谷の下水
 六^八水とく沖つ春風吹きぬらし汀にかへる志賀の浦なみ
 廿八番 左 良平 右 寂蓮
 七^八今朝も猶雪の雲に紛ふかな孰れ霞とみよしの山
 八^八春きてもなほ雪さゆる山風の麓になれば氷とくなり
 廿九番 左 具親 右 家長
 九^八いつしかとくすみの衣立田山うらめづらしき春の曙
 三十番 左 顯昭 右 三宮
 一^九姫小松引馬の野べに子日して手毎に千代を翳しつる哉
 二^九けふも猶雪ふる松に音づれて聲うちかすむ春の初風
 三十一番 左 女房 右 忠良卿
 三^九葛城やたかまの山に雪消えてささし嵐ははるの初風
 四^九春はまだ浅香の沼の薄氷消えあへぬ上に泡雪ぞふる
 三十二番 左 左大臣 右 兼宗卿
 五^九吉野山雪ふる里もしかすがに横のは凌き春風ぞ吹く
 六^九たちわたる霞も春は哀なり秋風ふかぬ萩のやはら
 三十三番 左 前権僧正 右 通光卿
 七^九春霞たてるは都さても猶山のおくには雪やふるらむ
 八^九絶々に去年の名残とちる雪を暫しもみせぬ春霞かな
 三十四番 左 公繼卿 右 釋阿
 九^九春の日の霞の内に暮ぬれば長しともまた覺えざり身
 〇^九春さぬと御垣が原は霞めども猶雲さゆる三吉野の山

三十五番 左 公經卿 右 俊成卿女
 〇^〇白妙の袖に縁をうつつしめて雪ふるのべに若菜つむ比
 一^〇昨日までとちし水柱の油水にいつ春風の浪を吹らむ
 三十六番 左 季能卿 右 丹後
 二^〇うち靡き所もわかす立つ春を何と隔つる霞なるらむ
 三十七番 左 持宮内卿 右 越前
 三^〇鶯の涙のこぼりとけしより打ち出でる谷川の水
 四^〇くもる日をいづちうらなく聊たまし霞の衣春雨の空
 五^〇浪路より春や立つらむ朝ぼらけ霞ぞこゆる末の松山
 三十八番 左 讚岐 右 定家朝臣
 六^〇春の雪は猶ふる草に晴れやらで道踏分けぬ竹の下折
 七^〇山のはに霞ばかりは急げども春に離れぬ空の色かな
 三十九番 左 小侍從 右 通具朝臣
 八^〇雲つゝくとはちの里の夕霞たえまゝに歸る雁がね
 九^〇雪の内に涙とけ行く鶯は我音に鳴きて春やしるらむ
 四十番 左 隆信朝臣 右 家隆朝臣
 一^〇君がへむ千代の例に引初し野べの小松も数添にけり
 二^〇山里は木間の日影猶さえて春とも見えぬ庭の霜かな
 四十一番 左 持有家朝臣 右 雅經
 三^〇けふこそは花の都にくれ竹のねぐらさだめよ春の鶯
 四^〇晴やらぬ雲は雪の春風に霞あまざるみよしの山
 四十二番 左 保季朝臣 右 寂蓮
 五^〇子日する野べより色ぞ變りける常磐の松の春の一入
 六^〇春は猶霞みもはてぬけしきかな吉野の山の松の村消
 四十三番 左 持良平 右 家長
 七^〇みよしの野の梢を花と眺むれば高嶺はいまだ冬の白雪
 八^〇から衣袖ふりはへて雪消ぬ裾野の原の若菜をぞつむ
 四十四番 左 具親 右 三宮
 九^〇志賀の浦や氷に流む冬の浪の幾日を過て立歸らむ
 〇^〇秋だにも仄めく空の夕月夜霞める春は其かともなし
 四十五番 左 顯昭 右 内大臣

一^一春霞けさは煙に紛ふらししるしもみえず鹽がまの浦
 二^一昨日迄氷柱の底に見し根芹けさは雪の氷に社つめ
 四十六番 左 女房 右 兼宗卿
 三^一白妙の衣春雨かき曇りふる野のわかな今やつむらむ
 四^一山里は聞きし人もあらじとやまづ聲ならす谷の鶯
 四十七番 左 左大臣 右 通光卿
 五^一時しもあれ春の七日の初子日若菜つむ野に松を引哉
 六^一待ちわびし軒端の梅に風過ぎばそれ聞へき鶯の聲
 四十八番 左 前権僧正 右 釋阿
 七^一池雪の花なさ里にうれしきは木のめも春の夕暮の空
 八^一春毎に子の日の松の千代は皆我君が世の例なりけり
 四十九番 左 公繼 右 俊成卿女
 九^一ときは山白雲かゝる梢こそはるかにみゆる雪の下草
 〇^一春日野の雪を分て尋ぬれば草の僅に春めきにけり
 五十番 左 公經卿 右 丹後
 一^二鶯の凍れる涙とけにけりまだ古年の雪は消え敢へで
 二^二雪閉ぢし軒の垂氷のとけ行くを早晩春の雨かぞふる
 五十一番 左 季能卿 右 越前
 三^二小松原雪を分けてひく人の手に顯るゝ千世の初春
 四^二音羽山松に明け行く横雲の名残をみればかすむ一村
 五十二番 左 宮内卿 右 定家朝臣
 五^二霞しく河添柳浪かけてねにあらはるゝ春のうぐひす
 六^二山里は谷の鶯打ちばぶき雪よりいづる去年のふる聲
 五十三番 左 讚岐 右 通具朝臣
 七^二深山いでゝ花を遅しと思ひけり松の雪にぞ鶯はなく
 八^二芹つみし御垣が原はそれながら昔をよに濡す袖哉
 五十四番 左 小侍從 右 家隆朝臣
 九^二春といへばなべて霞や渡るらむ雲なゝ空の朧月夜は
 〇^二春の日の浅澤をのゝ薄氷誰らみ分てねせりつむらむ
 五十五番 左 隆信朝臣 右 雅經
 一^三雪の内にもぐむ若菜は埋れて飛火の野守見かひぞなき

二^三若菜摘縁りにみればむさし野の草は皆から春雨の空
 五十六番 左 持有家朝臣 右 寂蓮
 三^三春毎に飛火の野守舊りぬらむ雪女の若菜年を積つゝ
 四^三誰か又春のしるしと契りけむ二輪の山もと鶯のこゑ
 五十七番 左 保季朝臣 右 家長
 五^三春くれば元よりたえぬ煙さへ霞とみゆる鹽がまの浦
 六^三暮れ果つる浪路の末は八重霞々を出づる春のよの月
 五十八番 左 持良平 右 三宮
 七^三くもる夜の空をよそにてもる月や木の下蔭に殘る沫雪
 八^三津國のなにはの春を見わたせば霞をよする沖つ白浪
 五十九番 左 具親 右 内大臣
 九^三都にて何かへるとも怨みけむはつねに出づる谷の鶯
 〇^三春風になびくのみかは鶯のさゝるにたえぬ青柳の糸
 六十番 左 顯昭 右 忠良卿
 一^四遙々と飛火がはらを見渡せば霞と共に雲雀立つなり
 二^四行末を子日の松に引かけて君が千年を手に任せつる
 六十一番 左 女房 右 通光卿
 三^四手折けむ軒端の梅を尋れば花もえならぬ袖のかぞする
 四^四庭の面に殘る跡で木のまもる月影うつす雪の村消
 六十二番 左 左大臣 右 釋阿
 五^四鶯のはね白妙にふる雪をうち拂ふにも梅のかぞする
 六^四袖のかに梅は變らす薫りけり春は昔の春ならねども
 六十三番 左 前権僧正 右 俊成卿女
 七^四はるはとし霞かゝれる梢より花ぞおそきと鶯のなく
 八^四山里は猶ふる雪の消えがてにまだき梢に花ぞ散ける
 六十四番 左 公繼卿 右 丹後
 九^四日影みぬみ山隠れに流れきて雪の氷の又凍りぬる
 〇^四昔よりけふまで絶ぬ子日にも君を松とや引残しけむ
 六十五番 左 公經卿 右 越前
 一^五春風たぎつ岩根にせきかねて霞におつる花の白浪
 二^五薄氷春日麗らに解ぬらし山田のさばに賤ぞゑづつむ

六十六番 左持季能卿 右 定宗朝臣
 六十七番 左 宮内卿 右 通具朝臣
 六十八番 左 讚岐 右 家隆朝臣
 六十九番 左 小侍 右 丹後
 七十番 左 隆信朝臣 右 寂蓮
 七十一番 左 有朝臣 右 家長
 七十二番 左 保季朝臣 右 三宮
 七十三番 左 良平 右 内大臣
 七十四番 左 具親 右 忠良卿
 七十五番 左 顯昭 右 兼宗卿
 七十六番 左 顯昭 右 兼宗卿
 七十七番 左 顯昭 右 兼宗卿
 七十八番 左 顯昭 右 兼宗卿
 七十九番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十一番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十二番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十三番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十四番 左 顯昭 右 兼宗卿
 八十五番 左 顯昭 右 兼宗卿

千五百番歌合卷第二 春二判權大納言忠良

七十六番 左 女房 右 釋阿
 七十七番 左 左大臣 右 俊成卿女
 七十八番 左 前權僧正 右 丹後
 七十九番 左 公經卿 右 越前
 八十番 左 公經卿 右 定宗朝臣
 八十一番 左 季能卿 右 通具朝臣
 八十二番 左 宮内卿 右 家隆朝臣
 八十三番 左 讚岐 右 雅經
 八十四番 左 小侍 右 寂蓮
 八十五番 左 隆信朝臣 右 家長

春日山松の緑はほのみえて消散へぬ雪に春風ぞ吹く
 梅の花なづさふ人の袖毎にありあへたるは匂也けり
 八十六番 左 持有家朝臣 右 三宮
 八十七番 左 保季朝臣 右 内大臣
 八十八番 左 良平 右 忠良卿
 八十九番 左 具親 右 兼宗卿
 九十番 左 顯昭 右 通光卿
 九十一番 左 女房 右 俊成卿女
 九十二番 左 前權僧正 右 越前
 九十三番 左 顯昭 右 兼宗卿
 九十四番 左 公經卿 右 定宗朝臣
 九十五番 左 顯昭 右 兼宗卿
 九十六番 左 顯昭 右 兼宗卿
 九十七番 左 顯昭 右 兼宗卿
 九十八番 左 顯昭 右 兼宗卿
 九十九番 左 顯昭 右 兼宗卿
 一百番 左 顯昭 右 兼宗卿

二六〇 ことしもしらぬ梅は薫来て垣ねの末に鶯ぞなく
 九十六番 左 持有家朝臣 右 家隆朝臣
 九十七番 左 宮内卿 右 雅經
 九十八番 左 讚岐 右 寂蓮
 九十九番 左 小侍 右 家長
 一百番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百一十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百二十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百三十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百四十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百五十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百六十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百七十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百八十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 一百九十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 二百番 左 隆信朝臣 右 三宮

百六番 左勝女房 右 丹後
 深き夜の哀れはしるや春の月しく物もなき有明の空
 行くへなき雲路にきゆる雁音の聲さへかすむ春の曙
 百七番 左勝左大臣 右 越前
 わたのはら雲に雁音浪に舟かすみてかへる春の夕暮
 梅枝のあたらしに袖ふれて獨片しくよはを重ぬる
 百八番 左 前権僧正 右 兼定家朝臣
 春とにかざして年ぞ積りぬるわが老隠せ梅の花笠
 春や非ぬ宿を詔言に立出れど孰も同じ霞む夜の月
 百九番 左 持公繼卿 右 通具朝臣
 三吉野のかすがの杜の梅花とる神葉に香を交へけり
 寂さの繁さぞ増 淺茅生の庭は春雨ふるに附けても
 百十番 左 公經卿 右 兼隆朝臣
 梅の花袖に匂ひの風こえて夢の枕にきるるうぐひす
 百十鳥たが袖ふれし古郷の軒端の梅のかを慕ふらむ
 百十一番 左 季能卿 右 兼雅經
 かざこしの嶺には春やたゞざらむ麓の空に霞隔て
 白雲のたえまに靡く青柳のかづら山に春風ぞふく
 百十二番 左 兼宮内卿 右 寂蓮
 うすくこきのべの緑の若草に跡までみゆる雪の村消
 谷の戸をいでいも雲に入にけり花に木傳ふ野べの鶯
 百十三番 左 讚岐 右 兼家長
 わざもが衣春雨ふるからに裾野の草ぞ色増りける
 八自から跡みし雪は消えはてて草たつ庭に春雨ぞふる
 百十四番 左 小侍從 右 三宮
 年つめば果は老けり若菜こそ見し當時の形見也けれ
 梅花あかぬ色香を幾しほか心にそめて春をへぬらむ
 百十五番 左 隆信朝臣 右 兼内大臣
 植しより春はと待ちしかひありて梅の葉末に鶯の聲
 百十六番 左 兼有家朝臣 右 忠良卿

百三十七番 左持左大臣 右 通具朝臣
 更級や姨すて山のうす霞かこめる月に秋ぞこもれる
 百三十八番 左 前権僧正 右 兼隆朝臣
 櫻花まだみぬさきも三吉野の山のかひある嶺の白雲
 月は猶かすみの下にこほれども汀に歸る志賀の浦波
 百三十九番 左 公繼卿 右 兼雅經
 春のうちに梅さくその玉柳匂を移せ風の便りに
 山たかみ雲居の櫻雲とみて休らふ程に風や吹くらむ
 百四十番 左 公經卿 右 寂蓮
 霞み行く尾上の鐘の打つけに花の折まつ小初瀬の山
 一行止る所もあらじ木の本に過てぞ花は見ばかりける
 百四十一番 左 季能卿 右 兼家長
 春雨のふるからをのみ渡せば若葉さしそふ本柏哉
 一句ひさへ花の鏡にうつららしむすべば水の懐しき哉
 百四十二番 左 宮内卿 右 兼三宮
 雪まわけまだうら若き緑哉草の僅かに春はなれども
 梅がえの花のねぐらにあればはて櫻にうつる鶯の聲
 百四十三番 左 讚岐 右 兼内大臣
 もやしきや大宮人の玉かづらかけてぞ靡く青柳の糸
 春雨の心ばそくも古郷は人くといとふ鳥のみぞなく
 百四十四番 左 小侍從 右 忠良卿
 且みても散らむ嘆きを思ふまに花故身をそ碎く比哉
 風薫る雪のみ深きよしの山雲とは花の空目なりけり
 百四十五番 左 隆信朝臣 右 兼宗卿
 梅花ちり行く程ぞしられぬ吹きくる風の薄き匂に
 二あたし夜の月と花との眺よりいと身にしむ春の曙
 百四十六番 左 有家朝臣 右 兼通光卿
 小松原今一しほに色みえて大内山の春めきにけり
 名にたかき梢の花の色やさは大内山のみねのしら雲
 百四十七番 左 持保季朝臣 右 釋阿

百廿七番 左勝宮内卿 右 兼家長
 二月や雪ちる風に枝さえて咲出づる花や立止るらむ
 春雨のふるの山田をきてみれば鳴の臥どに蛙なく也
 百廿八番 左 讚岐 右 兼三宮
 春の池の汀の柳うちはへて靡く下枝に鶯ぞ立つなる
 八うあおきし若木の梅の初花に匂ひをぬる内哉
 百廿九番 左 小侍從 右 兼内大臣
 色あればそれとはみてむ梅花枝に残の雪消えずとも
 九かき連ね歸る越路に日は暮ぬ雲のいつくに宿を雁音
 百三十番 左 兼隆朝臣 右 忠良卿
 今我よはひも老いぬ鶯の笠にぬふてふ梅を翳さむ
 九山のはの雲より花に移りきて眺めくらせば霞む月影
 百三十一番 左 兼有家朝臣 右 兼宗卿
 津のくにやなにはのはるの色も皆一つに霞む曙の空
 九面影にこそぞの櫻をさかせて花まつ程は慰めにする
 百三十二番 左 持保季朝臣 右 通光卿
 九をちの里通はぬ風を恨みても梅が香思ふ眺ばかりぞ
 六打靡く柳のいとわきて又いかなる風に結ほらむ
 百三十三番 左 良平 右 兼釋阿
 九雁がねの歸る名 眺むれば心も越の空までぞ行く
 九白妙にゆふかけてけり神葉に櫻咲き添ふ天のかぐ山
 百三十四番 左 持具親 右 兼成卿女
 九消遣らぬ雪よりめむ若草の露しり初むる春雨の空
 九つれくの勝る霖は徒に春の物とてふればなりけり
 百三十五番 左 顯昭 右 兼丹後
 九風ふかぬ君が御代とはしりながら心と靡く青柳の糸
 九歸來む秋をたのむの雁だにも鳴てぞ春は立別るなる
 百三十六番 左 女房 右 兼定家朝臣
 九三月よし夜よしと誰に告遺らむ花可惜しき春の古郷
 九待ちわびぬ心づくしの春霞花のいざよふ山のはの空

百三十七番 左持左大臣 右 通具朝臣
 更級や姨すて山のうす霞かこめる月に秋ぞこもれる
 百三十八番 左 前権僧正 右 兼隆朝臣
 櫻花まだみぬさきも三吉野の山のかひある嶺の白雲
 月は猶かすみの下にこほれども汀に歸る志賀の浦波
 百三十九番 左 公繼卿 右 兼雅經
 春のうちに梅さくその玉柳匂を移せ風の便りに
 山たかみ雲居の櫻雲とみて休らふ程に風や吹くらむ
 百四十番 左 公經卿 右 寂蓮
 霞み行く尾上の鐘の打つけに花の折まつ小初瀬の山
 一行止る所もあらじ木の本に過てぞ花は見ばかりける
 百四十一番 左 季能卿 右 兼家長
 春雨のふるからをのみ渡せば若葉さしそふ本柏哉
 一句ひさへ花の鏡にうつららしむすべば水の懐しき哉
 百四十二番 左 宮内卿 右 兼三宮
 雪まわけまだうら若き緑哉草の僅かに春はなれども
 梅がえの花のねぐらにあればはて櫻にうつる鶯の聲
 百四十三番 左 讚岐 右 兼内大臣
 もやしきや大宮人の玉かづらかけてぞ靡く青柳の糸
 春雨の心ばそくも古郷は人くといとふ鳥のみぞなく
 百四十四番 左 小侍從 右 忠良卿
 且みても散らむ嘆きを思ふまに花故身をそ碎く比哉
 風薫る雪のみ深きよしの山雲とは花の空目なりけり
 百四十五番 左 隆信朝臣 右 兼宗卿
 梅花ちり行く程ぞしられぬ吹きくる風の薄き匂に
 二あたし夜の月と花との眺よりいと身にしむ春の曙
 百四十六番 左 有家朝臣 右 兼通光卿
 小松原今一しほに色みえて大内山の春めきにけり
 名にたかき梢の花の色やさは大内山のみねのしら雲
 百四十七番 左 持保季朝臣 右 釋阿

三歸る雁そなたの雪に思ひ出よ花の梢に心とまらば
六臂へてもいはむ方なし山櫻霞にかをる春のあけぼの
百四十八番 左 良平 右 勝俊成卿女
七またれつる花なりけりな山櫻霞のうへに見ゆる白雲
八あかなくに歸る雲居に春雨のふるは涙か雁ぞ鳴なる
百四十九番 左 持具親 右 丹後
九すはの海や冬の名残の薄氷消すはあり共頼べきかは
〇おく山の雪の梢もはれにけり都の櫻いまやさくらむ
百五十番 左 顯昭 右 勝越前
一よしの山みやこながらぞ入にける俤にたつ花の便に
二目をへつゝ霞の末を眺れば雲になりゆく小泊瀬の山

千五百番歌合卷第三 春三 判者釋阿

百五十一番 左 勝女房 右 通具朝臣
三みよしのよしの山の花盛くもより下の春の白雲
四山櫻あかね旅寝の露分けて手折るたもとに有明の月
百五十二番 左 勝左大臣 右 家隆朝臣
五山櫻いまやさくらむ陽炎のもゆる春べにふれる白雪
六玉柳春の梢に開くときはみどりの空にうぐひすの聲
百五十三番 左 持前權僧正 右 雅經
七香をだにと思ひし花の霞より色をも送る春の山かせ
八谷風や山も霞の隙ごとに又打ち出づる花のしらなみ
百五十四番 左 勝公繼卿 右 寂蓮
九儂くぞ朝ある雲に紛へつる花 匂ひのありける物を
〇花はみな枝に残らず散りにけり下のみ薫る春の山風
百五十五番 左 勝公繼卿 右 家長
一先だちて誰みよしの山櫻しらぬ葉の跡つけてけり
二永き日も花みる頃は暮易く程なき夜半ぞ明し兼ける
百五十六番 左 季能卿 右 勝三宮

三花みむと思ひたつより通ひきて心に匂ふ春の山かせ
四時しあれば雨に争ふ櫻花遂にさきぬるみよしの山
百五十七番 左 勝宮内卿 右 内大臣
五雲ならぬ花とは誰か三笠山霞める空に雪はふりつゝ
六春草を飛立つ雉子妻籠にけふな焼く鳴にや有らむ
百五十八番 左 勝讚岐 右 忠良卿
七鶯のしるべのみかは花の香に人を誘へ宿のはる風
八みねしらむ梢の空に影おちて花のくもるに有明の月
百五十九番 左 持小侍從 右 兼宗卿
九花をみて思ふ心の儘ならばちるに止りて斯は歎かじ
〇吉野山花とは誰かしらざらむたちな紛へそ峰の白雲
百六十番 左 隆信朝臣 右 勝通光卿
一淺緑糸よりかくる玉柳ぬく白露の名にこそ有りけれ
二あだにやは麓の庵に眺むべき花より出づる嶺の月影
百六十一番 左 持有家朝臣 右 釋阿
三春雨のふる野の小笹よをへて更に緑の色増りけり
四君が代に春の櫻もみける身を谷に朽ぬと何思ひけむ
百六十二番 左 保季朝臣 右 勝俊成卿女
五面影を春の匂に先だち枝にしらぬ花をみるかな
六すみれ草々野を分てし旅寝せし袖の形見計は
百六十三番 左 持良平 右 丹後
七白雲のかゝる高ねを始にて空より匂ふ山ざくらかな
八ながめやる花はいづれぞ白雲のたつたの山の曙の空
百六十四番 左 持具親 右 越前
九徒に霞に夜半は更けにけり山のは遠く出づる月かげ
〇櫻花あかね色香をことしだに風に任すな春の山姫
百六十五番 左 顯昭 右 勝定家朝臣
一咲ぬとて尋ねてみれば白雲の紛ふも花の情ならずや
二櫻花さきぬやいまだ白雲のはるかに薫る小泊瀬の山
百六十六番 左 勝女房 右 家隆朝臣
三雁かへる嶺の霞のはれずのみ恨つきせぬ春のよの月

四春はまだ其方ともなくとふ雁の花に匂へる夕暮の聲
百六十七番 左 勝左大臣 右 雅經
五誰をけふまつとはなしに山陰や花の雪に立ぞ濡ぬる
六山風の吹ぬるからに音羽川せき入れぬ花も瀧の白波
百六十八番 左 勝前權僧正 右 寂蓮
七掘削てみるは嬉しき花の木の移ろふにこそ習俗ぬれ
八志賀の浦に花の小漣こぎ分けて釣する蟹や袖匂らむ
百六十九番 左 勝公繼卿 右 家長
九いか計りまつも惜むも花ゆるは人の心を三吉野の山
〇足曳の山鳥の尾の長き日にあかでも花を獨かもみる
百七十番 左 勝公繼卿 右 三宮
一尋ね入る霞も深き花の香を誘ひて出づる山嵐のかせ
二尋ねつる花に變らぬ色ながら後れぬものは嶺の白雲
百七十一番 左 持季能卿 右 内大臣
三山櫻且さきとむる梢こそ友まつ雪をみしこちすれ
四梅も梅我身もわが身宿もやど春や昔のとのみ詠めて
百七十二番 左 宮内卿 右 勝忠良卿
五花も雪も色はかはらじ歸る鴈都の梢このしらやま
六花や雪霞やけふり時しらぬふじの高ねにさゆる春風
百七十三番 左 勝讚岐 右 兼宗卿
七咲ぬまは花とみよと三吉野の山の白雪消難にする
八くれぬ共暫しなつげそはつせ山花みる程の入相の鐘
百七十四番 左 持小侍從 右 通光卿
九つくくゝと花に向ていざさらは散なむ後の俤にせむ
〇何と此のさても止らぬ花故に恨みなれたる春の山風
百七十五番 左 隆信朝臣 右 釋阿
一尋ね入る花はそれとも白雲の隔つとみれば薫る山風
二今是我吉野の山に身を捨てむ春より後を問人もがな
百七十六番 左 持有家朝臣 右 俊成卿女
三鴈音の雲の衣のはる風にかへる空をや猶うらみまし
四故郷となりしにしかども櫻さく春や昔のしがの花ぞの

百七十七番 左 持保季朝臣 右 丹後
一木のもとに花故くらす轉寝は夢にもおなじ嶺の白雲
二夕月夜光は花に宿せども櫻がもとはおほろなりけり
百七十八番 左 勝良平 右 越前
三ひさ方の雲の上なる櫻花空にしらるゝ雪とこそみれ
四村消の雪かと見しや花ならむ一つになりぬ嶺の白雲
百七十九番 左 持具親 右 定家朝臣
五芳野山はなの盛になりけり故郷匂ふ春のあけぼの
六雲のなみ霞の波に紛へつゝ芳野の花の奥をみぬかな
百八十番 左 顯昭 右 勝通具朝臣
七遠近の花みる程に行きやらで歸きは暮ぬ志賀の山越
八石上ふる野の櫻誰れ植えて春は忘れぬ形見ならむ
百八十一番 左 勝女房 右 雅經
九歸る鴈霞のうちに聲はして物怨めししの春のけしきや
〇雲もうし嵐もつらし山櫻紛ふとすれば散果てにけり
百八十二番 左 勝左大臣 右 寂蓮
一春風は花と松とに吹替て散も散ぬも身にしますやは
二さびしさも今一しほの色をへて軒の葱に春雨ぞふる
百八十三番 左 勝前權僧正 右 家長
三春風の到りらぬ際ぞなき咲るがられば咲さるも咲さ
四山風に花の波たつ三吉野の吉野のはるや鹽がまの浦
百八十四番 左 公繼卿 右 勝三宮
五孰れとも花をわきえぬ心さへ霞にまじり春の山かな
六吉野山峰の櫻の咲しより花によがれぬ旅寝をぞみる
百八十五番 左 公繼卿 右 勝内大臣
七ほのくゝと花の横雲明けそめて櫻に白む三吉野の山
八花らぬ杜となさばやねぎ事をさのみ聞けむやし尋て
百八十六番 左 季能卿 右 勝忠良卿
九花ぞみる道の芝草ふみ分けて芳野のみやのはるの曙
〇花か雲かえぞ白浪の梢より落ちくる色や三吉野の瀧
百八十七番 左 勝宮内卿 右 兼宗卿

花故にまねに宿とふ暮に又人くといふ鳥の聲しも
 六〇いとせめて花に心をつくせとや春の山風吹始めむ
 百八十八番 左持讃岐 右 通光卿
 七〇あだなりと且三吉野の山櫻恨みても猶尋ね入るかな
 八〇山里はさらでも稀にとふ人を思ひたえぬる春雨の頃
 百八十九番 左持小侍従 右 釋阿
 九〇風ふけば晴れぬる雲とみる程に麓につもる花の白雪
 〇一し山や雪猶深き越路には歸る鷹にや春をしろらむ
 百九十番 左持隆信朝臣 右 俊成卿女
 一〇一年をへて同じ櫻の木の本にこりすもつくす我心かな
 一〇山路をば送し月を頼にてそこともしらぬ花に暮しつ
 百九十一番 左持有家朝臣 右 丹後
 一〇初瀬山檜原の霞紛ふらし思ひしよりもさける花かな
 一〇玉鉾の行くてに懸る山櫻我一人やはをらて過くべき
 百九十二番 左 保季朝臣 右 勝越前
 一〇道すから花散來れば吉野山すゞ分くる袖に風薫る也
 一〇三吉野の外山を花や隔つらむ雲にまづ吹く風の音哉
 百九十三番 左持良平 右 定家朝臣
 一〇芳野山分けきて後にながむれば霞をこむる春の白雲
 一〇しるしらぬわかぬ霞の絶間より主あらはに薫る花哉
 百九十四番 左 具親 右 勝通具朝臣
 一〇花にあかぬ吉野の奥の篠枕いとぬ月の雲隠れかな
 一〇行返り花こそあだに思ふらめ幾世の人か志賀の山越
 百九十五番 左持顯昭 右 家隆朝臣
 一〇思ふ事なくもみるべき花盛心みだるはるの山かせ
 一〇散りなれし梢はつらし山櫻春しりそむる花を尋ねむ
 百九十六番 左持女房 右 寂蓮
 一〇よしの山雲にうつるふ花の色を緑の空に春風ぞふく
 一〇荒増る駒の氣色も著き哉野と成にける里のあたりは
 百九十七番 左持左大臣 右 家長
 一〇葦鳴の下の氷は解けにしを上毛に花の雪を降りしく

吹風の吹でも花は止らねど己とちるは庭にこそられ
 百九十八番 左持前權僧正 右 三宮
 七人しれぬ花を霞に尋ねれば己れよそなる三輪の山杉
 八古郷の庭の櫻に風ふけば軒のしのぶに雪かゝりつゝ
 百九十九番 左持公繼卿 右 内大臣
 九あかなくに花の下ふし日數へぬ却 宿や旅心せむ
 〇春毎に花も咲や積らむ散るを恨みぬ人しなれば
 二〇番 左持公繼卿 右 忠良卿
 一〇風吹く花の下陰ふみ分けて朧月夜にとふひともし
 三吉野の月をたのむの鷹音や花咲春もよると鳴らむ
 二〇番 左 季能卿 右 兼宗卿
 三玉づさにあらぬ霞を何と又翼にかけて歸るかりがね
 三綾なしや惜むにやらぬ花故に幾度風を恨みきぬらむ
 二〇番 左 宮内卿 右 通光卿
 三わきも子が葛城山の花ざかりはなれぬ色の嶺の白雲
 三歸るらむ行くへもしらぬ曙にたのむの鷹の雲深き聲
 二〇番 左 隆信朝臣 右 釋阿
 三思寝の花を夢路に尋ねきて風にかへるうたゝねの床
 三御狩せし片野の冬やつらからむ春の山路に雉鳴なり
 二〇番 左 小侍従 右 俊成卿女
 三根めども止らぬ春 慕ふとて花も心や空に散りけむ
 〇嶺越に散りくる花を知べにて恨みもあへぬ春の山風
 二〇番 左 隆信朝臣 右 丹後
 一〇ちる花を浪かみれば高砂の尾上も今朝は末の松山
 一〇吹く風を夢の中に眠ふかな花に枕を結ぶよなく
 二〇番 左 有家朝臣 右 越前
 三葛城や高間の山の花盛くもよそなる雲をみるかな
 三花の色に移る心のいと無て我身世にふる詠やはする
 二〇番 左 保季朝臣 右 定家朝臣
 三音のみ哀と聞きし松風に花の香うつす春の山ざと
 六あかざりし霞の衣たちこめて袖のなかなる花の面影

二百八番 左持良平 右 通具朝臣
 一〇山川の岩もと櫻かげみれば雪をぞあらふたきつ白波
 一〇秋風にこしち悔しき旅なれば霞たつやと歸る鷹がね
 二百九番 左 具親 右 勝家隆朝臣
 一〇春の夜のまだ明やらぬ山端に白むともなき花の横雲
 〇けふみれば雲も櫻に埋れて霞みかねたる三吉野の山
 二百十番 左持顯昭 右 雅經
 一〇ちりまがふ花を雪かとみるからに風さへ白し春の曙
 一〇春の内は待つも惜むも思寝の花をのみ見る比の夢哉
 二百十一番 左持女房 右 家長
 一〇ちらばちれ好や吉野の山櫻吹迷ふ風はいふかひもなし
 一〇梢にはたえて櫻の清なる波の花こそかたみなりけれ
 二百十二番 左持左大臣 右 三宮
 一〇櫻花うつろはむとや山のはのうす紅に今朝は霞める
 六かきくもる遠のたかねの花盛消せぬ雪に春雨ぞふる
 二百十三番 左持前權僧正 右 内大臣
 一〇惜めども止らぬ花の緑りとて恨果つへき春の上かは
 七七飽ざりし花の名残を詠めよと木間漏りくる春夜の月
 二百十四番 左 公繼卿 右 忠良卿
 九珍しく燕軒端にさなるれば霞がくれに鷹かへるなり
 〇なれにけり名残よいか山櫻風より後の春の日數を
 二百十五番 左持公繼卿 右 兼宗卿
 一〇春風に散なば後をいかにせむ何と馴ぬる志賀の花園
 一〇春雨はのべの草葉の色よりも徒然増る物にぞ有ける
 二百十六番 左 季能卿 右 通光卿
 一〇遙々と雲路に歸る雁がねをいく霞まで詠めやらむ
 一〇山川を任せてけりな小山田の苗代水に花のなみよる
 二百十七番 左持宮内卿 右 釋阿
 一〇時きぬと苗代水や任す時らむ五百代小田に蛙なく也
 一〇哀にも空に轉るひばりかな芝生のすば思ふ物から
 二百十八番 左持讃岐 右 俊成卿女

照もせず雲も懸らぬ春のよの月は庭こそ静なりけれ
 六影きよき花の所は有明の月もえならす澄める空かな
 二百十九番 左持小侍従 右 丹後
 六有ふれば人の心もつらき世に目馴て花の散ぬるもよし
 〇櫻花又こむまでと契れどもうしろめたきは春の山風
 二百廿番 左 隆信朝臣 右 勝越前
 一〇尋こし山路は花を知べにてちる木の本や栖なるべき
 一〇いかにせむ分るもをし眺かな花の折しも歸る鷹音
 二百廿一番 左持有家朝臣 右 定家朝臣
 三朝日影匂へる山の櫻花つれなく消えぬ雪かとぞみる
 三櫻花移るふ春を許多へて身さへふりぬる淺茅生の宿
 二百廿二番 左持保季朝臣 右 通具朝臣
 七せきもあへず花吹きおろす嵐哉吉野の瀧の末匂ふ迄
 六春のよの心をわかぬ人はあらじ月と花との哀計りは
 二百廿三番 左 良平 右 勝家隆朝臣
 七尋來てしらぬ木の本無りけり花に馴行く三吉野の山
 七久かたの光のどかに櫻花ちらでぞ匂ふはるの山かせ
 二百廿四番 左 具親 右 雅經
 七跡たえてながめし雪の庭までは頼みし物を花の盛を
 〇忘れずば散なむ後も思出よ花見がてらの春のよの月
 二百廿五番 左 顯昭 右 寂蓮
 一〇越路には寂しきともあらじかし友引つれて歸る鷹音
 一〇なにとなく囀る山の鳥の音も物の哀は春のあけぼの
 千五百番歌合巻第四 春四 判釋阿
 二百廿六番 左持女房 右 三宮
 一〇花は雪とふるの小山田返しても恨果てぬる春の夕風
 一〇かくしつゝ今一しほや増らむ春雨そゝぐ浦の濱松
 二百廿七番 左持左大臣 右 内大臣

八八明果てば戀しかるべき名殘哉花の影もる可惜夜の月
八九侘人の住むとはきけど星引の山のかひある岩躑躅哉
九〇二百廿八番 左 前權僧正 右 勝忠良卿
九一こゝらなく鳥の妬くや思らむ惜むに止る花ならなくに
九二山嵐に櫻流るゝ吉野川はやくも春のくれて行くかな
九三二百廿九番 左 公繼卿 右 兼宗卿
九四歸る鴈越路に深き雪をみて春の空をやおほめきぬ覽
九五眺むればたなびく雲のたまより心細くも歸る雁音
九六二百三十番 左 公經卿 右 通光卿
九七春深く尋ねいるさの山のはに灰みし雲の色ぞ残れる
九八紛ふとて厭ひし峰の白雲はちりてぞ花の形見也ける
九九二百三十一番 左 季能卿 右 釋阿
一〇〇これにだにとふ人なしに住む宿を猶山深く呼子鳥哉
一〇一うらやまし苗代水をせくも心の程は任せこそすれ
一〇二二百三十二番 左 宮内卿 右 俊成卿女
一〇三庭は冬梢は夏の心ちして春にもあらず花を散り行く
一〇四みよしの野への櫻もちる儘に風に亂るゝ嶺の白雲
一〇五二百三十三番 左 持謙岐 右 丹後
一〇六春夜の短き程をいかにして八聲の鳥の空に知らむ
一〇七吉野山尋ねし花は散りはてて跡なき雲の跡をみる哉
一〇八二百三十四番 左 小侍從 右 勝越前
一〇九誰を斯うはの空には呼子鳥頼めぬ人のいかゞ答へむ
一一〇春風は吹きにけらしな吉野山雲になみたつ夕暮の空
一一一二百三十五番 左 隆信朝臣 右 定家朝臣
一二〇風薫る花のしづくに袖ぬれて空につかしき春雨の雲
一二一櫻色の庭の春風跡もなしとはゞぞ人の雪とだにみむ
一二二二百三十六番 左 有家朝臣 右 通具朝臣
一二三吉野山梢に花のはれぬれば岩のかけちをうづむ白雲
一二四みよまゝに高嶺の櫻雲消えて緑にすめる松の空かな
一二五二百三十七番 左 保季朝臣 右 家隆朝臣
一二六うづもるゝ花の梢に日數へて風よりはるゝ白川の里

一〇七待つ人に宿の春風ことづてよけふこそ櫻梢にもみめ
一〇八二百三十八番 左 勝良平 右 雅經
一〇九花の散山の高嶺の霞まじらば曇らぬ空の雪と見てまし
一一〇みよしのやたのむの雁の聲すなり花に名殘の春の曙
一一一二百三十九番 左 具親 右 寂蓮
一二〇今はよや雲をはなれてかりがねの霞にうつる曙の空
一二一あかで行く雁の涙や此ならむ雲に名殘の雨瀧ぐなり
一二二二百四十番 左 顯昭 右 家長
一二三心から妻戀すれや逢事の片山さすねにたてゝなく
一二四都をばたのむの雁の振捨て己が越路によると鳴く也
一二五二百四十一番 左 女房 右 内大臣
一二六霞み行三月の空の山端をほのゝ出づる十六夜の月
一二七此右歌兩本共無之不辭
一二八二百四十二番 左 左大臣 右 忠良卿
一二九うちながめ春の三月の短夜をねもせで獨明す頃かな
一三〇住吉のまつ吹くかぜのさびしさも今一しほの春の曙
一三一二百四十三番 左 前權僧正 右 兼宗卿
一三二古郷の花の白雪みにゆかむいざ駒なめて志賀の山越
一三三草も木もいかに契て藤の花松にとしもは懸り初けむ
一三四二百四十四番 左 公繼卿 右 通光卿
一三五苗代に窺るゝ賤が麻衣こなきが花のするかひぞなき
一三六杜若色に出てぞ隠れぬをそことも人に知せめつる
一三七二百四十五番 左 公經卿 右 釋阿
一三八つづくゝと軒の玉水敷そひてしのふに曇る春雨の空
一三九猶さへぞ位の山の喚子鳥ひかしの跡をたゝぬ程をば
一四〇二百四十六番 左 季能卿 右 俊成卿女
一四一駒なめてこそ春野を朝ゆけばをあきが原に雉鳴也
一四二高砂の松の緑もまがふまで尾上の風に花ぞ散りける
一四三二百四十七番 左 宮内卿 右 丹後
一四四おしこめて朧月夜の春ならば霞の外を秋とながめじ
一四五春風にしられぬ花や残らむ猶雲かゝる小泊瀬の山

一二六二百四十八番 左 謙岐 右 越前
一二七あればはてゝ我もかれにし古郷に又立返り葉をぞつむ
一二八櫻さくひらの高嶺に風吹けば梢に續く志賀の浦なみ
一二九二百四十九番 左 小侍從 右 定家朝臣
一三〇思へども聲はたてじと忍ぶるに羨しくも喚子鳥かな
一三一花の香も風こそよもに誘ふらめ心もしらぬ古郷の春
一三二二百五十番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣
一三三雨瀧ぐ色こそ春にあひにけれ人も分けぬ庭の蓬生
一三四ちり残る青葉の山の櫻ばな風より後を尋ねざりせば
一三五二百五十一番 左 有家朝臣 右 家隆朝臣
一三六さらぬだに朧にみゆる春の月ちりかひ曇る花の蔭哉
一三七花のちる山下風にふしわびて誰又あくる空を待らむ
一三八二百五十二番 左 保季朝臣 右 雅經
一三九眞柴分くる交野のみのゝ朝はらけ霞の末に雉立つ也
一四〇里遠みいくのゝ末を見渡せば霞にかへす春の小田山
一四一二百五十三番 左 良平 右 寂蓮
一四二ちる折もふるに紛ひし花なれば又木の本に残る泡雪
一四三ちりにけり哀恨のたれなれば花の跡とふ春の山かせ
一四四二百五十四番 左 具親 右 家長
一四五よしさらば孰ちも誘へ春の風花も限りとみむ人の爲
一四六つづくゝと霞に暮す野への庭庭の葦に雲雀おつなり
一四七二百五十五番 左 顯昭 右 三宮
一四八徒然の春日をいかでくらさまし心董の花見ざりせば
一四九さく花に心をとめてかりがねの歸りわづらふ曙の聲
一五〇二百五十六番 左 女房 右 忠良卿
一五一芳野山てりもせぬよの月影に梢に花は雪とちりつゝ
一五二水底に紫ふかきかげみえて波に色づくつごのうら藤
一五三二百五十七番 左 左大臣 右 兼宗卿
一五四泊瀬山花に春風吹きてゝ雲なき嶺にありあけの月
一五五よしの河淀むまもなく行く水に影は流れぬ岸の山吹
一五六二百五十八番 左 前權僧正 右 通光卿

一四六おくまでは尋ねぬ花をみせ顔に風に流るゝ山川の水
一四七見渡せば春の限の色なれやたがすむ宿のいけの藤浪
一四八二百五十九番 左 公繼卿 右 釋阿
一四九春山に駒もすさめぬ岩躑躅心のまゝに花さきにけり
一五〇松蔭にさける葉は藤の花散敷く庭とみえみするかな
一五一二百六十番 左 公經卿 右 俊成卿女
一五二ひたるぶにたのむの雁のいかなれば歸雲路を三吉野の里
一五三春くれて花や散らむ吉野川せゞの岩浪風薫るなり
一五四二百六十一番 左 季能卿 右 丹後
一五五天つ空雲の旗手に亂れつゝめも綾なりや遊ぶ糸ゆふ
一五六答むべき人なき井手の款冬を心安くや浪のをらむ
一五七二百六十二番 左 宮内卿 右 越前
一五八松が枝におきつ鹽風春かけて霞になぎぬたごの浦波
一五九谷河に花のしがらみかけてけり嶺の嵐や春の關もり
一六〇二百六十三番 左 謙岐 右 定家朝臣
一六一こぬ人を怨みやすらむ喚子鳥しほたれ山の夕暮の聲
一六二止らぬは櫻計りを色に出でちりの紛ひにくるゝ春哉
一六三二百六十四番 左 小侍從 右 通具朝臣
一六四石上ふる野のさとをきてみれば獨董の花さきにけり
一六五吹き拂ふ木の下風に且きえて積らぬ庭の花の雪かな
一六六二百六十五番 左 隆信朝臣 右 家隆朝臣
一六七さは短はなべて縁をそむれ共董に變る野べの色哉
一六八さらけに又猶面かげに櫻花やよひの雲のくれがたの空
一六九二百六十六番 左 有家朝臣 右 雅經
一七〇尋ねつゝ小島が崎の山吹のいはぬ色し知べ顔なる
一七一くれぬともいかゞ見捨てゝ橘の尋ね小島の款冬花
一七二二百六十七番 左 保季朝臣 右 寂蓮
一七三山深き風のそくに喚子鳥跡なき道さふみ分けよとや
一七四吹く風の誘ひもはてぬ青柳の枝にぞ春の色は残れる
一七五二百六十八番 左 良平 右 家長
一七六ちる花の忘れがたみの峰の雲をだに残せ春の山風

263 咲すみれ咲野をながしみ草枕結べる夢は一夜のみかは
 264 色ふかき藤浪なびきみる人の心をよするたごの浦風
 265 いとせめて慕ふ心や鴈音の歸る雲居の列にそふらむ
 266 山吹のうつろふ影を掬ふ手の雲にあかぬるでの玉水
 267 昔誰れるでの山吹うらおきて花故里の名を残すらむ
 268 風ふけば花の白雲稍消てよるくはるく三吉野の月
 269 花故に惜むけふぞといふならば却て春や我を怨みむ
 270 花ちりて木の本疎くなる儘に遠ざかり行く袖の移香
 271 忍べどもいはぬ色なる山吹の花に戀しきむでの古郷
 272 立返りみれどもあかぬ藤波は過ぐる心に懸る也けり
 273 春くれぬ今やさくらむ蛙なく神なび川山ぶきの花
 274 大方の春の目影も長閑くて時にぞあへる藤生の花
 275 ぬとも猶春風は吹き通へ吉野の奥の花の青葉に
 276 立ちかへり猶古郷にすみれさく籬の暮に春風ぞふく
 277 懐しき色のゆかりと思ふにもみれば心にかゝる藤波
 278 色しらぬ蟬もや目には立てつ覽雲に紛へるたごの浦藤
 279 春深み井手の山吹ちる儘に偏に夏になるかとぞみる
 280 庭の面はのらと成ぬる古郷のまやの餘に雲雀おつ也
 281 吉野川たぎつ岩浪せきもあへず早く過行く花の頃哉
 282 今とはとて春の有明にちる花や月にもをしき嶺の白雲
 283 櫻花ちりのまがひに暮なむ歸らば春の道紛ふがに

279 紫の雲居にみゆる藤のはないつか心の松にかゝらむ
 280 鳴きとむる花かと思ふ鶯の歸るふるすの谷の白雲
 281 春といへは今はの心つくばねの峰を遙に歸る雁がね
 282 移り行く春をばたごの怨ても忘れずかけよ岸の藤浪
 283 わきも子が紅染の岩躑躅いはで千入の色ぞみえける
 284 思ひたつ鳥は古巢も頼むらむ馴れぬる花の跡の夕暮
 285 曙におもひなれたる春なれど山の端かすむ夕暮の空
 286 あとしのふ昔みかはの杜若涙は今もふりはてにけり
 287 水をしきかな彌生のそらに花ちりて梢にすさむ鶯の聲
 288 山吹さきしより底さへ匂ふるでの玉河
 289 心あれや神なび河に鳴くかはづ春も移ろふ山吹の花
 290 花散りぬ何かは春も惜からむ花故にこそ春を待しか
 291 葉がへせぬ老木の松に色めくや若紫のふちなみの花
 292 花になれし名残を雲に眺むれば三月の暮の春雨の空
 293 古の春さへけふはつらき哉くるといかに歸初けむ
 294 夜ふくる鐘の音には行春を慕ふ心も盡果てにけり
 295 手に掬ふ岩井の水の飽でのみ春に別る志賀の山越
 296 惜むとて春は止らぬ物故に卯月の空は厭ふとやみむ
 297 暮ぬれど花の下にも宿かれれば日數計りぞ春に別る
 298 猶わきて時こそ有りけれ霞たつ夕の空も春くる程
 299 公經卿 右 丹後

300 行く春と空の景色をつくらんと心にとめて眺む計ぞ
 301 其方へは歸らぬ春と知乍らくればつらき西の山端
 302 歸りなば春のみをしき名残かは馴にし鳥も雲に入也
 303 暮はつる春の行方も白雲の眺めや送る氣色なるらむ
 304 四方の山けふを限と霞ませて覺東なみの春の行方や
 305 けふのみと強ても折じ藤花咲ける夏の色ならぬかは
 306 花もなし人もしらぬ柴の戸も道に春のくるけふこそ
 307 行へなく果なき物は暮れて行く春の雲路の泊也けり
 308 花にちる花こそあらめ鶯のねさへ枯行く春の暮かな
 309 三吉野の大河のべの藤浪の春も深しと色にみすらむ
 310 ちるとみる花もねに社歸るなれ過行春の行へ知ばや
 311 限あれば今夜も既に更にけり暮難かりし春の口數の
 312 漕寄せよ難波わたり舟とめて今宵計の春を眺めむ
 313 東路や春の行へを今夜より夢にもつげようつ山踏
 314 名残なくけふ社春は筑波嶺の木の本毎に花も降にき
 315 ちる花に嘆きなれぬる心こそ春の別もたへ忍びけれ
 316 今日暮ぬいづくへ春の行て又伴ふ花を外にみすらむ
 317 ながめ送る心をやがて誘ひつゝ雲のふる巢に歸る鶯
 318 行春の別はけふに鳴門より船いだしてもいかに尋ねむ
 319 春の色もけふを限の夕づく日さしや藤のうら紫に
 320 花もちり鳥も古巢に歸りなば惜かるべくもなき別哉

300 行へなき眺ばかりを名残にて雲の旗手に春ぞ暮ぬる
 301 春山の霞の衣ぬぎすて、今朝はみどりの夏の明ばの
 302 衣こそかふとも更め春の色に染し心はいつか移らむ
 303 三島江に茂果てぬる蘆のねの一夜は春を隔來にけり
 304 春の色を留めがたみの夏衣立日も今日に成にける哉
 305 夏にさく池の藤なみ色に出て山郭公なくをまつかな
 306 けふよりは心さへこそ變りぬれ昨日は待し郭公かは
 307 形見とやかべに背くる灯のわづかに残る春の影かな
 308 夏衣急ぎかへつるかひもなくたち重ねたる花の面影
 309 思はずよ蟬の羽衣たち替て一夜に春を忘るべしとは
 310 郭公まつに心のうつるより袖にとまらぬ春の色かな
 311 花にそむ心や薄くなりぬらむ急ぎたる、蟬の羽衣
 312 暮いし春の形見とけふみれば花の袂に露ぞまだひぬ
 313 けふこそあれ春は霞も立田山縁をこめて過ぎし物也
 314 今ほよも花は嵐の夏山に青葉まじりのみねのしら雲
 315 神まつる卯月の花もさきにけり山郭公夕かけてなけ

千五百番歌合卷第五 夏一

無判 判者土御門内大臣 雖有勅定幾去畢

袖の色も移りにけりな夏衣春はくれぬと詠せしみに
三百九番 左 小侍従 右 寂蓮
昨日送厭ひし風をまつにこそ定なき世の程も知るれ
野べみれば霞の袖も引きかへて緑は草の袂なりけり
三百十番 左 隆信朝臣 右 家長
心には春の名残を怨みてかひなき袖の一重なる覽
春の色なごりも更に夏たてば翠にかふる衣手の森
三百十一番 左 有家朝臣 右 三宮
夏ごろも春の形見を立田山秋は紅葉の色はそむとも
脱換ふる衣の袖に知れけりまだうら馴ぬ夏の氣色は
三百十二番 左 保季朝臣 右 内大臣
心からけぬぎかへて夏衣恨を春になほのこすらむ
神祭る卯月になれば卯花の垣根をみよの衣きてけり
三百十三番 左 良平 右 忠良卿
けふよりは春をば夏に立ちかへて花の袂は蟬の羽衣
けさよりは花ともみえず夏衣立田の山の峰のしら雲
三百十四番 左 具親 右 兼宗卿
空蟬の羽におく此れや袖の露花の名残を忍びくりに
限あらむ春こそあらめ花の色を心とかふる夏衣かな
三百十五番 左 顯昭 右 通光卿
卯花を折違へても思ふかな雪ふる里に我やきぬらむ
立替ふる衣に社は思知れけふより春をよそになる共
三百十六番 左 女房 右 俊成卿女
夏の空くもれるよはの卯の花の月を宿せる玉河の里
卯花のさきぬる時は夏山の木陰曇らぬ夕づくよかな
三百十七番 左 左大臣 右 丹後
鶯のひとりかへれるおく山に心あるべきおそ櫻かな
今朝なき夏のかさねの鶯も暮れにし春の忘形見に
三百十八番 左 前權僧正 右 越前
とめくれど春なき山の梢より今は厭はぬ風渡るなり
故郷の卯花月夜きてみればねやの板まをもらぬ計ぞ

三百十九番 左 公繼卿 右 定家朝臣
夏きぬと更る衣は着馴にし春の形見をたつにぞ有ける
待つとせし人の爲には詠めぬど繁る夏草道もなき迄
三百二十番 左 公經卿 右 通具朝臣
卯花のかきねほのめく夕づくよいつ有明の久方の空
さきぬればまだき有明の光かな卯の花山の曉のかけ
三百廿一番 左 季能卿 右 家隆朝臣
村雨に露置きわたす卯花のかきねつゞきや玉河の里
入る月に氷きえ行く木間より打出づる浪や谷の卯花
三百廿二番 左 宮内卿 右 雅經
卯花を離にうゑて雨のよも月見顔なるをのきさと人
卯花や春をへだつる垣根まで残りはてたる雪の村消
三百廿三番 左 讃岐 右 寂蓮
時鳥まだ打ちとけぬ忍音に木の下のくらき夏のよの月
卯花や汀をかけてさきぬらむ浪よせまさる玉河の里
三百廿四番 左 小侍従 右 家長
葵草頼をかくる諸人のしるしはいつか御誕なるべき
忘ては冬かと思ふ卯花の雪ふみ分ぐるをのし通路
三百廿五番 左 隆信朝臣 右 三宮
山賤の頼む計のうつ木垣花みむとしは植すや有けむ
いつしかと山時鳥まつとや春を忘るゝ始めなるらむ
三百廿六番 左 有家朝臣 右 内大臣
神代より年に一たび葵草逢ふ日稀なる挿頭なりけり
三百廿七番 左 保季朝臣 右 忠良卿
卯花の變らぬ色を名残にしているもいらぬも有明の月
忍びぬをいづくに鳴きて時鳥卯花垣に猶またらむ
三百廿八番 左 良平 右 兼宗卿
玉河の岸の卯花咲きぬれば汀にしらぬ浪ぞたちける
幾たびかけふのみあれに葵草思ふも久しむづ垣の内
三百廿九番 左 具親 右 通光卿

卯花のさける垣根や此ならむそながら非ぬ有明の月
時鳥待につけてぞ夏のよをねぬにあけぬと思知ぬる
三百卅番 左 顯昭 右 釋阿
ぬれ衣ほすかとみれば白妙の卯花さけるあまの袖垣
卯花の垣根の露に宿りきて春忘れよと夕づくよかな
三百卅一番 左 女房 右 丹後
ほととぎす心してなげ橋のはなる里の五月雨の空
木綿褌かけてぞ待ちし神祭る卯月は夏の始と思へば
三百卅二番 左 左大臣 右 越前
有明のつれなく見まし月は出ぬ山時鳥待夜ながらに
思ひぬのまくらになれて時鳥うつゝと夢の一聲の空
三百卅三番 左 前權僧正 右 定家朝臣
よはにきて山郭公なるとなり旅のやどかせ橋のはな
七時しらぬ里は玉川いつとてか夏のかきねを埋む白雪
三百卅四番 左 公繼卿 右 通具朝臣
賤の男が圍ひませたる垣根こそ卯花月の曇なりけれ
九ともしける澤の螢は灰みえて曇るもしらぬ鳥の一聲
三百卅五番 左 公卿 右 家隆朝臣
郭公しのぶる聲のすが原や伏見の暮の夢かうつゝか
千早ふる神代をかけて葵草君に二葉の蔭やそふらむ
三百卅六番 左 季能卿 右 雅經
しらざりき卯花月夜うちしらみはるより後も曙の空
花は春散りにし峯に哀てふとをまたにやらぬ白雲
三百卅七番 左 宮内卿 右 寂蓮
郭公初音をとこそ思へどもまたずしもなし山端の月
里なれぬ聲をそたのむ郭公み山にふかき宿の夕ぐれ
三百卅八番 左 讃岐 右 家長
郭公夜ふかき聲は諸共にねざめぬ人もうらめしき哉
爲のいりにし跡の雲路より待出づる時の鳥も鳴く也
三百卅九番 左 小侍従 右 三宮
大江山急き生野の道にしもことをかたらふ時鳥かな

春過ぎて猶み山べを尋ねみむ嵐に残る花はありやと
三百四十番 左 隆信朝臣 右 内大臣
若葉さす君か光に葵草よつて代かけて神やうゑけむ
五月雨にあふさか山の郭公園屋に暫し雨やどりせよ
三百四十一番 左 有家朝臣 右 忠良卿
郭公まつ夜空しく明ぬなり木綿附鳥の聲ばかりして
浪やたつ雪やつもると卯花のさき紛へたる玉河の里
三百四十二番 左 保季朝臣 右 兼宗卿
むら雨ぞ先づ音づると時鳥待つ夕暮の雲のはたてに
郭公まつにはよらぬ物ぞとも中々さらは聞も果ばや
三百四十三番 左 良平 右 通光卿
郭公山のいづくにうちはぶき鶯かへる頃をまちけむ
七わかねつ夢現とも時鳥それかあらぬか夜はの一聲
三百四十四番 左 具親 右 釋阿
一月もをし初音も遅し郭公山のあなたに住身ともがな
夏も猶心はつきぬ紫陽花のよひらの露に月も住けり
三百四十五番 左 顯昭 右 俊成卿女
横の戸を月にさいでぞ晝も又敲く水雞は有けりと知
一人しれぬねには盡きて時鳥待つよの月の影に語らへ
三百四十六番 左 女房 右 越前
まだ宵の月まつとも明に鳥短き夢の結ぶともなく
三一聲はさくもつらしと郭公怨果ねば明けぞしにける
三百四十七番 左 左大臣 右 定家朝臣
すまの浦の浪に折はへ降雨に鹽垂衣いかにほさまし
あふひ草かりねの野べに郭公曉かけて誰を問ふらむ
三百四十八番 左 前權僧正 右 通具朝臣
時鳥逢坂こえて尋ねれば今ぞおとはの山に鳴くなる
忍音の哀しらるゝうたゝねに語らふよひの郭公かな
三百四十九番 左 公繼卿 右 家隆朝臣
草枕菖蒲を結ぶ今夜こそ淀の變らぬかりねなりけり
うちつけにそれかとぞきく時鳥人まつ山に忍音の聲

三百五十番 左 公經卿 右 雅經
 ○名残まで忍びぞあへぬ霍公深山の庵の出でがての聲
 三百五十一番 左 季能卿 右 寂蓮
 時鳥かよひそむればうの花のかきぬうかるゝ鶯の聲
 時鳥まつ夜ふけ行く一聲もあまり程ふる五月雨の空
 三百五十二番 左 宮内卿 右 家長
 天雲のよそにもなるか時鳥流石に聲はたえぬ物から
 聞きそめしたる一聲に時鳥幾短夜をあかしきぬらむ
 三百五十三番 左 讚岐 右 三宮
 手折りつる花橋の香をしめてわが手枕にをしき袖哉
 卯花のかきぬつゞきの郭公月影分くるよはの忍びね
 三百五十四番 左 小侍従 右 内大臣
 中々にしひのびし頃ぞ郭公さかとも聞きしよはの一聲
 一聲はみはてぬ夢の心ちしてねてかきかめてか山郭公
 三百五十五番 左 隆信朝臣 右 忠良卿
 長きねを結ぶあやめの枕にも猶程なきは夏のよの夢
 こそろこそ行へもしらぬ時鳥なくや夕のこゑの空
 三百五十六番 左 有家朝臣 右 兼宗卿
 猶またむ鳴でもやまじ時鳥こそならしの岡の一聲
 名にたちし春にも勝る哀かなほとゝぎすなく曙の空
 三百五十七番 左 保季朝臣 右 通光卿
 郭公いつかわすれむ東路やすがの荒野のよはの一聲
 時鳥しばしはなごか左明の月も夜深き空のけしきに
 三百五十八番 左 良平 右 釋阿
 夏の夜も花橋の薫るかに聞は綾なき物にぞ有りける
 忍び妻待つにぞ似たる郭公語らふ聲はなれぬ物ゆゑ
 三百五十九番 左 具親 右 俊成卿女
 郭公まつ心やかはるらむ花立花にしひびねぞなく
 時鳥まつ夕ぐれの橋に風さへいかに吹きてすぐらむ
 三百六十番 左 顯昭 右 丹後

○誰も皆頼をかくるみあれ山神の恵にあふひとをしれ
 時鳥なかの眼は卯花をさかえぬ垣根の雪かとぞみる
 三百六十一番 左 女房 右 定家朝臣
 夕づくよ暫し宿れる山の井のあかぬ光の水に涼しき
 等閑に山時鳥鳴き捨てしわれしもとまる森の下かけ
 三百六十二番 左 左大臣 右 通光卿
 時しあれば花ちる里の軒の雨に己がさ月の鳥の一聲
 露かけて拂ふ袂にちりぬべし垣根分け行く宵の卯花
 三百六十三番 左 前權僧正 右 家隆朝臣
 幾里を語りひすて、郭公今わが宿のはつねなるらむ
 七かきくもる庭の梢とみる程に軒も縁に葛蒲をぞふく
 三百六十四番 左 公繼卿 右 雅經
 足曳の山下水を引かけしすその田の早苗とる也
 算ふればこぬ夜許多の郭公まつ夜増れる眺せよとや
 三百六十五番 左 公經卿 右 寂蓮
 郭公なほうとまれぬ心かな汝がなく里のよその夕暮
 こそそに又こゝろなわけ時鳥入まつ山の夜はの一聲
 三百六十六番 左 季能卿 右 家長
 嬉しきの類ひなきかな郭公獨は聞かぬ初音なれども
 六明果つる名残よいにし時鳥月にいざよふ山のはの聲
 三百六十七番 左 宮内卿 右 三宮
 その程と眺むれば又時鳥おほぬかたのそらの一聲
 待侘びぬ宿やかへまし、鳥同じ都もわきて鳴くなり
 三百六十八番 左 讚岐 右 内大臣
 引兼ねし山田の水を梅雨にあらぬ方に任せつる哉
 けふたにも結ぶ逢の人数にいらぬ葛蒲の音をまげとや
 三百六十九番 左 小侍従 右 忠良卿
 葛蒲草あさかの沼に引つれど思ふ計のねこそ難けれ
 なげやなほ己が五月ぞ時鳥誰故ならぬよはの寝覺を
 三百七十番 左 隆信朝臣 右 兼宗卿
 葛蒲草けふ荷且にふきつれば葱ぞ軒のあるじ顔なる

郭公をりしりがほにきなく也花立花のにはふ夕ぐれ
 三百七十一番 左 有家朝臣 右 通光卿
 聲よりもすがたやしのお郭公小倉の山の雲になく也
 葛蒲ふくけふともわきてみえぬ哉さらでも繁る草の庵は
 三百七十二番 左 保季朝臣 右 釋阿
 すぎぬなり信太の森の郭公たえぬ雪を袖にのこして
 時鳥五月の雲に契りおきて人の心をそらになすらむ
 三百七十三番 左 良平 右 俊成卿女
 年毎にふける葛蒲のねをとめば軒や浅香の沼と成なむ
 夏も猶衰れしらする妻とてや葱の軒に葛蒲ふくらむ
 三百七十四番 左 具親 右 丹後
 思知りぬ雲の幾重を隔つとも人をばとはむ梅雨の頃
 郭公こそ古聲今さらになにかはしの子己が五月を
 三百七十五番 左 顯昭 右 越前
 郭公尋ねかねたる怨して歸る人ゆやばづかしの森
 郭公なればまづぞ結しられける、黄昏時の古の空

此卷内大臣通親公判者也予、時不達遊道也云

千五百番歌合卷第六 夏三 無列

土御門内大臣 雖有勅定幾去畢

三百七十六番 左 女房 右 通光卿
 立寄らば涼くやあると掬ぶ手の雫に濁る井出の玉水
 行く末をたれしのとて夕風に契りかおかむ宿の橋
 三百七十七番 左 左大臣 右 家隆朝臣
 とぶ鳥のあすかの里を時鳥昔の聲になほや鳴くらむ
 軒端もる月の光に薫るよははな橋にあきかせぞふく
 三百七十八番 左 前權僧正 右 雅經
 紅のふり出てぞなく時鳥もみちの山にあらぬ物ゆゑ
 郭公ねざめざりせばと計に思ひもあへず過ぐる一聲
 三百七十九番 左 公經卿 右 寂蓮

飛鳥川せりの石橋水こえて道たゞし五月雨の頃
 五月雨にあさむが末は浪きえて又埋もる、庭の遺水
 三百八十番 左 公經卿 右 家長
 さらばよし心をかへて時鳥さなぬ空、まぢ試みよ
 むこ河に跡も留めぬかほよ鳥堰杭も見えぬ梅雨の頃
 三百八十一番 左 季能卿 右 三宮
 五月雨に露さへ添ふる笹枕短き夜をも明しかねけり
 郭公まねのこの板まより枕におつる夜はの一聲
 三百八十二番 左 宮内卿 右 内大臣
 けふと云へば汀の葛蒲たち乍ら末を片しく鄙の夕暮
 葛添ふる軒の葛蒲も翠にしてのぶになる、蓬生の宿
 三百八十三番 左 讚岐 右 忠良卿
 涼むべき清水尋ねて行く道の野中の草を先結びつる
 五月雨の雫に濁る山の井のあかで過ぎぬる杜鵑かな
 三百八十四番 左 小侍従 右 兼宗卿
 へそへけむ昔の人をみるに似て露に濡たる撫子の花
 郭公雲居遙に鳴きゆくは月のみやこの人もきけとや
 三百八十五番 左 隆信朝臣 右 通光卿
 一方にまたましものを郭公すぐる雲路も跡を定めば
 五月雨に山郭公音づれて軒端のあやめ風薫るなり
 三百八十六番 左 有家朝臣 右 釋阿
 夏のもの長くもあらば時鳥今一聲もまたましものを
 三百八十七番 左 保季朝臣 右 俊成卿女
 五月雨に小田の水口せきも敢ず浪こす袖に早苗取也
 杜鵑鳴く有明の空はれていつくの露の袖にちるらむ
 三百八十八番 左 良平 右 丹後
 杜鵑たづねくらせる木の本にこたふる物は峰の松風
 杜葉にけふの葛蒲を葺添て幾重に成ぬこやの八重葺
 三百八十九番 左 具親 右 越前
 津の國の蘆の丸屋の梅雨に際こそなけれ雲の八重葺

〇杜偶言傳てむ迄なけれ共やまよまてとは云まし物を
〇音無の山時鳥いつよりか爰になくとは人に知られし
一〇一暮はなくね空なる郭公心のかよふやぞやしらむ
三百九十一番 左 女房 右 家隆朝臣
二〇心あてにさかばやきかむ時鳥雲路に迷ふ峰のこゑ
三百九十二番 左 左大臣 右 雅經
三〇鶺鴒の雲のかけはし程やなき夏の夜わたる山のはの月
三百九十三番 左 前権僧正 右 寂蓮
四〇橋の句はいまぞほととぎすなかなばなくべき夕暮の空
三百九十四番 左 公繼卿 右 家長
五〇郭公涙はなれに聲は我に互にかしていくよへぬらむ
三百九十五番 左 公繼卿 右 家長
六〇五月雨の空のみ夏はくもるかは月を眺めし池の浮草
三百九十六番 左 公繼卿 右 家長
七〇五月雨にゆけの河原の埋木も顯れてこそ流來にけれ
三百九十七番 左 公繼卿 右 家長
八〇明るまもいづもしらぬ空の雲軒造とづる梅雨の山
三百九十八番 左 公繼卿 右 家長
九〇郭公哀も深く住むやまに杉のあみ戸のあけくれの聲
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇さきにけむ花はままだきの夏草に先一色の露結びけり
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇照射すと山の小雨に立侘びて哀にもうき袖も濡けり
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇梅雨はみかさもえ社さし敢ね木下露のかゝる繁さに
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇宿や非ぬ花や五月の花ならぬ山時鳥よそにのみして
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇〇橋の昔に薫る袖に又けふのあやめねはかゝりけり
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇〇〇夏蟲のともしすてたる光さへ残りてあくる東雲の空
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇〇〇常とはに鳴くとも人やあかざらむて試みよ山郭公
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇〇〇〇五月雨に水やこゆるむ澤田河田つく計淺かりしかど
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長
一〇〇〇〇〇〇〇〇〇早苗とるけふ俤に立ちそめて稲葉もそよの秋の初風
三百九十九番 左 公繼卿 右 家長

四百番 左 隆信朝臣 右 釋阿
一〇一聲の後はうらめし時鳥さく心ちせぬ時しなければ
一〇二よそへても昔は今はかひもなし花橋の袖のこもがな
四百一十番 左 有家朝臣 右 俊成卿女
一〇三此頃は月をまつべき山のはを幾夜隔てつ五月雨の雲
露けさも哀とぞ思ふ風靡くしげみにしげる常夏の花
四百二十番 左 保季朝臣 右 丹後
一〇四五月間幾夜の雨になれぬらむいでいる月の影を忘て
四百三十三番 左 良平 右 越前
一〇五五月雨に庭のさゆるは水越て入ぬる磯の草かとぞ見
四百三十三番 左 良平 右 越前
一〇六夏刈の玉江の蘆やくちぬらむ浪に鳥をる五月雨の頃
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇七初聲に限らざりけり郭公聞きての後も猶ぞまたる
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇八いと聲のあかぬなごりは杜鵑恨みてあかす東雲の月
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇九あまたれつゝ年に稀なる郭公阜月ばかりの聲な惜みそ
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇〇いまはとていなばの山の蜀魂忘れ形見の一聲もがな
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇一照射する木下闇を分濡れて露に亂るゝ信夫もぢぢり
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇二足引の山ほととぎすをちかへり雫にぬるゝ夕暮の空
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇三いにしへやみぬ面影も立花の花ちるさとの有明の空
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇四眞葛原玉まく敷や増らむ葉におく露に螢飛ぶなり
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇五昔ともおもひなすべき身の程を花橋にとふ人もがな
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇六やよいかかに山鶺鴒さへぞ住侘ぶる身の猶難面きに
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇七五月雨に淀の繼橋跡もなし此と長柄の名を流しつゝ
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇八五月雨ののどかにくらす夕暮を驚かしつる蜀魂かな
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣
一〇九芳野山花をのみやは尋ぬべきとへかし人の梅雨の比
四百四十四番 左 具親 右 定家朝臣

〇郭公きの丸殿の雲居まであさくら山のおもひ出の聲
一〇〇言繁し暫しはたてれ横の戸を敲く水鶏よ鳴果すとも
四百一十一番 左 季能卿 右 忠良卿
二〇花をまつ心は秋に通へども分くる跡なき庭のなつ草
三〇ともし消ち聲は聞えぬ夏蟲のいはぬ思に身を焦す哉
四百一十二番 左 宮内卿 右 兼宗卿
四〇大方のほるゝ時だに雲たえぬ嶺の庵の五月雨のころ
四百一十三番 左 讀岐 右 通光卿
五〇けふさいへば薫る在かを誘ひつゝ風も吹ける軒の菖蒲を
四百一十三番 左 讀岐 右 通光卿
六〇故郷の庭のあさぢに風たちて涼しくなれば夕立の空
四百一十四番 左 小侍從 右 釋阿
七〇何となく寂しき程をつくゝと思ふ心も五月雨の空
四百一十四番 左 小侍從 右 釋阿
八〇ふくる迄晴すと見えし夕立の名残ともなき有明の空
四百一十五番 左 隆信朝臣 右 俊成卿女
九〇立花にあやめのまくら薫る夜ぞ昔を忍ぶ限りける
四百一十六番 左 有家朝臣 右 丹後
一〇〇時鳥飽ぬ名残を思はせてきくとしもなきさよの一聲
四百一十六番 左 有家朝臣 右 丹後
一〇一みても猶あかぬよのまの月影を思絶たる五月雨の空
四百一十七番 左 保季朝臣 右 越前
一〇二郭公や軒端にかをる立花の代々の昔の風や吹くらむ
四百一十七番 左 保季朝臣 右 越前
一〇三春までとはれし物を哀又よしのゝ奥の五月雨の比
四百一十八番 左 良平 右 定家朝臣
一〇四むば玉の夜渡る月よりもこそやの餘の梅雨の頃
四百一十八番 左 良平 右 定家朝臣
一〇五けふいとて同じ縁に埋れて草の庵もあやめふくなり
四百一十九番 左 具親 右 通具朝臣
一〇六思ひいでたれ我宿を忍べとて花橋に風のふくらむ
四百一十九番 左 具親 右 通具朝臣
一〇七夕されば光みえ行く夏蟲の此や世をしる思なるらむ
四百二十番 左 顯昭 右 家隆朝臣
一〇八園居して如何遊ばむ梅雨にせが井の水も岩越にけり
四百二十番 左 顯昭 右 家隆朝臣

一〇一一聲は手向の山の蜀魂幣と取り敢へず明るよは哉
四百廿一番 左 女房 右 寂蓮
一〇二篋士の闇をもわかぬ水馴さを道に夏は月を待ちけり
四百廿二番 左 左大臣 右 家長
一〇三夏刈の蘆間に浪の音はして月のみ残ほらむほの古郷
四百廿二番 左 左大臣 右 家長
一〇四みさび江の菱の浮葉に隠るへて蛙鳴くなり夕立の空
四百廿三番 左 前権僧正 右 三宮
一〇五寝覺する枕におつる瀧の音に結はれたる夏のよの夢
四百廿三番 左 前権僧正 右 三宮
一〇六五月雨に物思ふ宿は時鳥なく一こゑも猶ぞ夜ふかき
四百廿四番 左 公繼卿 右 内大臣
一〇七夕まぐれ風につれなき白露はしのぶに籠る螢也けり
四百廿四番 左 公繼卿 右 内大臣
一〇八たが宿の花橋の句ぞと思ふかたさへなつかしきかな
四百廿五番 左 公繼卿 右 忠良卿
一〇九梅雨は賤の垣ねに日數へて麻のはぎえをすす隙ぞなき
四百廿五番 左 公繼卿 右 忠良卿
一〇〇菖蒲草片しく宵のさゝぐら枕しらぬ句ひの隙求めけり
四百廿六番 左 季能卿 右 兼宗卿
一〇一夏の月雲吹く風をさきたてゝ山のは涼し夕暮の空
四百廿六番 左 季能卿 右 兼宗卿
一〇二何となく美しきは夏蟲のはちすになるゝ光なりけり
四百廿七番 左 宮内卿 右 通光卿
一〇三けふは皆わたの早苗植て是たこてまなくみゆる五月に
四百廿七番 左 宮内卿 右 通光卿
一〇四軒しるさ月の光に山陰のやみをしたひて行く螢かな
四百廿八番 左 讀岐 右 釋阿
一〇五はととぎす花橋もちりはてゝ雲より漏すさよの一聲
四百廿八番 左 讀岐 右 釋阿
一〇六此の世より宿る露さへ清きかな濁にしまぬ池の蓮葉
四百廿九番 左 小侍從 右 俊成卿女
一〇七早苗五月雨をむる始とやよりの山雲曇り行くらむ
四百廿九番 左 小侍從 右 俊成卿女
一〇八我ならぬ深の螢もよるゝの思はえ社忍ばざりけれ
四百三十番 左 隆信朝臣 右 丹後
一〇九五月雨の雲路たどらぬ郭公己がさ月の宿をならして
四百三十番 左 隆信朝臣 右 丹後
一〇〇五月雨は伏見の田居に水越て庭まで續く宇治の川波
四百三十番 左 隆信朝臣 右 丹後
一〇一時鳥汝も心や慰まぬをばすてやまのつきに鳴く夜は
四百三十番 左 隆信朝臣 右 丹後

四百卅一番 左 有家朝臣 右 越前
 妻戀の秋の思は如何せむ照射に鹿の身を替へき
 五月雨に影のみ残る心ちして庭にみゆるや沼の八橋
 四百卅二番 左 保季朝臣 右 定家朝臣
 めにみえぬ句に袖をぬらすかな露やはかよふ軒の橋
 天川やせせもしらぬ五月雨に思ふら深き雲のみを哉
 四百卅三番 左 良平 右 通具朝臣
 待ちえても恨ぞふかき時鳥己が五月のよはのひと聲
 梅雨は頼めし野べに水越ていかに尋ねむも草ぐさ
 四百卅四番 左 具親 右 家隆朝臣
 蓮葉に風も靡かぬ夏の日もおき定まらぬ露のしら玉
 ぬ計田子のさ衣水漙つき雨もしみみに早苗取る覽
 四百卅五番 左 顯昭 右 雅經
 火串影鹿に會津の山なれば入にかひあるさつ夫也鳥
 五月雨に越行く浪は葛飾やかつ水際るまの繼橋
 四百卅六番 左 女房 右 家長
 照射する影をよなく深山木の懲ずも鹿のめを合す覽
 夕すみ夏はまへに住吉の松とはしるや沖つ沙風
 四百卅七番 左 左大臣 右 三宮
 塵をこそ据ゑじとせしか獨ぬる我床夏は露も拂はず
 月夜には己が影とも分かざりし螢は闇に顯れにけり
 四百卅八番 左 前權僧正 右 内大臣
 夜や暗き道や感ふとよふべきに山時鳥なかで明ぬる
 哀れなる淀の住ひは眞菰故夏計りこそ人からるれ
 四百卅九番 左 公繼卿 右 忠良卿
 身にしむる人の心や變らむ花たちばなの同じ句を
 夕づくよ傾ぶく空は青ながら雲のいつくに有明の影
 四百四十番 左 公經卿 右 兼宗卿
 古へを花たちばなに忍ぶれば袖とふ風のほふ夕暮
 五月雨は雲まなければ久方の月の盛は猶しるさかな
 四百四十一番 左 季能卿 右 通光卿

わきて思ふ句なくとも夕まぐれ花橋に風は吹きしを
 花の春月の秋とてなになれや忍びまたる此程の空
 四百四十二番 左 宮内卿 右 釋阿
 衣手に涼しき風をさきたてゝ曇りはじむる夕立の空
 五月雨は沼の浮草岩こえて蛙の床もねやたえぬらむ
 四百四十三番 左 讚岐 右 俊成卿女
 長きよの闇こそ勝れ照射する火串の松のかりの光に
 四百四十四番 左 小侍從 右 丹後
 沈まぬは此世ばかりと知すして憐くみゆる鶴飼舟哉
 鶴飼舟ほのかにともす篝火に數そふ物や螢なるらむ
 四百四十五番 左 隆信朝臣 右 越前
 空は雲庭のあさち波こえて軒端涼しき五月雨の頃
 呼ぶべき人もあらば梅雨に浮て流るさの舟橋
 四百四十六番 左 有家朝臣 右 定家朝臣
 よそにみで思はざりつる村雲も此里までの夕立の空
 袖の香を花橋におごるけば空に有明の月ぞのこれる
 四百四十七番 左 保季朝臣 右 通具朝臣
 まだきより秋にや宿をかり枕松蔭涼しうたゝねの床
 語りひし宿を忘るな不如歸聲みな月の空になるとも
 四百四十八番 左 良平 右 家隆朝臣
 思餘り眺めつるかな時鳥語らひ捨て消ゆる雲路を
 五月雨はかびやが煙打濕り山田のくれに蛙なくなり
 四百四十九番 左 具親 右 雅經
 心あてに露も光やそへつらむ月に色なき夕がほの花
 たいそのかみふるの道は夏草の露分衣袖ふかさまで
 四百五十番 左 顯昭 右 寂蓮
 かひ昇る鶴舟を繁みしくら河瀬々の浪やく篝火の影
 古への野守の鏡跡たえてとぶ火はよはの螢なりけり

千五百番歌合卷第七 夏三判左大臣後京極攝政良經

四百五十一番 左 勝女房 右 三宮
 風を痛みはすの浮葉に宿占て涼しき玉に蛙鳴くなり
 常夏の花におきゐる白露に又影宿す夜半の月かな
 四百五十二番 左 左大臣 右 内大臣
 山姫の瀧の白糸くりためておてるてふ布はなつ衣かも
 三筒井筒井筒の上に水こえて掬ふもあさし五月雨の比
 四百五十三番 左 前權僧正 右 忠良卿
 三杜鵬きなかぬ宿の橋はたぐかれねとぞ思ふべらなる
 三秋やくるとへど白露風涼しいはたのをの夏の夕暮
 四百五十四番 左 公繼卿 右 兼宗卿
 三中々に涼しくみゆる景色かな野澤の水にもゆる螢は
 三斯しつゝいつ晴べしと見えね共草月計や五月雨の空
 四百五十五番 左 公經卿 右 通光卿
 三かやりびの煙を空の隔てにて雲に曇らぬ軒の月かげ
 一月影を思ひもわかぬながめかな五月の間に卯花の頃
 四百五十六番 左 季能卿 右 釋阿
 三夏刈の蘆ふくこやにかよひきて軒端涼しき難波浦風
 三五月雨はすまの鹽屋も空とちて煙計を雲にそひける
 四百五十七番 左 宮内卿 右 俊成卿女
 三なにはがた月には遠くなりはては沖に漂ふ夕立の雲
 三草も木も宛ら露の玉おちて風に過ぎぬる夕立のくも
 四百五十八番 左 讚岐 右 丹後
 三六かりてなく涙やかへす郭公こゑみなつきの村雨の空
 三六人しれぬわが常夏の唐錦誰をまつとて敷き始めけむ
 四百五十九番 左 小侍從 右 越前
 三蓮葉に朝お露の亂れあひて一つになるも法の心か
 三夏山のともしの影に星みえて麓に誰か鹿を待つらむ
 四百六十番 左 隆信朝臣 右 定家朝臣
 三旅人の友よびかはす聲すなり夏野の草に道惑ふらし

久方の中なる河の鶴飼舟いかに契りて間をまつらむ
 四百六十一番 左 有家朝臣 右 通具朝臣
 三ほに出でぬ萱が繁みに包め共思ひ亂れてもぶ螢かな
 三夏の夜も岩もる月を掬ふ手に氷くたくる山の井の水
 四百六十二番 左 保季朝臣 右 家隆朝臣
 三楸おふる沖の小鳥の浪のうへに浦かせさそふ鯛の聲
 三五月雨のふるの中道中々に繁る草葉も見えぬ頃かな
 四百六十三番 左 持良平 右 雅經
 三時鳥たゞ一聲と契りけりくるればあくる夏の夜の月
 三夕立のなごりは峰に雲消えて裾野の草の露の一むら
 四百六十四番 左 具親 右 寂蓮
 三蚊遺火の煙の末もほのかにて霞にのこる夏の夜の月
 四百六十五番 左 顯昭 右 家長
 三うちとけぬけしきに著し氷室山夏を隔つる心有けり
 三終夜岩もる清水かたしきて程なき夢もいく結びしつ
 四百六十六番 左 勝女房 右 内大臣
 三澤水の草葉にやどを刈菰の思ひみだれて行く螢かな
 三鹿のねもまだ打解けぬ夕暮に怪しかるべき風の音哉
 四百六十七番 左 左大臣 右 忠良卿
 三松風のはらふ汀のはちす葉にきよき玉ある夏の夕暮
 三夕立の一むら過ぐる雲はれて名残の露は常夏のいろ
 四百六十八番 左 前權僧正 右 兼宗卿
 三宿もやどなく聲も聲郭公身の舊ぬるや今年なるらむ
 三丈夫が端山の原に木隠れて松を照射の鹿につけばや
 四百六十九番 左 公繼卿 右 通光卿
 三花ちりし宿の木蔭を自ら涼みがてらにとも人もがな
 三中々に眺むる程も夏のよの月に名残は思ひしられて
 四百七十番 左 公經卿 右 釋阿
 三玉に紛ふ宵の螢の影むれて雲居の雁の聲を待ちける
 三益荒夫や端山わくらむともしける螢に紛ふ夕間の空

四百七十一番 左 勝季能卿 右 俊成卿女
且みても珍しきかな常夏のはや初花の色をそへつゝ
四百七十二番 左 持宮内卿 右 丹後
見渡せば浪もゆるがぬ夏の日に松蔭遠きいその細道
涼しやと立寄る人の掬ふ手に亂れておつる瀧の白糸
四百七十三番 左 持謙岐 右 越前
住吉の松蔭洗ふおきつ浪したにや秋の風かよふらむ
貴舟河玉ちるせいに紛ひても紛ひもはてぬ夏蟲の影
四百七十四番 左 小侍従 右 定家朝臣
眞葛はふ夏野の草の繁くのみ誰を怨て露こぼらむ
夏衣立田河原をきてみれば篠に折はへ浪ぞほしける
四百七十五番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣
かき暮すとばかりみゆる夕立に孰の里か淺ぢふの露
忘れては秋かと思ふ風わたる峰より西の蛸のこゑ
四百七十六番 左 有家朝臣 右 家隆朝臣
時こそあれ露吹き拂ふ夕風に涼しくなりぬ床夏の花
照射する端山が峰を眺れば雲路ぞ鹿のたちど也ける
四百七十七番 左 保季朝臣 右 雅經
うらなれて螢飛びかふ夕まぐれ孰かもとの螢の漁火
明渡る雲の孰くに入りやらで山のは仰つ夏のよの月
四百七十八番 左 良平 右 寂蓮
鏡かともゆる氷室の氷にぞあらはれにける冬の面影
せきとむる山下水は未たえて風に流るゝ蟬のむら聲
四百七十九番 左 具親 右 家長
夕立のはるゝ程なき雲まより猶いで替る山のはの月
六月や風まらわぶる野への宿うらみぬ葛の怨しき哉
四百八十番 左 顯昭 右 三宮
さよ深み風に類へて行く螢秋近しとは空にしるらむ
松蔭の岩井の水の夕暮をたづぬぬ人や秋をまつらむ
四百八十一番 左 持女房 右 忠良卿

柳蔭すいみにきたるから衣ならず袂になるゝ河かせ
夕づくひさすや庵の柴の戸にさびしくもある蛸の聲
四百八十二番 左 左大臣 右 兼宗卿
蛸のなくねに風を吹きそへて夕日涼しき岡のへの松
みな月のてる日の影に色そへて錦をさらす常夏の花
四百八十三番 左 持前權僧正 右 通光卿
時鳥空もとゞろに鳴く程に夜たゞ雨ふる袖の上かな
夏蟲の思ひをうつす池水にたぐひしらする篝火の影
四百八十四番 左 公繼卿 右 釋阿
涼しさは宿からにしもなき物を心鎮まる所なりけり
大堰河籌さし行く鶺鴒かひ舟幾瀬に夏のを明すらむ
四百八十五番 左 持公經卿 右 俊成卿女
露すがる庭の玉簪打ちなびき一むらすぎぬ夕立の雲
岩叩く谷の清水の音きけば掬はぬ袖ぞまだ涼しき
四百八十六番 左 季能卿 右 丹後
風渡る檜の葉風のあらましに眺むる空のはつ雁の聲
待もせず惜もあへず夏のよは山端疎き月をこそみれ
四百八十七番 左 持宮内卿 右 越前
みぬ人を松の木蔭の苔筵猶しきしまや大和なでしこ
柞原立ちよる蔭の涼しきは梢に秋やちかくなるらむ
四百八十八番 左 謙岐 右 定家朝臣
なつのよの月の桂の下紅葉かつくゝ秋の光なりけり
夏の夜はまた宵のまど眺つゝぬるや川べの東雲の空
四百八十九番 左 小侍従 右 通具朝臣
あしらすらぬ一つ木蔭に立寄りて契を結ぶ山の井の水
夏衣すそのゝ原の夕風に秋おもほゆるさゆりばの露
四百九十番 左 隆信朝臣 右 家隆朝臣
み山かけ夏なき年やこれならむ月を清水に松の下風
身に近く馴す扇も檜のはの下ふく風に行へしらすも
四百九十一番 左 有家朝臣 右 雅經
昨日けふ夏をばよそにみ山べの檜の木かげに蛸の聲

三たちよれば衣手涼し嵐山秋やとなせの瀧の白なみ
四百九十二番 左 保季朝臣 右 寂蓮
夕暮の籬に秋や通ふらむ露をならば庭のさゆりば
すむ人は主人ともなき蓬生に蟲のねそはむ秋の夕暮
四百九十三番 左 良平 右 家長
夕立の雲まの日影はれぬれば玉をぞ研く淺ぢふの露
七吹く風は思ひたえたる庭の面に露にぞ靡く常夏の花
四百九十四番 左 具親 右 三宮
はくそ原まだ色づかぬ村雨に秋のけしきも森の下露
雨そゝぐ嶺の梢をながむればむら雲かゝる蟬の聲々
四百九十五番 左 顯昭 右 内大臣
蓮葉になどか心を懸ざらむあだなる露も置と吐みれ
寂しとて柴折りくべし山里に猶蚊遣火の煙たてけり
四百九十六番 左 兼宗卿
夏深み草のはがくれ露はわて忍びくゝの秋のはつ風
掬ふ手の掌に月も宿りけり是や名におふ玉の井の水
四百九十七番 左 左大臣 右 通光卿
萩原や聲もほに出ぬさを鹿の深く夏野に戦ぐなる哉
石走る清水をむすぶ深山べに涼しさそふる松の下哉
四百九十八番 左 持前權僧正 右 釋阿
露の身を玉ともなきむ蓮葉の濁にしまぬ我が心かな
山の井を掬びて夏は過ぬべし秋や立なむ志賀の浦風
四百九十九番 左 公繼卿 右 俊成卿女
せきとむる岩まの水にすむ月は掬べば解る水也けり
山深き松に吹きけり都にはまだいづれぬ秋風の聲
五百番 左 公經卿 右 丹後
かほげなくはすの下葉の小波に浮草わたる夕暮の風
わかればこれ名残のをしきかな夏の限の蛸の聲
五百一番 左 季能卿 右 越前
人はこず心はうかる岡のべやけふさへいかに蛸の聲
影さゆる山井の水の孰くにか暮行く夏の立歸らむ

五百二番 左 持宮内卿 右 定家朝臣
片枝さすをふの浦梨初秋に成も成ずも風ぞ身にしむ
三山のかげおぼくりに蛸の聲たのまるゝ夕がほの花
五百三番 左 謙岐 右 通具朝臣
蟲のねはまだ淺ぢふに忍來て下て露けき野への夏草
七尋ねきてならず日數に秋風や立田河原の夕暮のそら
五百四番 左 小侍従 右 家長
手に掬ぶ泉の水の涼しさに忘れて鹿のねをぞ待つる
松かげや瀧のうら葉の岩枕なつな山に通ふ頃かな
五百五番 左 隆信朝臣 右 雅經
秋をまつ日數も近く鳴神の音にはたてぬ露ぞ涼しき
夏深き野原のくれに影みえて螢露けきさゆりばの花
五百六番 左 有家朝臣 右 寂蓮
濱風に涼しくなびく夏草の野鳥が崎に秋はきにけり
夏も猶草にやつるゝ故郷に秋をかけたるをぎの上風
五百七番 左 保季朝臣 右 家長
泊瀬河岩こす波に打ちそへて涼しくなりぬ入相の鐘
隔てこし垣根も見えず成にけり隣一つに草ぞ繁れる
五百八番 左 良平 右 三宮
木間よりもりくる月の涼しきに散も秋なる下紅葉哉
秋をまつ深山隠のさを鹿は忍びくゝに聲やたつらむ
五百九番 左 具親 右 内大臣
秋近き夏野の草に隠ろへてまだほにいでの鹿の初聲
戀せじの櫻と人や御手洗の河瀬のけふの夏祓へをも
五百十番 左 顯昭 右 忠良卿
掬ぶ手の涼しきみか岩湍ぐたるみの音も夏は知れず
松風の夏たけぐまに涼しきは梢に秋やちかの鹽がま
五百十一番 左 持女房 右 通光卿
硯川せいの玉藻の水隠て知られぬ秋や今宵きぬらむ
御褌する河せの浪も音すゞし夏の日影は六月の空
五百十二番 左 左大臣 右 釋阿

四七夕の天のがはらに戀せりと秋を迎ふる候すらしも
 五なる浦や西の河せに御禊せむ岩こそ浪も秋や近きと
 五百十三番 左 前権僧正 右 俊成卿女
 夏衣かたへ涼しくなりぬ也夜やふけぬらむ行會の空
 七轉寝のまだ宵ながらあけなくむ禊に過ぐる六月の空
 五百十四番 左 公繼卿 右 丹後
 禊するながれになげけ原の國はじめせし神の心も
 禊するかはせの風の涼しきは秋にや神も心よすらむ
 五百十五番 左 持公繼卿 右 越前
 禊するあさの葉風のふき分て秋をよせくる浪の夕聲
 禊衣たちきてなれし程もなく袂に秋の風ぞ吹きける
 五百十六番 左 季能卿 右 定家朝臣
 六月のなごしの森の夕涼みみそぎもまたぬ秋の下風
 三たが禊同じ淺茅のゆふかけてまづ打靡くかもの河風
 五百十七番 左 宮内卿 右 通具朝臣
 夏衣袂に秋のなみかけてみそぎにふくる小夜の川風
 五みそぎ川夜や更ぬらむあさ露の暁て秋なる道芝の上
 五百十八番 左 讚岐 右 家隆朝臣
 早き瀬の禊に流すうき事は歸らぬ水に類へてぞ思ふ
 郭公こゑもたえにし垣根よりしのびねなく葦かな
 五百十九番 左 小侍從 右 雅經
 六みそぎ川なづる淺茅の一方に思ふ心をしられぬ哉
 六六月やさこそは夏の末の松秋にもこゆる波の音かな
 五百二十番 左 隆信朝臣 右 寂蓮
 禊して神の恵も廣瀬川幾千世までかすまむとすらむ
 夏はつるかもの河原の禊こそ神やうくらむ秋風の聲
 五百廿一番 左 有家朝臣 右 家長
 夏はたい今宵ばかりと禊する河浪涼し秋やたつらむ
 禊する河せの浪の立ち返り猶抱へとや夏したふらむ
 五百廿二番 左 保季朝臣 右 三宮
 禊する河せに今宵音づれてあくるをまたぬ秋の初風

七けふのみと夏を眺むる淺茅原末こそ風の傍へ涼しき
 五百廿三番 左 良平 右 内大臣
 六朝の聲にや秋のかよふらむ木かげ涼しき夏の暮かな
 七六月のけふ呉竹のよおりにぞ君か千年の數はそへける
 五百廿四番 左 具親 右 忠良卿
 七推しなべて皆六月の禊川幾瀬の波にいぐし立つらむ
 七さを鹿の聲もほに出ぬ篠薄忍びかねたるのべの夕風
 五百廿五番 左 顯昭 右 兼宗卿
 〇涼しさを檜の葉風に先だて、信夫の森に秋やきぬ覽
 〇憂事もみな盡果つるけふならばあすや禊の験をもみむ

千五百番歌合卷第八 秋一判者同前

五百廿六番 左 持女房 右 釋阿
 〇風の音に秋はけふより立田山よはにや夏の獨越らむ
 〇潮路より秋や立つらむ明方は聲變るなりすまの波風
 五百廿七番 左 左大臣 右 俊成卿女
 〇深草の露のよすがを契にて里をば枯す秋は來にけり
 〇秋くれば身にしむ物と成にけり昨日も聞し萩の上風
 五百廿八番 左 前権僧正 右 丹後
 〇風の音に驚くのみか萩のはのさやかに靡く秋はきに鳥
 〇轉寝は心せよともいふべきに思ひもあへぬ秋の初風
 五百廿九番 左 公繼卿 右 越前
 〇秋さぬと一夜を分くる鐘の音に哀うちそふ曉のそら
 〇うたゝねに心づくしの秋さぬと驚かすなり萩の上風
 五百卅番 左 持公繼卿 右 定家朝臣
 〇けふよりや秋は立田の山端に八日寂しむる空かな
 〇けさよりは風を便の知べにて跡なき浪も秋や立ちむ
 五百卅一番 左 持季能卿 右 通具朝臣
 〇誰に又露の哀をかけむと袖より過ぐる秋のはつ風

〇萩の葉にいつ秋風の吹馴れて身にしむ計人に知する
 五百卅二番 左 宮内卿 右 家隆朝臣
 〇軒ちかき松の梢に音づれて袖にしられぬ秋のはつ風
 〇秋はくるまだ東雲の氣色より夕の空もみえける物を
 五百卅三番 左 持讚岐 右 雅經
 〇算へし人の心にたつ秋を西とりとしも誰定めけむ
 〇朝倉やきのまる殿に誰とへば秋をもなる萩の上風
 五百卅四番 左 小侍從 右 寂蓮
 〇いかなれば身にはしむと尋ても秋吹風の色を知ばや
 〇秋風は一夜ばかりを蟲の音の機おるまでや夕暮の空
 五百卅五番 左 隆信朝臣 右 家長
 〇まださかぬ哀を争で添つらむ今年に限る秋の風かは
 〇忍びこし岩井の水の松の風願れて吹く秋はきにけり
 五百卅六番 左 有家朝臣 右 三宮
 〇けさよりは稲葉もそと知す也鳥羽田の面の秋の初風
 〇昨日より萩の下葉に通ひきてけさ顯るゝ秋のはつ風
 五百卅七番 左 保季朝臣 右 内大臣
 〇かかれてだに心に止る秋風のけふ明けそむる黄昏の空
 〇秋風のたつた河原の柳かけ春の緑もいろづきにけり
 五百卅八番 左 良平 右 忠良卿
 〇けふよりは秋の氣色の森なれば頓て身にしむ山嵐の風
 〇夕暮の哀を空にながむれば秋きにけりと萩のうは風
 五百卅九番 左 具親 右 兼宗卿
 〇しきたへの枕の上に過ぎぬなり露を尋ぬる秋の初風
 〇故郷と荒にし庭の淺茅にも露置添へて秋はきにけり
 五百四十番 左 顯昭 右 通光卿
 〇水莖の岡のくすばも色づきてけさうら悲し秋の初風
 〇立初むるけふより人に知れけりなれし袂に歸る秋風
 五百四十一番 左 持女房 右 俊成卿女
 〇秋たちて昨日にかはる浪風に涼しく靡く伊勢の濱萩
 〇稀にあふ蟹の河邊の秋風は此世ならずや哀なるらむ

五百四十二番 左 左大臣 右 丹後
 〇一方の夕はさぞとおもへども我ためにふく萩の上風
 〇けふも又緑は同じ松風等に風に任せて秋や立つらむ
 五百四十三番 左 前権僧正 右 越前
 〇今宵こむ人にぞ逢む七夕の絶ぬ契にあらむと思へば
 〇斯ればや野山も色の變らむ身にしみ初る秋の初風
 五百四十四番 左 公繼卿 右 定家朝臣
 〇ふけにけり今や秋たつ思寝の夢路を籠て吹ぞ涼しき
 〇水莖の岡のくすばは吹きかへし衣手うすき秋の初風
 五百四十五番 左 持公繼卿 右 定家朝臣
 〇契あればあまの羽衣立ちるても待つよ必ず星合の空
 〇哀又いかにしのび袖の露野原の風に秋はきにけり
 五百四十六番 左 季能卿 右 家隆朝臣
 〇けふよりは月の秋ぞと眺れば唯には非ぬ夕づゝの影
 〇七夕の雲の衣を吹き重ね夜さむに非ぬ夕づゝの影
 五百四十七番 左 宮内卿 右 寂蓮
 〇風の音に物侘しかる秋はきにけり宿を思ひ定めむ
 〇久かたのあまの羽衣まれにきて契はつきぬ星合の空
 五百四十八番 左 持讚岐 右 寂蓮
 〇三日月の光灰かにみゆるより心をつくす秋の空かな
 〇吹風も松のひいきも浪の音も秋きにけりな住由の濱
 五百四十九番 左 小侍從 右 家長
 〇天の河年に一よは待ちもみじ又わく方の心有りせば
 〇いと早も尾上の鹿は聲たてつ裾野の小萩咲も取ぬに
 五百五十番 左 隆信朝臣 右 三宮
 〇秋の色を早晩みする夕づくよさすや岡への松風の聲
 〇秋立て幾日もあらぬに哀さをいつ習ひけむ夕暮の空
 五百五十一番 左 持有家朝臣 右 内大臣
 〇さらには又待べき秋も久かたのあまの河せに歸る波哉
 〇秋さぬと灰二日月の光にぞかねて隈なき影は知るゝ
 五百五十二番 左 保季朝臣 右 忠良卿

出初むるまだ三日月の仄にて争てか秋の色をみす覽
竹のはにあさひく糸や七夕の一夜の節の亂れなる覽
五百五十三番 左 良平 右 勝兼宗卿
天川けふをあふせと眺てもくろく待には袖や濡らむ
年をへてながき契のたえせねば例にひける七夕の糸
五百五十四番 左 隆信朝臣 右 通光卿
あひみても猶行く末の契をや結び重ぬる七夕のいと
五百五十五番 左 顯昭 右 釋阿
七夕にけふかす絲は君が代の長き例を引にぞ有ける
風の音を萩の葉のみに聞來しを萬の裏にも秋は見え鳥
五百五十六番 左 勝女房 右 丹後
篠薄まだほに出でぬ夕月夜流石に秋の氣色なるかな
眞葛原怨み袖の上迄も露おき初むる秋はきにけり
五百五十七番 左 左大臣 右 勝越前
白露も色そめあへぬ立田山まだ青葉にて秋風ぞふく
待ちえてもいかに眺む早晩と氣色殊なる新月の影
五百五十八番 左 前權僧正 右 定家朝臣
思ふべし我身一つの秋ぞかし誰か斯しも月を眺めむ
夕暮はをのゝ篠原忍ばれぬ秋きにけりと鶉鳴くなり
五百五十九番 左 公經卿 右 通具朝臣
彦星の妻むかへ舟よそふらし天の河原の今日の暮方
いつしかと空に哀を三日月のかたぶく影も秋の夕暮
五百六十番 左 公經卿 右 家隆朝臣
本荒の萩の下ねに鳴蟲の聲をば誰にみせもきかせも
我宿の萩の下葉のいかならむ袖も露けし初雁のこゑ
五百六十一番 左 季能卿 右 雅經
人こそあれ庭の萩も色づきて風のみかよふ古里の秋
萩が花さくともよそに宮城野の木の下露の秋の夕暮
五百六十二番 左 宮内卿 右 寂蓮
天河もみちの橋やわたすらむ色づきにしの夕暮の空

秋の色にぞ匂ふぶち袴しらぬ主さへむつまじきかな
五百六十三番 左 讚岐 右 勝家長
天川こそわたりは移ろへど深き契や變らざるらむ
五百六十四番 左 小侍從 右 三宮
早晩とけふ待つる七夕のあすの心を思ひこそやれ
七夕もしばし休らへ天河わけし浪は返りやはする
五百六十五番 左 隆信朝臣 右 内大臣
あきらけき庭の灯かずごとに空居にかよふ彦星の影
萩の葉に秋ふく色はみえね共身にしむ程の風の音哉
五百六十六番 左 勝有家朝臣 右 忠良卿
をぎ原や末吹きなびく秋風の音する度に人は怨めし
萩の葉に松の梢を吹きませておなじ風の哀わくなり
五百六十七番 左 保季朝臣 右 兼宗卿
星合のまたれし空と思ふより籬の萩に風かはるなり
最どしく露の白玉おきそへて萩の錦のあだならぬ哉
五百六十八番 左 良平 右 通光卿
夕されば玉ちる野への女郎花枕さだめぬ秋風ぞふく
眺むべき秋の半の影までも思ひ知る夕づくよかな
五百六十九番 左 具親 右 釋阿
大方のこのてる月の影までも宿る習に秋はきにけり
七夕のあかぬ別の袖よりや秋は露けき頃となるらむ
五百七十番 左 顯昭 右 勝俊成卿女
萩は宿ともわかつ秋はきて心盡しに月ぞもりくる
五百七十一番 左 勝女房 右 越前
七夕の雲の袂やぬれぬらむ明けぬとつぐる秋風の聲
七夕の涙やそへてかへすらむ我衣手もけさは露けき
五百七十二番 左 左大臣 右 勝定家朝臣
旅人のいるのゝ尾花手枕に結びかはせる女郎花かな
松の葉のいつとも分ぬ蔭にしもいかなる色と變る秋風

五百七十三番 左 前權僧正 右 通具朝臣
秋の盛くもらぬ空や久方の月の桂のみもぢなるらむ
秋はきて幾日もあらぬ空にしも心盡しの星あひの影
五百七十四番 左 公繼卿 右 勝家隆朝臣
七夕の枕の塵は拂ふとも猶むつ言はつさじとぞ思ふ
秋風に本あらの小萩露おちて山陰寒み鹿ぞ鳴くなる
五百七十五番 左 公經卿 右 雅經
わびつゝは玉かと問し白露のあき感はせる東雲の空
音づれて身にしむ風の吹しより掬ばぬ袖に萩の上露
五百七十六番 左 季能卿 右 寂蓮
草のはに露こぼるとや思らむ風こそ知ぬ暮方の空
女郎花なびきもはてぬ秋風に心よわきは露の下をれ
五百七十七番 左 宮内卿 右 家長
宮城野や野はらの床をかり衣風に任する萩が花すり
畦傳ふ鳥羽田の面の夕まぐれわくる稻葉に鶉鳴く也
五百七十八番 左 讚岐 右 三宮
秋はまだ淺香の野らの朝露にさしも萎る旅衣かな
七夕のあかぬ別の涙故もみぢのはしや色まさるらむ
五百七十九番 左 小侍從 右 内大臣
あさむさびる露にやしむる七夕のかへる朝の天の羽衣
越ちまで秋風吹くと誰れ告げて都にけさは初雁の聲
五百八十番 左 隆信朝臣 右 勝忠良卿
秋といへば心も色に成ぬべし尾花に混り咲花をみて
雲居より鷹の涙や小倉山ふもとの野への萩の上の露
五百八十一番 左 勝有家朝臣 右 兼宗卿
藤袴一もと故の色よりも香ぞむつまじきのの秋風
花の名は誰かつけこし女郎花心ありける昔なりけり
五百八十二番 左 保季朝臣 右 通光卿
袖に又いつより露の馴ぬらむ風こそ秋の始と思ふに
思ひこし眺はこれ秋萩の花にはのめく野への夕暮
五百八十三番 左 良平 右 釋阿

秋をへてよそに思ひし夕よりたまらぬ物を萩の上風
五百六十三番 左 讚岐 右 勝家長
天川こそわたりは移ろへど深き契や變らざるらむ
五百六十四番 左 小侍從 右 三宮
早晩とけふ待つる七夕のあすの心を思ひこそやれ
七夕もしばし休らへ天河わけし浪は返りやはする
五百六十五番 左 隆信朝臣 右 内大臣
あきらけき庭の灯かずごとに空居にかよふ彦星の影
萩の葉に秋ふく色はみえね共身にしむ程の風の音哉
五百六十六番 左 勝有家朝臣 右 忠良卿
をぎ原や末吹きなびく秋風の音する度に人は怨めし
萩の葉に松の梢を吹きませておなじ風の哀わくなり
五百六十七番 左 保季朝臣 右 兼宗卿
星合のまたれし空と思ふより籬の萩に風かはるなり
最どしく露の白玉おきそへて萩の錦のあだならぬ哉
五百六十八番 左 良平 右 通光卿
夕されば玉ちる野への女郎花枕さだめぬ秋風ぞふく
眺むべき秋の半の影までも思ひ知る夕づくよかな
五百六十九番 左 具親 右 釋阿
大方のこのてる月の影までも宿る習に秋はきにけり
七夕のあかぬ別の袖よりや秋は露けき頃となるらむ
五百七十番 左 顯昭 右 勝俊成卿女
萩は宿ともわかつ秋はきて心盡しに月ぞもりくる
五百七十一番 左 勝女房 右 越前
七夕の雲の袂やぬれぬらむ明けぬとつぐる秋風の聲
七夕の涙やそへてかへすらむ我衣手もけさは露けき
五百七十二番 左 左大臣 右 勝定家朝臣
旅人のいるのゝ尾花手枕に結びかはせる女郎花かな
松の葉のいつとも分ぬ蔭にしもいかなる色と變る秋風

七秋きぬは萩のうは風うたがひて萩の下露心おかるな
 五百九十四番 左持小侍従 右 忠良卿
 八たぐならず見ゆる籬の篠薄いかなる露の契なりけむ
 尾上より通ふ嵐にたぐひきて松の梢にさる鹿のこえ
 五百九十五番 左持隆信朝臣 右 兼宗卿
 九白露の起くとは野べの花を見てぬは忍ばむ萩の上風
 朝夕に向ひの野べの女郎花みるともあかじ花の姿は
 五百九十六番 左持有家朝臣 右 通光卿
 一〇袖の上誰かはかゝる枕はおく我身一つの秋の夕暮
 女郎花あさちを草の枕にて己が野原を旅寝とや思ふ
 五百九十七番 左持保季朝臣 右 釋阿
 一一風ふけば雲は残らぬ山のはに月をよこざる初雁の聲
 夏の野は草の繁みのさゆりはも秋は露にや萎れ果らむ
 五百九十八番 左 良平 右 勝俊成卿女
 一二これや此の夜なく蟲の涙とて玉を貫くまの糸はぎ
 七いかなりしよはの哀に月も又秋に光を契りそめけむ
 五百九十九番 左持具親 右 丹後
 一三忍ぶれど色にやいづる女郎花物や思ふと露のおく迄
 己のみ思ひ亂るゝ刈萱の世を秋きぬと風やつげゝむ
 六百番 左持具親 右 越前
 一四背くとて恨みもはて女郎花又吹返す風もこれあれ
 誰か又とめて折りつる秋露の立ち隠すらむ萩の錦を

千五百番歌合巻第九 秋二 御判

六百一番 左 女房 右 勝通具朝臣
 一この夕風吹きたらぬ白露に争ふ萩をあすかもみむ
 夕まぐれ待人はこれ故郷の本荒の小萩風ぞとふなる
 各奉つれる百首をつがひて甘巻の歌合として人々
 判申す内に二巻よしあしをさだめ申すべきにて侍

るに愚意のおよぶ所勝負ばかりはつくべしとはい
 へども難におきてはいかに申すべしとも覺え侍ら
 ず左右のしもに一文字ばかりをつけむは無下に念
 なきこまなるべしより判の詞の所にかたの様に
 卅一字をつらねて其の句の上ごとに勝負の字ばか
 りを定め申すべきなり
 三 みせばやな君を待夜の野べの露に枯まぐ惜しむ
 六百二番 左持左大臣 右 家隆朝臣
 四 葦草葉にあらぬ我が床の露を尋ねていかで鳴くらむ
 秋は猶心盡しのこの間より月にもりくるさを鹿の聲
 七三 時に斯に心ぞ止るには非で且おと露の散紛ふ秋
 六百三番 左持前権僧正 右 雅經
 八 鳴く鹿の聲にめさめて忍ぶ哉みはてぬ夢の秋の思を
 九 尋ねても誰か厭はむ三輪の山きりの籬に杉たてる門
 〇 忍ぶ夢かつゝ覺ぬ空の月夜渡る山の木々の秋風
 六百四番 左 公繼卿 右 寂蓮
 一 武藏野にこれもむつまし女郎花若紫の故ならねども
 二 野べ迄も尋て聞し蟲の音の淺茅が庭に怨めしき哉
 三 葎はひ繁き真葛のはの下によすがら鳴か東雲の蟲
 六百五番 左 公經卿 右 勝家長
 四 葎鳴きてよすがら明すなりまのうら萩色かはる頃
 五 秋風に思ひ亂るゝ刈萱のこやの寝覺に小鹿鳴くなり
 六 置露の篠に亂るゝ刈萱の且みるからに散るか涙の
 六百六番 左持季能卿 右 三宮
 七 いざさらば妻に結ばむ女郎花旅ねの庵の秋の寢覺に
 八 散れば影も止らずなりけり野澤の水の萩が花摺
 九 折れかへり靡く裾野の下萩のほの上照す遠山の月
 六百七番 左持宮内卿 右 内大臣
 一〇 物や思ふ秋にや空の成初むる變らぬ床に寢覺をぞする
 一七 夕のたへぬ思やいかならむ雲の衣をこよひ雁がね
 二五 閨の上にしよし時雨の廻來てよはのさ衣紋侘つゝ

六百八番 左持讀岐 右 忠良卿
 一花薄秋の盛になる時は聲もほに出で、鹿も鳴くなり
 二遠山田いなば仄に雁なきて雲のたままに三日月の影
 三遠山田打戦なる時しもあれ恨も敢て通ふ鹿のね
 六百九番 左 小侍従 右 兼宗卿
 四いかにせむ風に従ふ刈萱の思ひ定むる方もなき世を
 五分けきつるをぞが原の朝露の袂ひまなき旅衣かな
 六見渡せばさつゝ慣にし野べの小笹形見と袖に散か白露
 六百十番 左 隆信朝臣 右 勝通光卿
 七夕暮は野原のけしき只ならで露吹き返す葛のうら風
 八誰となく招く尾花の一つ野に心おきける葛のうら風
 九世の常にさゝも慣にし風の音も身にしみ暮の葦哉
 六百十一番 左持有家朝臣 右 釋阿
 一〇三吉野の頼むともなき玉章を幾秋懸て雁のきぬらむ
 一一朝露にはかなく移す月草も秋の形見の色となるらむ
 一二時ぞとや森の秋風俄にも夜寒になりぬ東雲のそら
 六百十二番 左 保季朝臣 右 勝俊成卿女
 一三浪のうへにいざよふ月を松島や小鳥が磯の秋の初風
 一四風ふけば篠に亂るゝ刈萱も夕はわきて露こぼれけり
 一五月すめば夢やは結ぶ野べの庵雁の涙に散紛ひつゝ
 六百十三番 左持良平 右 丹後
 一六さびしさの心の限吹く風に鹿の音すさむ野べの夕暮
 一七唐衣裾野をすぐる秋風にいかに袂のまづしをらむ
 一八千々に思ふ外山の月の山嵐にせば袂に結ぶ白露
 六百十四番 左持具親 右 越前
 一九絶々に月より過ぐる村雲の雨うちすさむ萩のうは風
 二〇秋萩の露に袂を分けなしてほさむもをしき花の濡色
 二一秋の月廻てすめる野べの露重る玉を千里にぞしく
 六百十五番 左 顯昭 右 勝定家朝臣
 二二主しらぬ若むらさきの蘭たがゆかりとて風の立ちらむ
 二三萩原や植て悔しき秋風はよくをすさみに誰か明さむ

置迷ふ木毎の露を山風の且ふくからにちる木葉哉
 六百十六番 左 女房 右 勝家隆朝臣
 七 女郎花枝もとをゝにおく露を待ちとる風に蟲怨む也
 八 雲消ゆる空を限りとすむ月の光もなるゝ秋の袖かな
 九 空清くて日影の山里にさしても慣ぬ柴あめる門
 六百十七番 左持左大臣 右 雅經
 一〇 夕づくよ宿る山田の露の上にかね争ふ稲妻のかけ
 一八 遠山をこえ行く雁の夜はの聲夜寒に成ぬ柴の假庵
 二六 小萩原ぬ夜の露やふかゝらむ獨ある人の秋の栖は
 三三 たれか又千々におもひを碎きても秋の心に秋の夕暮
 四〇 越路より初雁音ぞ聞ゆなるよるとな鳴を東雲の月
 四八 六百十九番 左持公繼卿 右 家長
 五五 女郎花萩混り咲きぬればしがむ鹿や心わくらむ
 六二 鳴捨て、鹿はつれなき山嵐にすが驚くひたの音哉
 六八 岡のべや靡く交野の篠薄穂向の露も時を待ちける
 七五 六百廿番 左 公繼卿 右 三宮
 八二 雲に紛ふ花ともいはし眺れば月も吉野の山路也けり
 八九 行人も止らぬ野べの花薄招きかねてや露こぼらむ
 九六 住僧ぬすそのゝ庵の霧の中に夜深き月の東雲の影
 一〇三 六百廿一番 左持季能卿 右 内大臣
 一〇九 吾妹子がすそわの田に風過ぎて衣手寒し初雁の聲
 一一六 淺茅原たへ忍ぶべき夕かは露ふき拂ふ風のけしきに
 一二三 遠山田薄霧隠れ飛ぶ雁を打眺むれば風ぞ身にしむ
 一三〇 六百廿二番 左持宮内卿 右 忠良卿
 一三七 見る人の心盡せと初秋の空よりかはるゆふ月夜かな
 一四四 獨誰外山の月を忍びかね木々の木葉に風恨むらむ
 一五〇 六百廿三番 左持讀岐 右 兼宗卿
 一五七 枝乍ら宮城野の萩に玉ある秋の夕露

九尋ねてもたれかはとはむ鶉なく野べに哀は深草の里
 〇〇 都人きてもとへかし松風の嶮しき里のよの氣色を
 六百廿四番 左持小侍從 右 通光卿
 一〇たのめつる人まつ宵に哀れ又心さわがす萩のうは風
 二〇わりなし小萱が下の亂葉に露吹きむす秋の夕風
 三〇置露に靡く小萱の萎つゝほすまを無と問はと答よ
 四百廿五番 左 隆信朝臣 右 勝頼阿
 四〇人はこず寂しかれとや萩の葉の戦ぐ計りの秋の山里
 五〇浪に洗ふから錦ともみゆるかな野鳥が崎の秋萩の花
 六〇鶉の海やししがの浦曲に霧晴て影曇りなき月の影哉
 六百廿六番 左 有家朝臣 右 俊成卿女
 七〇待出で後さへつくる心哉雲にいざよふ山のはの月
 八〇忍べき人だにたへぬ秋のよを野原の蟲の露に鳴らむ
 九〇昔誰しのに露おく野べにしも斯る秋とは契置けむ
 六百廿七番 左 勝保朝臣 右 丹後
 一〇〇大方の月には風もつらからず宿かる露の有があなる
 一〇〇〇 様々に花の紐とく秋の野にいかなる露の結はらむ
 一〇〇〇〇 片敷のせばき袂をのべとてや斯しも露の散紛ふ覽
 六百廿八番 左 勝良平 右 越前
 一〇〇〇〇 秋きては幾日になりぬ夕月夜ふけ行く空に影殘る迄
 一〇〇〇〇〇 咲き迷ふ嵐のつてに誘はれて松に亂るゝさを鹿の聲
 一〇〇〇〇〇〇 柴の戸や通嵐の庭の松にげにも寂しきにはの聲哉
 六百廿九番 左 具親 右 勝定朝臣
 一〇〇〇〇〇〇 厭ひえて雲なき空となる儘に彌遠さかる山のはの月
 一〇〇〇〇〇〇〇 さを鹿のなくねの限つくしてもいかん心秋の夕暮
 一〇〇〇〇〇〇〇〇 石間行く山下水の薄氷げには凍らですめる月かけ
 六百卅番 左 持顯昭 右 通具朝臣
 一〇〇〇〇〇〇〇〇 友をなみ我假寐こそ寂しけれ野にたつ鹿は妻呼ぶ也
 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇 我もしる思ひし物を諸共に音に立つべき夕まぐれ哉
 一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 見からに浪ぞ涼しき鶉の海や暮行空のしがの浦風
 六百卅一番 左 女房 右 勝雅經

二分行けば繁くも露のみゆる哉月吹き宿せ野べの秋風
 三よしさらば袖にも影を宿してむ月待つ宵の山の下露
 四峰にふく木々の嵐に空晴れて夜渡る月の清き比哉
 六百卅二番 左 左大臣 右 勝寂蓮
 五物思へする業ならし木間より落たる月にさを鹿の聲
 六露さむき聲になたてそ葦たれかはしらぬ草の原とは
 七知ざりき斯る露置野べの庵に横の戸敲くけさの風
 六百卅三番 左 持前權僧正 右 家長
 八藤袴花にぬしとふゆふ暮にこたふる風や萩の上もも
 九野べみれば朝夕露の萩原や置敢へぬ程に秋風ぞふく
 〇人はこで年ふる秋の柴の庵に桐の落葉を物を訪ける
 六百卅四番 左 持公繼卿 右 三宮
 一むかしたれ袂ににせて忍びけむ尾花が露を結ぶ秋風
 二風渡る萩の上葉に宿りきて影うちそよぐ秋の月の月
 三手に掬ふ石井の水も人訪で年へに身なしがの山風
 六百卅五番 左 持公繼卿 右 内大臣
 四すめばすみ曇れば曇る涙哉物思へとて月には非ねぞ
 五壁になく秋の末葉の垂いづまで草にすまむとすらむ
 六となべ川薄霧靡く瀬々の浪に群たる衛風に行く也
 六百卅六番 左 季能卿 右 勝忠良卿
 七霧迷ふ深山の奥のすまひまでやればやらるゝ我心哉
 八真葛はふまのゝ濱路の夕風に恨みて歸るおきつ白浪
 九ながむれば峰の嵐に空晴れて影曇なき月の頃かな
 六百卅七番 左 勝宮内卿 右 兼宗卿
 一〇つねよりも哀ぞ深き霧の中に鹿の立ちなく峰の夕暮
 一〇〇山里の秋の哀の身にしむは鹿の音さふる萩のゆふ風
 一〇〇〇 みつ瀬や岸打浪の松がねに嶮しき迄の夜はの浦風
 六百卅八番 左 勝讚岐 右 通光卿
 一〇〇〇 女郎花よかれぬ露を置乍らあだなる風は何靡くらむ
 一〇〇〇〇 さらふけて哀とさげば袖の上に露を傳ふる萩の上風
 一〇〇〇〇〇 みるの里きてもとへかし遙々と待も怨めし葛の秋萩

六百卅九番 左 小侍從 右 勝釋阿
 一〇遙にぞ尾上の鹿はなくなれど涙は袖の物とこそみれ
 二〇名こそあらめ見も懐かし女郎花枝さへ花の色に匂て
 三〇庭の萩の穂向の風に日敷へてよなゝ宿る東雲の月
 六百四十番 左 勝隆信朝臣 右 俊成卿女
 四〇雲はらふ風に哀を先だてて出づるも著き山のはの月
 五〇引き列ね歸りし空に音づれて又袖ぬらす秋の雁がね
 六〇おきつなみ浪吹上の潮風に照すともなき磯の漁火
 六百四十一番 左 持有家朝臣 右 丹後
 七〇末の松まつよ更行く空晴て浪よりいづる山のはの月
 八〇聲たてて鹿ばかりこそなかね其袖にぞ著き秋の夕暮
 九〇時は秋物おもへとや庭の萩よかれぬ露を暮ふ秋風
 六百四十二番 左 勝保季朝臣 右 越前
 一〇眺め侘ぬ心を秋にとめじとて思ひすつれど更科の月
 二〇秋風の身にしむ夜はの寝覺こそ物の哀の限りけれ
 三〇見渡せば木々の木葉も晴れし松に降りてくるゝ秋風
 六百四十三番 左 持良平 右 定家朝臣
 四〇しの薄上葉の露に宿かりて風にみだるる秋のよの月
 五〇秋さぬと袖に知らるゝ夕露に頓て木間の月ぞ宿れる
 六〇見る袖の涙言とひ宿る月寂しくも有か柴あめ垣
 六百四十四番 左 持具親 右 通具朝臣
 七〇秋といへば此は習ひよ夕まぐれ袖に涙と何思ひけむ
 八〇下秋の露さえわぶる蟲の音にうたて寂しき風の音哉
 九〇人はこで年古里を鹿ぞとふ木毎に秋の風は吹つゝ
 六百四十五番 左 持顯昭 右 家隆朝臣
 一〇小萩原玉しく色をみぬ人や露をあだなる物と云けむ
 二〇さやけさは秋の習の夜はの月思へどえ社寝れざりけれ
 三〇瀬々下す宇治の里人舟止て浪にすむ月暫かもみよ
 六百四十六番 左 女房 右 勝寂蓮
 四〇哀昔いかなる野べの草葉よりかゝ秋風吹き始めけむ
 五〇思ひ餘る心の程も聞ゆなりしのぶの山のさを鹿の聲

六六よはの月に鹿の立鳴深山より露を分くる初雁の聲
 六四十七番 左 勝左大臣 右 家長
 一〇故郷は我まつ風をあるじにて月に出でこし更科の山
 二〇秋にそむ心もたへずみか月の仄めく影にさを鹿の聲
 三〇自ら柴の戸敲く風の音も松にぞ通ふくるゝ夜毎に
 六百四十八番 左 持前權僧正 右 三宮
 四〇哀にもおなじみどりの春の草の心々に色かはりゆく
 五〇蟲の音も千種の花も野べ乍ら鹿をのみ待庭の浅茅生
 六〇小山田に鳴子引てふ賤夫は穂向の風を友と聞らし
 六百四十九番 左 持公繼卿 右 内大臣
 七〇花薄招きとめてや思ふらむ道ゆく暮の野べの旅寝を
 八〇月影をほどなき袖にせきかねて秋の哀をもらす涙か
 九〇何となく置迷ふ露ぞ干るまなき外山に結ぶ柴の假庵
 六百五十番 左 公經卿 右 勝忠良卿
 一〇千々に思ふ心は月に更にけり我身一つの秋と眺めて
 二〇み山べや霧の離の萩が上に詫言がましき露の色哉
 六百五十一番 左 持季能卿 右 兼宗卿
 三〇故郷の庭をば己が野べにして流石に誰をまつ蟲の聲
 四〇山田守るすゝが住ひのいかならむ稲葉の風の秋の夕暮
 五〇時しもあれ物思へとや庭の萩によすがら通ふ鹿の聲哉
 六百五十二番 左 持宮内卿 右 通光卿
 六〇淺茅原下葉片しく袖の上に露おきかふる野べの秋風
 七〇秋は唯萩の葉すぐる風の音に夜深く出づる山端の月
 八〇寺々の入相の鐘に日は暮て外山の月に鹿ぞ鳴なる
 六百五十三番 左 讚岐 右 勝釋阿
 九〇一時の花とみれども女郎花秋の契りを世々に結ばむ
 一〇紫の色をばのこせ藤ばかま露は風にくだけちるとも
 〇九 月清みゆらの港の濱千鳥夜深き空の霜になくなり
 六百五十四番 左 持小侍從 右 俊成卿女
 一〇 渉なさを共にみむとや思ふらむあだなる露に宿る電

三九 よしさらば必人にはあはず今夜の月にねむ物かは
 三九 友誘ひ浦田の霧に飛ぶ雁はうのはの天空に歸る玉章
 六九五十五番 左 隆信朝臣 右 丹後
 四九 秋をへて眺めぬよはもなき物を猶珍しくすめる月哉
 五九 野べならで柵む鹿はなけれ共露にをふれす宿の秋哉
 六九五十六番 左 有家朝臣 右 越前
 七九 秋きては宇治の橋守なれも又夜渡る月を哀とや思ふ
 八九 思ひこし秋の哀を数々にかけ列ねたるかりの玉づき
 六九五十七番 左 保季朝臣 右 定家朝臣
 〇〇 浦風に鹽路の末も霧はれて月になり行くしだの浮島
 一〇 松蟲の聲をとひ行く秋の野に露尋ねける月の影かな
 二〇 六九五十八番 左 良平 右 通具朝臣
 三〇 野べみればちぐさの花は灰にておく白露に有明の月
 四〇 雲はるゝ空も一つに清見瀉浪にかさなる秋の夜の月
 五〇 松が枝に喰しく當るよの嵐身にしむ色を聞忍つゝ
 六〇 相坂のせきの岩角引きつれて影をならぶ望月の駒
 七〇 秋といへば濱松がえの手向草わりなき露に宿る月哉
 八〇 水面に清くも宿れ山端をさやかに出るしかの月影
 九〇 六六十一番 左 顯昭 右 勝雅經
 〇〇 さらぬだに秋の哀にたへぬ身を夕霧隠れ鶉なくなり
 一〇 まくす原露に光をさしそへて玉まく秋の夜の月
 二〇 横の戸を曇もやらず過ぬ也よ渡る月に時雨兼つゝ
 三〇 六六十二番 左 女房 右 勝家長
 四〇 野べに置る露をば露と眺めきぬ花なる玉か雁の涙か
 五〇 山里はさやけき月もしかの音も峯の嵐の心なりけり
 六〇 六六十二番 左 左大臣 右 三宮

一 秋なればとて社藩す袖の上を物や思ふと月は問けり
 二 秋のよの月吹く風に霧晴て空にぞすめるさ鹿の聲
 三 三室山さほふ木葉に紛ひつゝに降雨も夜は知れず
 四 六六十三番 左 前権僧正 右 内大臣
 五 故郷の蟲の涙やおきつらむ庭もまがきも野べの白露
 六 いとせめて名残の空もわりなきに秋は宛ら有明の月
 七 月をまつ夕より先晴初めてよすがら清き東雲の空
 八 六六十四番 左 公繼卿 右 忠良卿
 九 鹿のねはあろす嵐に類ひけり麓の野べに妻や立らむ
 一〇 積りけるいくよの雪に眺むれば横のは白く照す月影
 一〇 松風も岸打浪も長閑にて影をや月の千里にはしく
 二〇 六六十五番 左 公經卿 右 兼宗卿
 三〇 深きよの心の内を顯して霧まの月にをじか鳴くなり
 四〇 夕暮は萩の上葉に風さえて花に宿る蟲のこゑなり
 五〇 千々に思時とは月の宿れ共せばく袖は武藏野の露
 六〇 六六十六番 左 季能卿 右 通光卿
 七〇 草葉にもあらぬ袖さへ萎れけり露は定めぬ置所かな
 八〇 初雁はかへりし雲の跡わけて又都にも思ひたちけり
 九〇 雲路より澤べを頼む初雁のよはの涙に時雨おつ也
 〇〇 六六十七番 左 宮内卿 右 釋阿
 一〇 谷の戸はまだ明やらぬ霧の内に旭は影にけり鳥
 二〇 花も露もいかに心を碎けて秋は野分の吹始めけり
 三〇 秋山の寂しき庵に人はこで四方の嵐を鹿ぞわぶなる
 四〇 六六十八番 左 讚岐 右 俊成卿女
 五〇 君が代の秋の空まで眺めける契うれしき月の影かな
 六〇 廻り馴ぬる空の秋の月さてもあかぬ光そひけり
 七〇 みるからに涙ぞ曇る宿の月寂しとや思ふ柴の扉を
 八〇 六六十九番 左 持小侍 右 丹後
 九〇 朝毎の露には何のおくならむ我袖のみぞ其と知るゝ
 〇〇 憂世とは思ふ物から鈴蟲の振捨難き身をいかにせむ
 一〇 沖つ風浪や吹らむしがの浦に照月影の磯にさやけき

六六七十番 左 隆信朝臣 右 越前
 板受もる月は都に變らねど鹿なく野べに秋風ぞ吹く
 〇〇 様々に秋の哀はつくせども萩ふく風にしく物はなし
 一〇 獨のみ年ふる軒の忍草きてとふものは風の音のみ
 二〇 六六十七番 左 有家朝臣 右 定家朝臣
 三〇 すすまの浦に侘と答し跡もなしよなく月の影はとへ共
 四〇 思入れぬ人の過行く野山にも秋は秋なる月や澄らむ
 五〇 水無瀬川眺むる空のよはの月清き早瀬に影宿し鳥
 六〇 六七十二番 左 保季朝臣 右 通具朝臣
 七〇 長き夜の哀をいかにみたりや守稻葉の露に月を宿して
 八〇 高砂の尾上の秋よいつととも松を拂はぬ風ならぬ共
 九〇 千度うつ遠路の里のさよ衣旅ねの夢に結はれつゝ
 〇〇 六六十三番 左 良平 右 家隆朝臣
 一〇 思ひやるむかしの秋の哀まで今夜の空にみする月影
 二〇 九四しがの海や鴈照浪を見渡せば月にいざよふ蟹の釣舟
 三〇 影清き月松がえに風過て汀に浪をかぬよぞなき
 四〇 六六十四番 左 具親 右 勝雅經
 五〇 曇るといふ思ひばかりそ更科や娘捨山も月は入りけり
 六〇 葛城や高間の峯に雲はれてあくるわびしき有明の月
 七〇 誰か又斯るみ山の横の葉に影漏り兼る月を見らむ
 八〇 六六十五番 左 顯昭 右 寂蓮
 九〇 都へはなど出でやらぬ逢坂の關に入りぬる望月の駒
 〇〇 涙をばよその袂になしはてゝ聲をば鹿の己が物とは
 一〇 小萱原靡く夕の柴の庵に照すともなき稻妻のかけ

千五百番歌合卷第十 秋三 御判折句歌

九五 此頃は鹿こそはなけ山里の寂しくむすぶ柴の庵に
 六六十七番 左 左大臣 右 内大臣
 〇〇 蟲のねは橋の落葉に埋れて霧のまがきに村雨ぞふる
 一〇 白玉か何ぞと問へば女郎花露のさえつゝ萎れ臥ぬる
 二〇 昔思ふしがの都の山風に里あれぬとや鹿も鳴らむ
 三〇 六六十八番 左 前権僧正 右 忠良卿
 四〇 わたつ海の秋なき浪の花に猶霜おく物はよはの月影
 五〇 明石がた浦風さびし月影の浪にさえ行くうす霧の空
 六〇 下葉ふく森の秋風かせさえて月すむ露に通ふ袖哉
 七〇 六六十九番 左 公繼卿 右 兼宗卿
 八〇 しのゝめの曉露や染つらむよのまに變る萩の上の色
 九〇 六の原空行く月をいかなれば我物顔に見する山の色
 〇〇 六七十番 左 公經卿 右 通光卿
 一〇 長岡や田づらの庵のあれまくに寝覺誘ふ鳴の羽根搔
 二〇 七の比は尾上の鹿の聲により麓の里に寝覺がちなる
 三〇 〇七の海にきつゝも訪ひこ山風に寂くも有る號
 四〇 六八十一番 左 季能卿 右 釋阿
 五〇 身を碎く心の色は夕まぐれ千草の花に顯はれにけり
 六〇 七しめきて今やと思ふ秋山の蓬がもとに松蟲のなく
 七〇 武藏野や下葉露けき萩がえによなく秋の鹿や鳴覽
 八〇 六八十二番 左 宮内卿 右 俊成卿女
 九〇 雲かゝる生駒が嶽に月おちて三輪の檜原に猿鳴く也
 〇〇 七さらでだに慰むものか長き夜に月より外の獨寝覺は
 一〇 七ねも遣ずさぞな深山に目覺つゝ夜渡る月を忍秋哉
 二〇 六八十三番 左 讚岐 右 丹後
 三〇 八詠めつる有明の月は傾きて山より出づるさを鹿の聲
 四〇 九秋風にむら雲はるゝ月みれば心の中も涼しかりけり
 五〇 〇八東雲や刈田の面に風すぎて月にむれたる鴈の聲哉
 六〇 六八十四番 左 持小侍 右 越前
 七〇 八霧深き難波の浦のもかり舟いとて葦間をよせや煩ふ

我さへに涙ぞおつる秋風にしのびもあへぬ蟲の聲々
契あれや常世の雁の山を分て都の空に群てきに鳥
六百八十五番 左 隆信朝臣 右 定家朝臣
さきてみれば寂かるべき家かかは月も住けり秋の山里
高砂の尾上の鹿の聲たてし風よりかはる月の影かな
岡のべや軒もる月の隔て哉夜渡る雲に時雨過つ
六百八十六番 左 有家朝臣 右 通具朝臣
篠簾垂秋は懸ても横の戸をさいで有明の月をみる哉
雁もこばまてと契をすが原や伏見の床に衣うつなり
松風に霧晴ぬらし山のべや影さへ渡る月ぞ宿れる
六百八十七番 左 保季朝臣 右 家隆朝臣
明ぬるかまの浦風音づれて招く尾花に鳴の羽根搔
泊瀬山古河のべも霧はれて月にぞたてる二もの杉
すまの關さくや關守遙々と通ふ千鳥の月になく也
六百八十八番 左 持良平 右 雅經
憂身には月を見だにかひぞなき秋の心を袖に残して
有明も秋ぞ名残は大はらや月ををしほの山のはの空
己のみ鳴尾の松の潮風にしづえにかゝる浪の音哉
六百八十九番 左 具親 右 寂蓮
思ひ侘ぬあれまをもし菅原や伏見の里の秋風の比
初かりのさこゆる空をながめても心にかはる春の曙
松が枝にけさや風の弱るらむ道に聲の遠かり行く
六百九十番 左 顯昭 右 家長
結びおく霜とはいさや岩代の濱松かえにすめる月哉
都思ふ月もあかしの浪の上に夜の心の長閑からずも
眺ればみるめの浦の松の風嶮しくもあるよはの聲哉
六百九十一番 左 女房 右 内大臣
秋の田の篠におしなみ吹く風に月もて研く露の白玉
露ふかき道のさゝ原分來てもかゝる袂を哀とはみよ
み山べや木々の木葉を宿も訪ふ寂き嶺に時雨過つ
六百九十二番 左 左大臣 右 忠良卿

かち人の道をぞおもふ山城のこはたの里の秋の夕霧
天つ空よもの雲霧消えはてし嵐にのこる秋のよの月
此比は榎の紅葉の立枝だに夜置く露も霜結ぶらし
六百九十三番 左 前權僧正 右 兼宗卿
霧はれぬ倉橋山の秋かせに音にや月をさく渡るらむ
心有む人とも見ばやと思より云ぬに惜きよはの月哉
小倉山紅葉吹おろし吹風の松につれなき暮方の聲
六百九十四番 左 持公繼卿 右 通光卿
行く人の裳裾も著し秋といへば朝おく露の深草の里
浅茅生や吹きくる風を便にて光を散す露の月かげ
岡のべや檜の落葉に時雨ふり仄々出づる遠山の月
六百九十五番 左 持公繼卿 右 釋阿
秋をへて幾夜もしらぬ故郷の月は主にすみ代りつ
あれ渡る秋の庭こそ哀なれまして消えなむ露の夕暮
身に占て眺むる頃の宿にしもさも生憎鹿の聲哉
六百九十六番 左 季能卿 右 俊成卿女
秋の例をかひく諸人の行きあふ坂のちも月の駒
葛のはふ真垣の霧に鳴く鹿も恨み顔なる風の音かな
松にふく風こそあらね霧の中に霞みし春の月の俤
六百九十七番 左 宮内卿 右 丹後
忘れずは又こむ秋の空までと雲にたのむる有明の月
秋の夜の月もり明す柴の戸をととふものは峯の松風
葛のはに物怨めしく風過て月は浅茅に影宿しけり
六百九十八番 左 讀岐 右 越前
秋の月いかに待出て眺ればさやけき影の先曇るらむ
廣澤の池しもいかに昔より月見夜はのさかと成けむ
いなば山嶮しくも非ぬ松風の曇らぬ月の影拂ふ也
六百九十九番 左 小侍從 右 定家朝臣
常よりも月に心のすむ夜哉斯てや人の雲にいりけむ
七心のみもろこしまでも浮れつゝ夢ぢに遠き月の頃哉
草枕もりくる月に怨むなりけさたつ山の末の白雲

七百番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣
さのみやは月に臥猪のいん安みならぬ物を秋のよなく
影宿す露のよすがの秋くれれば月ぞ澄けるをの篠原
夜はの秋すむ月影の影清しよさの浦曲の東雲の空
七百一番 左 有家朝臣 右 家隆朝臣
秋のよは月見よとてや長月の有明にさへ成にける哉
忘れずや昔三笠の山の月猶ふる里にめぐりあふとは
みるからに影ぞ返行く笹の庵夜床の月の霜の狭籠
七百二番 左 持保季朝臣 右 雅經
鳴く鹿の聲より落つる夕露に萩の下葉の所せきまで
照射せし端山繁山忍びきて秋にはたへぬさを鹿の聲
大方の眺むる宿の下萩もほに出つゝぞ時を待ける
七百三番 左 持良平 右 寂蓮
雁音にいざことよはむこしちより都に向ふ旅の心を
空近てすむべき月を山端に星の光のかねてみすらむ
此頃は鹿も月にや契りけむよがれぬ露の東雲の空
七百四番 左 具親 右 家長
人はいさ苦しき物と知ぬればよそには聞じ松蟲の聲
秋の夜は蟲の音のみと思ひしに月影繁き淺茅生の露
よはの月空さえ渡る山風に里にも秋の霜や置らむ
七百五番 左 持顯昭 右 三宮
岩がねにたかばかりしき眺れば吉野の嶽に月傾きぬ
折しもあれ獨ながむる大空の有明の月に初雁のこゑ
庭の松間もる月を訪からに千々に物思ふ風の音哉
七百六番 左 女房 右 忠良卿
小山田の稲葉片より月さえて穂向の風に露亂るなり
夜さむなる松の風をとひ顔に遠里をのに衣うつなり
夜はの秋無悲しき蟲のねも風の氣色も月の光も
七百七番 左 左大臣 右 兼宗卿
千度うつ砧の音を算へても夜を長月の程ぞしらるゝ
岩まよりもりくる水に宿しても心計りの月は眺めつ

北よりや主定らぬ玉章を懸つゝ雁の月にきつらむ
七百八番 左 前權僧正 右 通光卿
我門のわさ田假寝の草の庵に夢路移るふ神なびの杜
都人とへかし秋の花盛なさけこめたる霧のまがきを
わくらばに里訪人の便あらば夜枯ぬ月に忍と答よ
七百九番 左 公繼卿 右 釋阿
吉野のさき山際に待月は十市の里の陰よりぞみる
秋の夜は光を殊にそへよとや月の都に定めおきけむ
みほの浦や清見が關に影宿す月は旅寝も變ざり鳥
七百十番 左 持公繼卿 右 俊成卿女
あかで入る月に恨や残らまし山のはにぐる夕也せば
色變る露をば袖に置迷ひうら枯れて行く野への秋哉
うらがれの下葉色づく秋萩の露ちる風に鶉鳴くなり
押かやし眺むる秋を忍てもこぼるゝ露の所せき迄
七百十一番 左 季能卿 右 丹後
秋からの月の光か露故の秋の哀れいかにながめむ
いかなれば霞にきえし雁音は月の秋しも契置きけむ
水きよき清瀧川の月影をよるとはみえず東雲の空
七百十二番 左 宮内卿 右 越前
事しげき都の空の月にだに秋は詠のつきぬとぞきく
草深み道ふみ惑ふ故郷にあれども月の影のみぞすむ
萬葉もさぞな怨むる野べにしも片へ露けく契露哉
七百十三番 左 讀岐 右 定家朝臣
哀なる山田の庵の寢覺哉いなばの風にはつかりの聲
紅葉する月の桂に誘はれて下の嘆きも色ぞうつろふ
物思へば亂て露ぞ散紛ふ夜はに寢覺を鹿の聲より
七百十四番 左 小侍從 右 通具朝臣
暗き夜の闇に迷はむ道にても今夜の月や思出づべき
深草の里の月影寂しさもすみこしまの野への秋風
嶺の月清き岩間に宿りきて小浪凍るしかの山の井
七百十五番 左 隆信朝臣 右 家隆朝臣

秋の夜は雲も心や有明の傾ふくまでもすめる月かな
月みばと頼めは置し人はこで淺茅が露に松蟲ぞなく
日敷への外山の露にしほる袖きつゝ慣にし唐衣哉
七百十六番 左持有家朝臣 右 雅經
身爲に急ぐとならば唐衣重ぬる夜は打もれなむ
秋風に鶉なく野の夕まぐれなき心まで哀れをぞしる
忘れずよ清見が浦の楫枕袂に浪をしばりわびしも
七百十七番 左持保季朝臣 右 寂蓮
嘆きくらすよもぎが袖のさよ枕片しく袖に松蟲の聲
み山出し山路の月の影のみぞ送る附ても友に成ける
峯の月眺ねる宿にしもさよのね覺を鹿ぞ訪ける
七百十八番 左 良平 右 勝家長
心さへはるゝまぞなき霧の中に眺め侘ぬる秋の山里
蟲のねを萩吹風や誘らむをよくとすれば遠ざかる也
武藏野や下葉の露の夜すがら清くも月の影宿す覽
七百十九番 左持具親 右 三宮
徒にねぬ夜の敷となりけり月ならぬ頃の鳴の羽搔
草枕なみだの露は秋風の言とふにしも落ち増りけり
女郎花靡く風をや慕ふらむ稍白露も打時雨れつゝ
七百廿番 左持顯昭 右 内大臣
眺むれば千々に物思ふ是ぞ此心づくしの秋のよの月
あくがれて今はと思ふ山里に澄慣にける夜はの月哉
眞葛原玉まく露もおきやそふ眺むる儘の東雲の空
七百廿一番 左 女房 右 兼宗卿
めぐり行く秋やほもとの秋の空月ぞ昔のしがの古里
眺むれば月浪影さえてあかしの濱に積る白雪
水の面に峯の松風宿りきてさぞ住の江の東雲の月
七百廿二番 左 左大臣 右 通光卿
裙野ゆく衣にすれる月草の移り易くも過ぐる秋かな
雲はらふ嵐を空に先だてて秋とも著くすめるよの月
すまの秋空はあく共残れとや夜渡る月を慕ふ浦風

七百廿三番 左 前權僧正 右 釋阿
露の染めて色々にす紅葉の又色々に露をそむらむ
秋の月ひるとは見えさえ寒し雪と思ふは庭の白露
寂さは蟲明のせみの潮風に夜深き月にしく物ぞなき
七百廿四番 左 公繼卿 右 俊成卿女
浪のうつ玉の浦わのあら磯に光を砕くよはの月かな
月をのみ伏見の里の秋の暮松風ならでとふ人もなし
横の戸は月に任て夜や明す桐の葉傳ひ風は吹つゝ
七百廿五番 左 公經卿 右 丹後
衣うつみ山の庵のしほりもしらぬ夢路に結ぶ手枕
さ夜ふけて砧の音の寒ければ衣雁がね空に鳴くなり
武藏野や澄ける月を吹風に夜枯ぬ露や下葉染らむ
七百廿六番 左 季能卿 右 越前
遙々と月みる空にあくがれて心にこゆる小初瀬の山
袖の上に曇らぬ夜はの雨過ぎて月は隈なく住吉の里
七百廿七番 左 持宮内卿 右 定家朝臣
一衣手は秋の山田のそぼつとも月返る夜の露は拂はじ
置く露本荒の小萩隙をなみ枝もとをよに澄る月哉
七百廿八番 左 持讚岐 右 通具朝臣
終夜置居る露のいかなれば草の葉毎にぬるとみゆ覽
一世中に靡きおきふす下萩も末こす風に露は落ちけり
音にきくなるとの浦の潮風に仄かに通ふ友衛かな
七百廿九番 左 小侍從 右 定家朝臣
眺むるに傾く月ぞ怨めしき我は斯こそ入もやられぬ
心なき身をさへ更に惜む哉にはわたり秋の夕暮
眺むれば庭の淺茅を拂ふ風影うち靡く月の影かな
七百卅番 左 持隆信朝臣 右 雅經
明けぬるか外山の原の秋の月傾く空に鳴のはねがき
夕暮は孰くをいかに眺まし野には山にも秋風ぞふく

水の面に流れもやらず宿れ月さほの河風欄はなし
七百卅一番 左 持有家朝臣 右 寂蓮
秋の色を染る無名や立田姫常磐の山は鹿のみぞなく
なごりなく峯の嵐に雲落ちてのきばの空に有明の月
外山風木々の木葉を拂ふらし雁音塞く積る秋かな
七百卅二番 左 持保季朝臣 右 家長
暮毎の露にや色の變るらむ時雨はまたじ庭の淺茅生
秋の夜の野べに變ぬ袖の露ありとや爰に蟲の鳴らむ
窓近くたつきの音や柴の戸に通ふ山人爪木取るらむ
七百卅三番 左 持良平 右 三宮
衣うつ賤が伏屋の板ま粗み砧のうへに月もりにけり
草結ぶ秋の野原の假寝には月にぞかはすさよの手枕
都人などかとひこぬ山の月さすや庵の椎しばの門
七百卅四番 左 持具親 右 内大臣
大方のうきにかへたる寢覺哉里わく物をさ鹿の聲
風よけば過行く秋の立田山よはに紅葉や獨らるらむ
閨の内にはさす月影は目覺つゝ片しく袖の露拂ふ也
七百卅五番 左 顯昭 右 忠良卿
昔みし月は哀やまさりけむ面影にさへぬるゝ袖かな
秋風をくるゝ夜毎に身にしめて頼めぬ誰を松蟲の聲
七百卅六番 左 女房 右 通光卿
同じくば哀れしられむ人もがな鹿と蟲との秋の夕暮
衣うつきぬたの音に賤のめがいそぐ心や夜はの秋風
よはの月敷津の浦を見渡せば岸の松がえ拂ふ秋風
七百卅七番 左 左大臣 右 釋阿
秋風にはし鷹ならすかた岡の柴の下草色づきにけり
人とはいかに語らむ秋の山松のあらしに有明の月
時雨して晴ぬるよはの野べの露を且々袖に散す秋風
七百卅八番 左 持前權僧正 右 俊成卿女
露は野べわが夕暮の袖を又雁の涙のそめて過ぎける

夜をかきね月影さむみ暮よもぎが本に聲よわるなり
月をまつ夕に靡く空の雲よはに拂へ木々の秋風
七百卅九番 左 公繼卿 右 丹後
隈もなき月をしみれば秋夜も程社無ねぬに明ぬる
紅葉は染むる時雨もある物を何故月の色をそふらむ
物思はし身にしみ返れ千々にのみよはを詠て忍ぶ月影
七百四十番 左 公經卿 右 越前
玉鐙の行手の袖のてらまで紅葉をあらふ雨の夕暮
なぐさまぬ心に月のめぐりきて昔にかへる娘捨の山
村雨の風打ち靡く下萩にかごとがましく露結ぶ袖
七百四十一番 左 季能卿 右 定家朝臣
月みれば頓て袂のぬるゝかな心の玉や水をとらむ
秋とだに忘れむと思ふ月影をさも生憎にうつ衣かな
山路よりさすか月影柴の門もるも寂しき霧の離に
七百四十二番 左 持宮内卿 右 通具朝臣
夜々をへて聲遠ざかる葦栖はおなじすみかなれども
あはれなる時しも秋の寢覺かな妻とふ鹿の明方の聲
七百四十三番 左 持讚岐 右 家隆朝臣
渡の原露に漕入る藻刈舟關とはしるやすまの浦風
七百四十四番 左 小侍從 右 雅經
人のはみな心の外の秋なれやわが袖ばかりおける白露
秋の風ふきにけらしな外山なる柴の下草色變るまで
七百四十五番 左 持隆信朝臣 右 寂蓮
眺むれば身には心の止らぬに誘ひもしてよ秋夜の月
いは代の野べの下草吹く風に結ばれたる松蟲の聲
鳴渡る雁の涙に統ぶ露まなくもちるか葛のうら風
七百四十六番 左 有家朝臣 右 家長

色かはる端山が峯に鹿なきて尾花吹こす野への秋風
今更にまくずがはらをわけよとや恨顔なる松蟲の聲
松が枝に曇らで空も住吉や通ふ浪風に月は澄けり
七百四十七番 左 勝保季朝臣 右 三宮
七さ夜ふけて鳩吹く山の秋風に村雨過ぬ袖にしぐれて
七衣うつをちの里より吹風に遙々きたるつちの音かな
七さの庵夜深き月の影寒し妻とふ鹿の通ふ寢覺に
七百四十八番 左 良平 右 勝内大臣
いづれともみえぬ離の月影に匂ひにぞわく菊の白露
七朝ぼらけまさきを山に霧こめてうちの川長舟呼ふ也
七女郎花ささける野べに露落て夜深き風に鳴立の也
七百四十九番 左 具親 右 勝忠良卿
七こぬ人をまつ津守の浦風に遠里をのほ衣うつなり
七柴の戸に木葉鹿のね誘ひきて見せも聞せも山嵐の風
七此頃の野にも山にも晴曇り通ふ時雨を月に怨むる
七百五十番 左 持昭 右 兼宗卿
間ばやな詠る儘にあくがる心のほては月や知らむ
七有明のあけ行く空の月みれば姿ばかりも哀なりけり
七治まれり猶も絶せじ敷島や大和島根も動なき世ぞ

千五百番歌合卷第十一 秋四 判定家朝臣

七百五十一番 左 勝女房 右 釋阿
秋の蟲の手玉もゆらに織機を誰きてみよと野への夕暮
八月は是哀を人に盡させて西に遂にはさそふなりけり
七百五十二番 左 持左大臣 右 俊成卿女
秋は猶葛のうら風恨てもとはすかれにし人ぞ戀しき
七人とふ人も風吹きそふ秋はきて木の葉に埋む宿の道芝
七百五十三番 左 勝前權僧正 右 丹後
脆く見し霜と露との經緯は風のありける錦なりけり

夕まぐれ野への淺茅を分行けば露なる風に鶉鳴なり
七百五十四番 左 公繼卿 右 勝越前
ははれ曇り定なきよの月影にくめちの神の心いかにぞ
九月をのみ見とはなきをすまの蟻の秋の幾夜をねて明す覽
七百五十五番 左 勝公繼卿 右 定家朝臣
紅の色にぞ波も立田川紅葉のふちをせきかけしより
七獨ぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影
七百五十六番 左 勝季能卿 右 通具朝臣
あなしふく灘のしほちに雲消えて浪に極る月の影哉
七風も嵐になればとこの山夕の鶉うらみてぞ鳴く
七百五十七番 左 持宮内卿 右 家隆朝臣
秋は唯草に任せて蟲の音のあれたる庭と人は見とも
七鐘のこゑ鳴の羽音もあはれなり野守の霧の明方の空
七百五十八番 左 勝讚岐 右 雅經
夜と共になだの鹽やに暇なみ浪の夜さへ衣うつらむ
七何と斯く拂ひもあへず結ぶらむ袂は露のおき所かは
七百五十九番 左 勝小侍從 右 寂蓮
よしさらば眺むる月にすけ心やがて西への道に伴へ
七曉の鳴たつまでもなかりけりいなばに籠る宿の夕暮
七百六十番 左 隆信朝臣 右 勝家長
潮風や秋は夜寒になるみ濁あまの苦屋も衣うつなり
七秋風はふかの草葉もなき物を啣ち顔なるかやが下折
七百六十一番 左 持有家朝臣 右 三宮
時雨には色もかはらぬ高砂の尾上の松に秋風ぞふく
七秋やをしきくれ行く空や哀なる思ひ定めよ蟲の聲々
七百六十二番 左 保季朝臣 右 勝内大臣
山深き秋をみるにも思ふかなこれより奥の夕暮の空
七うら風の夜寒なるらむ松島や蟻の苦屋に衣うつなり
七百六十三番 左 勝良平 右 忠良卿
紅葉ちる岩田のをの、柞原風にぞはる、秋のよの月
七浦近き葦屋の里に日は暮れて浪路の霧にあまの漁火

七百六十四番 左 具親 右 兼宗卿
大方の秋のけしきを此は唯思ふまゝなるさを鹿の聲
七事毎に悲しき秋としりながらさても誰か恨果たる
七百六十五番 左 顯昭 右 勝通光卿
秋風に思遣りつゝ打衣聞音さへに身にはしみけり
七松蟲の聲する方に宿からむ蓬が門の住ひなりとも
七百六十六番 左 勝女房 右 俊成卿女
一寸鏡みるめの浦のよはの月氷をよする秋の潮かせ
七一月みばとたのみし秋の終夜又うらめしくうつ衣かな
七百六十七番 左 持左大臣 右 丹後
露の袖しもの狭筵しき忍ぶ方こそなけれ淺茅生の宿
七いかなれば移ふ色とみせながら散てふとを白菊の花
七百六十八番 左 持前權僧正 右 越前
立田川袖の紅葉にせきかねて唐紅のしたとよむなり
七波の上に積れる雪を眺れば沖の白洲に訝ゆるよの月
七百六十九番 左 勝公繼卿 右 定家朝臣
寢覺する九月のよの床寒み今朝ふく風に霜や置らむ
七いかにせむきはふ木葉の風にたえず物思ふ九月の空
七百七十番 左 持公繼卿 右 通具朝臣
紅葉の色よりはやく行く水のそこの梢にうつる秋風
七弱り行く蟲の音にさへ秋暮て月も有明に成にける哉
七百七十一番 左 季能卿 右 勝家隆朝臣
いさいかに深山の奥に萎れても心知りたき秋夜の月
七夜やふくる雲居遙に鳴く雁も一つになりぬ衣うつ聲
七百七十二番 左 持宮内卿 右 雅經
外山迄深山の霞分過ぎてまさ木のかづら秋風ぞふく
七よな／＼は宿り慣にし月影も枯行をのゝ淺ぢふの露
七百七十三番 左 讚岐 右 勝寂蓮
磯ちかきあまの苦屋の夕暮に霧のまがきを洗ふ白浪
七秋をしる袖は恨の露ながら萩の下葉を哀れと思ふ
七百七十四番 左 小侍從 右 勝家長

ひとりねの枕の下の蟋蟀訪らふ聲はしのばざりけり
七蟻の袖いかに干敢へて松島や小島が磯に衣うつらむ
七百七十五番 左 勝隆信朝臣 右 三宮
秋ふかき深山の庵々の習ぞときよとも悲し峯の松風
七行通ふ人だに有らば問てまし山路の菊の千代の景色を
七百七十六番 左 有家朝臣 右 勝内大臣
あき風に草のやどりやあれぬらむ枕になる、葦かな
七今こむの空だのめをや九月の有明方の松むしのこゑ
七百七十七番 左 勝保季朝臣 右 忠良卿
くれかゝるをの、草ぶし風過て結ぶ枕に鶉鳴くなり
七たが栖いづくの秋を尋ねまし野べも山邊も眺侘ぬる
七百七十八番 左 勝良平 右 兼宗卿
嵐まで紅ふかくみゆる哉わたるこすゑに木葉ちる頃
七長月の九日毎に逢ふならば八重はなどさく白菊の花
七百七十九番 左 持具親 右 通光卿
たれか又山路の末に掬ふらむ千年を流す菊のした水
七色ふかくそむる梢もあるものを花に移ろふ菊の白露
七百八十番 左 顯昭 右 勝釋阿
なき増る己が聲にや葦深けゆくよはの程をしるらむ
七ふる郷に獨りも月をみつるかな姨捨山を何思ひけむ
七百八十一番 左 勝女房 右 丹後
玉はこの道の芝草うちなびきふるき都に秋風ぞふく
七水上に峯のもみちやちりぬらむ色々になる瀧の白糸
七百八十二番 左 持左大臣 右 越前
寝がてに庵もる田子の假枕夜半に奥手の露ぞ隙なき
七夕まぐれ梢を拂ふ風の音にさびしくなりぬ秋の山里
七百八十三番 左 勝前權僧正 右 定家朝臣
紅葉を夜の錦になすものはまだみぬ山の嵐なりけり
七さを鹿のふすや叢うら枯て下もあらはに秋風ぞふく
七百八十四番 左 公繼卿 右 勝通具朝臣
衣うつ賤が袖にや通ふらむ寢覺の床のあかつきの露

○暮れて行く秋の契は浅茅原末葉の露や結びはつらむ
 七百八十五番 左 勝公經卿 右 家隆朝臣
 一昨日みてけふの風の程の風に綾なく脆き峯の紅葉
 二大方の野原の花はうつろひて風にしられぬ庭の白菊
 七百八十六番 左 持季能卿 右 雅經
 三長きよを思ひあかして朝顔の世の理を人にみすらむ
 四暮方の木葉に紛ふ秋の雨の窓うつ程によは成にけり
 七百八十七番 左 勝宮内卿 右 寂蓮
 五そらも海も一つにかよふ緑かな月さへ浪に有明の色
 六尋つる楡の立枝や其ならむ霧のあなたにも鳴なる
 七百八十八番 左 持謙岐 右 家長
 七頼め置し人のゆくへを松蟲の聲計して秋ぞふけ行く
 八吹からに涙も脆き秋風の木々の紅葉に懸らずもかな
 七百八十九番 左 小侍従 右 三宮
 九鳴子引鳥羽田の面の夕まぐれ色々に社風も見えけれ
 〇影やすす峰のしら菊さきしより庭に秋ある谷川の水
 七百九十番 左 隆信朝臣 右 勝内大臣
 一女郎花唯一枝の名残さへ今はあらしの風わたるなり
 二秋きては夢の枕やよそにみむ月夜好しとて打もふさすは
 七百九十一番 左 有家朝臣 右 勝忠良卿
 三木枯の露ふき結ぶ草村に秋もふけぬと蟲ぞわぶなる
 四眺れば空に心ぞつきぬべき秋に知られぬ夕暮もがな
 七百九十二番 左 持保季朝臣 右 兼宗卿
 五開分かぬ木葉は庭の時雨にて鹿のねすさむ長月の暮
 六類なき八隅の岡の紅葉はみぬより色の程ぞしらるゝ
 七百九十三番 左 持良平 右 通光卿
 七ちり積る木葉凌ぎてさを鹿の立田の山に秋風ぞふく
 八枝かはす松の緑の一しほも紅葉の秋ぞ色まさりける
 七百九十四番 左 具親 右 釋阿
 九今日迄はまだ露のみや小倉山下葉より社色附にけれ
 〇衣打音こそあやな頼まるれ夜はの枕もさゆる霜夜は

七百九十五番 左 顯昭 右 勝俊成卿女
 一紅葉をそむるのみかは常磐木の色も時雨に顯れに鳥
 二秋山の麓の小田のかり庵に紅葉を分て月ぞもりける
 七百九十六番 左 持女房 右 越前
 三秋山の松をば凌げ立田姫をむるにかひもなき縁なり
 四かよひこし枕に蟲の聲たえて風に秋の暮ぞきこゆる
 七百九十七番 左 勝左大臣 右 定家朝臣
 五苔の上に嵐ふきしく唐錦たゞまくをしき森の蔭かな
 六岩代の野中さへ行く松風に結びそへつる秋のはつ霜
 七百九十八番 左 持前權僧正 右 通具朝臣
 七秋はいぬと小倉の山に鳴鹿の聲の内にや時雨初らむ
 八干間なき袖をば露の宿りにて心の秋よいつ變るべき
 七百九十九番 左 公繼卿 右 勝家隆朝臣
 九なべて世の哀も秋の風そよぐ夕暮よりや思初むらむ
 〇小倉山西こそ秋と尋ねれば夕日に紛ふ嶺のみみぢば
 八百番 左 持公繼卿 右 雅經
 一霜の下に搔籠りなば草の原秋の夕もとはじとやさば
 二秋ふかき松に嵐の立田山よその梢をまづはらふらむ
 八百一番 左 勝季能卿 右 寂蓮
 三鹿のねも残らぬのべのの小萩原離になせる古郷の秋
 四秋深き野への草葉の色よりも鳴枯らしたる松蟲の聲
 八百二番 左 持宮内卿 右 家長
 五ひたぶるにみぬ人戀し秋風にやゝ露さむし九月の末
 六眺めやる緑の奥の紅葉故思はぬ松を手折りつるかな
 八百三番 左 勝謙岐 右 三宮
 七秋の暮風の山をすぎゆけば袖にこきいるゝ峰の紅葉
 八蟲のねの枯々になる草の上に秋かけておく庭の初霜
 八百四番 左 勝小侍従 右 内大臣
 九よそへつる誰の菊は移るはでや人の心の秋をしる哉
 〇長らへば又もさこそと思へ共戀しかるべき秋の空哉
 八百五番 左 持隆信朝臣 右 忠良

一眺めてもいかに忍ばむ紅葉に時雨降ぬる秋の日数を
 二時雨ふる秋にはあへず葛のはの恨は色に出にける哉
 八百六番 左 勝有家朝臣 右 兼宗卿
 三みる度にをらまほしきは唐錦立田の山の紅葉也けり
 四染渡す時雨の雨は乾くとも猶もみち葉に風を厭はむ
 八百七番 左 保季朝臣 右 勝通光卿
 五萩原や秋も末葉にうら枯て思へど弱るかせの音かな
 六いり日さす麓の尾花打ち靡きたが秋風に鶉なくらむ
 八百八番 左 良平 右 勝釋阿
 七枯々に野への千種もなりはてゝ又こむ秋を松蟲の聲
 八立田姫立田の山は我名とや紅葉も殊に思ひそめけむ
 八百九番 左 持具親 右 俊成卿女
 九露さゆる秋の末葉の浅茅原蟲のねよりぞ枯始のける
 〇眺めつゝさへ行く袖に有明の月より結ぶ秋の霜かな
 八百十番 左 顯昭 右 勝丹後
 一紅葉に魚れ合てもみゆる哉繪島が磯のあけのそば舟
 二鳴止ぬ秋こそあらめ葦己がねさへぞ弱りはてぬる
 八百十一番 左 勝女房 右 定家朝臣
 三けふこそは秋の日數も異機あやなし名のみ長月の空
 四冬はたゞあすかの里の旅枕おきてやいなむ秋の白露
 八百十二番 左 持左大臣 右 通具朝臣
 五答ふべき萩の葉風も霜がれて誰にとはまし秋の別路
 六秋風け木葉の底に吹枯て身にしみはつる夕まぐれ哉
 八百十三番 左 前權僧正 右 勝家隆朝臣
 七紅葉を幣に手向て行く秋を惜みとめぬや神なびの森
 八露時雨もる山陰の下紅葉ぬるともをらむ秋の形見に
 八百十四番 左 持公繼卿 右 雅經
 九過ぐる秋露も名残はなき物を何にぬるらむ我袖の上
 〇深草や秋さへ今夜出ていば最と寂しき野とや成なむ
 八百十五番 左 公經卿 右 勝寂蓮
 一此よりや秋は生田の森の蔭過ぐる時雨にちる木葉哉

二誰もみなあかぬ名残ぞ大江山秋は生野の方を眺めて
 八百十六番 左 勝季能卿 右 家長
 三秋風の吹初めしより慣にける袂の露は今夜ばかりや
 四聲たつる鹿もいまはの常磐山己なきてや秋惜むらむ
 八百十七番 左 宮内卿 右 勝三宮
 五津國や長らへもせで秋はけふ生田の奥に風ぞ烈しき
 六打わびて眺むる空の浮雲に今夜ばかりの秋風ぞ吹く
 八百十八番 左 勝謙岐 右 内大臣
 七孰方へ秋の送をすまの關せき行く舟も行へしらねば
 八時雨する雲のあなたは冬の空秋の名残は今幾日かは
 八百十九番 左 小侍従 右 勝忠良卿
 九長月のみ空に秋や歸るらむけふしも風の音もたてねば
 〇とゞまらぬ秋に涙は先だちて木葉もたえず山嵐の風
 八百廿番 左 隆信朝臣 右 勝兼宗卿
 一今夜迄秋風音のみや秋を残して人にきかれむ
 二行秋の形見なるべき紅葉もあすは時雨と降や紛はむ
 八百廿一番 左 有家朝臣 右 勝通光卿
 三惜めどもけふさへ暮ぬ孰方へあすは生田の森の秋風
 四あすよりは秋をしのぶの草枕名残なるべき袖の露哉
 八百廿二番 左 保季朝臣 右 勝釋阿
 五みるもうしあすは名残も嵐山けふのみ秋の夕暮の雲
 六頼めおく方もやあらむ歸る秋心をやりて惜むけふ哉
 八百廿三番 左 持良平 右 俊成卿女
 七くれはつる秋の名残をしのぶ山峰に嵐の聲恨むなり
 八色變るあさちが末に吹く風の音にも著き秋の暮かな
 八百廿四番 左 持具親 右 丹後
 九紅葉に秋の日數も三室山立田の河にしがらみもがな
 〇堰にも止る紅葉や無かるらむ流れて早き秋の暮には
 八百廿五番 左 顯昭 右 勝越前
 一今夜かく心筑紫の言の葉や秋を留むる門司の關もり
 二片岡のすゝの篠屋に秋くれぬ時雨もらすな檜の上葺

千五百番歌合卷第十一 冬二 判定家朝臣

八百廿六番 左持女房 右 通具朝臣
風さえて今朝より冬を檜柴や狩場の小野に時雨すぐ也
八百廿七番 左持左大臣 右 家隆朝臣
秋はけふいづら旅寝の草枕枯れ行く野に霜結らむ
八百廿八番 左持前権僧正 右 雅經
風の音も早晩寒き横の戸に今朝よりなる埋火の本
八百廿九番 左持公繼卿 右 寂蓮
錦おるしづはた山の初時雨げに経緯となりける哉
八百三十番 左持公繼卿 右 寂蓮
秋山に時雨はすぎぬ神無月木の葉ぞ冬の始とはふる
八百三十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
押なべて冬の氣色に成に鳥昨日もけふも打時雨つゝ
八百三十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
昨日みし秋の梢も其ながら折し顔にうち時雨つゝ
八百三十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
置初むる霜にちさゆる嵐哉昨日は露の凍りやはせし
八百三十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
紅葉せし秋は困憊の山風に松のみ残る冬は來にけり
八百三十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
今朝は又時雨そめけり昨日まで秋の哀にぬれし袂を
八百三十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
冬きぬる氣色の杜の村時雨めし木葉を又誘ひけり
八百三十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
昨日こそながめし秋も吳機生憎なれやさゆるよの風
八百三十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
何とかや峯なる鐘よ霜おげば冬にや今夜成始むらむ
八百三十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
秋くれて哀つきにし鐘の音の霜に答ふる冬は來に鳥
八百四十番 左持公繼卿 右 寂蓮
秋は皆杉の板戸の隙しらみ明行く空に時雨ふるなり
八百四十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
霜の音をたてゝや招つる尾花が末に冬は來にけり
八百四十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
神無月けさは梢に秋過て庭にもみぢの色をみるかな
八百四十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
霜とのみ結ぶか露の玉櫛篋二夜だにへぬ秋の名残を

八百四十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
早晩と時雨ぬ冬に移りこば秋の跡とて寂しからまし
八百四十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百四十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百四十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百四十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百四十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百五十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百六十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百七十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百八十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十一番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十二番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十三番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十五番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十六番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十七番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十八番 左持公繼卿 右 寂蓮
八百九十九番 左持公繼卿 右 寂蓮
九百番 左持公繼卿 右 寂蓮

八百四十六番 左 季能卿 右 野内大臣
斯しつゝ人目も草も枯よと庭の淺茅のけさの初霜
八百四十七番 左持宮内卿 右 忠良卿
初時雨振はへて社とはす都の雲のよそにだにみよ
八百四十八番 左持宮内卿 右 忠良卿
秋の色も今は嵐の山風に紅葉こきませ時雨おつなり
八百四十九番 左持小侍從 右 通光卿
山廻り時雨やすぐる松風の吹くかときけば軒の玉水
八百五十番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
鳴交す籬の蟲も鹿のねも時雨にかへて音づれもせず
八百五十一番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
秋のうちも折々音はせしかども冬の始の初時雨かな
八百五十二番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
音づれて猶過ぬ也いづくにも心をとめぬ初時雨かな
八百五十三番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
たえくの木葉が下の音信も霜にとちつる蟲の聲々
八百五十四番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
横の屋の冬の寂しさ告顔に木葉しぐれて袖濡すなり
八百五十五番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
そめすて、立田姫もや神な月風に任せてちる紅葉哉
八百五十六番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
寂しさを訪來ぬ人に山嵐の木葉吹捲く庭をみせばや
八百五十七番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
淺茅生のをの、篠原霜枯て孰くを秋の形見とかみむ
八百五十八番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
嶺嶺き時雨る、雲のたえまより夢か仄にみか月の影
八百五十九番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
散懸る紅葉に色ぞ變りける袖をば染ぬ時雨と思ふに
八百六十番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
木間も夕日の影はさし乍傍へしぐる、深山べの里
八百六十一番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
木葉さへ山廻りする夕かな時雨をさそふみねの嵐に
八百六十二番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
晴曇る影を都に先だてしとつる山のはの月
八百六十三番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
冬來ぬと時雨の音に驚けばにもさやかに、木本
八百六十四番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
雨とふる紅葉の山をこえゆけば簑代衣色かへてけり
八百六十五番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
野へにおく露の名残も霜枯ぬあだなる秋の忘形見は
八百六十六番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣

八百六十七番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百六十八番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百六十九番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十一番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十二番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十三番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十四番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十五番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十六番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十七番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十八番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百七十九番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十一番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十二番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十三番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十四番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十五番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十六番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十七番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十八番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百八十九番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十一番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十二番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十三番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十四番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十五番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十六番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十七番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十八番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
八百九十九番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣
九百番 左持隆信朝臣 右 隆信朝臣

つくと身を夜はの村時雨よその床にはきかじと思
 八百六十七番 左 保季朝臣 右 勝越前
 散りにける峯の梢は空しくて色も残らぬ山嵐のかせ
 八百六十八番 左 勝良平 右 定家朝臣
 蘆葺の宿も願はに枯果て、霜にさえたる夜はの狭籠
 残る色もあらしの山の神な月おせきの波におろす紅
 八百六十九番 左 持具親 右 通具朝臣
 今又ちらでも紛ふ時雨かな獨ふり行く庭の松かせ
 時雨行宿はいかにと風の吹くに附つとふ人もがな
 八百七十番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 たぎつ浪たつかき聞けば吉野河いはと柏に時雨ふる也
 嵐ふく梢は晴れて大井河木葉かくれにやざる月かな
 八百七十一番 左 勝女房 右 寂蓮
 紅葉する程は時雨の村雲に空行く月や廻りあふらむ
 軒ちかき峰の嵐も心せよ木葉ならではくもる宿かは
 八百七十二番 左 勝左大臣 右 家長
 霜埋む刈田の木葉踏しだき群居る雁も秋をこふらし
 山嵐にたえずちりくる紅葉のおき迷はせる庭の初霜
 八百七十三番 左 持前權僧正 右 三宮
 あげばみよ四方の山邊の雪の色を衣手寒し東雲の風
 蟲の音は草葉と共に枯ぬれど弱らぬ物ば浅ちぶの空
 八百七十四番 左 持公繼卿 右 内大臣
 風渡る梢に雨を聞馴れてもに濡ける袖もしられず
 蟲の音は木葉の下に埋れて時雨のみこそ庭に音すれ
 八百七十五番 左 持公經卿 右 忠良卿
 互暮らしよな、過る霞哉繪のふり葉に音を殘して
 ふじのねや木葉波よる清見湯嵐の末におきとも船
 八百七十六番 左 季能卿 右 兼宗卿
 獨ぬる山鳥の尾の搔垂れてふるらむ雪を思ふ寂しさ
 都だに蔽ふる夜は信樂のまきの外山ぞ思ひやらるゝ

八百七十七番 左 持宮内卿 右 通光卿
 立田山木の下ふしの跡にのみ嵐に殘る紅葉なりけり
 哀なりみ山の庵にちりつものなる枯葉に蔽ふる音
 八百七十八番 左 持讚岐 右 釋阿
 湊が波の枕にわかぬる時雨はとまの雫にぞしる
 山廻る時雨は頓て過ぬれど木葉にぬる、袖の上かな
 八百七十九番 左 小侍從 右 勝俊成卿女
 跡つけし其昔こそ戀しけれ長閑に積る雪を見るにも
 秋も猶衰ぞありし夕まぐれ斯る嵐の風はなかりき
 八百八十番 左 隆信朝臣 右 丹後
 木葉かとき、だにわかぬ村時雨漏で過ぬる暮ぞ少き
 山里は雪より先に跡絶て木葉ふみ分けとふ人もなし
 八百八十一番 左 持有家朝臣 右 越前
 わけきつる裾野の尾花うら枯て衣手寒し篠の小吹雪
 木枯に峰の紅葉はちりにけり色々たつうちの河波
 八百八十二番 左 持保季朝臣 右 定家朝臣
 露觸し葉末は霜に成にけり秋より冬のをの、しの原
 六かれはつる草の離は顯れて岩も水を埋むもみち葉
 八百八十三番 左 勝良平 右 通具朝臣
 うた、ねの夢も嵐の山里にまきの葉傳ひ蔽ふるなり
 時雨つる今朝の村雲程もなく入日に研く山のはの露
 八百八十四番 左 具親 右 勝家隆朝臣
 今よりは木葉隠れもなけれど時雨に殘る村雲の月
 月さゆる庭の木葉におく霜の曇らぬ上に蔽ふるなり
 八百八十五番 左 顯昭 右 雅經
 雪ふれば皆白妙の梢にて名も定まらぬ花さきにけり
 行きかへり此や時雨の廻る雲又かきくらす遠山の空
 八百八十六番 左 持女房 右 家長
 晴曇時雨ふるやの板間粗み月を片しく夜はだのさ蓮
 袖さえてぬる夜の床も狭籠に夢を抄なみ松風ぞよく
 八百八十七番 左 持左大臣 右 三宮

なにはがた光を月のみつ潮に蘆邊の千鳥浦傳ふなり
 稀にこし都の人は枯果て、草の戸ざしに蔽ふるなり
 八百八十八番 左 持前權僧正 右 内大臣
 奥山の雪けの水に流出て秋と冬をみするもみちば
 獨寝の友とや驚もふる雪を搖木の柱に立ちも騒がぬ
 八百八十九番 左 公繼卿 右 忠良卿
 吹き迷ふ峰の嵐は積りにし庭の木葉を又ちらしけり
 今ほと浅茅かれ行く霜の上に月影寂しをの、篠原
 八百九十番 左 公經卿 右 兼宗卿
 手にくみしるでの玉水さゆるよに契を結ぶ薄氷かな
 古郷のねやの板間にもる霞思はぬ床に玉ぞしきける
 八百九十一番 左 季能卿 右 通光卿
 六そことなき雪を心に分さてみ深山への爰に寂しき
 六みる人に秋の名残を忍べとや枯野にさゆる冬夜の月
 八百九十二番 左 宮内卿 右 釋阿
 津國や何ぞは蘆のあるかひは風も顯はに宿は成つゝ
 初瀬山夜ふかき鐘に驚けば旅ねの床も玉ぞさえける
 八百九十三番 左 持讚岐 右 俊成卿女
 霜結ぶ冬のよな、重りて風のみかれぬ庭の浅芽生
 待人も訪べき里も無れ共時雨ふる夜はねられざり鳥
 八百九十四番 左 小侍從 右 丹後
 夕しほに荒磯浪や騒ぐらむも定らず鳴く千鳥かな
 時雨だに音にしらるゝ山里の梢の枯葉に蔽ふるなり
 八百九十五番 左 隆信朝臣 右 越前
 我門のかり田の間にふす鳴の床顯なる冬のよの月
 しみし人も訪でのみこそ杉の庵に絶ず音する村時雨哉
 八百九十六番 左 持有家朝臣 右 定家朝臣
 霜おかぬ人めも今は枯果て、松に訪來る風ぞ變らぬ
 萎れ葉や露の形見におく霜も猶風ふく庭のよもぎふ
 八百九十七番 左 持保季朝臣 右 通具朝臣
 せけふまでは猶とちはてぬ氷にて音をぞ殘す谷川の水

霜結ぶ袖の片しき打とけてぬぬよの月の影ぞ寒けき
 八百九十八番 左 勝良平 右 家隆朝臣
 大堰川なみは木葉になりはて、峰に色なき嵐山かな
 夕づくひ流石にうつる柴の戸に霞ふきまく山嵐の風
 八百九十九番 左 具親 右 勝雅經
 松風も今は嵐になるみがた色なき浪の冬のさびしさ
 霜やこれ變らぬ色をおきあかし月に枯野の秋の古郷
 九百番 左 顯昭 右 寂蓮
 東路を雪にうち出て見渡せば浪にたよふ浮島が原
 木の葉ちる汀を拂ふ山風の跡にむすぶは氷なりけり
 千五百番歌合卷第十三 冬二 判進經季經入道
 九百一番 左 勝女房 右 三宮
 から錦秋の形見をたよとや霜まで殘る庭の一むら
 九とふ人の踏分てける庭の雪の跡をぞ埋むよはの月影
 九百二番 左 持左大臣 右 内大臣
 霜の上には己が翼をかたしきて友なき鶯のさよ深き聲
 六時雨とも何かはわかむ神な月いつも信太の森の雫は
 九百三番 左 持前權僧正 右 忠良卿
 吉野山峰の白雪いかならし麓の里もふらぬ日はなし
 暫しこそ秋の形見と眺めしか霜に跡なき野べの色哉
 九百四番 左 公繼卿 右 兼宗卿
 神葉に霜のしらゆふかけてけり神なび山の曙のそら
 九百五番 左 公經卿 右 通光卿
 時雨だに争ひかねし横のはの埋れはつる雪の夕ぐれ
 九百六番 左 季能卿 右 釋阿
 せめて猶惜みなれにし花故に雪ふく風も怨めしき哉

霜さゆる枯野の草の原にきて涙ぞやがて氷なりける
 九百七番 左 宮内卿 右 俊成卿女
 神無月夕日の影に成にけりあらだちそむる沖つ白浪
 九百八番 左 讚岐 右 丹後
 世にふるは苦しき物を横のやに易くも過る初時雨哉
 九百九番 左 小侍從 右 越前
 浪かくる磯まがくれの友下鳥浦より遠に浦傳ふなり
 〇山里の庭の浅茅生霜がれて人めもさぞな思ふ悲しさ
 九百十番 左 隆信朝臣 右 定家朝臣
 〇何故のうらみをすまの友千鳥浪にしをる、曉のこゑ
 〇花薄草の袂もくちはてぬなれて別れし秋をこふとて
 九百十一番 左 持有家朝臣 右 通具朝臣
 〇神無月山かき曇る村時雨程やはふるにけふも暮ぬる
 〇水鳥の上毛を拂ふ音すなりそでにぞ消ぬ冬のよの霜
 九百十二番 左 持保季朝臣 右 家隆朝臣
 〇草の庵もあらぬ小萱と成ぬればよなく馴し蟲のねもし
 〇春秋の色々ごとみにみし夢のさむるも冬の梢なりけり
 九百十三番 左 持良平 右 雅經
 〇早晩と鴨のはがひに霜置きて玉藻の床に氷居にけり
 〇この頃は月こそいたくもる山の下葉残らぬ木枯の風
 九百十四番 左 具親 右 寂蓮
 〇今は又さく離はかれはて、おき迷ふ霜に有明の月
 〇浪騒ぐ鷺の羽風も定まりぬ結びやしつる池の薄らひ
 九百十五番 左 顯昭 右 家長
 〇武蔵野の草の縁りも問かねつづきの原の雪の夕暮
 〇結びきて露にかはりし初霜の霜より雪のふる郷の庭
 九百十六番 左 持女房 右 内大臣
 〇深山ふくよもの木枯さえ初て横の葉白く初雪をふる
 〇小笹原敷ふる夜を思ひ出づる今更々に獨りのみねて

九百十七番 左 左大臣 右 忠良卿
 一網代もる宇治の里人いか計いざよふ浪に月を見らむ
 淡路島浪もてゆへる山のはに凍りて月のさ渡る哉
 九百十八番 左 前權僧正 右 兼宗卿
 一岩にさく雪の花社哀なれ春も見ざりき秋も見ざりき
 一待人の跡をばつけよ庭の雪獨はいかやみ山へのさと
 九百十九番 左 公繼卿 右 通光卿
 〇とふ人の音かときけば山陰の眞柴が上に霰ふるなり
 〇道たえぬけふよりやさは都人心みゆべきにはの白雪
 九百二十番 左 公經卿 右 釋阿
 〇うちとけし岩まの水も今夜こそ誠に凍る冬よの月
 〇村雲の時雨し空はそれながらさゆる嵐に霰ふるなり
 九百廿一番 左 季能卿 右 俊成卿女
 〇音きけば梢曇らぬ木葉にも誠に袖はうち時雨れけり
 〇風にちる木葉亂る、露霜に結ばれ行く冬のよの夢
 九百廿二番 左 宮内卿 右 丹後
 〇右に花もみちもなりはて、雪にぞ宿の梢をばまつ
 〇曉の時雨のおとにたぐふなり寝覺催す鳴のはねがき
 九百廿三番 左 讚岐 右 越前
 〇打はへて冬はさばかり長き夜を猶残りける有明の月
 〇終夜さえつる床の怪しさにいつしかみれば嶺の初雪
 九百廿四番 左 小侍從 右 定家朝臣
 〇谷ふかみ住む人いかにせよとてか氷を結ぶ山川の水
 〇時雨れこし峯の松蔭つれもなくすむ鴉鳥の池の通路
 九百廿五番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣
 〇奥つ浪高師の濱のさよ千鳥跡も定めぬ聲きこゆなり
 〇冬のよの寝覺習ひしまきのやの時雨が上よる霰哉
 九百廿六番 左 持有家朝臣 右 家隆朝臣
 〇村雲の杉の庵のあれまより時雨に變るよはの月かな
 〇楸おふるさほの河原にたつ銜空さへ清き月に鳴なり
 九百廿七番 左 持保季朝臣 右 雅經

外山なる松より聲の移りきて枯野の嵐月によくなり
 〇淵はせに變るのみかは飛鳥川昨日の浪ぞけよは凍れる
 九百廿八番 左 良平 右 寂蓮
 〇あさち原凍れる露に霰ふり玉より上に玉ぞこぼる、
 〇心とやひとり明石の濱千鳥友感ふべきよはの月かは
 九百廿九番 左 具親 右 家長
 〇霜に残る縁はいつか嶺の松ありとばかりぞ雪の下風
 〇播磨磯うつ浪のまに友よふ千鳥こゑ残るなり
 九百卅番 左 顯昭 右 三宮
 〇住吉の細江の蘆も霜がれてよそにもしるき落標かな
 〇谷川の岩うつ波やこほるらむ嶺の嵐の音のさむけき
 九百卅一番 左 持女房 右 忠良卿
 〇里人のいほりにたける椎柴の煙吹きしくやま蘆の風
 〇一つ空におなじ雲こそかはりけれ麓は時雨嶺は白雪
 九百卅二番 左 左大臣 右 兼宗卿
 〇朝日さす水のうへの薄煙まだはれやらぬよごの河岸
 〇吉野山咲べき花の知べかとみれば松にも雪ぞ降ける
 九百卅三番 左 前權僧正 右 通光卿
 〇白浪のこえて歸るとみえつるや雪に風吹く末の松山
 〇うちしくれ今は尾花が末の露結びし秋の跡忍びけり
 九百卅四番 左 公繼卿 右 釋阿
 〇日をふれどまだ跡もなき庭の雪に訪れぬ程を人に
 〇冬くれば己がやくとや炭竈の煙にさほふ大はらの里
 九百卅五番 左 公經卿 右 俊成卿女
 〇うちむれて遠ざかり行く銜哉浦より遠に聲を残して
 〇露凍る野路の玉笹よをへつ、嵐にそよ霰ふるなり
 九百卅六番 左 季能卿 右 丹後
 〇中々に軒の雫の音もなし木葉のふるも寂しかりけり
 〇夜や寒き友無し千鳥打侘て浪の立るにねをのみぞ鳴
 九百卅七番 左 宮内卿 右 越前
 〇程もなく風の氣色もあらち山峯よりわけて積る白雪

此をきかむ生田の奥にさ夜ふけて妻や争ふ鷺の諸聲
 九百卅八番 左 讚岐 右 定家朝臣
 〇露は霜水は氷にとちられて宿かりわぶる冬のよの月
 〇まきのやに時雨霰は夜かれせで凍る寛の音信ぞなき
 九百卅九番 左 小侍從 右 通具朝臣
 〇谷がくれ木葉が下の埋れ水凍ればやらむ音もせぬ
 〇猿人の干敢ぬ袖も凍るらむ小嶋の浪に月さゆる夜は
 九百四十番 左 隆信朝臣 右 家隆朝臣
 〇山のは、宵よりしらむ雪のよの猶さえ行くや曙の空
 〇衣手に松風さむ住吉の夕浪千どらうらづたふなり
 九百四十一番 左 持有家朝臣 右 雅經
 〇柴の庵の軒端のひかけ今更に曇るとすれば曇ふる也
 〇つくば山しげき梢やいかならむ此面彼面の雪の下折
 九百四十二番 左 保季朝臣 右 寂蓮
 〇はる、と猶行く末やおほえ山いくの、道の雪の曙
 〇志賀の浦は凍りにけりな有明の月より後に宿る月影
 九百四十三番 左 良平 右 家長
 〇さ夜千鳥浦傳ひ行く浪の上に傾く月も遠ざかりぬる
 〇波の上に行方もしらぬ浮巢哉巢立にけりな鴉の雛鳥
 九百四十四番 左 具親 右 三宮
 〇風やいかに待ちみむ三輪の山つれなき杉の雪折の聲
 〇雪ふればしがの幸崎浦さえて氷の上によする白なみ
 九百四十五番 左 顯昭 右 内大臣
 〇衛なくせとのうきねに月よさし哀寂しき浪の上哉
 〇こゆるぎの磯の松風音すれば夕波千鳥たち騒ぐなり
 九百四十六番 左 持女房 右 兼宗卿
 〇押照や難波の蘆の下隠れ刈根もる鴨の霜に鳴くこゑ
 〇いつかわか姿の池と思ふにも枯葉のあしの哀なる哉
 九百四十七番 左 左大臣 右 通光卿
 〇三室山嶺のひはらのつれなきをしるる嵐に霰ふる也
 〇旅旅から聞や忍ばぬ磯衛なれたる鬢の袖をとはいや

九百四十八番 左 前權僧正 右 釋阿
 同雪のよそめ也鳥初瀬山花とみつるも月とみつるも
 敷忍びよはの枕はさえつれど今朝は嬉しき庭の初雪
 九百四十九番 左 公繼卿 右 俊成卿女
 木葉をば風もはらひき雪にこそ埋れにけれ冬の山里
 おく山の雪げの水やくたすらむ瀧つ岩ねに積る紅葉
 九百五十番 左 持公卿 右 丹後
 蘆鴨の上毛の霜をうちはらふ羽風もさやに氷る空哉
 氷みて鳥だにすまず成にけり昔の池の跡ならねども
 九百五十一番 左 季能卿 右 勝越前
 さゆるよの氷の上に住慣れて月に鳥ゐる勝間田の池
 在明の月のでしほに湊舟今や入らむ千鳥たつなり
 九百五十二番 左 宮内卿 右 定家朝臣
 花にとひし跡を尋ねて待つ人も梢の雪に嵐吹くなり
 是やさば秋のかたみの浦ならむ變らぬ色を沖の月影
 九百五十三番 左 持謙岐 右 通具朝臣
 風渡る池の汀のいかならむ袖だに氷る冬のよな
 氷る 寛の音のたえしより夜はの嵐ぞ寝覺問ける
 九百五十四番 左 小侍従 右 家隆朝臣
 夏刈の玉江の蘆も霜がれて葉分の浪に鴛ぞ鳴くなる
 九百五十五番 左 持隆信朝臣 右 雅經
 春秋の花が月かとながむれば雪やはつもる庭も梢も
 とふ嵐とはぬ人もつもりてはひとつ眺の雪の夕暮
 九百五十六番 左 有家朝臣 右 寂蓮
 野べみればかつふる雪を忘水唯村消の心ちこそすれ
 獨のみながむる空に雲消えて雪の光にすめるよの月
 九百五十七番 左 保季朝臣 右 家長
 雪つもる梢を花に紛へともふ人つらき庭の跡かな
 さゆる夜の己が上毛を拂ひわび霜に物思ふ鴛の獨寢
 九百五十八番 左 勝良平 右 三宮

月影の宿り慣たる池の上に凍果てぬも分れざりけり
 夕まぐれ風のけしきもあらち山雪に宿かる越の旅人
 九百五十九番 左 具親 右 内大臣
 春秋のながめは雪に積りけり花と月とを三吉野の里
 つきはてし秋の哀れは曉の時雨の音に猶のこりけり
 九百六十番 左 顯昭 右 忠良卿
 夕かけて妻や戀しきかみ鳥の磯まの浦に衝しば鳴く
 空や海月やこほりとさ夜千鳥雲より浪に聲迷ふなり
 九百六十一番 左 勝女房 右 通光卿
 浦ちかき末の松山雪ふれば冬より上を浪やこゆらむ
 それとみし月の光も池水にかさねて結ぶうす氷かな
 九百六十二番 左 勝左大臣 右 釋阿
 山里はいくへか雪の積るらむ軒端にかゝる松の下折
 雪よ是雲さへ凍る冬の雨の空に結べる名に社有けれ
 九百六十三番 左 前權僧正 右 俊成卿女
 白雪のなべてふれれば梅花冬さく色はかひ無かり鳥
 さえわびてさむる枕に影みれば霜深き夜の有明の月
 九百六十四番 左 公繼卿 右 丹後
 夕さればさほの河瀬の風寒み空に浪たつさよかな
 さえく夜夜間に積る嶺の雪を朝みる雲と誰眺らむ
 九百六十五番 左 公經卿 右 勝越前
 岩間わけし昔の下水行惱みしられぬ冬の音こほる也
 雪にまだ隠れてすめる津國のこやもあらはに立煙哉
 九百六十六番 左 持季能卿 右 定家朝臣
 片しきの袖こそぬるれ嶺分に時雨落ちくる松風の音
 浦風にやく響けぶり吹きまよひ謎く山の冬ぞ寂しき
 九百六十七番 左 持宮内卿 右 通具朝臣
 紀の國やあまのふせやの苦底吹上の衝月に鳴くなり
 玉はこやかよ小川の薄氷結びもあへぬ音聞ゆなり
 九百六十八番 左 持謙岐 右 家隆朝臣
 寢覺する人徹せば消ぬとも争で知らまじよはの埋火

天のはら雪ふりくれば足引の山こそ浪の麓なりけれ
 九百六十九番 左 小侍従 右 雅經
 朝日さす池の氷の隙々にむれる鴛の友ぞあまれる
 浪の上に友なし千鳥打ちわびて月に怨むる有明の聲
 九百七十番 左 隆信朝臣 右 寂蓮
 三吉野の冬の住ひぞ哀なる日数は雪のふるに任せて
 三色も猶むかしの袖ぞしられける雪ふりうづむ軒の橋
 九百七十一番 左 有家朝臣 右 家長
 冬がれの薄押しなみ古郷のふみ分け難き庭の雪かな
 笹の熊ひのくま川につらゝみて駒もとめす冬の曙
 九百七十二番 左 保季朝臣 右 三宮
 とはれける昔の跡は無れども雪踏分くるをの通路
 雪の下水の上をすみかにて冬にこもれる池のをし鳥
 九百七十三番 左 持良平 右 内大臣
 山里は軒端の岡をふく風にこほりておつる松の白雪
 さは川に衝なく夕されば衣手寒し誰とかはねむ
 九百七十四番 左 持具親 右 忠良卿
 跡たゆる都の外山里は人もうらみず雪もいとはず
 浪のおとは氷にたえて蘆鴨の上毛の霜に霞ふるなり
 九百七十五番 左 顯昭 右 兼宗卿
 氷してかち渡りするすはの海を出で煩ふは鴨の浮舟
 浪かくると鳥が崎の友衝立かとすれば又さなくなり

千五百番歌合卷第十四 冬三 判者 同前

九百七十六番 左 勝女房 右 釋阿
 雪の且木の下風は寒けれど櫻もしらぬ花ぞ散りける
 すむ月も千里の外は凍りけり雪の且は限だになし
 九百七十七番 左 勝左大臣 右 俊成卿女
 嵐ふく空にみだる雪のよに氷ぞ結ぶ夢は結ばず

松島やをしまが磯による浪の月の氷に千鳥鳴くなり
 九百七十八番 左 前權僧正 右 丹後
 梅がえの匂ひ嬉しきたまかな木ごとと花の雪の曙
 冬のよはあまざる雪に空さえて雲の浪ち凍る月影
 九百七十九番 左 公繼卿 右 越前
 ちり積る木葉に埋む谷川の頓て氷柱に結ばれにけり
 通ひける人の跡だにみえぬ哉しきみが原に積る白雪
 九百八十番 左 公經卿 右 定家朝臣
 寂しさをいかに問まし夕附日さすや岡への松の雪折
 なく千鳥袖の湊をといこかし唐土舟のよるの寢覺に
 九百八十一番 左 持季能卿 右 通具朝臣
 潮風の蘆まを分けて吹く度に浮寝や變るあぢの村鳥
 千鳥なく浦曲の西の松風に月もをしとや有明の空
 九百八十二番 左 持宮内卿 右 家隆朝臣
 さゆる夜も音こそ絶ね岩が根に散玉凍る三吉野の瀧
 巻もくの檜原に雪や重るらむたえぬ梢に柚木とる音
 九百八十三番 左 持謙岐 右 雅經
 ふる雪に人こそとはね炭がまの煙は断たぬ大原の里
 あしまとちいかに浮寝の鴛の聲先凍りける浪の枕を
 九百八十四番 左 小侍従 右 寂蓮
 丈夫は年よるひをに面なれて頭の霜も網代とやなる
 柴の戸に音する方をながむれば己れと雪を拂ふ松風
 九百八十五番 左 持隆信朝臣 右 家長
 石間わけあつるよそめは其乍音せぬ瀧や垂氷なる覽
 駒とめて草のよ末に霞ふりまたかりゆかぬ雉立つ也
 九百八十六番 左 有家朝臣 右 三宮
 誰斯てすむらむとだに白雪の深き山奥の庵かな
 やどりぬる影もこほれる池水に月を語らふ鴛の獨寢
 九百八十七番 左 保季朝臣 右 内大臣
 降積る幾重の雪の下にても煙を断たぬをの炭竈
 秋はては人め枯行く山里に友まつ雪のいかに降らむ

九百八十八番 左 良平 右 勝忠良卿
 雪のうち越のしら山みわたせば雲に曇らぬ更科の月
 冬くれば谷の下水おとたえてひとり凍らぬ峯の松風
 九百八十九番 左 具親 右 兼宗卿
 何故かさえ行く浪と思ふらむ凍れば砕くしがの浦風
 宿るべき月を隔つる冬の池に心の氷柱思ひしらぬ
 九百九十番 左 持顯昭 右 通光卿
 網代木にちる紅葉を片敷きて月と共にぞ守明しつる
 うらさしはれぬ空にも鴛鳥の番ひ離れぬ雪の夕暮
 九百九十一番 左 勝女房 右 俊成卿
 月かたて拂はねばまだ白妙の袖にぞ近る深き夜の霜
 更に又積れる雪に埋れぬ時雨ふりあきし檜の枯葉も
 九百九十二番 左 勝左大臣 右 丹後
 庭の面を我のみ見ればをしき哉月と花とに紛ふ白雪
 庭には海や釣する蟹の衣手に雪の花ちる志賀の山風
 九百九十三番 左 勝前權僧正 右 越前
 冬草の枯ぬと何か思ふべき花の春こそは人も訪てし
 葛飾やまの懸橋雪ふれば其名は影に移るばかりぞ
 九百九十四番 左 勝公繼卿 右 定家朝臣
 事ぞともなく今年も杉の戸のあけて驚く初雪の空
 九百九十五番 左 持公經卿 右 通具朝臣
 庭の積る雪を氷にしきかへて月影さゆる山の端の空
 庭の木葉色は變れど跡ぞなき霜より雪に降果るまで
 九百九十六番 左 季能卿 右 勝家隆朝臣
 そのかみの岩戸も斯や明星のあけ行く空に鳥歌ふ也
 宿からむ行へも見えず久方の川の河原のゆき暮の空
 九百九十七番 左 持宮内卿 右 雅經
 見わたせば氷の上に月さえて霞波よるまのうら風
 網代木やうちの川風夜はさえて己のみよる波の音哉
 九百九十八番 左 讚岐 右 寂蓮

我友と頼みし竹は雪をれて人こそなけれ冬の明ぼの
 山風は誘ひかねたる横の戸を行へもしらず埋む雪哉
 九百九十九番 左 持小侍從 右 家長
 風近の宇治の川長今宵もや寄むともせぬひを待らむ
 千 番 左 持隆信朝臣 右 三宮
 浦の浪は水に音絶えて立居る物はあぢの村鳥
 風ふく八十うぢ河の浪の上に木葉誘ふせの網代木
 千 一 番 左 有家朝臣 右 勝内大臣
 久方の天の川風さえぬらし流るゝ月のなほ凍るまで
 三年までつがひなくとも鴛鳥の浮寝の床に新枕すな
 千 二 番 左 保季朝臣 右 勝忠良卿
 冬くれば常磐の山も風さえて變らぬ松に霞ふるなり
 人の人は跡なき庭に顯れて怨みもよかしけさの白雪
 千 三 番 左 勝良平 右 兼宗卿
 雪ふりつもる都の雪を眺めても思ひこそやれ越の山越
 哀なり下のおもひやいかならむ水を抱るをしの毛衣
 千 四 番 左 勝具親 右 通光卿
 岩たゞく音も嵐につらゝる谷の小川も冬籠るなり
 武夫や八十宇治川に月近て網代にひなの夜もねられず
 千 五 番 左 持顯昭 右 釋阿
 山あむにすれる衣や紛らむはだれ霜ふる庭の櫛葉
 さゆる夜は清水の浪も凍りけり玉ぞ砕くる床の狭筵
 千 六 番 左 持女房 右 丹後
 巻もくの岸の小松に雪ふれば檜原か末に雲ぞ懸れる
 秋よりも寂しき影や優らむ雪に月みる更しなの山
 千 七 番 左 持左大臣 右 越前
 雲はるゝ雪の光や白妙の衣はすてよあまのかぐやま
 つくゝと煙につけて思遺る心ぞやがてをのゝ炭竈
 千 八 番 左 持前權僧正 右 定家朝臣
 秋色かへぬ冬の緑をみよとてや途にもみちぬ松の白雪

片敷の床の狭筵凍るよにほふりやしくらむ峯の白雪
 千 九 番 左 持公繼卿 右 通具朝臣
 炭がまのたえぬ煙の故なれや雪にも通ふをのゝ細道
 訪人も跡なき庭は絶もせで庭の白雪ふるに任せて
 千 十 番 左 勝公經卿 右 家隆朝臣
 枯渡の薄押並みふる雪にとはぬもつらし岡のへの里
 あまつ袖ふる白雪に少女子か雲の通路花ぞちりかふ
 千 十一 番 左 勝季能卿 右 雅經
 さよ千どり聲こそ近く鳴海瀾傾く月に潮やみつらむ
 昔よりたぬ煙のさびしきはひろの八島の冬の夕暮
 千 十二 番 左 宮内卿 右 寂蓮
 宮城野や萩の古枝に霜さえて木下露は垂氷なりけり
 庭の雪にけふこむ人を哀とて踏分つべき程ぞ待れし
 千 十三 番 左 讚岐 右 家長
 柳川の氷によむ筏士や岩間の雪にはるをまつらむ
 ぬふる雪の深き庵を人とは柴折くべてわふと答へよ
 千 十四 番 左 勝小侍從 右 三宮
 今朝はしもそるはし鷹の影も見じ野寺の鏡薄氷して
 網代木に波と氷魚とのよるゝを獨や明す牧の島人
 千 十五 番 左 隆信朝臣 右 勝内大臣
 寒けしやつがはぬ鷺のよを重ね浪に片しく霜の毛衣
 霞ふる寒き汀に立つ鷺は玉になれたる鳥にぞ有ける
 千 十六 番 左 勝有家朝臣 右 忠良卿
 宵のまは月を氷と水の面にやがても結ぶ浪の音かな
 暮て行く冬のしをりか跡たえて山路も深き松の雪折
 千 十七 番 左 勝保季朝臣 右 兼宗卿
 うさねする枕なすきこそよ千鳥孰れの浦も同じ月影
 山がつの世にすみがまぞ哀なる煙さびしき大原の里
 千 十八 番 左 持良平 右 通光卿
 何故の思ひなるらむ埋火の体むまもなく下焦れする
 柳とて歌へば冬の長さよも今やあくらむ天の岩戸を

千 十九 番 左 持具親 右 釋阿
 小夜千鳥湊吹きこす潮風に浦よりほかの友誘ふなり
 埋火のあたりに近き轉寝は春の花こそ夢にみえけれ
 千 廿 番 左 持顯昭 右 俊成卿
 三島野に鳥踏立て合せやる眞白の鷹の鈴もゆらゝに
 三里の眞柴の煙かすかにてたぬもさびし雪の夕暮
 千 廿 一 番 左 勝女房 右 越前
 杉の葉の緑もみえずふる雪をわたる嵐の跡の一しは
 年くれて送り迎ふる人毎は孰を急ぐいそぎなるらむ
 千 廿 二 番 左 持左大臣 右 定家朝臣
 柳くたすにぶの川上あたたぬみぎはの水峯の白雪
 千 廿 三 番 左 持前權僧正 右 通具朝臣
 飛鳥川流れでけふも暮ぬれば春に逢瀬は今夜也けり
 草も木も降紛へたる雪もよに春待梅の花の香ぞする
 千 廿 四 番 左 持公繼卿 右 家隆朝臣
 身に積る年と思へば惜けれど春をばえ社厭まじけれ
 雪の内に遂に紅葉ぬ松のはの難面き山にくるゝ年哉
 千 廿 五 番 左 公經卿 右 雅經
 梅花共ともみえぬ雪の夜におぼめく月の影ぞしりくる
 哀にも斧の音までいそぐなり松さる山の年の暮かな
 千 廿 六 番 左 勝季能卿 右 寂蓮
 踏分し狭山は雪に跡絶て池のみくりははる人もなし
 谷の戸は結びはてたる山風に松の雪さへ上凍るなり
 千 廿 七 番 左 勝宮内卿 右 家長
 己が里の山風さえて吹からに都へ出づるをのゝ炭竈
 三とはに音せし風は音もせで絶々響くまつの雪折
 千 廿 八 番 左 讚岐 右 三宮
 白妙のふじの高嶺に雪ふれば凍らで流る田子の浦波
 春近き氷の下の小浪は打ちいでむ事や思ひたつらむ
 千 廿 九 番 左 小侍從 右 勝内大臣

三數ならで世にすみ竈の煙こそ心細くは思ひたちけれ
四冬と春とゆきかふ風の池水に片へとけ行く薄氷かな
千卅番 左持隆信朝臣 右 忠良卿
一六はらや心々にやく炭のけふりは一つ空のうきぐも
二震初めし春の空より眺来て雪ふる年の暮になりぬる
千卅一番 左 有家朝臣 右 兼宗卿
三水鳥の騒ぐ入江の小浪のよるこほるまの浦風
四心あらば柳山川の筏士もしばしは年の暮をとめよ
千卅二番 左持保季朝臣 右 通光卿
五夜や深きせきいる水の音たえて衣手寒し鶯の一聲
六日はくれぬ宿はいづくに狩衣怨は歸ればし鷹の木居
千卅三番 左 良平 右 釋阿
七天戸の明やしぬらむむば玉の更行く空にあか星の聲
八衛鳴繪鳥が崎を繪にかはば友よぶ聲ぞ聞えざるべき
千卅四番 左持具親 右 俊成卿女
九炭竈のけふりばかりは太原やたぬぬ寂し冬の山里
〇訪ざらむ人も怨じ跡たえてふるの里の雪の深さに
千卅五番 左 顯昭 右 丹後
一炭竈の大原山は此なれど此面彼面にけふりたつめり
二炭竈の煙になるをの山は執雪げの雲と分くらむ
千卅六番 左持女房 右 定家朝臣
三冬暮て今年もけふに筑波嶺の木芽も兼て春めきに鳥
四宿毎に春の霞を待つとてや年をこめては急ぎ立ちむ
千卅七番 左持左大臣 右 通具朝臣
五月よめば早くも年のゆく水に数かきとむる柵ぞなき
六徒に月日はゆきと積りつゝ我身ふりぬる年の暮かな
千卅八番 左持前權僧正 右 家隆朝臣
七年のあけて影いかならむ増鏡今夜一夜に面變りして
八年暮てよそぞろ過ぬ鳥玉の我黒髪も霜や置らむ
千卅九番 左持公繼卿 右 雅經
八行く年も立來る春も逢坂の關路に鳥のねをや待らむ

〇六歳くる春や昔の春ならぬ元の身にのみ立歸りつゝ
千四十番 左 公經卿 右 寂蓮
一六くれにけり空に月日の杉の戸に今年も今は入相の鐘
二春秋と眺めし月や今もこれ積れば年の末となるらむ
千四十一番 左 季能卿 右 家長
三あすは又今日をばこそと云捨て惜みし物と思だにせじ
四冬空侘つゝ今日に成にけり跡なき庭の雪と見から
千四十二番 左 宮内卿 右 三宮
五稍わかめ假初臥しの袖の上にけふ年浪も小動搖の磯
六今日迄はまだ雪深き三吉野の山のあなたに春やきぬ覽
千四十三番 左 讚岐 右 内大臣
七増鏡影さへくれぬ物ならば重なる年を嘆かざらまし
八暮て行く年の惜さは増鏡見る影さへやあすは變らむ
千四十四番 左 小侍從 右 忠良卿
九思遣れ八十ちの年の暮なれば如何計かは物は悲しき
〇年と云て四十ちも近く送來ぬ借も迎ふる春は疎くて
千四十五番 左持隆信朝臣 右 兼宗卿
一七春の目を秋の夜とこそ詠めしか借も程なき年の暮哉
二珍しき春もあすとぞ聞ゆれば暮なむ年を何か惜まむ
千四十六番 左持有家朝臣 右 通光卿
三行年の名残の空も更ぬれば春やこゆらむ小夜の中山
四皆人の何故ならず惜むらむ今歳の果のけふの暮とて
千四十七番 左 保季朝臣 右 釋阿
五あすをまつ賤が門松先だてけふより春の色を見哉
六今日毎に今日や限と惜め共又も今年にあひにける哉
千四十八番 左持良平 右 俊成卿女
七けふ迄は雪やとくらむ春風の明て立つべき白川の關
八昨日と云ひけふと過來し年月を降積む雪の跡ぞ知れぬ
千四十九番 左持具親 右 丹後
九今日も又過し日數に暮に鳥まどろむ夢に春を隔て
〇一年を今宵計に眺めきて惜みながらに春をまつかな

千五十番 左持顯昭 右 越前
一留めあへず流るゝ年の果は早重る老の浪にぞ有ける
二儂くて今年の空もくれ竹の一よ計りになりける哉

千五百番歌合卷第十五 觀部 判者 生蓮師光 入道

千五十一番 左持女房 右 通具朝臣
一萬代とみもすそ川の春の朝浪にかきかねてたつ霞かな
二淺緑四方の梢のめもはるに様々みゆる千代の影かな
千五十二番 左持左大臣 右 家隆朝臣
三ぬれてほす玉串のはの露霜に天てる光幾世へぬらむ
四四方の海の浪の外まで開ゆ也はこやの山の萬世の聲
千五十三番 左持前權僧正 右 雅經
五小れ石の苦むす岩と成て又雲かゝる迄君ぞみるべき
六千世を祈る神の三室の榊葉は君が例と茂りあひにき
千五十四番 左持公繼卿 右 寂蓮
七宮居せし千尋栲羅君が爲ながき契をむすびそめけり
八蘆鶴の友よぶ聲に著き哉名残多かる千代のけしきは
千五十五番 左 公經卿 右 家長
九君が代を我がたつ袖に祈りきて檜原杉原色も變らじ
〇はる毎にはこやの山にさき草の萬代かけて殿造せり
千五十六番 左持季能卿 右 三宮
一君が代はながとの鳥の小松原神さびて又若葉さす迄
二小れ石の巖とならむ行末を千度見べき君とこそきけ
千五十七番 左持宮内卿 右 内大臣
三長閑なる御代の始の春の日を霞に變る空かみやみむ
四君が代は御裳濯川にすむ月の底の心は神ぞしるらむ
千五十八番 左 讚岐 右 忠良卿
五伊勢の海さよき渚の浪も唯君に心をよするなりけり
六天つ空霞を分けて出づる日の影も長閑き千世の初春

千五十九番 左 小侍從 右 兼宗卿
一八洲もる國つ御神に祈りきて千年は君が心なる哉符
〇神風や内引の宮に祈り置きて片々君が千代は頼まむ
千六十番 左持隆信朝臣 右 通光卿
一〇君かへむ八千代の數も曇なくみもすそ川を照す月影
二男山おひそふ松にしるさかな限もしらぬ君が千年は
千六十一番 左持有家朝臣 右 釋阿
三雲の色星の宿りもさしながら治れる代を空にみる哉
四神風や御裳濯川の小れ石も君が御世にぞ岩と成べき
千六十二番 左 保季朝臣 右 俊成卿女
五年へたる御裳濯川の月影や世にすむ君が光なるべき
〇照しむ八百萬代ぞ曇なきはこやの山の峯にすむ月
千六十三番 左持良平 右 丹後
一〇鈴鹿川ふるさ流を傳へきて猶末とほき君が御代がな
二枝毎に千世も八千世も色變ぬひら野の松は君が隨に
千六十四番 左 具親 右 越前
三君が代の數には此れも筑波山年へて繁き梢なれども
〇ひまもなく内外の宮に行き通ふ心は君が萬世のため
千六十五番 左持顯昭 右 定家朝臣
一我君に千代もやちも譲りはの常磐の陰は猶盡きもせじ
二天地と限なけれど誓ひ置きし神のみことぞ我君の爲
千六十六番 左持女房 右 家隆朝臣
三萬代と御手洗川の夏よに秋とすめる山のはの月
四久方の天のかぐ山空晴れて出づる月日や萬代のため
千六十七番 左持左大臣 右 雅經
一君が代に法の流をせきとめて昔の浪やたち歸らむ
二思ひやる心の果も猶過ぎて道ある御代の千代の行末
千六十八番 左持前權僧正 右 寂蓮
三君が代にさしての磯の友衛八千代の聲を聞ぞ嬉しき
四いつとなく八重の湖路に立浪の數限なき君が御代哉
千六十九番 左持公繼卿 右 家長

足引の八つを梅君が世に幾度影を替むとすらむ
 君が代は遙なるとの濱底久しき影は浪のまに〜
 千七十番 左 勝公經卿 右 三宮
 君が世の末を思へば久方の天てる神の影をならべて
 幾度か君が御代には廻りあはむ月日の光千々の春秋
 千七十一番 左 季能卿 右 内大臣
 治れる八隅の内の一くさの君が御影に靡かぬはなし
 百敷は龜の上なる山なれば千世を重ねよつるの毛衣
 千七十二番 左 宮内卿 右 忠良卿
 行く末を思へば涼し君が世の風ものごけき夏の夕暮
 君がため千町の早苗年をへて幾萬代をとりぞ重ねむ
 千七十三番 左 持謙岐 右 兼宗卿
 宿り置く影静なる月みればすむもかひある石清水哉
 幾千世も君が心に任せよとすみ始めける石清水かな
 千七十四番 左 持小侍從 右 通光卿
 此君と頼めてうゑし唐人の千世の契や今のよのため
 君が代は谷の岩根の姫小松雲の嶺に下枝さすまで
 千七十五番 左 降信朝臣 右 勝釋阿
 行く末よ幾代の秋を契らむわかの浦路を照す月影
 君が代は幾千年にか葵草かはらぬ色に神もまらむ
 千七十六番 左 持有家朝臣 右 俊成卿女
 君が世に十度すむべき水の色を汲て知ける山の聲哉
 千七十七番 左 持保季朝臣 右 丹後
 君をこそ神も哀と石清水外よりいでぬ流れと思へば
 君が世は貌姑射の山の嶺におふる白玉椿葉替せむ迄
 千七十八番 左 持良平 右 越前
 君が世はあだにも云じ石清水澄べき御代の底の深さに
 鈴鹿河やそせの浪を隔てゝもわが神風に君を祈らむ
 千七十九番 左 具親 右 勝定家朝臣
 幾千世も君が例や此ならむいつぬきがはの鶴の毛衣

根こじの神に懸し鏡こそ君が常磐の影はみえけれ
 千八十番 左 顯昭 右 通具朝臣
 君がへむ三千世を懸て咲桃の百返り迄榮えまきなむ
 茜さす日影もしるし夏の空明けき世の長きためしに
 千八十一番 左 勝女房 右 雅經
 萬代と三笠の山の秋風に長閑にみねの月ぞすみける
 限なき世は久方の空晴れて照す月日も長閑にぞすむ
 千八十二番 左 左大臣 右 寂蓮
 久かたの空の隈もなき世かな三つの光のすまひ限は
 浪の上に葉求めし人もあらは貌姑射の山に道知せよ
 千八十三番 左 持前權僧正 右 家長
 斯ばかり深き心の報には君が八千世に逢ざらめやは
 斯すらしをも千町の早苗取々に祝ふも著き天の下かな
 千八十四番 左 持公繼卿 右 三宮
 春日野に若菜摘つゝ祝ひけむその古事も適ふ御代哉
 朝夕に千年の聲ぞ聞ゆる松と竹とに通ふあらしは
 千八十五番 左 勝公經卿 右 内大臣
 君が代の有數にせむ神風や御裳濯河によするしき浪
 唐土の代々は移れど敷島や大和島根は久しかりけり
 千八十六番 左 季能卿 右 忠良卿
 雲の浪煙の浪を尋ねても君が御代には及ぶしまかは
 霧はるゝはの山の秋の空に月も幾千世澄むとす覽
 千八十七番 左 持宮内卿 右 兼宗卿
 草も木もわが守置てふ白露のしられぬ数の君が御代哉
 神山の嶺におひそふ小松原幾木の千世も君が代の數
 千八十八番 左 讚岐 右 通光卿
 四方の海は浪静にて住吉の松吹く風の音のみぞする
 常磐なる緑の色に顯はれて君が千年は空にしるしも
 千八十九番 左 小侍從 右 勝釋阿
 四の海の浪静なる君が代に懸のいのちも嬉しかる覽
 君がへむ千世の爲とぞ小松原小鹽の山も祝初めけむ

千九十番 左 勝隆信朝臣 右 俊成卿女
 譬ても猶君が代ぞ大原や小鹽の松も千代をこそつめ
 四方の海や吹く浪風も静にて煙迷はぬあまの藻鹽火
 千九十一番 左 有家朝臣 右 丹後
 諸人の二心なく仰ぐかなはこやの山に身を任せつゝ
 君が爲うゑおおく竹の節しげみ其數々に千世ぞ籠れる
 千九十二番 左 持保季朝臣 右 越前
 古き跡を世の例には移すとも千歳は君ぞ始なるべき
 幾返りおひかふ松の花を見むはこやの山の春の梢に
 千九十三番 左 良平 右 勝定家朝臣
 千早ふる賀茂の社のゆふ禊千代を君にかけよとぞ思
 我道を護らば君を護らむよはひはゆづれ住吉の松
 千九十四番 左 具親 右 通具朝臣
 君ならで有き有すや萬代を飛火の野守年はへにけり
 いとざなきや色はも同じ末なれば君に契れる豊國の土
 千九十五番 左 顯昭 右 勝家隆朝臣
 君が代は數しらぬきの萬葉草引とも盡じけふの挿頭は
 影懸く星の位も長閑に空にぞしるき御代の氣色は
 千九十六番 左 勝女房 右 寂蓮
 萬代とみつの濱風空さえてのどけき浪に氷ぬにけり
 今よりや飽迄花も三千年になるてふ桃の園を移して
 千九十七番 左 左大臣 右 家長
 みる塵の山を幾重に重ねてもげに我國は動なき世を
 萬代をふべき君なり月も日も長閑き光かねて著しも
 千九十八番 左 前權僧正 右 三宮
 千早振る神ぞしるらむ我君をねても覺めて祈る心は
 水のすむいづぬき川のしき浪に猶立優る御代の數哉
 千九十九番 左 公繼卿 右 内大臣
 常磐なる御代の微にたてりけり古河のへの二本の杉
 遙なる程を思へば武隈の松のみどりや君が行くすゑ
 千百番 左 持公經卿 右 忠良卿

君が代に積りて山となる塵の末を思へば雲懸るまで
 友衝むれむる磯の聲々に君が八千世の敷ぞきこゆる
 千百一番 左 勝季能卿 右 兼宗卿
 曇なく治まる御代を人も皆みよとて出づる星の影哉
 跡垂し三笠の山のかひあれば天の下社長閑かりけれ
 千百二番 左 持宮内卿 右 通光卿
 千代までとよはの氷に事よせて契を結ぶしがの浦浪
 君が世は蟻の栲繩くり返し濱の真砂を數にとるらむ
 千百三番 左 持謙岐 右 釋阿
 春日野の春の若菜も君が爲幾萬世かつまむとすらむ
 君が世を日吉の神に祈置けば千年の敷やしがの浦波
 千百四番 左 小侍從 右 俊成卿女
 二葉なる松の例も堪ぬ哉幾千世となき君が御代には
 群居つゝ若の浦曲に鳴たづの聲に君が千代ぞ聞ゆる
 千百五番 左 勝隆信朝臣 右 丹後
 昔よりさこそは祈る萬代も君ぞ誠の例なるべき
 君が世を長井の浦にみるたづも萬世までと聲聞ゆ也
 千百六番 左 持有家朝臣 右 越前
 龜尾の岩根落来る瀧の糸の幾千世へてもたえむ物か
 君が代にあふの松原枝繁み末頼もしく影ぞさしそふ
 千百七番 左 保季朝臣 右 勝定家朝臣
 此世には昔もさかず今もあらじ君が齡まさる例は
 萬代の春秋君になづさはむ花と月との末ぞひさしき
 千百八番 左 良平 右 通具朝臣
 つきせじと天の下をや祈るらむ萬代よばふ三笠山哉
 千々の秋かねてぞ著き君が世を長月にさく白菊の花
 千百九番 左 持具親 右 家長
 かつまたの池に鳥なし古の過ぎにし程や君が行く末
 君が代は花 千年の友として松と竹とに春風ぞふく
 千百十番 左 顯昭 右 雅經
 かちの葉に八百萬代とかきつけて願ふ願は君が隨に

君がへむ輪をさして大空にむれたるたづの己が聲々
 千百十一番 左勝女房 右 家長
 萬代と三熊野の浦の濱ゆふの重ても猶盡せざるべし
 君が世は二葉の松の千世をへて梢の風を露にきく迄
 千百十二番 左勝左大臣 右 三宮
 人の世をなご定なく思ひけむ君が千年の有ける物を
 曇なき天てる神のみづ垣に君が千年の影うつるなり
 千百十三番 左持前權僧正 右 内大臣
 長らへてかひある事を松なれや君が千年の影に隠て
 諸人の仰ぐのみかは君が世の空に慶ぶ雲も立けり
 千百十四番 左持公繼卿 右 忠良卿
 君が世はちくまの川のさざれ石の宛ら岩と顯るゝ迄
 未遠く千世の御影を頼むかな契あればぞあふの松原
 千百十五番 左持公經卿 右 兼宗卿
 君が世をとふ人あらば出る日の光をさして空に答む
 曇なきはこやの山の月影に光をそふる玉つ島かな
 千百十六番 左持季能卿 右 通光卿
 神路山下つ岩根の宮柱しるし遠へぬ御世とこそみれ
 萬世の例をいはし君が世は鶴の毛衣いろもかはらで
 千百十七番 左持宮内卿 右 釋阿
 昔より流をうくる四方の海あかぬは君が輪也けり
 住吉の松も涼しく思ふらし君が千年の和歌のうら風
 千百十八番 左 讚岐 右勝俊成卿女
 君を祈る心をくみて答ふ也御手洗川の香もさやかに
 咲きにけり君がみるべき行末は遠里をのゝ秋萩の花
 千百十九番 左持小侍從 右 丹後
 三千年なるてふ桃の百返り花さく春を君や見べき
 龜尾の岩根におつる瀧つせにちる白玉や君が世の數
 千百廿番 左 隆信朝臣 右勝越前
 君が世はにまの里人作の田の稻の穂末の數に任せて
 空はれていづる月日や君が世の末遙なる例なるらむ

千五百番歌合卷第十六 戀一判者生蓮

千百廿一番 左持有家朝臣 右 定家朝臣
 玉椿八千世の後も我君のときはかきはの色は變らじ
 四方の海も煙にさは濱底久しき千世に君ぞ榮えむ
 千百廿二番 左持保季朝臣 右 通具朝臣
 此君の猶行く末は年をへて生ひそふ竹の數しらぬ迄
 君ぞみむ千尋の海の底の色のこむ年波に顯るゝまで
 千百廿三番 左持良平 右 家隆朝臣
 住吉の松の縁と君が世といづれ久しと神ぞしるらむ
 八百日行濱の眞砂にゐる衛君が千世をや添て敷へむ
 千百廿四番 左 具親 右勝雅經
 芋生の浦の其中濱による浪の豊けき君が千世の末哉
 君が世は常磐の山の松の風色も變らじ香もたえせじ
 千百廿五番 左 顯昭 右勝寂蓮
 君ぞみむ山路の菊を千世ながら長月毎につめる印は
 たちぬはぬ衣の袖も匂ふなり山路の菊の萬づ世の秋

千百卅番 左持公經卿 右 通光卿
 然りとて靡かじ物をさを鹿の入野の薄ほにも出敢ず
 此やさば人をみるめの渚なる習はぬ袖にかゝる浪哉
 千百卅一番 左 季能卿 右勝釋阿
 分初めていかに辿らむ行へなきあふを限の道芝の露
 尋入らむ道もしられぬ忍山袖ばかりこそ菜なりけれ
 千百卅二番 左 宮内卿 右勝俊成卿女
 詠めには心許さじこれぞ此の積れば遂に戀となる物
 しらざりき柳ばぬ水に影みえて袖に雫の懸る物とは
 千百卅三番 左持讚岐 右 丹後
 ふじのねも立そふ雲は有る物を戀の煙ぞ紛ふ方なき
 けふ社は袖にも漏せいつのまに傾て涙の色にみゆ覽
 千百卅四番 左 小侍從 右勝越前
 たてそめてあふ目をまちし錦木の餘り難而き人心哉
 戀路にもおり立ぬればよそに見したごの裳裾を袂に
 千百卅五番 左 隆信朝臣 右勝定家朝臣
 袖のいろは若紫にあらずに心をそむる信夫もぢ摺
 逢事の稀なる色や顯れむもいいでそむる袖の涙に
 千百卅六番 左 有家朝臣 右勝通具朝臣
 折らずしてやみなむ物か山櫻霞のまよりみえし句を
 戀をのみしふの道の果通ふしるべは心也けり
 千百卅七番 左 保季朝臣 右勝家隆朝臣
 雲の色も昨日みしには變りけり思染めつる夕暮の空
 ほのみてし君にはしかに春霞疑びく山の櫻なりとも
 千百卅八番 左 良平 右勝雅經
 いつのまに君に心を筑波山程なく茂る歎きなるらむ
 これやさは人を思ひの初煙なれぬながめの空の浮雲
 千百卅九番 左 具親 右勝寂蓮
 戀すてふ名は徒に陸奥の忍のやまもかひなかりけり
 物思ふと涙の末もちりぬべし心の内も袖にしられて
 千百四十番 左 顯昭 右勝家長

灰めかすかひこそなけれ逢事を印南の浦の蟹の漁火
 君をけふ三垣が原に袖濡し芹つむばかり物や思はむ
 千百四十一番 左勝女房 右 内大臣
 神無月そでのみ下の初時雨人のこゝろを秋の一しほ
 包袖たが戀るとは漏さすとつくらむ墨を哀ともみよ
 千百四十二番 左持左大臣 右 忠良卿
 うち忍び磐瀬の山の谷隠れみづの心をくむ人ぞなき
 言の葉は色にもいで朽ねとや常磐の杜の秋の下露
 千百四十三番 左持前權僧正 右 兼宗卿
 我戀はゆく方もなき詠めより空しき空に秋風ぞふく
 富士のねの煙に耻ぬ思哉もゆとはみえて下に焦るゝ
 千百四十四番 左持公繼卿 右 通光卿
 陽炎の岩垣淵のわさかへり上浪たゝぬ物をこそ思へ
 人しれぬ心の同じ友なれや仄みしま江の蘆の亂れは
 千百四十五番 左持公經卿 右 釋阿
 せきも敢ず戀すてふ名や流れなむ水の下迄影通ふ也
 哀なり轉寝にのみ見し夢の長き思ひに結ばれなむ
 千百四十六番 左持季能卿 右 俊成卿女
 身にはまだ習はぬ物を怪くも聞しに似たる袖の上哉
 いかせむ忍の山に跡たえて思入れども露の深さを
 千百四十七番 左持宮内卿 右 丹後
 人しれぬ戀をのみ唯菅の根の長くや頼て思入れなむ
 打出でむ言の葉さへぞ堰れぬる搔も流さぬ山川の水
 千百四十八番 左持讚岐 右 越前
 諸共に有明の空ぞまたれけるほの三日月の宵の面影
 顯れむ名は惜しけれど忍山嶺の白雲かゝらずもがな
 千百四十九番 左持小侍從 右 定家朝臣
 片糸のあふとはなしに玉緒もたえぬ計を亂果てぬる
 千百五十番 左 隆信朝臣 右勝通具朝臣
 忍山現にだにもまだみぬをはかなくたのむ夢の通路

千九十二番 左持宮内卿 右 通具朝臣
我戀は人しれぬまの 萬蒲草怪めぬ程ぞねをも忍びし
吉野川岩うつ浪のわき 歸り影みぬ水の瀬に碎けつゝ
千九十三番 左 藤原朝臣 右 家隆朝臣
うちへて若しき物は 人のみ忍の浦の蟹のたく繩
から衣日も夕浮の空の色 曇らば曇れまつひともなし
千九十四番 左 小侍従 右 藤原雅經
思はじと思ふ心の叶は ねば人をば況ていかゝ怨みむ
懸てだに頼めぬ浪のよる 松もつれなきよきの浦風
千九十五番 左 持隆信朝臣 右 寂蓮
いかせむ思は深し伊勢の海に 釣する蟹の承引ぬ身を
自ら恨むる方も有なまし 身をなき物に思ひなさすば
千九十六番 左 藤原朝臣 右 家長
山賤のありたつ澤の 眞菰草假にのみこそ袖も濡らぬ
浪返る君に近江の 堅田舟繁き蘆間を行く方ぞなき
千九十七番 左 藤原朝臣 右 三宮
今こむと契空しく つけぬれば空行く月の影も怨めし
頼まじと思ふ物から 暮毎に心にかゝる蜘蛛のふるまひ
千九十八番 左 良平 右 藤原内大臣
あはで唯嘆く計りの 契をばこそ何故に結びおきけむ
幾世しも有じ物故味 氣なく憂身にかへて思べきかは
千九十九番 左 具親 右 藤原忠良卿
さりととも待し暮こそ 儂れ訪にだに猶つらき心を
思寝に我が心から みる夢もあふ夜は人の情なりけり
千二百番 左 顯昭 右 藤原兼宗卿
厭はれて年ふる身には 思ひやる心遣ひも恥かしき哉
逢坂は都に近き程なれど 戀路となれば遠ざかりけり

千五百番歌合卷第十七 戀二判者顯昭法師
千二百一番 左 藤原女房 右 釋阿
眺れば人の人またる 侘つゝも今夜の月に飽すかもねむ
せきわびぬあふ瀬も しらぬ涙河片しく袖やあでの欄
千二百二番 左 藤原左大臣 右 俊成卿女
下燃の名にやはたて む難波なる蘆火焚屋に燻る煙を
夏衣薄くや人のなり ぬらむ空蟬のねにぬるゝ袖かな
千二百三番 左 藤原權僧正 右 丹後
有明のこや長月の 空頼あ待出づる月のかき曇るまで
時しらの戀はふじの ねいつとなく堪ぬ思にたつ煙哉
千二百四番 左 持隆信朝臣 右 越前
波荒き岩にも松は 生にけりと思ふ計を慰めにして
岩の上におひぬる 松の種をのみ頼む計の慰めぞうき
千二百五番 左 藤原公經卿 右 定家朝臣
斯しつゝ憂身消なば ありし世の夢を儂み哀とをみよ
夢なれやをのゝ篠原 假初に露分し袖は今も萎れて
千二百六番 左 藤原季能卿 右 通具朝臣
遮莫憂身の程や 知せまし云はせいでやむべき物思かは
我戀はあふを限の 頼みだにゆくへもしらぬ空の浮雲
千二百七番 左 持宮内卿 右 家隆朝臣
身の程に包むといは 自ら厭ふに成ぬ戀すしも非ず
思へども人の心の 淺茅生に置迷ふ霜の敢すけぬべし
千二百八番 左 讚岐 右 藤原雅經
更に身此や頼めしよ はならむ月をのみ社待可りけれ
哀ともいつかは 人に磐余野のいはれず懸る袖の露哉
千二百九番 左 小侍従 右 寂蓮
淺ましや斯やは物 と思ふべき我つらからば人は忍ばし
思ふ事千江の浦曲の 浮木だに寄合ふ末は有と社さけ
千二百十番 左 藤原隆信朝臣 右 家長
朝夕にうき面影を 水馴掉さすがにさても慰みやせむ

夢にだにみるよもなく 明るよの返す衣の袖の浦波
千二百十一番 左 有家朝臣 右 藤原三宮
年ふとも流てこひむ たらしとて扱やは人を山川の水
よと共にくき人よりも つれなきは思に消ぬ命也けり
千二百十二番 左 保季朝臣 右 藤原内大臣
思遣れ草にも非ず 木にも非ず唯やは袖に露は置べき
見し夢を忍ぶる雨の 漏さばや現ともなきそでの雫を
千二百十三番 左 持良平 右 忠良卿
池水につがはぬ 鶯の浮枕ならぶ方なき戀もするかな
人もうく我も悔しき 慰めは世々の契の報いばかりぞ
千二百十四番 左 藤原具親 右 兼宗卿
今はとて思絶べき 横の戸をさゝぬや待し習ひなる覽
君をのみ偏に忍ぶ 夏衣さても裏なきかひやなからむ
千二百十五番 左 顯昭 右 藤原通光卿
さり共とも唯にては 山城の泉の小管いつか逢みむ
古はしぢの端書 百夜とも頼むればこそ其につけても
千二百十六番 左 持女房 右 俊成卿女
君は知や待夜 許多に積來て袖に有明の月をみるとも
色變る心の秋のとき しもあれ身にしむ暮の萩の上風
千二百十七番 左 左大臣 右 藤原丹後
木隠れて身は空 蟬の唐衣ころもへにけり忍びしに
わりなしや露のよすが 尋ねきて物思袖に宿る月影
千二百十八番 左 藤原權僧正 右 越前
いかにとよ戀しき 事を由なしと思果つれば物忘して
逢事は片山岸の 岩の上につを待とてふるみる覽
千二百十九番 左 藤原公經卿 右 定家朝臣
蘭夢路はさこそ 通ひけれあふとみる夜の移香もがな
尋見るつらき心の 奥の海よ汐干の渦の云かひもなし
千二百二十番 左 持公經卿 右 通具朝臣
眺めわびつらき 空なる月影に身の浮雲ぞ最ぞ悲しき
あふとみて思合せぬ 夢にさへ儂かりける契なれとや

千二百廿一番 左 藤原季能卿 右 家隆朝臣
知せては中々戀や 増べき云ぬにつらき人し無れば
自から頼む夢路は 空しくていつか現の戀はさむべき
千二百廿二番 左 持宮内卿 右 雅經
これも又哀いつまで 嘆かれむ變らぬだにも變る心を
先の世を思もうしや 人心つれななれとは契しもせじ
千二百廿三番 左 藤原讚岐 右 寂蓮
夢にだに人をみよと 轉寝の袖吹き返す秋の夕風
いせの海の潮瀬に 靡く濱萩の程なき節に何萎るらむ
千二百廿四番 左 小侍従 右 藤原家長
契らずな枕にとめ 移香を絶なむ後の形見なれとは
侘つゝは同世にだに と思身のさらぬ別に成や果なむ
千二百廿五番 左 藤原隆信朝臣 右 藤原三宮
石川や蟬の小川の 流にもあふせありやと契をぞする
物思ふ心のうちに 宿りきぬ富士の高嶺も室の八洲も
千二百廿六番 左 持有家朝臣 右 内大臣
荷且に結ぶ 笹屋の雨そよぎよのほども漏る涙かな
忍れどよそめやいかに 麻手洗ふ盥の水の影も耻かし
千二百廿七番 左 保季朝臣 右 藤原忠良卿
思ふ事忍べど今は 名取川せいの埋木現はれやせむ
ねれねば枕もうち とき床の上に我知り顔にもる涙哉
千二百廿八番 左 持良平 右 兼宗卿
名残にはぬれこそ 増れさよ衣かへしてきつる夢の曙
厭ふ共同世にこそ すすむらめと思ふばかりぞ頼也ける
千二百廿九番 左 具親 右 藤原通光卿
はしわびぬ思ひ 信太の杜の露千々に碎くる手枕の袖
空蟬の人もといへば 何ならず身に替てやは忍果べき
千二百卅番 左 顯昭 右 藤原釋阿
厭ひつる君ばかり やは浮暮くるしき物をたえぬ怨は
幾年に慣にし床の ふりぬらむつげの枕も若生にけり
千二百卅一番 左 持女房 右 丹後

三 怨みよとなれる夕のけしきかな頼めぬ宿の萩の上風
 四 中々に越てぞ迷ふ相坂の關のあなたや戀ぢなるらむ
 千二百卅二番 左 勝左大臣 右 越前
 五 行通ふ夢の内にも紛るやとちぬる程の心休めには
 六 秋風に思ひ亂れて悔しきは君をならしの岡のかる萱
 千二百卅三番 左 前権僧正 右 定家朝臣
 七 慰むる時こそなけれ月や非ぬ秋やむかしの萩の上風
 八 人心通ふたゝちのたえしより怨みぞ渡る夢のうき橋
 千二百卅四番 左 公繼卿 右 通具朝臣
 九 いかで我忍びになるゝ移香のたえぬ匂を袖に重ねむ
 〇 曉の床は草葉の何なれや露に別れのなみだおくらむ
 千二百卅五番 左 持公經卿 右 家隆朝臣
 一 萩のはに露の御言を結ばずばかをも人も誰か怨む
 二 思ひ出たがかね事の末ならむ昨日の雲の跡の山風
 千二百卅六番 左 季能卿 右 勝雅經
 三 何と斯よなゝ袖の萎るらむ思へば誰が心なりしぞ
 四 思ひわびあつる涙の玉毎に碎さはてゝもある心かな
 千二百卅七番 左 勝宮内卿 右 寂蓮
 五 明るまに惜まぬ物をくれればとは心の外の空頼め哉
 六 浪騒ぐ蘆間につく鳥の浮沈みてもぬるゝ袖かな
 千二百卅八番 左 勝讀岐 右 家長
 七 深草の野への鶉よ汝は猶假にはとだにまたぬ物かは
 八 詠めわびぬ獨有明の月影にあはぬ數かく鳴のはね搔
 千二百卅九番 左 小侍從 右 三宮
 九 頼む共今は頼まじ近江路のしのゝを吹雪人謀り也
 〇 さのみやは人の心に任すべし忘るゝ草の種をばや
 千二百四十番 左 隆信朝臣 右 勝内大臣
 一 戀せじの袂も今や夢にだにみたらし川の忘れ形見は
 二 明暮はなれし昔を忘つゝ夢かとのみぞ思ひなざるゝ
 千二百四十一番 左 持有家朝臣 右 忠良卿
 三 立返り暮まつ程の晝間だになくゝ袖を絞りつる哉

四 戀をのみしつやの小菅露深み假にも袖の乾くまぞなき
 千二百四十二番 左 保季朝臣 右 兼宗卿
 五 大方を涙にくらす夕されは思ふばかりの眺だにせず
 六 泣流す涙も我を厭へばや身を離てはあつるなるらむ
 千二百四十三番 左 持良平 右 通光卿
 七 狭筵やあたり寂しき寢覺して夢の別も露けかりけり
 八 白らあふよあらばのあらましも思絶ぬる身の思かな
 千二百四十四番 左 具親 右 釋阿
 九 結びける浅き契の程みえてあかて別るゝ山の井の水
 〇 陸奥のあら野の牧の駒だにもとればとられて馴行物を
 千二百四十五番 左 顯昭 右 俊成卿女
 一 昔より人の上にも思ひさや戀に浮名を留むべしとは
 二 うち返し重ねし袖を片しければそれかと匂ふ手枕 露
 千二百四十六番 左 勝女房 右 越前
 三 萩のはに身にしむ風は音信てこぬ人つらき夕暮の雨
 四 人ならば驚かすなといひてまし心もしらぬ萩の上風
 千二百四十七番 左 勝左大臣 右 定家朝臣
 五 縁返し頼めても猶あふといひ片糸をやは玉のをにせむ
 六 俤は慣しなから身にそひて非ぬぬ心の誰契るらむ
 千二百四十八番 左 前権僧正 右 通具朝臣
 七 つみしらば報を思へ花霞めならふ人は一人ならぬを
 八 とへかしな尾花が本の思草萎るゝ野への露はいかに
 千二百四十九番 左 公繼卿 右 家隆朝臣
 九 道のべのいつ柴原のいつかわれ歸る朝の露拂ふべき
 〇 時しもあれなぞ強ちにつらからむ秋は夕暮月は有明
 千二百五十番 左 公經卿 右 勝雅經
 一 怨ばや人をも身をも朝霞の八重立つ波の秋をしぞ思
 二 宿るとて月に涙をまかせてもくちなばいかに袖の桐
 千二百五十一番 左 季能卿 右 寂蓮
 三 沖つ浪荒井の磯の岩に生ふる松にも似たる袖の上哉
 四 面影は曇る空だに有る物をうたて隅なくすめる月哉

千二百五十二番 左 勝宮内卿 右 家長
 唐衣うちぬる程の夢路にも人に怨みを結ぶなりけり
 小夜衣重ぬる事のなきてのみ涙に袖の朽やはてなむ
 千二百五十三番 左 持讀岐 右 三宮
 曇るさへ嬉しかるべき空ならば涙の雨も厭ざらまし
 〇 うとかりし唐土船もよるばかり袖の港をあらふ白浪
 千二百五十四番 左 小侍從 右 勝内大臣
 侍人もとふの菅菰とはこそ七ふをあけてぬとも
 〇 詠むれば心さへこそ憂雲やその右のゆふぐれのそら
 千二百五十五番 左 隆信朝臣 右 勝忠良卿
 一 明けぬとて傳く忍ぶ名殘哉あふともなき夢の契を
 二 待し比待習ひにし夕暮はまたれぬ時も猶またれけり
 千二百五十六番 左 有家朝臣 右 兼宗卿
 三 誰も皆うきをば厭ふ理をしらずばこそは人を恨みめ
 四 朝夕になれ行く君が俤はつらき心の外にやあるらむ
 千二百五十七番 左 保季朝臣 右 通光卿
 五 つれなきは猶變らでや山科の音羽の山の音に立らむ
 六 逢事は夢にのみこそ習ひきて現ともなき今夜也けれ
 千二百五十八番 左 持良平 右 釋阿
 七 逢見ても名殘小島の蟬人はけきの起きにぞ袖濡しつる
 八 あやなしや戀すてふ名はたつた川袖をぞ括る紅の波
 千二百五十九番 左 具親 右 俊成卿女
 九 あかずして別るゝ涙袖にけふなほ東雲の遺芝のつゆ
 〇 思ひ出でゝなきこそ渡れ秋風に契りし空の初雁の聲
 千二百六十番 左 顯昭 右 丹後
 一 先の世の契有けりと計もみゆる程なる言のはもがな
 二 逢見ても心のはるゝ隙ぞなき歸空には打時雨つゝ
 千二百六十一番 左 勝女房 右 定家朝臣
 三 現こそぬる宵々もかたからめそをだに許せ夢の關守
 四 思出よにがきぬゝの曉もわが又忍ぶ月ぞみゆらむ
 千二百六十二番 左 左大臣 右 通具朝臣

五 暮しつる日は菅のねの菅枕交しても猶つきぬよは哉
 〇 今こむと契し事は夢ながらみし夜に似たる有明の空
 千二百六十三番 左 前権僧正 右 兼宗卿
 六 我袖に宿る習の悲しきはぬるゝがほなるよの月影
 七 清見瀉我通路の關なれやうちぬる人も浪のよるゝ
 千二百六十四番 左 公繼卿 右 勝雅經
 八 あひなくも時雨の音のつらき哉侍人の來りよはの寢覺は
 〇 返しても空しき床に絞る哉恨み果てつるよはのさ衣
 千二百六十五番 左 公經卿 右 寂蓮
 一 つくゝとと思石の浦千鳥浪の枕になくゝぞきく
 二 たが里の露をば袖に拂ふらむ蓬のとは風に任せて
 千二百六十六番 左 季能卿 右 家長
 三 逢見ても後つらからむ浮名をば止ぬ命に替むとぞ思
 四 うち萎れ露のみ深き思草霜にしられで年はへにけり
 千二百六十七番 左 勝宮内卿 右 三宮
 五 間へかしな時雨の袖の色に出て人の心の秋になるみを
 六 心こそ一方ならず感ひぬれ釣する蟻のうけならね共
 千二百六十八番 左 勝讀岐 右 内大臣
 七 涙川せきやる方やしがの浦みるめは末も頼なければ
 八 山城のこまの爪生の世中やならしは果て人のつれなき
 千二百六十九番 左 小侍從 右 勝忠良卿
 九 唯もせし眺なれ共折からに忍ぶも又ぞ苦しかりける
 〇 身のうきは人のつらさを知べにて涙の宿は袂也けり
 千二百七十番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
 一 我戀は夢の寢覺かはみるにつけても袖の濡らむ
 二 いつ迄か思亂れてすすべきつれなき人を忍もち摺
 千二百七十一番 左 持有家朝臣 右 通光卿
 三 涙しもせきやはあへぬ結着く水も漏らじの契違は
 四 逢見ても過にし方のつらさをば忘べしとは思ざりしな
 千二百七十二番 左 保季朝臣 右 釋阿
 五 袖の上に心の色は著けれど流石に淺き思ひとはみし

六思ひ出よ忘れやしぬる若狭路や後瀬の山と契し物を
千二百七十三番 左 勝良平 右 俊成卿女
七露の身の其曉にきえずしてたゆる恨に結ばれつゝ
八待つとだに人は忘るゝ狭筵に幾夜重ねつ袖の片しき
千二百七十四番 左 持具親 右 丹後
九いつ迄とこのよを月に叩つゝ濡ても袖を又忍ぶらむ
〇悔しくぞ磯邊の浪の打出てけふはかひなき怨のみする
千二百七十五番 左 顯昭 右 越前
一あだに吹風には如何散すべき浮田の杜の秋の言のは
二斯れとは重ねざりしをさよ衣あな生憎の袖の氣色や

千五百番歌合卷第十八

戀三 判同前

千二百七十六番 左 持女房 右 通具朝臣
三濱底久しくもみぬ君なれや逢夜をなみの浪ま無れば
四草の原とへば白玉とればけぬ夢なの人の露の詭言や
千二百七十七番 左 左大臣 右 家隆朝臣
五身にそへる其裾も消なくも夢也けりと忘るばかりに
六浦風や今夜も松に更にけり頼めぬ浪の音ばかりして
千二百七十八番 左 持前權僧正 右 雅經
七寢覺する我手枕の秋の露は春も置けりいつも置けり
八思ひかねつれなき中にまつ事は暮せる宵の夢の通路
千二百七十九番 左 勝公繼卿 右 寂蓮
九逢夜さへ今や／＼と鳥のねを思へば待に成ぬべき哉
〇夕ざれば軒の葱にさ／＼がにのいと斯りける心弱さよ
千二百八十番 左 勝公繼卿 右 家長
一きえかへり風に漂ふ泡雪の哀思ひの行くへしらせよ
二物思へば袖に光は有明の月の行へていく夜ながめつ
千二百八十一番 左 季能卿 右 勝三宮
三眺めやる生駒の山に雲とちて行へに迷ふ雨の夕ぐれ

四思侘びうちぬる隙の難ければ夢もよがるゝ床の上哉
千二百八十二番 左 宮内卿 右 勝内大臣
五いとせめて思入れたる歎哉憂身ならでは恨やはする
六戀死なむ孰方へとて息のをの絶む命の名こそ惜けれ
千二百八十三番 左 讚岐 右 勝忠良卿
七思寝の心の外にさめにけり夢の内にも夢としらねば
八跡たえぬ誰にとはまし陸奥の思ひしのよの奥の通路
千二百八十四番 左 小侍從 右 勝兼宗卿
九つらきをば恨ぬ物を逢争のあればぞ斯る心をもみる
〇獨寝の床に片しく我袖にあふ嬉しさをいつか包まむ
千二百八十五番 左 勝隆信朝臣 右 通光卿
一今は唯思ひたえたる夜な／＼の契もしらぬ松の風哉
二今ぞしるつらしと聞し鳥の音は獨寢覺に待れ鳥とも
千二百八十六番 左 有家朝臣 右 勝釋阿
三此を見れば哀もなご懸さらむぬるゝ貌なる袖の月影
四夢にだにあふせありやと待べきに枕のみうく涙川哉
千二百八十七番 左 保季朝臣 右 勝俊成卿女
五幾返り七ふのちりを拂ふらむ待夜重なるとふの菅菰
六みる程ぞしばし慰む歎きつゝねぬよの空の有明の月
千二百八十八番 左 良平 右 勝丹後
七今はさば心にしげれ忘草うきをばたへて忍ぶ物かは
八思ひかね宇治の橋姫事とはむ待夜の袖は斯や濡しと
千二百八十九番 左 具親 右 勝越前
九忘れず稀に通ひし一夜だに我を怨みし人や契りし
〇待程にふけぬる夏のはも猶思絶ゆれば明し兼ね鳥
千二百九十番 左 顯昭 右 勝定家朝臣
一等閑の玉章をたにみましやは憂を恨ぬ心ならずば
二忘れねよ此は限のと計の仁人傳ならぬ思出はうしむ
千二百九十一番 左 勝女房 右 家隆朝臣
三數々に思ふ心は大淀のまつを怨むるなみのおとかな
四あひにあひて物思ふ頃の夕暮になくやさ月の山郭公

千二百九十二番 左 勝左大臣 右 雅經
六廻りあはむ限はいつとしらね共月な隔てそ空の浮雲
七山のはに入る迄月を眺むともしらでや人の有明の空
千二百九十三番 左 持前權僧正 右 寂蓮
八とに斯にうき敷かくや我ならむしちの端書鴨の羽搔
九物思へば月だに宿る袖の上をととはでや人の有明の空
千二百九十四番 左 勝公繼卿 右 家長
〇妹がと思ひ暮せば山端にまたれでこそは月は出づれ
一今は唯むねは漁火床は海恨みてのみも年はふるかな
千二百九十五番 左 勝公繼卿 右 三宮
二歎きわびみしは夢ぞと忍ぶれば忘侘びぬる中の手枕
三猶頼む我心をぞ怨むべきこれにかざれる空頼めかは
千二百九十六番 左 持季能卿 右 内大臣
四忘ても露の情や残らむよしや草葉と云しばかりに
五忘草おふるのべをば尋ぬれど昔思ぶぞなほも露けき
千二百九十七番 左 持宮内卿 右 忠良卿
六つれなくも猶長らへて思ふ哉浮名を惜む心ばかりに
七戀ひわぶる袖の港の浪枕幾夜うきねの數つもらむ
千二百九十八番 左 持讚岐 右 兼宗卿
八契置きし浦吹く風はさも非で袖に涙ぞやむ時もなき
九逢見ての後さへ物を思ふ哉人の心のしらまはしさに
千二百九十九番 左 持小侍從 右 通光卿
〇長らふる身の連なさを同世に在て聞るゝ事のみぞうき
一〇さりととも頼む心の深ければ猶此暮も松のしたみづ
千三百番 左 隆信朝臣 右 勝釋阿
一〇忘れじの露の情を忍草名をかふるまで老いにける哉
二現には思絶行く逢事をいかにみえつる夢路なるらむ
千三百一十番 左 勝有家朝臣 右 俊成卿女
三〇うしと思ひ戀しと思ふ一方に乾く時なき袖の上哉
四〇めの前に變る物ぞとみても猶よゝの契の果ぞ忘れぬ
千三百二十番 左 勝保季朝臣 右 丹後

五忍取ぬ名をや煙にたてつらむ蟻の藻鹽火下焦れても
六漏さじと互みに包む人めにも涙はえ社留めざりけれ
千三百三番 左 勝良平 右 越前
七思はずな重ねし袖の其儘に歎のつまとならむ物とは
八蘆のはの枯行みれば津國のこや秋はつる微なるらむ
千三百四番 左 持具親 右 定家朝臣
九厭はるゝ身にそへし思はじを心ならぬや君が御
〇果は唯蟻の刈藻を宿りにて枕定むるよひ／＼ぞなき
千三百五番 左 顯昭 右 勝通具朝臣
一待夜はの明行鐘はぬ人のつらさをさへぞ驚かしける
二まつらむと思ひし物を秋風の獨身にしむ夕まぐれ哉
千三百六番 左 勝女房 右 雅經
三つれなくば唯異浦にたて煙我すむ方は月ぞさやけき
四物思ふ心ひとつに秋ふけて人をも身をも葛のうら風
千三百七番 左 持左大臣 右 寂蓮
五我が涙求めて袖に宿れ月さりとて人の影はみえねど
六すまの浦の鹽燒蟻の袖は猶ほすもぬるゝも心なる覽
千三百八番 左 持前權僧正 右 家長
七顯れて移ろふ色の著ければ人の心のはなをみるかな
八年月を古河のべに戀侘びぬいつかあひみむ二本の杉
千三百九番 左 公繼卿 右 勝三宮
九戀しさも餘り思へば忘れられて其事となく涙落ちけり
〇さめぬればあかぬ別の心ちして割なき物は轉寝の夢
千三百十番 左 公繼卿 右 勝内大臣
一〇獨のみ憂古郷 なにし負はゝ忍とだにも人の知れかし
二〇忍ぶとも軒の玉水つゞ／＼とありし雨夜の物語せよ
千三百十一番 左 季能卿 右 勝忠良卿
三〇つらきをも思知ずは無き物を怨む計の身の程もがな
四〇憂を思ふ歎の色を染しより松に夜深く風しぐる也
千三百十二番 左 宮内卿 右 勝兼宗卿
五〇津國のみつとな云そ山城の訪ぬつらさは身に餘る共

六〇つくくと思も悲し逢ぬ夜はいをだに安くぬるよ
千三百十三番 左 讚岐 右 勝通光卿
七〇天雲のよそ乍らだにいつ迄かめにみる程の契也けむ
八〇かひなしと返す衣を怨むればねられぬよの習也
九〇千三百十四番 左 小侍従 右 勝釋阿
一〇〇とに斯に思へど物の適はねばいける命を歎く計りぞ
一〇一云通ふ道だにたえぬ逢事の長柄の橋はさこそ朽なめ
一〇二千三百十五番 左 持隆信朝臣 右 俊成卿女
一〇三徒に明ぬと告る鐘のねは逢ぬ夜しもぞ悲しかりける
一〇四うき物と誰かいひけむ曉の別のみこそ形見なりけれ
一〇五千三百十六番 左 勝有家朝臣 右 丹後
一〇六夕やぐれ頼めぬ物をとばかりに忍び返せば萩の上風
一〇七君こふる涙の色は思ひかへすにかへるものかは
一〇八千三百十七番 左 勝保季朝臣 右 越前
一〇九さくもろし何と心に止るらむ思ひたへたる夕暮の鐘
一〇一〇心あらば心をかへて思ひしれをの、篠原忍ぶ氣色を
一〇一一千三百十八番 左 良平 右 勝定家朝臣
一〇一二根來し涙ばかりを袖にかけて幾夜か戀をすまの關守
一〇一三かかれぬるはさぞな例と眺めても慰まなくに霜の下草
一〇一四千三百十九番 左 具親 右 勝通具朝臣
一〇一五忘れぬ時忍べとはなけれ共云ねばしぬ習ひ計ぞ
一〇一六打拂ふ折も有けむ床の浦の浪にねれたるよはのさ蓮
一〇一七千三百廿番 左 顯昭 右 勝家隆朝臣
一〇一八つらして何怨けむ契あればさける物をよはの下紐
一〇一九中々に明だに果ね起もせずねよはの村雨の空
一〇二〇千三百廿一番 左 持女房 右 寂蓮
一〇二一白露も明行く程はのべにおく時ともわかぬ袖の上哉
一〇二二さゆる夜の浮寝の霜を打拂ひなくなる鴛も我計やは
一〇二三千三百廿二番 左 勝左大臣 右 家長
一〇二四我とこそ眺慣れにし山のはにそれも形見の有明の月
一〇二五みせばやな曉露のおき別笹わくる朝の袖のけしきを

千三百廿三番 左 勝前權僧正 右 三宮
七我涙よしの、河のよしさらば妹背の山の中に流れよ
八七夕をわが身の上になしはて、重ぬる袖に天の河浪
九千三百廿四番 左 持公繼朝臣 右 内大臣
一〇身を知て人をば何か恨べきと思へば最ど慰めもなし
一〇一いせの蟹のみるめ果よいかならむをふの浦梨
一〇二千三百廿五番 左 持公繼朝臣 右 忠良卿
一〇三斯迄のつらさに堪で戀死なば思ひ出もなき命也けり
一〇四戀ひ渡るとだえばかりは現にてもみるも夢の浮橋
一〇五千三百廿六番 左 勝季能卿 右 兼宗卿
一〇六こむともすぐる習は中々に頼めぬ夜はの情也けり
一〇七人心木葉ふりしくえにしあれば涙の河も色變りけり
一〇八千三百廿七番 左 宮内卿 右 勝通光卿
一〇九我からと人を怨みぬ袖の上も涙はおなじ涙なりけり
一〇一〇形見とも常にしすまば眺めまし慣し其夜の有明の月
一〇一一千三百廿八番 左 讚岐 右 釋阿
一〇一二石上ふるのわさ田に綱はへて引人あらば物は思はじ
一〇一三昔みし人のみ今は戀しきを又逢まじき事を悲しき
一〇一四千三百廿九番 左 小侍従 右 俊成卿女
一〇一五頼のつゝこの夜を待し古を忍ぶべしと思はせし
一〇一六習ひこしたるが偽もまだしらすで待とせしに庭の蓬生
一〇一七千三百卅番 左 隆信朝臣 右 勝丹後
一〇一八戀をのみしつる門田の一向に音たゆる迄秋果ぬとや
一〇一九獨寝の袖に知る、時雨社秋しもわかぬ物と見えけれ
一〇二〇千三百卅一番 左 勝有家朝臣 右 越前
一〇二一戀をのみ常に時雨の横のやの疎らにだに音信よかし
一〇二二いかにせむ慰むやと眺むれば別しよはの有明の空
一〇二三千三百卅二番 左 勝保季朝臣 右 定家朝臣
一〇二四思ひおきていづる涙の行く末は袖より頼て遠芝の露
一〇二五千三百卅三番 左 勝良平 右 通具朝臣

一〇二六變行く人の心は何なればつらきを慕ふ我身なるらむ
一〇二七言のはの移りし秋も過ぬれば我身時雨とふる涙かな
一〇二八千三百卅四番 左 具親 右 勝家隆朝臣
一〇二九後の世を頼む頼も有りなまし契變らぬ別れ也せば
一〇三〇入るまでは月眺めつ電の光のまにももの思ふ身の
一〇三一千三百卅五番 左 顯昭 右 勝雅經
一〇三二何とかは今朝の別を嘆くべきその移香は慕ひきに身
一〇三三思事残らぬ秋の夕だに、猶忘らるゝ身こそつらけれ
一〇三四千三百卅六番 左 勝女房 右 家長
一〇三五長月の月みてかひはなけれも頼めし物を有明の頃
一〇三六眞葛原人 心のあき風はかへすゝも怨めしきかな
一〇三七千三百卅七番 左 勝左大臣 右 三宮
一〇三八嘆かずと今は同じ名取川せいの埋木朽果てぬとも
一〇三九今こむの契はたえて中々に頼めぬ月ぞ夜枯ざりける
一〇四〇千三百卅八番 左 勝前權僧正 右 内大臣
一〇四一立田山夜はにや君が獨とてねしよの夢の行へぞぞ知
一〇四二猶つらしきかず顔にて明す夜に枕に近き鳥の浮寝よ
一〇四三千三百卅九番 左 持公繼朝臣 右 忠良卿
一〇四四絶果る程ぞ哀にしられる夢路にだにもみらく少き
一〇四五影たえて程は雲のながめにも猶夕暮の山のはの月
一〇四六千三百四十番 左 勝公繼朝臣 右 兼宗卿
一〇四七戀ひわぶる涙や空に曇るらむ光も變るねやの月かけ
一〇四八懲果ぬ身身の果を疑ひて心裏に附べかりけり
一〇四九千三百四十一番 左 勝季能卿 右 通光卿
一〇五〇厭はるゝ名はふるさじと思ひしを心に除る袖の村雨
一〇五一忍びあへず我やゆかひのいざよひに昔語の夕暮の空
一〇五二千三百四十二番 左 持宮内卿 右 釋阿
一〇五三頼めしを待とて我身ゆきふればらみとりにも果は成鳥
一〇五四逢ふ事は交野の里の笹の庵篠に露ちる夜はの床かな
一〇五五千三百四十三番 左 讚岐 右 勝俊成卿女
一〇五六哀々はかなかりける契かな唯うたゝねの春のよの夢

一〇五七戀といふ浮名ばかりぞ留めけむ忘形見を誰忍べとて
一〇五八千三百四十四番 左 小侍従 右 丹後
一〇五九歌妙の枕も疎く成ぬれば歩みし夜はも戀しかりけり
一〇六〇千三百四十五番 左 勝隆信朝臣 右 越前
一〇六一とへしかな哀と迄は非ず共借もやいけると計をだに
一〇六二打絶て待れぬ程に成ぬれば吹くも吹ぬも萩の上風
一〇六三千三百四十六番 左 勝有家朝臣 右 定家朝臣
一〇六四忘じと云しばかりの名残とて其夜の月は廻來にけり
一〇六五千三百四十七番 左 勝保季朝臣 右 通具朝臣
一〇六六起別れ歸る道をば送るとも月は物をや思はざるらむ
一〇六七千三百四十八番 左 良平 右 勝家隆朝臣
一〇六八今とはや己がきぬゝ急ぐらむ獨り片しく東雲の月
一〇六九千三百四十九番 左 勝具親 右 雅經
一〇七〇およしさらば怨果てむと思へ共心強さは人によりけり
一〇七一お掬ぶ手の雫ばかりを袖にみて飽でも人に山の井の水
一〇七二千三百五十番 左 勝顯昭 右 寂蓮
一〇七三一邂逅に逢見て後も厭けり戀は果うき物にぞありける
一〇七四露繁きよもぎが闇のひまとちて古き枕に秋風ぞ吹く
一〇七五千三百五十一番 左 勝女房 右 三宮
一〇七六千三百五十二番 左 勝女房 右 三宮
一〇七七久方の空はれわたる浪の上に雲ときえ行く沖の釣舟
一〇七八君が代に類も見えぬ例哉神のたねまきし住吉の松

千五百番歌合卷第十九 雜一 判者 前權僧正

千三百五十二番 左 左大臣 右 内大臣
 八八 皆人の世にふる道ぞ哀なる思入るも思ひぬも
 八八 そのかみや祈りしとは豊受のしるしぞ君が恵也ける
 九八 豊受の受すと如何思べき世にふる道はあれ共
 千三百五十三番 左 前権僧正 右 忠良卿
 〇九 明石がた舟の昔にことへば鳥がくれば行く跡のしら浪
 九八 寂しさを人も梢の眺にてけふもくれぬとまつ夕風
 二九 敲きける水鶏ならねど松風の人も梢は哀なりけり
 千三百五十四番 左 公繼卿 右 兼宗卿
 三九 情しる人はいかに眺むらむ明行く山の空の氣色を
 四九 住吉の松の梢のふか緑つもれるはるの色ぞみえける
 五九 眺むれば明け行く山の空よりも緑の色は住吉の松
 千三百五十五番 左 公經卿 右 通光卿
 六九 更に又妻と暮の武藏野にゆかりの草の色も睦まし
 七九 古も今行く末の世の果も思ひいれつるあかつきの空
 八九 世の果と中におかずは武藏野の色や有まし曉の空
 千三百五十六番 左 季能卿 右 釋阿
 九八 くら持の神も怨めしいかなればあたに櫻の花と做けむ
 〇〇 夜を重ねさびしき床にすが枕幾度鐘の聲を待つらむ
 一〇 鐘の音に驚きて聞く神の名は猶白菅の枕なりけり
 千三百五十七番 左 宮内卿 右 俊成卿
 二〇 さし昇る日影たけり朝なきの雲なき空にたづ遊ぶ也
 三〇 寢覺もる月さへ寂し奥山の柴の編戸の明け方のそら
 四〇 寢覺もる月さへ寂し奥山の柴の編戸の明け方のそら
 千三百五十八番 左 謙阿 右 丹後
 五〇 古への神世もかくや春の花枝の紅葉は定めおきけむ
 六〇 時しあれば花は春にも逢に鳥待事も無きみいかにせむ
 七〇 待事は珍しからぬ花なれば神世の紅葉色やそぞろ
 八〇 袖におく露もまだひぬ曉に木綿附鳥の鳴くぞ怪しき
 九〇 いすゞ川その水上を尋ぬれば神路の峯にかゝる白雲

〇一 曉の鳥のねたしや神路山思ひなかけそ嶺のしら雲
 千三百六十番 左 隆信朝臣 右 定家朝臣
 一 明ぬとや約する舟も出でぬらむ月に棹さす磯菴の浦
 二 大方の月もつれなき鐘の音に猶怨めしき有明のそら
 三 何事とわかぬ有明の空よりも月に棹社さし増らめ
 千三百六十一番 左 持有家朝臣 右 通具朝臣
 一 跡たれて幾世に成ぬ神風や五十鈴の川の清き流に
 二 翠のねに通ふ岡邊の松風は葉分に千々の秋調ぶなり
 三 神風はいすゞ河原に吹馴れぬ時々許せ松の葉分に
 千三百六十二番 左 保季朝臣 右 兼隆朝臣
 一 尋入る山路の深くなるまゝに鳥の聲迄變り行くかな
 二 神風やみもすそ川も岩清水も君が爲とや澄始めけむ
 三 懸まくも畏き神の諸注連は中にも如何引習ふべき
 千三百六十三番 左 持良朝臣 右 雅經
 〇一 かなれば同空より降雨の春秋のべの色をかふらむ
 二 四阿屋の軒のしのぶの末の露幾朝起の袖したふらむ
 三 雨も露も朝起の袖の上の色深し浅しも思ひ分れず
 千三百六十四番 左 具親 右 兼光朝臣
 二 てるつきも君に心をゆふかけて柳葉白き天のかぐ山
 三 谷の水嶺の嵐をしのびても法の薪にあふぞうれしき
 千三百六十五番 左 顯昭 右 兼家
 二 明ぬと鳴が羽音に驚けばまた夜も深し猪名のふし原
 三 八雲たつ出雲八重垣ひまもなく恵にこめよ君が萬世
 更にける鳴が羽音も争でかは八雲の色に立優べき
 千三百六十六番 左 女房 右 内大臣
 二 ありそ海のやむ時もなき浦風に浪隠れ行く蟹の釣舟
 三 柳葉やいつも緑のしめの内に鳩吹秋は風ぞ身にしむ
 一 蟹小舟波隠れ行浦風は鳩吹よりも身にぞしみる
 千三百六十七番 左 持左大臣 右 忠良卿
 三 かり人も哀しれかし嶺の鹿のべのさすの己が聲々

山高みかけちの雲の絶間より麓の浪を出づる月かけ
 月影は麓の雲を出でぬれば嶺には鹿の聲ぞ悲しき
 千三百六十八番 左 前権僧正 右 兼宗卿
 三 君が世にふるからを、本木に返るや我身なるらむ
 六 風の音に聲をも頼てしらすれば友とぞ頼む窓の呉竹
 七 本木には未歸果すさればよ竹のよしとこそみれ
 千三百六十九番 左 公繼卿 右 通光卿
 八 玉鐸の道の消え行くけしきまで哀しらす夕暮の空
 九 暮はてむ空をば暫し三日月の影仄なる名残をぞ思ふ
 〇 たまほこの道の夕の氣色に光ぞ薄き三日月の空
 千三百七十番 左 公經卿 右 釋阿
 一 山のはに重る雲のいかなれや都にもぬ空の色哉
 二 押てるや濱の南の松原も幾木の千世を君にそふらむ
 三 君が世の幾木の千世を松の色に染ます物は有らむ
 千三百七十一番 左 季能卿 右 俊成卿
 四 深山木の梢にさ夜や更ぬらむ月に寂たるむさびの聲
 五 哀思ふ侍人こそ知ね雲の嶺のかけ路を通ふ松風
 六 哀なる峯のかけちの松風に最恐しきむさびの聲
 千三百七十二番 左 宮内卿 右 丹後
 七 窓近く嶺の松風おとづれてのきよりしたを通ふ白雲
 八 羨まし雲の遙になりぬれど空行く月は廻りあひけり
 九 珍しき軒より下の白雲に空行く月の立ち隠れぬる
 千三百七十三番 左 謙阿 右 兼光朝臣
 一 草も木も己が折々契置て色をも香をも人にしれつゝ
 二 神さすと宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 三 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 千三百七十四番 左 小侍従 右 定家朝臣
 四 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 五 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 六 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 七 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 八 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 九 潮みても宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かぢし
 千三百七十五番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣

故郷の池はみ草にとぢられて心に月を宿しつるかな
 流れての世々に傳はる河竹も君に契れる末ぞ久しき
 千三百七十六番 左 持有家朝臣 右 兼隆朝臣
 一 此頃は又なぞらへて持さすべし難の言葉も續けて
 二 風ふけける天の戸山の荒まくも小嶋が磯による浪哉
 三 霧はるゝ鳥羽田の面を見渡せば行末遠き秋の山里
 千三百七十七番 左 保季朝臣 右 雅經
 一 此頃の風 姿に馴れて身にしむ色は孰れともなし
 二 一夜だに心止らぬすまひかな片袖に山嵐のかせ
 三 宿れとや苦のさむしむらうち拂う旅行く人を松の下風
 千三百七十八番 左 良平 右 兼光朝臣
 一 今ぞ思ふ片岡山の旅びとも身をかくしける紫のそで
 二 見れば此も哀也ける衣哉身を隠すとて身も隠れぬる
 千三百七十九番 左 具親 右 兼家
 一 見渡せば花と雪とに同色のをりから變る峯の白雲
 二 此頃は和歌の浦浪立ちそひて君をや守る玉つ嶋姫
 三 雲に如何立劣るべき若の浦に君を守らむ玉つ嶋姫
 千三百八十番 左 顯昭 右 兼光朝臣
 一 筵田のいつぬき川に年をへて浪や立つらむ鶴の毛衣
 二 鳥のねも鐘の響もなき山は明くるもしらぬ峯の丸臥
 三 薙田と打聞くよりも深き山に哀なるべき嶺の丸臥
 千三百八十一番 左 女房 右 忠良卿
 一 すまの浦に待夜更行月影を浪のあなたに誰惜むらむ
 二 珍しき浪のあなた月影に忘れにけり深き山端
 千三百八十二番 左 持左大臣 右 兼宗卿
 一 舟の内波の下にぞ老いにける蟹の所爲も暇な世や
 二 春の日の長閑に照す大空にむれたるたづの遊ぶ聲々
 三 波の下蟹の所爲に比ぶれば其事となきたづの聲哉

千三百八十三番 左 前權僧正 右 勝通光卿
 舊にける長柄橋は跡もなし我老の末は斯らずもがな
 一八 通ひけむ昔のこのしらべまで思ひしらすの松風
 二八 松風に昔のこを引懸けて思ひ知るらむ末ぞ遙けき
 千三百八十四番 左 公繼卿 右 勝釋阿
 三六 秋としも哀を何か思ひけむ暮行く空の癖にぞ有ける
 四八 色變ぬ御垣の内の吳竹も君が御代にぞ千世は繁らむ
 五八 君が代に千世繁るべき吳竹の癖なき方に心移りぬ
 千三百八十五番 左 持公經卿 右 俊成卿女
 六八 教へおきし是ぞ都の辰巳とて軒端の峯に鹿も鳴なり
 七八 時知ぬすの篠屋に月もりて風こそ秋の音をきかすれ
 八八 孰方ぞ巽の鹿も風の音もいとよかに聞ぞ分れぬ
 千三百八十六番 左 持季能卿 右 丹後
 九八 栗原のあねはの松を誘ひても都はいつとしらぬ旅哉
 〇八 哀なるすの篠屋の丸寝哉跡留むべき隈とやはみし
 一八 凡て唯劣りと云て有ぬべしあれはの松らすの篠屋も
 千三百八十七番 左 宮内卿 右 勝越前
 二八 わたの原幾重の波を隔てとも都をこめしおなじ白雲
 三九 濁る世に光さやけき夜半の月心をすます道知べせよ
 四九 思分かぬ雲の隔てに迷ふ程月の知べや澄増るらむ
 千三百八十八番 左 讚岐 右 持定家朝臣
 五九 心あらば行て見べき身なれ共音にこそきけ松が浦嶋
 六九 幾世へぬかざしをりけむ古に三輪の檜原の苔の地路
 七九 住蟹の心有べき松が浦もみわの檜原に及べきかは
 千三百八十九番 左 小侍從 右 勝通具朝臣
 八九 浮節は滞るとも河竹の流れてするにあふせなりせば
 九九 風速み夕沙みてば難波かた入江のたづの聲も惜ます
 〇〇 浮節はげに滞る心ちして入江のたづや鳴増るらむ
 千三百九十番 左 隆信朝臣 右 勝家隆朝臣
 一〇 尋ねきて心なきまで月ぞすむ世の隠れがと頼む庵に
 二〇 住の江の月に神世のこと問へば松の梢に秋風ぞよく

三〇 隠がの庵に住すまじ住江にいつも眺めむ松の秋風
 千三百九十一番 左 勝有家朝臣 右 雅經
 四〇 山のはの雲を衣に片しきてさも明けがたき岩枕かな
 五〇 雲にふし嵐に宿る足引の山のいくへの夕ぐれのそら
 六〇 山端の同じ雲にはふしながら強くもみゆる岩枕哉
 千三百九十二番 左 保季朝臣 右 勝如商人得主寂蓮
 七〇 打はへて如何とみえし柴の庵もすめば追に日數へに鳥
 八〇 里遠き市の庵のとみえし柴の庵もすめば追に日數へに鳥
 九〇 柴の庵げに如何とて苦庇さしてぞ厭ふ心とめけむ
 千三百九十三番 左 勝良平 右 家長
 一〇 夕暮は山のはいづる月をみて挑げちやらぬ窓の灯火
 二〇 色深き萬の葉まで梢のはの名におふ宮に散始めけり
 三〇 萬の葉散おほせてもみえぬ哉此古事は懸まくもいさ
 千三百九十四番 左 勝具親 右 三宮
 四〇 尋來る人もいつかは三輪の山杉は傷ぬる印ばかりぞ
 五〇 波の音も風の響もさしながら幾世になりぬ松が浦嶋
 六〇 舊ぬれど杉は印も有ぬべし波のよせなき松が浦嶋
 千三百九十五番 左 顯昭 右 勝内大臣
 七〇 來人のあらばいかと問てまし獨のみきく嶺の松風
 八〇 せさのをも君が尊の爲とてや八雲の印立ち立ちけむ
 九〇 松風は人に問ふべき眺かは八雲の印立ち優るべし
 千三百九十六番 左 勝女房 右 兼宗卿
 一〇 都人とはで月日は杉の庵一軒になれたる嶺のまつ風
 二〇 舊にける磯の岩屋にすむ龜は幾年波を重ねきつらむ
 三〇 杉の庵の軒に慣てはいとしく聞所ある松の風哉
 千三百九十七番 左 勝左大臣 右 通光卿
 四〇 若かねの凝しく嶺を踏馴し薪ころをもいかに苦しき
 五〇 年毎に生添竹の節をへて久かれともなれる御世哉
 六〇 千三百九十八番 左 前權僧正 右 勝釋阿
 七〇 情あらば人もすさめよ櫻麻の學生の下草老果ぬとも

二 和歌の浦の風に携さふ友鶴の君が壬年に逢ぞ嬉しき
 七二 今ぞ知左を右になしらば老とすと人は人に云れし
 千三百九十九番 左 勝公繼卿 右 俊成卿女
 八二 さよふけて風吹くらしあなし河川音高くなり増る也
 九二 斯しても明せば幾夜過ぎぬらむ山路の苔の露の狭庭
 〇三 あなし河けに音高く聞ゆなり敷忍ぶべき露のさ庭
 千四百番 左 勝公經卿 右 丹後
 一三 たつた山こえし昔の面影はふもとのさとの有明の月
 二三 今更に思入るこそ儂けれ占置かざりし谷の戸ほそに
 三三 何となく物寂しきは立田山思入る方も哀なれども
 千四百一番 左 持季能卿 右 越前
 四三 まだかゝる道こそ雪も白菅の風に漂ふ朝ぼらけかな
 五三 高砂の松を友とはなれども眺めぞなる徒にして
 六三 とに斯に云おほせてや見えざらむ雪の白菅高砂の松
 千四百二番 左 持宮内卿 右 持家朝臣
 七三 中々にながめにぬれぬ賤がさる田籾の島の雨の夕暮
 八三 駒とめしひの熊川の水清み夜渡る月の影のみぞみる
 九三 更にける雨と月に分兼ぬぬ田籾の島もひの熊川も
 千四百三番 左 勝讚岐 右 通具朝臣
 〇四 身のうさや月や非ぬと眺れば昔ながらの影ぞ漏來る
 一四 曉は獨ねざめに思ふことあはれ敷そふ鳴のはねかき
 二四 身のうさの詠めはげにぞ哀なる月や非ぬの春の曙
 千四百四番 左 小侍從 右 勝家隆朝臣
 三三 音羽河音に聞きつゝやみなばや越て悔しき相坂の關
 四三 幾世としられぬ物は白雲の上よりおつる布引の瀧
 五三 いとしく音さへ高く開ゆ也雲に晒せる布引の瀧
 千四百五番 左 持隆信朝臣 右 雅經
 六三 古郷はいく重の雲に跡とちてかさなる山の峯の月影
 七三 跡とめて止る方なき浮寝哉こそ浮たる浪ちなれ共
 八三 とに斯に山路波方は變れども心は同じ旅ね也けり
 千四百六番 左 勝有家朝臣 右 勝子得母寂蓮

九四 花かとも故郷人のとひこかし軒端の山のみねの白雲
 〇四 かりける御法の花ぞ鶯よ梢を惜しとおもひけむ
 一四 哀とも如子得母の戯れを思出でや獨行くらむ
 千四百七番 左 勝保季朝臣 右 家長
 二四 山深くすまば共にと云人も誠にならば變りもやせむ
 三四 此までも畏き御世にははらねば古今の跡をこそとへ
 四四 昔く道は誠にならば通らねと思知こそげには覺ゆれ
 千四百八番 左 勝良平 右 三宮
 五四 わたのはら眺の果は一つにて村雲わくる沖つしら波
 六四 尋ねこし昔の人は跡たえて野中の清水誰かくむらむ
 七四 わたの原村雲分る波に又野中の水も淺からぬかな
 千四百九番 左 持具親 右 内大臣
 八四 わたの原幾夜の月を知べにて都の山を波にまつらむ
 九四 神垣に夜や明方になりぬらむ木綿附鳥の聲の聞ゆる
 〇四 山端を波の上には待もせよ月の知べや幽なるらむ
 千四百十番 左 顯昭 右 勝忠良卿
 一四 我友と人やみららむ柴の庵の籬にうつすいさ村竹
 二四 しほがまやをちの眺めの波分て松の木間に沖の釣舟
 三六 常にみるいさ村竹聊も勝べき節ぞみえず成ぬる
 千四百十一番 左 勝女房 右 通光卿
 四六 これやさは都にてみし空の雲を片しく嶺の旅臥
 五六 昔筵青ねが峯は名のみして唯白雲のよそめなりけり
 六六 立劣る峯の雲こそかひなけれ其を片しく心深さに
 千四百十二番 左 左大臣 右 勝釋阿
 七六 春の田に心をつくる民も皆おり立てのみ世をぞ厭はむ
 八六 四の海治れる世は音に聞龜のを山にも波ぞよせこむ
 九六 下立て營む民も然はあれど猶よせ深し龜のを山は
 千四百十三番 左 前權僧正 右 勝俊成卿女
 〇六 蘆たてる難波のみつに燒鹽の鹽垂て物を思はずもがな
 一六 諸共にすめばなりけり葦鶴も吉野の奥の松の木の本
 二七 仙人の栖がましきよしなれや吉野の山の奥の松風

千四百十四番 左勝公繼卿 右 丹後
千四百十五番 左勝公繼卿 右 越前
千四百十六番 左 季能卿 右勝定家朝臣
千四百十七番 左 隆信朝臣 右 通具朝臣
千四百十八番 左 持謙岐 右 家隆朝臣
千四百十九番 左 小侍從 右 雅經

千五百番歌合卷第二十

千四百廿六番 左勝女房 右 釋阿
千四百廿七番 左 保季朝臣 右勝内大臣
千四百廿八番 左 前權僧正 右勝丹後

千四百廿九番 左勝公繼卿 右 越前
千四百三十番 左勝公繼卿 右 定家朝臣
千四百三十一番 左 有朝朝臣 右勝家長
千四百三十二番 左 有朝朝臣 右勝家長
千四百三十三番 左 有朝朝臣 右 三宮

千四百三十四番 左 顯昭 右勝兼宗卿
千四百三十五番 左 顯昭 右勝兼宗卿
千四百三十六番 左 顯昭 右勝兼宗卿

千四百四十四番 左持公繼卿 右 定家朝臣
 六丈夫は稻葉かき分け家ゐして戀秋風を身に占つらむ
 六六 磯馴松變らぬ色の色もいさ身にしむ風もします
 千四百四十五番 左持公繼卿 右 通具朝臣
 六六 待てよはひの熊川に頼め置し駒打並むる夕暮の空
 六六 泊りするをしまが磯の波枕さこそはふかめ夜の松風
 六六 千四百四十六番 左持季能卿 右 家隆朝臣
 六六 荇生のきしも嶮しき古郷をまことに厭ふ心なりせば
 〇昨日こそ浪はかけしか楫枕雲しく峯も袖はぬれけり
 〇枕掛雲しく嶺にうつる程嶮しき里にしばし宿らむ
 千四百四十七番 左持宮内卿 右 雅經
 〇武夫の八十宇治川の橋柱のごかにおとせまきの鳥舟
 〇今日も又荻の末葉を空にみて露ふり暮す武藏野の原
 〇武藏野の露も細かに見ゆれ共もじ少ななる橋柱哉
 千四百四十八番 左持謙岐 右 知得得灯 寂蓮
 〇行末をしる人あらば問てまし斯云々て果はいかにぞ
 〇雪螢光を窓にあつめても思ひしらるゝ法のともし火
 〇儂しな法の灯そも消ぬかくいひくはてはても誠に
 千四百四十九番 左 小侍從 右 藤室長
 〇かくばかり勿來の關と思ひける人に心を何と留めむ
 〇海をなみ蘆邊を指て鳴たづの千世を伴ふわかの浦人
 〇斯計脈ふ勿來の關よりも蘆べよせはある若の浦人
 千四百五十番 左 隆信朝臣 右 勝三宮
 〇寢覺とふ深山の里の松の風さくも聞ぬも寂しかり身
 〇荷且と思ひし物を飛鳥井のみま草隠れ幾夜ぬらむ
 〇み眞草や立優るらむ松風を聞ぬ心は如何しるべき
 千四百五十一番 左 有家朝臣 右 勝内大臣
 〇八人数に眺めすべき秋の月身を浮雲のうち時雨つゝ
 〇八八 八百萬神の誓もまことには三世の佛の恵みなりけり

〇八八 浮雲やわかぬ心に見る時は神を佛としるぞ嬉しき
 千四百五十二番 左 保季朝臣 右 忠良卿
 〇八八 物思はで袖の涙となる物は松よりおろす嵐なりけり
 〇八八 月影を待も惜むも眺にて出づるも入るも山のはの空
 〇八八 みれば猶月を眺の山のはに袖の松風吹き増るらし
 千四百五十三番 左 持良平 右 兼宗卿
 〇八八 夜と共に木の下暗き常磐山月も送らで誰かこゆらむ
 〇八八 都にてみしに變らぬ月なれど山里さびし有明のそら
 〇八八 何と無て異なる影もみえぬ哉送らぬ月も變らぬ月も
 千四百五十四番 左 具親 右 通光卿
 〇八八 三月いらば我もさてやは磯枕旅寝も近ししがのうら波
 〇八八 冬の夜はうら風寒し楫枕さても明石の月をみつれば
 〇八八 旅枕並べてみれば最どしく月は明石や澄増るらむ
 千四百五十五番 左 顯昭 右 釋阿
 〇八八 舟をよする音にや騒ぐ覽すまの上野に雉立なり
 〇八八 懸ていへば厭もす覽春日山さりとて如何頼ざるべき
 〇八八 昔より木高くなれる春日山落下てもみゆるす舟
 千四百五十六番 左 丹後 右 丹後
 〇八八 月残る蘆屋の里の有明に昔に似たるあまのいさり火
 〇八八 人にだにしらぬ谷の下水に昔き月の影はさしけり
 〇八八 谷水に宿れる月は臆にて影さやかなるあまの漁火
 千四百五十七番 左 左大臣 右 越前
 〇八八 押返し物を思ふは苦しきに知ず顔にて世をや過まし
 〇八八 捨やらぬ我身を浦の空背負空しき世とは思ふ物から
 〇八八 知らず顔は希はるゝ世なれ共又すて難き空背負哉
 千四百五十八番 左 前權僧正 右 定家朝臣
 〇八八 誰か聞く難波の潮のみつなへに田籠の鳥の鶴の諸聲
 〇八八 年ふれば霜夜の間に鳴鶴をいつ迄袖のよそに聞けむ
 〇八八 行末を頼む霜夜の鶴の聲や田籠の鳥に鳴増るらむ
 千四百五十九番 左 持公繼卿 右 通具朝臣
 〇八八 作ける長柄の橋は又朽ぬふりにし人の此をみませば

〇九〇 又造る長柄の橋の末も如何もしりしらす曉の空
 千四百六十番 左 勝公經卿 右 家隆朝臣
 〇九〇 重ねては衣手さむし泉河千鳥なく夜のあかつきの霜
 〇九〇 我庵は嶺の杉村分け過ぎて其ともしらぬ深山木の蔭
 〇九〇 峯の杉またみ山木の繁さより眺めやすきは曉の霜
 千四百六十一番 左 季能卿 右 雅經
 〇九〇 九品の蓮の内に結ばれてとへは散さぬ身とも成ばや
 〇九〇 草の葉にしをれふしぬる袖枕夢やは結ぶ夜は白露
 〇九〇 極樂の尊き方はしばしおくをかしき色の袖枕かな
 千四百六十二番 左 持宮内卿 右 實得 寂蓮
 〇九〇 越行けば梢にかゝる跡もなし山の孰くに雲懸るらむ
 〇九〇 侘人の心計りは通ひきて思ふにさこそ嬉しがるらむ
 千四百六十三番 左 謙岐 右 勝家長
 〇九〇 影たけて悔しかるべき秋の月山路近くも成やしぬ覽
 〇九〇 君が世に染増すと聞く色なれば今一入も身にぞ
 千四百六十四番 左 小侍從 右 勝三宮
 〇九〇 羨まじいた田の橋の桁よりも戀ひ渡りけむ人の心よ
 〇九〇 沖つ風鹽やく浦を吹くからに昇りもやらぬ夕煙かな
 〇九〇 みれば猶板田の橋の末よりも鹽やく浦に風渡る也
 千四百六十五番 左 隆信朝臣 右 勝内大臣
 〇九〇 我宿をとふ人あらば知せよ岩ふむ道になるゝ山守
 〇九〇 位山跡を尋ねてのほれども子を思ふ道に猶惑ひぬる
 〇九〇 昔聞く心は開の末なれば子を思ふ道ぞげに哀なる
 千四百六十六番 左 有家朝臣 右 忠良卿
 〇九〇 身の中々なれば云はねども見人毎に如何とぞ思
 〇九〇 數ならぬ我身は花にふく嵐すむ夜も月にかゝる浮雲
 〇九〇 流懐の心々の心をはこゝろしてこそ定むべらなれ
 千四百六十七番 左 保季朝臣 右 兼宗卿

〇九〇 明ぬれど浪は許さず清見海關路は鳥の音迄と思ふに
 〇九〇 位山何中々のあとならむ嶺まで思ふほごのくるしさ
 〇九〇 位山思ふ心ぞ哀なる跡あるからにあとをくるしと
 千四百六十八番 左 勝良平 右 通光卿
 〇九〇 春の日の恵を松にかゝる哉其數ならぬ藤の末葉も
 〇九〇 斯しつゝ幾世の露になれぬらむ草の枕に袖を重ねて
 〇九〇 何となくさ社は松に懸るらむ藤の末葉を哀とぞ見
 千四百六十九番 左 具親 右 釋阿
 〇九〇 芳野河岩こそ浪を眺むればたえぬ水の心をぞしる
 〇九〇 吉野川絶ぬ流の深さをば汲てだに社知まほしけれ
 千四百七十番 左 顯昭 右 俊成卿女
 〇九〇 假庵の友とはいかに頼むべきも程もなき背の稻妻
 〇九〇 清見濁浮寝の浪に宿る夜は月に心のとまるなりけり
 〇九〇 理や清見が月の光にはいかに及ばむ背のいなづま
 千四百七十一番 左 持女房 右 越前
 〇九〇 誰みよと荒れたる宿の松風に獨すみける浅茅生の月
 〇九〇 思事なきだに安く背く世に哀捨てををしからぬ身を
 〇九〇 浅茅生の月に心の澄からに惜からぬか捨られぬ哉
 千四百七十二番 左 持左大臣 右 定家朝臣
 〇九〇 浮沈こむ世は倍もいかにぞと心に問ひて答兼ぬる
 〇九〇 徒にあたら命を聞きけむ長らへてこそけふに逢ぬれ
 〇九〇 けふに逢て過來し方の悔しきも心に問ふも苦し
 千四百七十三番 左 前權僧正 右 通具朝臣
 〇九〇 鷹のくる嶺の松風身にしみて思ひ盡せぬ世の行へ哉
 〇九〇 過ぎにける三十ちの夢の枕にもあはれに秋のよくる曉
 〇九〇 霜に結ぶ三十の夢の枕にもあはれに秋のよくる曉
 千四百七十四番 左 公繼卿 右 兼宗朝臣
 〇九〇 駒とめて爰にや暫休らはむ眞草もよき飛鳥井の蔭
 〇九〇 昔だに昔朽ちける津の國の長柄の橋の跡をしぞ思ふ
 〇九〇 朽にける長柄の橋の跡なれば昔の昔さぞな遙けき

千四百七十五番 左 公經卿 右 勝雅經
有し世の月を浪まに待たて袖ふしかぬる蟲明のせと
千四百七十六番 左 季能卿 右 如民得王 寂蓮
待わびて袖ふしかぬるせとよしも猶濡増る旅衣かな
千四百七十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
心やる道こそ遠くなり増れ老い行くまゝに昔思へば
千四百七十八番 左 持隆信朝臣 右 三宮
心やる道も儂し歸こでねをなく蟻も猶いかにせむ
千四百七十九番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
谷深み重なる宿を見わたせば軒より出づる山川の水
千四百八十番 左 隆信朝臣 右 勝忠良卿
漢草草かきおく末の跡みれば昔にこゆる和歌の浦浪
千四百八十一番 左 隆信朝臣 右 三宮
とに斯に云流しても見えぬ哉わかの浦波山河の水
千四百八十二番 左 保季朝臣 右 通光卿
長らへて猶君が代を松山の待とせしに年ぞへにける
六いとせめて身のうき時の眺には袖にも落る瀧の白玉
千四百八十三番 左 前権僧正 右 勝家隆朝臣
誰も皆のふる思ひは品々に哀にぬるゝ百草のそで
千四百八十四番 左 具親 右 勝俊成卿女
みきとだにたれに語らむ雨そゞ雲に紛ひし曉の夢
千四百八十五番 左 公經卿 右 勝寂蓮
世を厭ふ人の入るなる山里に又住侘て孰ちゆかまし
千四百八十六番 左 丹後
浦ちかき嶺の庵のさびしきはふもとの雲に夕波の聲
千四百八十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
世中を強ても何か椎柴やしばしへぬべき栖だになし
千四百八十八番 左 前権僧正 右 勝家隆朝臣
何となく云くたしたる椎柴や麓の浪に折増るらむ
千四百八十九番 左 公經卿 右 勝寂蓮
憂ながら猶連なくて過すともあらじ我身の末の思出
千四百九十番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
恨むべき人はなれば大方に頼めば世をも打敷つゝ
千四百九十一番 左 季能卿 右 勝家隆朝臣
取々に思けるこそ哀なれ頼めば世をも打敷つゝ
千四百九十二番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
山深み唯こそ人の訪ざらめ月につけては音信もがな
千四百九十三番 左 勝謙岐 右 内大臣
跡もなく岩のかけ路辿りきて雪と分けつる庭の白雲

思分かず同じと云て有な、深き山も岩のかけぢも
千四百八十三番 左 勝良平 右 釋阿
おちれきても猶埋れて年やへむ木葉がくれの山川の水
千四百八十四番 左 具親 右 勝俊成卿女
行へある木葉隠れの山水は沖つ波にも立優れかし
千四百八十五番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
荷且の庵も草のたび枕夢こそあかね野べのうたゝね
千四百八十六番 左 丹後
誰も皆聞渡るなる橋の名は此夢よりもげに残る覽
千四百八十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
袖濡す木の下露もある物を涙添ふすとのかりふし
千四百八十八番 左 丹後
山端にいざよふ月の影みても更ぬる身社悲かりけれ
千四百八十九番 左 公經卿 右 勝寂蓮
さやかなる光も見えす幾程と思分れぬ月と露とは
千四百九十番 左 勝公經卿 右 勝寂蓮
朝夕にあふくこゝろを猶照せ浪もしづかに宮川の月
千四百九十一番 左 前権僧正 右 勝家隆朝臣
和歌の浦にかひなき藻屑揺つて身さへ朽ぬと思ける哉
千四百九十二番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
とにかくに心詞もおよばれずいとも畏き宮川の月
千四百九十三番 左 勝謙岐 右 内大臣
君に斯逢ぬる身こそ嬉しけれ名やは朽せむ世々の末迄
千四百九十四番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
代々と云も嬉しと聞も其乍朽せぬ名こそ云慣てきけ
千四百九十五番 左 前権僧正 右 勝家隆朝臣
朝夕にみてもなづさふ山水の早くも君に仕へつる哉
千四百九十六番 左 公經卿 右 勝寂蓮
憂乍あればぞあへる君が世に數ならす其身をば厭はじ
千四百九十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
山水に揺流してし小浪は誰にもいかた憂るべき
千四百九十八番 左 丹後
嬉しくも其の人数に流れきて跡を尋ぬる堀川の水
千四百九十九番 左 具親 右 勝丹後
哀とてしらぬ山路は送りきと人にはつげよ有明の月
千五百番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
いか計心の底にすみきけむれば跡ある堀川の水
千五百一十番 左 勝公經卿 右 勝寂蓮
心あらむ人は中々住ぬべし浦の筈屋に世を盡しても

見ずしらぬ唐土舟の行來迄世をふる道は八重の潮風
千四百九十一番 左 季能卿 右 勝家隆朝臣
哀さを何に譬へむと思ふまに唐土舟のあとの白波
千四百九十二番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
明き月日が高く仰つゝ年ふる身をばあだにやは思ふ
千四百九十三番 左 勝謙岐 右 内大臣
君が代に此事業は山城のとはにあひみむ和歌の浦人
千四百九十四番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
一條をいひ流すこそ哀なれ我君が代の和歌の浦浪
千四百九十五番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
身のうさを斯ても間に倣果つなぬぐ心を三熊野の月
千四百九十六番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
揺つゝける藻屑を如何思らむ浪に馴たる和歌の浦人
千四百九十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
みくまのゝ月を哀とみる程に又袖濡すわかの浦浪
千四百九十八番 左 良平 右 勝俊成卿女
老の波なほ立出づるわかの浦に哀はかけよ住吉の神
千四百九十九番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
一年をへてこし方のみぞ忍ばるゝ有ましかばと思人故
千五百番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
こし方を忍ぶも如何老の波に哀かくべき住吉の神
千五百一十番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
命こそ嬉かりけれ和歌の浦の又人なみに立交りぬる
千五百一十一番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
いと斯に繁く成ぬる浦浪の耳なれぬればめにも
千五百一十二番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
一位山登りたちにし椎柴の道に迷ひて老いにけるかな
千五百一十三番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
争で猶思心を通さまし道ある御代にあふ身とならば
千五百一十四番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
哀なるなふさゝの思哉等閑ながら人にしれつゝ
千五百一十五番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
我事しはし名草の濱跡こそかよへ和歌の浦わに
千五百一十六番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
濱草をたづのさしもやは藻屑をよする若の浦風
千五百一十七番 左 持隆信朝臣 右 兼宗卿
千四百九十七番 左 保季朝臣 右 勝釋阿
千四百九十八番 左 良平 右 勝俊成卿女
千四百九十九番 左 良平 右 勝俊成卿女
君が代の千世の始に較ればに數ならぬ袖と社見れ

六百番歌合

左大將家百首歌合
春 元日宴 餘寒 春水 若草
夏 遊絲 野遊 雉 雲雀
秋 乞巧奠 稻妻 秋夕 鶯
野分 秋 秋雨 秋夕 秋田

鳴 九月九日 廣澤池眺望 暮秋 柞
 冬 残菊 枯野 寒松 柴
 野行幸 冬朝 佛名 寒松 柴
 初戀 忍戀 契戀 見戀
 尋戀 祈戀 契戀 待戀
 遇戀 別戀 顯戀 稀戀
 絶戀 恨戀 舊戀 曉戀
 朝戀 畫戀 夕戀 求戀
 老戀 幼戀 遠戀 近戀
 旅戀 寄月戀 寄雲戀 寄風戀
 寄雨戀 寄煙戀 寄山戀 寄海戀
 寄河戀 寄關戀 寄橋戀 寄草戀
 寄木戀 寄鳥戀 寄獸戀 寄蟲戀
 寄笛戀 寄琴戀 寄繪戀 寄衣戀
 寄席戀 寄遊女戀 寄傀儡戀 寄海人戀
 寄樵夫戀 寄商人戀 寄商人戀

恩詠 後京極
 從三位藤原朝臣季經
 正四位下行左近衛權中將藤原朝臣兼宗
 從四位上藤原朝臣有家
 從四位下行左近衛權少將藤原朝臣定家
 阿闍梨顯昭

從三位行左近衛權中將兼中宮權大夫藤原朝臣家房
 從三位藤原朝臣經家

正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信
 從五位上藤原朝臣家隆
 從五位下源朝臣信定
 寂蓮 講師
 讀師
 判者

春
 一番 元日宴 左持女房 右 信定
 新玉の年を雲居に迎ふとてけふ諸人にみき給ふなり
 百敷や春をむかふる盃に君が千年のかけぞうつれる
 [判者略下同]
 二番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 立ち變る年の印は豊御酒に重ねて給ふひろはたの衣
 松が崎絶ぬ水室にすべきの千世の例を今日ぞ建ける
 三番 左 有家朝臣 右 家隆
 初春のけふは畏き詔のべよと千世のしるしをぞ置く
 諸人の立ちあふる庭の盃にひかりもしるし千代の初春
 四番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 春くれば星の位に影見えて雲居の橋に出るたをやめ
 いつかと神をたらぬる百しきに萬代めぐれ春の盃
 五番 左 持顯昭 右 寂蓮
 陸月立つけふの圓居や百敷の豊の明の始めなるらむ
 百敷や袖を連ぬるさかづきに醉を侑むる春のはつ風
 六番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 袖交すみはしの際に年古りて幾度春をよそに迎へつ
 いつかと御階の内の節に會に大宮人や春を知らむ
 七番 餘寒 左 持季經卿 右 中宮權大夫
 猶さゆるけしきに著し山櫻まだ冬ごもる梢なるらむ
 幕べき冬には雪の後れるて春とも云はず河渡るらむ

八番 左持兼宗朝臣 右 家隆朝臣
 春きても猶しみ凍る山里は寛の水のおとづれもなし
 春來ても雪ふる空を眺むれば霞も冴る心地こそすれ
 九番 左 持顯昭 右 經家卿
 信樂の外山は雪も消にしを冬をのこすや谷のゆふ風
 春風は吹と開け共柴の屋は猶狭席にいこそ寝られぬ
 十番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 霞あへず猶ふる雪に空とちて春物ふかき埋火のもと
 霞しく今朝さへ冴ゆる袂哉雪ふる年や身に積るらむ
 十一番 左 持有家朝臣 右 信定
 天の原春とも見えぬ眺かな去年の名残の雪の明ぼの
 名残には春の袂もさえにけり霞よりちる雪の氣色に
 十二番 左 持女房 右 寂蓮
 空は猶霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
 梅が枝の匂ばかりや春ならむ猶雪深し窓のあけぼの
 十三番 春水 左 持顯昭 右 經家卿
 つららむし汀を渡る春風に池の心もとけやしぬらむ
 雪積る嶺に春日やさしぬらむ谷の小川に水増り行く
 十四番 左 持定家朝臣 右 中宮權大夫
 氷あし水の白波たちかへり春風しるき池のおもかな
 諏訪の海の氷の上の通路は今朝吹く風に跡絶にけり
 十五番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 音すなり浅芽が下の忘水凍りし程はしられざりしを
 開馴れし嶺の嵐にいつしかと音づればかはる谷の下水
 十六番 左 持兼宗朝臣 右 寂蓮
 春風に池の水や解ぬらむまたれぬ波の花を見るかな
 鶯の涙のつらさ聲ながらたよりにさそへ春の山みづ
 十七番 左 有家朝臣 右 經家卿
 山河の氷のくさび打ちとけて石に砕くる水のしら波
 春風に下行く波の敷見えてのこるともなき薄氷かな
 十八番 左 持女房 右 信定

木の間より日影や春を洩すらむ松の岩根の水の白波
 春くれば水をはらふ谷風のおとにぞつづく山河の水
 十九番 若草 左 持顯昭 右 隆信朝臣
 荒ぬれば繩断つ駒をいかにして接ぎとむ野邊の若草
 今朝見れば深の若せり下根とけ緑にはゆる雪の村消
 二十番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 立渡る野邊の霞を煙にてもえ出にけるこれわか草
 萌出る野邊の若草末遠み空ともいぞ淺みどりなる
 二十一番 左 季經卿 右 信定
 名に立てる老曾の森の下草も年若しとや二葉なる寛
 霜置し去年の枯葉の残るまに其とも見えぬ春の若草
 二十二番 左 持有家朝臣 右 家隆
 春日野の野邊の草葉や萌ぬ寛今朝は雪間の淺緑なる
 花をのみ待ちむらに山里の雪間の草の春をみせばや
 二十三番 左 持定家朝臣 右 經家卿
 運くとも己がさまくさく花も一つ二葉の春の若草
 色々の花咲べしと見えぬ哉草たつ程の野邊の景色は
 二十四番 左 持女房 右 寂蓮
 雪消ゆる枯野の下の淺緑去年の草葉や根に歸らむ
 春雨はこそ見し野邊のしるべかは緑に返る萩の燒原
 二十五番 賭射 左 持女房 右 中宮權大夫
 けふは我が君の御前にとる文のさして片よる梓弓哉
 百しきや近きまもりの梓弓我がひく方ぞ心にはいる
 二十六番 左 有家朝臣 右 寂蓮
 心あるいての舎人の氣色かな玉敷く庭にともね響て
 梓弓ひくばかりはよそなれど心にはいるは雲の上人
 二十七番 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 梓弓春の雲居も響くまでともねに通ふのおとかな
 梓弓儲けの箭にや引けるら迄果迄けふは當りぬる哉
 二十八番 左 持季經卿 右 隆信朝臣
 百敷に引き連なれる梓弓はるもとも音の珍らしき哉

○舍人子がとち打ち鳴す梓弓いて引渡る春はきにけり
 二十九番 左持顯昭 右 信定
 一梓弓射て引春のかひ有てけふの諸響矢は世に響く也
 二あづさ弓春九重にちる雪をけふたつ舞の袖に見る哉
 三十番 左持定家 右 家隆
 三百敷やいて引く庭のあづさ弓昔に返る春にあふかな
 四あづさ弓春の雲居に引連れて氣色となるけふの諸人
 一番 野遊 左持顯昭 右 寂蓮
 五若菜つむこゝを見ればたか取の翁も宜ぞ戯れ合ける
 六若菜つむ子日に出る友ならば家路思はぬ旅寝せましや
 七打群れて葉つむ間に飛火野の霞の内につふも暮しつ
 八暮ぬるかいざ歸なむ春の野の園居はけふに限べきかは
 九三番 左持有家朝臣 右 經家卿
 十あづさ弓春の日暮し引連れてさの原に園居をさする
 十一四番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十二知る知ず事有顔の園居哉芽花抜く野にけふも暮しつ
 十三いつしかと子日に出し春の野を董摘む迄踏馴しつる
 十四五番 左持女房 右 信定
 十五都人宿を霞のよそに見て昨日もけふも野邊に暮しつ
 十六是ぞこの春の野邊かと思ゆる哉大宮人の打群てゆく
 十七六番 左持定家朝臣 右 家隆
 十八皆人の春の心の通ひきてなれぬる野邊の花の蔭かな
 十九思ふどちそことも云ず行暮れぬ花の宿かせ野邊の鶯
 二十七番 雉 左 定家朝臣 右 信定
 二十一鳴てたつきとすの宿を尋ねれば裾野の原 柴の下草
 二十二八番 左持季經卿 右 經家卿
 二十三み狩する人や來つらむすきの野にさ躍る雉千聲頻る也
 二十四さす鳴く交野の原の鳥立こそ誠に假の宿り也けれ

九番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 一春山の霞の内に鳴くさす思ふ心はよそにしれとや
 二忍除り人にしれつゝ鳴く雉子其妻戀の程はいかにぞ
 三十番 左持有家朝臣 右 家隆
 四煙たつ片山さすこゝろせよ裾野の原に妻も籠れり
 五焼きすてし枯野も跡や霞むらむ煙に歸る雉子鳴く也
 六十一番 左 女房 右 中宮權大夫
 七武藏野に雉子も妻や籠らむけふの煙の下に鳴く也
 八妻戀のさす鳴くなり朝霞はるれば頓て草隠れつゝ
 九十二番 左 顯昭 右 寂蓮
 十狩人の入野のさす妻戀て鳴音計に身をやかへてむ
 十一三番 雲雀 左持定家朝臣 右 隆信朝臣
 十二末遠き若葉の芝生打ち靡き雲雀なく野の春の夕ぐれ
 十三雲に入るそなたの聲を眺むれば雲雀おちくる曙の空
 十四四番 左持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 十五冬枯の芝生が下に住しかば春は雲居にあがる雲雀か
 十六雲雀あがる春の燒野の末遠み深山の方は霞なりけり
 十七五番 左持有家朝臣 右 經家卿
 十八住馴し床を雲雀のあくがれて行へも知ぬ雲に入ぬる
 十九見渡せば燒野の草は枯にけり飛立つ雲雀寢床定めよ
 二十十六番 左持女房 右 家隆
 二十一野へ見ればあがる雲雀も今はとて淺茅に落る夕暮の聲
 二十二七番 左持季經卿 右 信定
 二十三遙々と萩の燒原立つ雲雀かすみの内に聲あがるなり
 二十四春採き野への霞の下風に吹かれてあがる夕雲雀かな
 二十五十八番 左 顯昭 右 寂蓮
 二十六春日には空にのみ社あがる雲雀の床は荒やしぬ覽
 二十七子を思ふ巢立の岡を朝行けば揚りもやらず雲雀鳴也
 二十八十九番 遊絲 左持季經卿 右 隆信朝臣

一津の國のこやのわたりの眺には遊絲さへ隙無りけり
 二春來れば靡く柳のともがほに空に紛ふや遊ぶ絲ゆふ
 三二十番 左持兼宗朝臣 右 經家卿
 四覺束な何ばかりなる絲ゆふの軒端に人の詠わくらむ
 五佐保姫や霞の衣織つらむ春のみそらに遊ぶいとゆふ
 六二十一番 左持顯昭 右 信定
 七いとなく思ひ亂て過るよに美しきは遊ぶいとゆふ
 八空にしれ春の軒端に遊ぶ絲の思筋なき身の行方をば
 九二十二番 左持有家朝臣 右 寂蓮
 十春來れば空に亂るゝ糸ゆふを一筋にやはと頼まむ
 十一春風の長閑に吹けば青柳の枝も一つに遊ぶいとゆふ
 十二二十三番 左持女房 右 中宮權大夫
 十三而影に千里をかけて見するかな春の光に遊ぶ絲ゆふ
 十四見渡せばあるか無さかに亂れつゝ心細くも遊ぶ糸ゆふ
 十五二十四番 左持定家朝臣 右 家隆
 十六繰り返し春の糸ゆふ幾世へて同じ緑の空にみゆらむ
 十七長閑なる夕日の空を詠むればうす紅にそむる糸ゆふ
 十八二十五番 春曙 左持季經卿 右 經家卿
 十九立ち渡る霞ばかりは仄にてそことも見えず明暮の空
 二十霞もやあけ行く空を惜むらむ心細げに立ち渡るかな
 二十一二十六番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 二十二この世には心とめじと思ふまに眺めぞ果てぬ春の曙
 二十三何となく心うきぬる獨寝に明ぼのつらき春の色かな
 二十四二十七番 左持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 二十五此やこの心ある人のながむべき難波わたりの春の曙
 二十六哀さは古り行くまゝにそへてけり高津の宮の春の曙
 二十七二十八番 左 定家朝臣 右 經家卿
 二十八霞かは花鶯にとちられて春にこもれる宿のあけぼの
 二十九霞立つ末の松山はのゝと波にはなるゝ横ぐもの空
 三十二十九番 左持女房 右 信定
 三十一見ぬ世まで思ひ残さぬ詠よりむかしに霞むはるの曙

三十番 左持有家朝臣 右 寂蓮
 一思ひ出は同じ詠めに返るまで心に残れ春のあけぼの
 二さやかなる秋にもまさる哀かな月影かすむ有明の空
 三今はとて田面の鴈もうち侘びぬおぼろ月夜の曙の空
 四一番 運日 左持顯昭 右 信定
 五鶯の百さへやうりを幾返りながき春日になき暮すらむ
 六雲の上に鶴の諸聲音づれて哀れ長閑けき春の空かな
 七二番 左持季經卿 右 經家卿
 八春の日はたのむが中に非ね其暮し煩ふ物にぞ有ける
 九春の日の慰め難き徒然に幾たび今日も晝寝しつらむ
 十三番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 十一夕暮に思へばけさの朝霞よを隔てたる心地こそすれ
 十二斯しつゝ積れば惜き春の日を長閑けき物と何思ふ覽
 十三四番 左持定家朝臣 右 中宮權大夫
 十四詠侘びぬ光長閑に霞む日に花さく山は西をわかねど
 十五徒然と暮らしぞかぬる山里の花さかぬ間の春の心は
 十六五番 左持女房 右 寂蓮
 十七秋ならば月待つ事のうからまし櫻に暮す春のやまり
 十八白雲の八重たつ山の花をみて返る家路も日は遙なり
 十九六番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 二十秋の柄を斯てや人のくたしけむ山越覺ゆる春の空哉
 二十一七番 志賀山越 左持定家朝臣 右 家隆
 二十二袖の雪空吹く風もひとつにて花に匂へる志賀の山越
 二十三八風吹く花の梢にあと見えて春もすぎゆく志賀の山越
 二十四八番 左 有家朝臣 右 經家卿
 二十五花散れば道やはよけぬ志賀の山うたて梢を越る春風
 二十六誘れて志賀の山路を越ぬれば散行花ぞしるべ也ける
 二十七九番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二十八散積る花をば踏しと思ふまに道こそ無れ志賀の山越
 二十九春は只雲路を分る心地して花こそ見えぬ志賀の山越

十番 左 季經卿 右 隆信定
 七句はすば吹雪く空とぞ思はまし花散紛ふ志賀の山道
 道もせに花の白雪降りとちて冬にぞ返る志賀の山越
 十一番 左 勝顯昭 右 寂蓮
 昔たれ志賀の山路を踏み初て人の心を花にみすらむ
 故郷に思ふ人あり家づとは花にぞ見ゆる志賀の山越
 十二番 左 持女房 右 中宮權大夫
 遠方やまだみぬ嶺は霞にて猶花おもふ志賀の山越
 春深み花の盛になりぬれば雲を分け入る志賀の山越
 十三番 三月三日 左 持顯昭 右 中宮權大夫
 盆の流につけて唐人の舟のりするけふをしぞ思ふ
 盆の水に浮ぶる花の盃やながれての世の例なるらむ
 十四番 左 持定家朝臣 右 家隆
 唐人の跡を傳ふる盃の波にしたがふけふもきにけり
 植置し賤が心は桃の花三月のけふぞ見るべかりける
 十五番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 けふと云へば岩間に淀む盃を待ぬ空迄花に酔ふらむ
 花の色入目を残す木の本に春も暮れ行く三日月の影
 十六番 左 持季經卿 右 經家卿
 流來て岩間を下る盃のさして誰にとみえずもある哉
 岩間分け流れもやらぬ盃は志せどもかひなかりけり
 十七番 左 持女房 右 隆信朝臣
 散る花をけふの盃とわの光にて波間にめぐる春の盃
 岩間より流れて下る盃に花の色さへうかぶけふかな
 十八番 左 持兼宗朝臣 右 信定
 桃の花枝さしかはす影なれば波にまがへむけふの盃
 さかづきの流と共に匂ふらしけふの花吹く春の山風
 十九番 蛙 左 持季經卿 右 家隆
 山吹の花の盛になりぬれば折しりがほに蛙なくなり
 谷水の岩も音は埋もれてすだく蛙の聲のみぞする
 二十番 左 有家朝臣 右 中宮權大夫

追風にすだく蛙のもろ聲も波もよりくる井手の川水
 漕ぎすぐる舟さへ淀む心地して堀江の蛙聲頻るなり
 二十一番 左 持定家朝臣 右 經家卿
 仄なる霞のすゑのあら小田に蛙も春のくれ恨むなり
 水隠て井手の蛙はすだくとも波の上にも聲は聞ゆる
 二十二番 左 顯昭 右 隆信定
 山吹の匂ふ井手をばよそにしてかびやが下に蛙鳴也
 九まだとらぬ早稲田の葉末靡めりすだく蛙の聲の響に
 二十三番 左 持女房 右 寂蓮
 雨そとぐ池の萍風越えて波と露とにかはづなくなり
 庭の面は一つに見ゆる浮草をこそぞ汀と蛙なくなり
 二十四番 左 持兼宗朝臣 右 隆信
 諸聲に痛くな鳴きそさこそは浮沼の池の蛙也とも
 世と共に波の下にて鳴く蛙何故深きうらみなるらむ
 二十五番 殘春 左 持顯昭 右 中宮權大夫
 儂しやいつ迄花の散じとて春を止たる氣色なるらむ
 飽ざりし花の形見と見春も今幾日は有むとすらむ
 二十六番 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 花も皆散ぬる春は鶯のなく音ばかりに止まる也けり
 鶯も思かねたる聲すなりあすはかりなる春を恨みて
 二十七番 左 季經卿 右 隆信
 兼て思ふ割無るべき名殘哉飽れぬ花も根に返りなば
 我が惜む歎きに添へて思ふかな花に後る春の心を
 二十八番 左 持定家朝臣 右 寂蓮
 木の本は日數ばかりを匂ひにて花も残らぬ春の古里
 鶯の花の時はあれにけり古巢に今やおもひ立つらむ
 二十九番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 うら若き彌生ののべのさいたま春は末葉に成にける哉
 二かなれば咲初むるより藤の花暮行春の色をみす覽
 三十番 左 持女房 右 信定
 吉野山花の故里あとなえて空しき枝にはる風ぞよく

一山のはに匂ひし花の雲きえて春の日數は有明のつき
 夏
 一番 新樹 左 持顯昭 右 隆信朝臣
 立田山わか緑なる夏木立紅葉の秋もさあらばあれ
 面影は時雨れむ秋の紅葉にて薄萌黄なる神なみの森
 二番 左 持季經卿 右 經家卿
 花は皆散りはてにけり夏木立緑も春の色ならぬかは
 夏衣うすもえざる若楓秋そみかへむ色ぞゆかしき
 三番 左 持季經卿 右 信定
 色かへぬ齡は知らず夏木立緑は松にかはらざりけり
 顯はれむ秋をも知らぬ楓かな常磐の色を暫し盗みし
 四番 左 持定家朝臣 右 中宮權大夫
 影ひたす水さへ色を緑なる四方の梢の同じわかばに
 おしなべて緑に見ゆる音羽山何れか花の梢なるらむ
 五番 左 持兼宗朝臣 右 家隆
 我宿の庭こそ暗く成にけれ梢の廣葉の影や添ふらむ
 紅葉ゆえうろし梢の淺緑いろには秋を思ふのみかは
 六番 左 女房 右 寂蓮
 花は散ぬいかに云てか人待む月だに洩らぬ庭の梢に
 春深き野へのけしきと見し程に緑は宿の梢なりけり
 七番 夏草 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 旅人や夏野の草を分來らむ菅の小笠の見え隠れする
 夏草のしげみを行けば何となく露分衣袖ぞぬれぬる
 八番 左 持季經卿 右 中宮權大夫
 誰か行く夏野の草の葉末より仄に見ゆるみし菅笠
 夏草に野飼の駒も隠るへて嘶ゆる聲ぞ人に知らるゝ
 九番 左 顯昭 右 家隆
 夏草の野鳥が崎のあさ露をわけてぞきつる萩が花摺
 繁き野と夏も成行く深草の里は鶉の啼かぬばかりぞ
 十番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣

夏きてぞ野中の庵は荒れ増る窓閉ぢてけり軒の下草
 我宿の蓬の庭は夏深し誰分けよとか打ちもはらはむ
 十一番 左 持定家朝臣 右 寂蓮
 夏山の草葉の丈ぞしられぬる春見し小松人し引ずば
 道もなき夏野の草の庵かな花に穢る庭と見しまに
 十二番 左 女房 右 隆信定
 夏草のともも拂はぬ故郷に露より上を風かよふなり
 夏草の中を露ふみわくる野は我故郷の垣根なりけり
 十三番 賀茂祭 左 持季經卿 右 隆信朝臣
 けふ祭の神の恵は兼てより卯月の忌のさして知にき
 又賀茂の川浪たち返り紫野にや色をそふべき
 十四番 左 顯昭 右 信定
 昔より君と神とに引分けてけふの祭は二葉なりけり
 昔より齋の宮に吹きそめてけふは涼しき賀茂の川風
 十五番 左 有家朝臣 右 家隆
 流ての世の例とて方々のつかひ立ちくる賀茂の川浪
 賀茂秋の宮人かけそへてのどかにわたる賀茂の川水
 十六番 左 持兼宗朝臣 右 寂蓮
 葵草翳すけふとぞ思ひしに花を折ても見え渡るかな
 千早振かもの御誕の葵草引きつゝ來ても渡るけふ哉
 十七番 左 持女房 右 經家卿
 雲居よりたつる使にあふひ草幾年かけつ賀茂の川浪
 年毎のけふの御誕に葵草斯る挿頭は有らじとぞ思ふ
 十八番 左 持定家朝臣 右 中宮權大夫
 雲の上を出づる使の諸鬘向ふ日影にかざすけふかな
 夕禱かけてぞ頼む玉かづら葵嬉しきみあれと思へば
 十九番 鶉川 左 持季經卿 右 經家卿
 同じ瀬をのぼる鮎子に大堰川下りぞやらの篝火の影
 桂川下りもやらの鶉舟かな此瀬にのみや鮎子さ走る
 二十番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 後の世を知らせ顔にも篝火の焦れて過ぐる鶉飼舟哉

丈夫が夜河にたつる篝火に深き哀をいかでみすらむ
 二十一番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 遠近に詠めやはかす鶴飼舟間を光のかかり火のかけ
 六 鶴飼舟と見ゆるは 武士の八十うぢ川の夕闇の空
 二十二番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 篝火の影にあらじ後の世の闇をも知らぬ鶴飼舟哉
 七 大堰川いづ瀨のほれば鶴飼舟風の山のあけ渡るらむ
 八 大堰川 左 持女房 右 中宮権大夫
 九 大堰川 左 持女房 右 中宮権大夫
 十 松浦川七瀬の流を鶴飼舟くだしも果ては明ぬ此夜は
 十一 松浦川 左 持女房 右 家隆
 十二 夜川立五月さぬらし瀬々をとめ八十仲夫も篝さすはや
 十三 鶴飼舟高瀬さしこす程なれや結ばれ行く篝火の影
 十四 鶴飼舟 左 持女房 右 隆信朝臣
 十五 郭公只一聲にあくる夜も待つには秋の心地こそすれ
 十六 郭公 左 持女房 右 隆信朝臣
 十七 短夜も鳥より後ぞ明けやらぬ老の寢覺に物思ふ身は
 十八 夏の夜は敲く水鶏の隙なきに程なく明ぬ天戸なれや
 十九 夏の夜は更行く程や無るらむくれば頓て明る東雲
 二十 暮ぬとて垂籠たれば頓て又隙より白め夏のよなく
 二十一 轉寝のゆめより先にあけぬなり山郭公一こゑのそら
 二十二 足引の山時鳥待つともねぬ夜のそらにあくる東雲
 二十三 夏の夜はなる清水の浮枕結ぶ程なきうたゝねの夢
 二十四 夏の夜の敷にもいれじ郭公さなかなぬ先にあくる東雲

一番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 裏もなき名は立ちながら夏衣袂に風はなほ隔てけり
 二番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 三番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 四番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 五番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 六番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 七番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 八番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 九番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 十番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり
 十一番 夏衣 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏衣袂に風はなほ隔てけり

風通ふ扇に秋のさそはれて先手なれぬる闇の月かけ
 九 打ち拂ふ扇の風の程なきに思ひこめたる萩の音かな
 十 袖の内半隠る扇の程なきに思ひこめたる萩の音かな
 十一 恨みても散にし花を尋ねばや扇の風の宿りなりける
 十二 片山の垣根の影ほの見える露にぞうつる花の夕顔
 十三 折てこそ見べかりけれ夕露に紐とく花の光ありとは
 十四 是や此の人目も知ぬ山賤にさしのみむかふ夕顔の花
 十五 賤男が片岡しめて住む宿をもてなす物と夕かほの花
 十六 蚊遣火の煙いふせきしづの庵に煤けぬ物は夕顔の花
 十七 煙たつ賤の庵か薄霧のまがきに咲けるゆふがほの花
 十八 暮れ初めて草の葉靡く風のまに垣根涼しき夕顔の花
 十九 日敷ふる雪にしをれし心地して夕顔咲ける賤が竹垣
 二十 自ら情ぞ見ゆるあらてくむ賤が外面のゆふがほの花
 二十一 山がつの契の程やしらるらむ夜をのみ待つ夕顔の花
 二十二 春はふ賤が垣根も色はえて光ことなるゆふがほの花
 二十三 黄昏に紛ひて咲ける花の名を遠方人や問はむ答へむ
 二十四 入日さす外山の雲は晴れにけり嵐にすぐる夕立の空
 二十五 谷川の流を見ても知られけり雲こそ嶺の夕だちの空
 二十六 二十番 左 持女房 右 隆信朝臣
 枯渡る軒の下草うちしをれ涼しく匂ふゆふだちの空
 二十七 夏の日をたが住む里に厭ふらむ涼しく曇る夕立の空
 二十八 二十一番 左 持女房 右 隆信朝臣
 四阿屋の軒に雫をとめ置きて程なく晴れぬ夕立の空

夕立の程こそしはし止りつれ名残も涼し深山木の蔭
 二十二番 左 持女房 右 隆信朝臣
 夕立の雲のみをより傳ひきて軒端に落つる瀧の白玉
 二十三番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 夕立は名残も見えず晴にけりいさら小川の音計して
 二十四番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 初瀬山夕日はさせど菅原や伏見の里はゆふだちの空
 二十五番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 鳴神は猶村雲にとろろきて入日に晴る夕だちの空
 二十六番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 これもやと人里遠き片山に夕立すぐる杉のむらだち
 二十七番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 風吹く梢はるかになく蟬の秋を近しと空につぐなる
 二十八番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 茂りあふ青き紅葉の下涼みあつさは蟬の聲に譲りぬ
 二十九番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 雲居よりひびきやすらむ夏山の嶺より高き蟬の諸聲
 三十番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 鳴きさすさぶ隙かと聞けば遠近に頓て待取る蟬の聲々
 三十一番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 隙もなく信太の杜に聞ゆ也千枝にや来なく蟬の諸聲
 三十二番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 夏山の木毎にひびく心地して一方ならずせみの諸聲
 三十三番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 ゆふま山松の葉風に打そへて蟬の鳴音も嶺渡るなり
 三十四番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 深山邊のふか緑なる夏木立蟬の聲とて繁からぬかは
 三十五番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 夏山の梢も高くなくせみは中々聲ぞかすかなりける
 三十六番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 秋ちかき木々の梢に風こえて下葉にうつる蟬の聲々
 三十七番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十番 左 持女房 右 隆信朝臣
 鳴蟬のはに置く露に秋かけて木蔭涼しき夕ぐれの聲
 三十八番 左 持女房 右 隆信朝臣
 夏深き杜の梢にかねてより秋をかなしむ蟬の聲かな

秋
 一番 殘暑 左 持女房 右 隆信朝臣

唐衣ひとへに夏の氣色にて袂に秋はしられざりけり
 秋來ぬと風の氣色は見ゆれ共猶涼しきは音せざり鳥
 二番 左 顯昭 右 中宮權大夫
 水無月の照日や影を残りけむ今朝吹風の秋に知れぬ
 秋を淺み照日を夏とおぼめければ暮行く空の萩の上風
 三番 左 持有家朝臣 右 家隆
 秋風のふきもつよらぬ真葛原夏の氣色に猶返るかな
 秋きてもまだ單衣なる衣手に脈はぬ程の風ぞ吹なる
 四番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 岩間よりもりくる清水手に懸て又澄程ぞ秋の目数は
 三音にのみ哀を添ていかなれば袖にしられぬ秋の初風
 五番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 秋きても猶夕風を松がねに夏を忘れし蔭ぞ立ちうき
 夏衣まだぬぎやらぬ夕暮は袖に待たるは萩のうは風
 六番 左 持有家 右 信定
 打ちよする浪より秋の龍田川さても忘れぬ柳蔭かな
 秋淺き日影に夏は残れどもくるまがきは萩の上風
 七番 乞巧奠 左 季經卿 右 經家卿
 宿毎に影をうつせば七夕のあふせはしげし天の川波
 八番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 吳竹に過ぐる秋風さよふけて祭る程にや星あひの空
 九重にけふ祭るをば七夕の唯一夜にも嬉しとや見む
 九番 左 持有家 右 隆信
 七夕はけふかすとは何ならも逢にのみこそ心引らめ
 焚物の匂ひもかしつ織女のおもふ心を空にしれとや
 十番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 秋毎にたえぬ星會にさ夜ふけて光ならぶ庭の灯火
 露深き庭の灯かけ消えぬ夜や更けぬらむ星あひの空
 十一番 左 持有家 右 信定
 星會の空の光となるものは雲居の庭に照すともしび

織女は雲の上より雲の下に心を分けて嬉しかるらむ
 十二番 左 顯昭 右 寂蓮
 空遠く星會の空のしるしとて秋の調に琴ちたつなり
 織女の逢瀬の庭におく琴のあたりには引くは笹蟹の糸
 十三番 稻妻 左 兼宗朝臣 右 隆信
 影宿す程なき袖の露の上に馴れてもうとき宵の稻妻
 〇むは玉の闇をあらはす電も光の程ははかなかりけり
 十四番 左 持有家 右 經家卿
 稻妻の光にのみやなぐさまむ田中の里の夕やみの空
 六賤の男が山田の庵の隙を荒みもる稻妻を友と社みれ
 十五番 左 兼宗朝臣 右 信定
 秋の夜に幾度ばかり照すらむ稻葉の露にやどる稻妻
 〇山の端に残れる雲の絶間より鳥羽田の面に通ふ稻妻
 十六番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 宵の間の月待つほどの雲間より思はぬ影を見する電
 〇夕月夜かげろふ宵の雲間より光をかへて照す稻妻
 十七番 左 持有家 右 寂蓮
 七はかなしや荒れたる宿のうたゝねに電通ふ手枕の露
 〇すだきこし澤の螢は影消えてたえぬ宿の宵の稻妻
 十八番 左 持有家 右 家隆
 風渡る淺茅が上の露にだに宿りも果てぬ宵の稻妻
 〇眺むれば風吹く野邊の露にだに宿りも果てぬ電の影
 十九番 鶉 左 顯昭 右 家隆
 鶉の子を手に据ねと鶉鳴栗津の原にけふも暮しつ
 〇秋といへば鶉鳴なり小萩原鹿の音をこそ花に任すれ
 二十番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 小萱原吹きくる秋の夕風に心亂れとうづらなくなり
 〇秋風を厭ひやすらむ夕まぐれ淺茅が下に鶉鳴くなり
 二十一番 左 持有家 右 隆信
 夕風のまのゝ萩原吹く儘に聞あれぬとや鶉なくらむ
 〇風の香花の色にも著かりつ鶉なくへき野邊の氣色は

二十二番 左 持有家 右 信定
 夕まぐれ哀籠れる野原かな霧の離にうづらなくなり
 〇移し植えし萩が離のあれ行くを誠の野べとなす鶉哉
 二十三番 左 持有家 右 中宮權大夫
 〇獨すむ蘆の丸屋の下露に床を並べてうづらなくなり
 〇秋風になびく尾花の夕露や鶉がねやの雨とちるらむ
 二十四番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 〇月ぞすむ里は誠にあれにけり鶉のとこをほらふ秋風
 〇繁き野とあれ果てにける宿り哉離の暮に鶉なくなり
 二十五番 野分 左 顯昭 右 經家卿
 〇萩が枝を柵む鹿も荒かりし風のねたさす猶如かず鳥
 〇女郎花野分の風の荒さには靡き乍らも露やこぼるら
 二十六番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 〇百草の花もいかにと思らむあら情なき今朝の野分や
 〇吹亂る野分の風の荒ければ安き空なき花のいろく
 二十七番 左 季經卿 右 寂蓮
 〇跡もなく今朝は野分に成に見しどろにみえしすこ竹垣
 〇思ひやる我心までしをれきぬ野分するよの花の色々
 二十八番 左 兼宗朝臣 右 信定
 〇萩の葉に變りし風の秋の聲やがて野分の露碎くなり
 〇靡き行く尾花が末に浪越えてまのゝ野分に續く濱風
 二十九番 左 持有家 右 家隆
 〇昨日まで蓬に閉し柴の戸も野分にはるゝ岡のべの里
 〇假にさす庵までこそ靡き野分にはるゝ篠原
 三十番 左 持有家 右 隆信
 〇朝未明庭も離も野分して露おきあがる草の葉もなし
 〇夕まぐれ村雲迷ひ吹く風に枕さだめぬ花のいろく
 〇雨ふれど笠取山の鹿の音は中々よその袖ぬらしけり
 〇さらぬだに秋の哀は絶せぬに心細さを添ふる雨かな
 二番 左 兼宗朝臣 右 信定

〇行方なき秋の思ぞせかれぬる村雨なびく雲のをち方
 〇目にそへて秋の涼さ傳ふなる時雨はまだし夕暮の雨
 三番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 〇秋の夜は窓うつ雨に夢さめて軒端にまさる袖の玉水
 〇見る夢も窓うつ雨に驚きて枕に秋のあはれをぞしる
 四番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 〇古の人をさくにも秋の夜の窓うつ雨は寂しかりけり
 〇軒近き萩の聲風だにある物を窓うち添ふる秋の村雨
 五番 左 持有家 右 隆信
 〇降り暮す小萩が下の庭の雨を今夜は萩の上の聞く哉
 〇萩原や野邊の秋風未分てさびし添ふる村雨のこゑ
 六番 左 顯昭 右 寂蓮
 〇小雨ふる葛飾むせをかる儘に民の袖さへ濕ひにけり
 〇小萩咲片山蔭に日ぐらしのなきすさびたる村雨の空
 七番 秋夕 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 〇秋は猶霧の離に鹿なきてはなもつゆけき夕なりけり
 〇哀をばいかにせよとて入相の聲打そふる鹿の音ならむ
 八番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 〇夕霧に千種の花はこもれどもかくれぬ物は蟲の聲々
 〇野べの色は皆薄墨に成にけり暫しと見ゆる夕霧の空
 九番 左 顯昭 右 中宮權大夫
 〇秋と云へばさらでも物の悲しきに夕風立ぬ高圓の宮
 〇物毎に秋は哀を分かねども猶限りなき夕まぐれかな
 十番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 〇夕さればそゝや下葉も安からで露は袂に萩のうは風
 〇暮行けば野べも一に露満て蟲の音なる庭の淺ちふ
 十一番 左 持有家 右 信定
 〇物思はでかゝる露やは袖に置く詠てけりな秋の夕暮
 〇倍もさばいかにかすべき身のうさを思果れば秋の夕暮
 十二番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 〇秋よ只詠め捨ても出なまし此の里のみの夕と思は

八 詠めつる軒端の萩の音づれて松風になる夕ぐれの空
 十三番 秋田 左持有家朝臣 右 經家卿
 九 山田もるすこがなる子に風觸てたゆむ眼を驚すなり
 〇 吹く折は鳴子の音も絶せねば風の守ける山田也けり
 十四番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 一 哀哉遠の山田に小夜ふけて灰にひたの音ばかりする
 二 づくより秋の哀を誘ひきて稲葉に風の吹續くらむ
 十五番 左 顯昭 右 寂蓮
 三 遠近の庵にひた打つ音きけば互みに守や秋の小山田
 四 風吹けば山田の庵に音づれて稲葉ぞ人を守明しける
 十六番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 五 秋田もる賤が庵に宿からむ借も此世は過ぬべき身を
 六 深からぬ山田の庵も秋は猶心の果はみつべかりけり
 十七番 左 定家朝臣 右 隆信
 七 幾夜ともやどは答へず門田吹く稲葉の風の秋の音信
 八 わきてなご庵守袖の萎るらむ稲葉に限る秋の風かは
 十八番 左 勝女房 右 隆信朝臣
 九 山遠き門田の末は霧晴れて穂なみにしつむ有明の月
 〇 夕月夜ほのめく影も哀なり稲葉の風は袖にかよひて
 十九番 鳴 左 顯昭 右 中宮權大夫
 一 哀は萩高瀬の淀にたつ鳴の羽音もそよや哀かくなり
 二 哀さは萩ふく風の音のみか有明の月に鳴もなくなり
 二十番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 三 唐衣裾野の庵の旅まくらそでより鳴のたつ心地する
 四 旅枕よはのあはれももはがき鳴たつ野べの曉の空
 二十一番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 五 時しもあれ寝覺の空に鳴立て秋の哀をかき集むらむ
 六 明ぬとや同じ心に急ぐらむ門田の鳴も今ぞ羽根かく
 二十二番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 七 明方に夜は成ぬとや菅原や伏見の田ぬに鳴ぞ立ける
 八 明ぬるか鳴の羽根搔ねや過ぎて袖に月もる深草の里

二十三番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 九 孰方へ羽根かく鳴の立ぬらむまだ明やらぬ霧の迷に
 〇 灰にも鳴の羽音ぞ聞ゆなる残るとなき秋のねざめに
 二十四番 左 勝女房 右 家隆
 一 浪よする深の野べをふし侘て風に立なり鳴の羽根搔
 二 明ぬとて澤立つ鳴の一聲は羽根かくよりも哀也けり
 二十五番 廣澤池眺望 左 季經卿 右 中宮權大夫
 三 詠めやる心の果は廣澤の池よりをちに出づる月かけ
 四 廣澤の池には沈む月影の音羽の山にたちのぼるかな
 二十六番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 五 澄み來ける跡は光に残れども月こそふりね廣澤の池
 六 隈もなく月すむよは廣澤の池は空にぞ一つ也ける
 二十七番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 七 心こそ雲居はるかにあくがれめ眺もさそふ廣澤の月
 八 月のすむ空はよそにも變らじを眼にあまる廣澤の池
 二十八番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 九 ながめやる心の末もとまれとや月に宿かす廣澤の池
 〇 更科も明石もこゝにさそひきて月の光は廣澤のいけ
 二十九番 左 顯昭 右 寂蓮
 一 廣澤の池さえわたる月かげは都までしく氷なりけり
 二 月清みみやこの空も雲消えて松風はらふ廣澤のいけ
 三十番 左 勝女房 右 家隆
 三 心には見ぬ昔こそ浮びけれ月にながむる廣澤のいけ
 四 行くへなく眺むる空も廣澤の池の心にすめる月かけ
 五 常磐木の茂みを染むる蕨の色の斯らざりせば下紅葉やは
 六 散らぬより紅葉に辿る山路哉岩根の蕨や色變るらむ
 二番 左 顯昭 右 隆信
 七 見るに猶住ま欲きは色々に蕨はふこやのよそめ也鳥
 八 年をへて苔に埋るゝ古寺の軒に秋ある蕨のいろかな
 三番 左 季經卿 右 中宮權大夫

九 下枝まで懸れる蕨は紅葉して錦をはるはわたの笠松
 〇 絶間なく懸れる蕨の色づけば紅葉を圍ふ垣根とぞ見
 四番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 一 色變へぬ松の縁に這ふ蕨は己が紅葉を譲るなりけり
 二 色變ぬ松の縁もなかりけり懸れる蕨や紅葉しつらむ
 五番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 三 葦のやの蕨はふ軒の村時雨音こそたてね色は隠れず
 四 今朝見れば蕨はふ軒に時雨して蕨の青葉也けれ
 六番 左 勝女房 右 寂蓮
 五 浅茅につ庭の色だにある物を軒端の蕨は打時雨つゝ
 七番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 六 船とめぬ人はあらじな泉川舟の森に紅葉しぬれば
 七 舟原そむる時雨もあるものを暫しな吹きそ木枯の風
 八番 左 季經卿 右 隆信
 八 舟原涼みし夏の青こだち色かはりても猶ならずかな
 〇 山めぐる時雨の宿る舟原わが物がほに色の見ゆらむ
 九番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 一 秋ぞかし岩田の小野の云共舟が原に紅葉やはせぬ
 二 薄くこく色はかはれど舟原梢にこぞる秋のいろかな
 十番 左 顯昭 右 隆信
 三 松風にいかで時雨のふりぬらむ岩もと舟初紅葉せり
 四 山科のいはたの小野に秋くれて風に色ある舟原かな
 十一番 左 勝女房 右 寂蓮
 五 舟原しづくも色やまざるらむ森の下草秋ふけにけり
 六 あたりまで梢寂しき舟原深くは何をおもひこむらむ
 十二番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 七 時分かぬ浪さへ色にいづみ川舟のもりに風吹くらし
 八 秋深さいはきの小野の舟原下葉は草の露やそむらむ
 十三番 九月九日 左 顯昭 右 中宮權大夫
 九 七 わけきつる情のみかはそが菊の色もて嘘す白妙の袖

〇 長月のけふ九日といひ顔にをりえて見ゆる白菊の花
 十四番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 一 君が代はけふつむ菊に置露の積て淵とならむ世迄に
 二 君が代はけふつむ菊に置露の積て淵とならむ世迄に
 十五番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 三 けふと云へば頼て離の白菊ぞ尋し人の袖とみえける
 四 盃に浮べるけふの影よりやうつろひ初むる白菊の花
 十六番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 五 いは置きて猶長月と契る哉けふつむ菊の末の白露
 六 君が經む世を長月の挿頭とてけふ折えたる白菊の花
 十七番 左 季經卿 右 寂蓮
 七 春秋にとめる宿には白菊を霞の色にうかべてぞみる
 八 君を思ふ祝に菊を摘添へて秋も限らぬ花とこそみめ
 十八番 左 勝女房 右 隆信
 九 雲の上に待來しけふの白菊は人の詞の花にぞ有ける
 〇 けふといへば八重咲く菊を九重に重し跡も顯れに鳥
 十九番 秋霜 左 季經卿 右 隆信
 一 女郎花まだきに霜を戴きて盛過ぎぬる氣色なるかな
 二 紅葉をば己が染たる色ぞかしよそに置る今朝の霜哉
 二十番 左 顯昭 右 經家卿
 三 色變る鴛の毛衣今朝見ずば降るともしらじ秋の露霜
 四 霜さゆる蓬がもとの葦こそも枯野になりやしぬらし
 二十一番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 五 秋の野の千種の色も枯散ぬに露置込むる夜半の初霜
 六 秋の野の千種の色も枯散ぬに露置込むる夜半の初霜
 二十二番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 七 虫の音の弱も著く淺茅生に今朝は寒くはだれ霜ふる
 八 思ふよりまたも哀れは重ねけり露に霜おく庭の蓬生
 二十三番 左 兼宗朝臣 右 家隆
 九 初霜や秋をこめても置つらむ今朝色變る野路の篠原
 〇 いかに又秋は夕と眺めきて花に霜おく野べの明ぼの

二十四番 左勝女房 右 隆信朝臣
 〇霜結ぶ秋の末葉の小笹原風には露のこぼれしものを
 〇月見れば霜に光を添へてけり秋の末葉の有明のそら
 〇二十五番 暮秋 左勝有家朝臣 右 經家卿
 〇長月の月も有明になりぬれば秋暮れはつる夕闇の空
 〇立返る空なく秋や思ふらむ野邊の末葉に露ぞ茂れる
 〇二十六番 左勝季經卿 右 隆信朝臣
 〇常よりも今年の秋の吳はとり怪しき迄に惜まるゝ哉
 〇斯ばかり心に止る秋の色の孰くの隙をもちて行らむ
 〇二十七番 左勝顯昭 右 中宮權大夫
 〇惜みかね秋暮ぬとはさを鹿の音せで人に告る也けり
 〇あすよりや萩の葉あらず霜枯て秋をば夢と驚すべき
 〇二十八番 左勝兼宗朝臣 右 家隆
 〇長明の有明の空を見てのちぞ秋の哀の果はしりぬる
 〇暮て行く秋も其方ぞ怨めしき傾く月影を見しより
 〇二十九番 左 定家朝臣 右勝寂蓮
 〇晨明の名ばかり秋の月影に弱りはてたる蟲の聲かな
 〇暮て行く秋の名残も山の端に月と共にや有明のそら
 〇三十番 左持女房 右 信定
 〇龍田姫今はの頃の秋風に時雨をいそぐ人のそでかな
 〇哀なる身のたぐひとも思ひこし秋の今はの夕暮の空

〇散積る紅葉掻分け來て見れば色さへ深き山路也けり
 〇四番 左 有家朝臣 右勝家隆
 〇山里は稍寂しくなり果てゝ風のおとも庭のかれ葉に
 〇木葉なる外山の暮を分けゆけば袖に風の聲ぞ碎くる
 〇五番 左持季經卿 右 中宮權大夫
 〇儂しやうきたる風に誘はれて孰ち生田の杜の木葉ぞ
 〇惜みかね嶺の紅葉に染置きし心の色も散果てにけり
 〇六番 左持女房 右 寂蓮
 〇散果てむ木葉の音を殘しても色こそなけれ嶺の松風
 〇時雨れゆく松の緑は空暗れて嵐に曇る嶺のみみぢは
 〇七番 殘菊 左勝女房 右 隆信朝臣
 〇様々の色をば菊に分けとめて垣根にしらぬ霜枯の頃
 〇移ろふか又咲く花もなき花と菊にも染めつ深き心を
 〇八番 左 季經卿 右勝家隆
 〇いつしかと移ろふ色の見ゆる哉花心なる八重の白菊
 〇九番 左 顯昭 右 經家卿
 〇霜ふれば若紫の色はえて菊は老せぬ花にぞありける
 〇染めかふる籬の菊の紫は冬に移ろふ色にぞありける
 〇十番 左勝兼宗朝臣 右 寂蓮
 〇暮ていにし秋の形見と思べき菊さへ色を變てける哉
 〇一枝も折つる袖は白菊の匂ひまでこそ移ろひにけれ
 〇十一番 左勝有家朝臣 右 中宮權大夫
 〇白きくも紫深くなりにけり秋と冬との色やわくらむ
 〇霜枯れぬきくにしあらば紫に移ろふ色も嬉しとやみむ
 〇十二番 左 定家朝臣 右 信定
 〇白きくの散らぬは殘る色顔に春は風をも恨みける哉
 〇花もかく雪のませまで見る菊の匂は袖にまだ残りむ
 〇十三番 枯野 左勝女房 右 隆信朝臣
 〇見し秋を何に殘さむ草の原一つに變る野への氣色に
 〇霜枯の野への哀れを見ぬ人や秋の色には心そむらむ

十四番 左勝顯昭 右 經家卿
 〇残り居て霜を戴く翁草冬の野もりとなりやしぬらむ
 〇狭筵に野べや宛ら成ぬらむ霜にし枯ぬ草葉ぞなき
 〇十五番 左 有家朝臣 右勝中宮權大夫
 〇色々の花故野べにたち出でし眺までこそ霜枯にけれ
 〇冬ふくる野べを見るにも思ひ出る心の内は花の色々
 〇十六番 左勝季經卿 右 家隆
 〇霜枯るゝ野原に秋の忍ばれて心の内に鹿ぞなくなる
 〇鹿の音も蟲も様々聲絶て霜枯れ果てぬ宮城野のはら
 〇十七番 左勝定家朝臣 右 寂蓮
 〇夢かさは野べの千種の俤はほのゝ招く薄ばかりや
 〇村薄絶々野邊に招げども下はふ葛ぞうらみはてぬる
 〇十八番 左持兼宗朝臣 右 信定
 〇花は猶其の姿とも見えわかる枯野は蟲の聲ぞ戀しき
 〇秋の色に移ふ野べをきて見れば哀は枯ぬ物にぞ有ける
 〇十九番 寒 左勝女房 右 隆信朝臣
 〇風寒みけふも寒のふる郷は芳野の山の雪けなりけり
 〇風吹き木葉こきませ寒ふり寂しかりける山の奥かな
 〇二十番 左 季經卿 右勝信定
 〇誰もみよこれは寒の空ならむ散くる花は雨や交りし
 〇風渡る花のあたりの春雨は冬の空にも有りける物を
 〇二十一番 左 有家朝臣 右勝家隆
 〇人目こそ枯れも果なめ山里に日影も見えず寒ふる頃
 〇搔曇り寒るゝ空や冴そめて凍りも果ぬ時雨なるらむ
 〇二十二番 左 定家朝臣 右勝中宮權大夫
 〇この山の嶺の村雲吹き迷ひ横の葉づたひ寒ふりきぬ
 〇雪ならば斯らましやは打拂ひ袖鹽たるゝ寒なりけり
 〇二十三番 左勝兼宗朝臣 右 寂蓮
 〇積るかと見えつる雪も寒にて詠め侘ぬる冬の上ざと
 〇かき曇る同じ空より雪ふれば時雨も色の變る也けり
 〇二十四番 左勝顯昭 右 經家卿

〇うつつの山夕越えくれば寒ふり袖ほしかねつ哀此の旅
 〇けふも又交野のみに寒して乾くまもなき狩衣かな
 〇二十五番 野行幸 左 顯昭 右勝經家卿
 〇大原や行邊の行幸に所えて空取るけふの真白斑の鷹
 〇嗟峨の原走る雉子のかた跡はけふの行幸に隠なき哉
 〇二十六番 左持有家朝臣 右 信定
 〇はし鷹を古き例に引すゑて跡ある野邊の行幸也けり
 〇敏鷹も逢を嬉しと思らむ絶にし野への今日の行幸に
 〇二十七番 左 兼宗朝臣 右勝中宮權大夫
 〇雉子なく嗟峨野の原の行幸には古き跡をや先尋ぬ覽
 〇皇のけふの行幸は御狩野の草葉も靡く物にぞ有ける
 〇二十八番 左持定家朝臣 右 家隆
 〇狩衣おどろの道も立ち返り打敷くみゆき野風寒けし
 〇諸人の狩場の小野にふる散けふの御幸に玉ぞ敷ける
 〇二十九番 左持季經卿 右 寂蓮
 〇古のながれをうくる御狩かなその芹川の跡に任せて
 〇古の野守の鏡けふ見ればみゆきをうつす氷なりけり
 〇三十番 左持女房 右 隆信朝臣
 〇芹川の波も昔に立ち返りみゆき絶えせぬ嗟峨の山風
 〇行幸せし野邊の古道ふみ分けて跡絶せぬは芹川の水
 〇一番 冬朝 左 顯昭 右勝家隆
 〇山里は朝川渡る駒の音に瀬々の氷のほどをしるかな
 〇谷川の凍るだにある山里に人も音せぬ今朝のしら雪
 〇二番 左勝有家朝臣 右 經家卿
 〇宿毎に絶ぬ朝けの煙さへ冬の景色はさびしかりけり
 〇朝まだき風は庭を渡れども雪には跡もつかぬ也けり
 〇三番 左勝兼宗朝臣 右 信定
 〇とへかしな庭の白雪跡たえて哀も深き冬のおしたに
 〇軒の内に雀の聲はなるれ共人こそ訪はね今朝の白雪
 〇四番 左勝定家朝臣 右 隆信朝臣
 〇一年を詠めつくせる朝戸出に薄雪凍る寂しさのほて

八人をさへ訪で社みれ今朝の雪を我踏初め跡の惜きに
 五番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 六番 左 持女房 右 寂蓮
 七番 寒松 左 季經卿 右 經家卿
 八番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 九番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十番 左 顯昭 右 寂蓮
 十一番 左 持有家朝臣 右 家隆
 十二番 左 持女房 右 信定
 十三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十四番 左 持顯昭 右 家隆
 十五番 左 持有家朝臣 右 經家卿
 十六番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十七番 左 持女房 右 寂蓮
 十八番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 十九番 左 持女房 右 寂蓮
 二十番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二十一番 左 顯昭 右 信定
 二十二番 左 持有家朝臣 右 中宮權大夫
 二十三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二十四番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二十五番 佛名 左 持顯昭 右 經家卿

三人をさへ訪で社みれ今朝の雪を我踏初め跡の惜きに
 五番 左 持有家朝臣 右 經家卿
 六番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 七番 左 持女房 右 寂蓮
 八番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 九番 左 持女房 右 寂蓮
 十番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十一番 左 顯昭 右 信定
 十二番 左 持有家朝臣 右 中宮權大夫
 十三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十四番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十五番 佛名 左 持顯昭 右 經家卿

唱つるみよの佛の中の夜になぞかへなしを進め置けむ
 二十六番 左 持兼宗朝臣 右 家隆
 二十七番 左 持有家朝臣 右 中宮權大夫
 二十八番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二十九番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十番 左 持女房 右 信定
 三十一番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十二番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十四番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三十五番 佛名 左 持顯昭 右 經家卿

戀
 一番 初戀 左 持女房 右 信定
 二番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 四番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 五番 佛名 左 持顯昭 右 經家卿

五番 左 持顯昭 右 寂蓮
 六番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 七番 忍戀 左 持女房 右 中宮權大夫
 八番 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 九番 左 持顯昭 右 家隆
 十番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十一番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十二番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十三番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十四番 左 持顯昭 右 家隆
 十五番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣

三いかでもと思ひし妹が有様は語る人まで懐かしき哉
 四雲間より聲を残して歸る雁さかずば斯る詠せましや
 十六番 左勝有家朝臣 右 信定
 五名にたる音羽の瀧も音にのみ聞より袖はゆる、物かは
 六鹿のねも嵐に類ふ鐘の音も聞よりこそは袖は濡しか
 十七番 左勝女房 右 經家卿
 七谷深みはるかに人を菊の露ふれぬ袂よ何しをらむ
 八君をのみ心盡しの菊の池云出でぬより袖を濡れぬる
 十八番 左持定家朝臣 右 寂蓮
 九諸越の見ず知ぬよの人計名にのみ聞てやみねとや思ふ
 十いかにして露をば袖に誘らむまだ見ぬ里の萩の上風
 十九番 見戀 左 有家朝臣 右勝經家卿
 十一中々にみるめ計りは難くとも遂に近江の海と頼めよ
 十二漁火の灰見てしより衣手に磯への浪のよせぬ日ぞ無き
 二十番 左持季經卿 右 權大夫
 十三今日やさば暫も戀の隙ならむ見るに慰む思なりせば
 十四色に出づるつらき氣色を見ても猶思返らぬ心也けり
 二十一 兼宗朝臣 右勝信定
 十五見ずも非ず見もせぬ中の故にだ人は思の附か物かは
 十六見ればげに中々にとて疎くとも猶俯の離るべきかは
 二十二 左勝顯昭 右 家隆
 十七妹が鳥荒磯による浮みるの憂をみるは見ぬに優れり
 十八思ひかね澤の根芹を摘みてだに心の跡を争で残さむ
 二十三 左持定家朝臣 右 寂蓮
 十九うしろ 淺香の沼の草の名よ假にも深きえには結ばで
 二十斯りける姿の池の鴛の聲きくは袖のぬれし數かは
 二十四 左勝女房 右 隆信朝臣
 二十一忘れずよはの一人を三島江の黄昏なりし蘆の迷に
 二十二花の色に移る心は山櫻かすみのまより思ひそめてき
 二十五 尋戀 左持有家朝臣 右 權大夫
 二十六連なきの又如何ならむ尋ねあふ事だに難き人の行末

一尋ね来て逢はぬ思に最どしく歸る遠さを添てける哉
 二十六番 左勝兼宗朝臣 右 經家卿
 二今日も亦歸らむ憂さを思ふかな尋ね侘びにし心習に
 三今宵さへ唯や歸らむ月故に友を尋ねし人ならなくに
 二十七番 左持顯昭 右 家隆
 四尋ても逢はずは憂さや増りなむ心盡しにいきの松原
 五行き逢はむ契も知らず花薄はのみし野べに迷ぬる哉
 二十八番 左持季經卿 右 寂蓮
 六偽の微と杉を三輪の山とひつゝ來たるかひし無れば
 七三輪の山杉たつ門をとへとだに頼めぬ道に迷ふ頃哉
 二十九番 左持女房 右 信定
 八尋ねつる道に今宵は更けにけり杉の梢の有明のつき
 九心こそ行くへも知らぬ三輪の山杉の梢の夕暮のそら
 三十番 左持定家朝臣 右 隆信朝臣
 一〇面影は教へし宿に先だちて答へぬ風の松にふくこゑ
 一一尋ねれば例やはなき幻のよをへだてたる波の上にも
 一二 祈戀 左持有家朝臣 右 經家
 一三今はさば戀の奴の行く末も頼むみ親の神にまかせむ
 一四諸戀に今は慰むみごもりの神の驗もありとこそきけ
 一五 二番 左持兼宗朝臣 右 權大夫
 一六いざさらば生田の杜に祈りみむ頼む方なき戀の病を
 一七哀とも思ひもや知る我戀をなげきの杜の神に祈らむ
 一八 三番 左勝季經卿 右 隆信
 一九長らへむ契迄をば知らねども一夜が程も神を頼まむ
 二〇願事を神もちかふる身也鳥つられと社今は祈らめ
 二一 四番 左 顯昭 右勝信定
 二二石川や蟬の小川に忌申立てねぎし逢瀬は神に任せつ
 二三思ひかね其の子の許にゆふ懸て戀こそ渡れ三川の橋
 二四 五番 左持定家朝臣 右 家隆
 二五年もへぬ祈る契は初瀬山尾上の鐘のよそのゆふぐれ
 二六朽ちはつる袖の例となりねとや人を浮田の杜の占繩

六番 左勝女房 右 寂蓮
 一幾夜我波に萎れて貴舟川袖に玉ちるものおもふらむ
 二貴船川百瀬は浪も分け過ぎぬ濡れ行く袖の末の頼に
 七番 契戀 左勝顯昭 右 經家卿
 三葛城や夜の契は空しきに物思ふ橋はなやと絶えぬ
 四頼むるに露の命をかけつればこの言の葉ぞ置所なき
 八番 左勝兼宗朝 右 權大夫
 五行末は逢見て猶や知らるべき今日は其日と契る計ぞ
 六待てと云し其言の葉に懸りつる露の命も消ぬとなしれ
 九番 左 季經卿 右勝寂蓮
 一偽のこの葉ならむと思へども契は猶も情なりけり
 二頼むき楯の丸寝の言葉は思絶ぬかと云はぬばかりぞ
 十番 左勝女房 右 隆信
 三生けらばと誓ふ其日も猶來ずばあたりの雲を其と眺めよ
 四一言の葉に暫しも止る露の命かけむ懸じは君に任せつ
 十一番 左 定家朝臣 右勝信定
 一あぢきなし誰も傳へ命もて頼めば今日の暮を頼めよ
 二唯頼め譬へば人の偽を重ねてこそはまたもうらみめ
 十二番 左勝有家朝臣 右 家隆
 三先の世を思ふさへこそ嬉けれ契も今日の契のみかは
 四扱も猶人の心を知らぬまは契るさへこそ思ひ也けれ
 十三番 待戀 左 顯昭 右勝信定
 一入會の音に附ては待たれしをねよとの鐘に思弱りぬ
 二宵のまを聞過ぐすだに苦しきを鳥の音を鳴袖の上哉
 十四番 左勝季經卿 右 中宮權大夫
 一連なきを怨しよりも割なきは頼むる暮を待にぞ有ける
 二今宵こそ床打拂ひ待つ方の風の音さへ嬉しかりけれ
 十五番 左勝兼宗卿 右 經家朝臣
 一思ひやる心使ひの幾かへり我が待つ人を驚かすかな
 二さりともと思鎮むるかひぞなきまたこぬ程の心騒に
 十六番 左勝有家朝臣 右 寂蓮

一更に鳥頼めぬ鐘は音づれて七ふたびしき十ふの菅菰
 二けふは又憂きに頼の變れ共待つとてや安き物思かは
 三 十七番 左勝女房 右 家隆
 一蓬生の末葉の露の消え返り猶此の世にと頼む物かは
 二頼めとや頼めし宵の更くるこそ且々變る心なりけれ
 三 十八番 左持定家朝臣 右 隆信朝臣
 一風つらき本荒の小萩袖にみて更行くよはに重る白露
 二この人を何に聊たむ山端の月は待出でさよ更にけり
 三 十九番 遇戀 左 季經卿 右勝經家卿
 一戀衣萎れし袖はそれながら今宵はつまに重ねぬる哉
 二懸りける涙の色を哀れとは新手枕のそでにしるらむ
 三 二十番 左持有家朝臣 右 權大夫
 一果もなく行方も更に知らざりし戀の限は今宵也けり
 二明けば先逢はぬ物故君こふと諫めし人に斯と知せむ
 三 二十一番 左勝兼宗朝臣 右 家隆
 一菅菰のみふは我も寝たれ共逢ふ嬉さにしく物ぞなき
 二戀々て逢見るよはぞ増りける人の心の知まほしさに
 三 二十二番 左持女房 右 隆信朝臣
 一唐衣重ぬる契朽ちずして幾夜の露を打ちはらふらむ
 二夜を重ね返す衣の怨みても現までとは思はざりけり
 三 二十三番 左持定家朝臣 右 信定
 一堪まじき明日より後の心ち哉慣て悲しき思添ひなば
 二逢見てばまづと思ひし言の葉に心の露の猶重きかな
 三 二十四番 左勝顯昭 右 寂蓮
 一死ぬ計嬉きにこそ知られけれ逢に命をかふと聞しは
 二命かは逢ふに心や替つらむ惜からぬ身ぞ惜く成行く
 三 二十五番 別戀 左 顯昭 右勝權大夫
 一夜枯せし折は怪しく覺えしをされば遂に行へ知れぬ
 二忘れじと契る計を名残にてよそに成なむ事を悲しき
 三 二十六番 左 季經卿 右勝信定
 一何か我がけさの名残を嘆かまし歸る程なく暮るゝ

六暫しなる今朝の別に見つるかな心變りの行く末の夢
 二十七番 左持定家朝臣 右 經家卿
 八別路の有りける物を逢坂の關を何しに急ぎこえけむ
 二十八番 左持有家朝臣 右 寂蓮
 九つれもなく逢ふに命の長らへて今日は別に變べき哉
 二十九番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 一思へ唯只よその人だにも別るゝ道は悲からずや
 三十番 左持女房 右 家隆
 七忘れじの契を頼む別れかな空行く月の末をかぞへて
 風吹かば嶺に別れむ雲をだに有し名殘の形見ともみよ
 一番 顯戀 左 季經卿 右 隆信朝臣
 五身に餘る戀は中々善かりけり人目を忍ぶ歎なれば
 六鶉ある磯の松がね波かけて顯れにける戀ぞわりなき
 二番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 七干しかねし袂は早く朽ち果てゝ戀ぞ涙に顯れにける
 八忍びこし思を今は忘れむよその人目も歎く計りに
 三番 左持有家朝臣 右 信定
 九袖の上に懸る涙の白玉を包まねばこそ世には散らめ
 〇よしさらば逢下重ぬる濡衣の怨に朽つる妻も有なむ
 四番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 一よしさらば今は忍ばで戀死なむ思にまけし名にぞ
 二君こふと人には知れぬ如何にして逢ぬ浮名を今は
 五番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 六我戀は涙の雨のよにふりて袖より外に顯はれにけり
 七人しれぬ心の内に染し色も千入になれば隠れざり鳥
 六番 左持女房 右 寂蓮
 八袖のなみ胸の煙は誰も見よ君が浮名の立つぞ悲しき
 九うとからぬ人こそ今は恨みけれ忍びし程の心強さを

七番 稀戀 左持顯昭 右 信定
 八絶え果えぬ情の山に雲消えてはるゝ心や星あひの空
 八番 左持有家朝臣 右 家隆
 九天の河秋の七日を眺めつゝ雲のよそにも思ひける哉
 〇斯りける契ならずば七夕の心の程をいかで知らまし
 九番 左持季經卿 右 寂蓮
 一自ら絶えぬ情に忘れられて積るつらさを恨みやはず
 二今は只思ひ出づるぞ哀なる忘れはつべき中の絶間を
 十番 左 女房 右 隆信朝臣
 七有し夜の袖の移香消果てゝ又逢ふ迄の形見だになし
 八揺えぬ情ばかりは有ながら忘るゝ程の逢事ぞうき
 十一番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 七心ざしあるか無きかの忘水いかなる折に思出づらむ
 十二番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 八唯に又千夜に一夜の夜枯して流石に我を思出づらむ
 九争で猶斯る絶間を過す身の一をだにも明し兼けむ
 十三番 絶戀 左持女房 右 隆信朝臣
 七休らひに出にし人の通路を古き野原とけふは見る哉
 八知らざりき今はと云ひし曉を頼て誠の言の葉ぞとは
 十四番 左持季經卿 右 經家卿
 八恨みこし其の古に變らぬは絶えぬ後の心なりけり
 九何故に忘れにける我身ぞと人傳にても如何聞べき
 十五番 左持有家朝臣 右 家隆
 八侘つゝは音する風の傳もがな萩の上葉の枯果ぬとも
 九淺ましや淵とせく瀬の末だにも斯絶果つる程はみえぬを
 十六番 左持兼宗朝臣 右 權大夫
 八ざりとも待し月日も過ぬればこや絶果る始なる覽
 九いかにこは疎く成行君ならむ絶べき程の契をやせし
 十七番 左 顯昭 右 隆信朝臣

七海原の根やはら小菅今更に誰に引れて見えぬなる覽
 八さしも我絶す忍し中にしも渡してけりな久米の岩橋
 十八番 左持定家朝臣 右 寂蓮
 九心さへ又よそ人になりはてば何か名殘の夢の通ひ路
 〇思侘び哀幾夜か横の戸を暫しと云はで月を見つらむ
 十九番 恨戀 左 顯昭 右 隆信朝臣
 九引替へて荒き心のみたらの細々とこそ恨かけつれ
 〇露繁き秋の野もせの眞葛原いつ迄よその物と聞らむ
 二十番 左 季經卿 右 權大夫
 九淺ましや何と恨のそひぬらむ戀計りを歎べき身に
 〇思きや逢人もなき戀路より深き恨におり立たむとは
 二十一番 左持女房 右 經家卿
 九浪ぞよる借はみるめはなき物を恨慣だる志賀の里人
 〇君故に涙の河にゆらさるゝ落標とらなりはてねとや
 二十二番 左持定家朝臣 右 寂蓮
 八あらざらむ後の世までも恨ても其俵をえこそ疎まね
 〇さても猶頼む心や残しけむ恨けるさへ恨めしきかな
 二十三番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 八身のうきは思ふによらぬ世なれ共君計をば猶や恨みむ
 〇今は又我も心や變らむ戀しき人のうらめしきかな
 二十四番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 一〇君ぞうき空やはつらきともすれば哀あなと打詠つゝ
 二〇物思ふ心の秋の夕まぐれまくずが原に風わたるなり
 二十五番 舊戀 左持女房 右 寂蓮
 〇末までと云しばかりに淺茅原宿も我名も朽や果なむ
 〇斧の柄も年ふる程はしる物をなぞ我戀の朽るよしなき
 二十六番 左持季經卿 右 權大夫
 〇つれなきの心がさを引かへて絶ぬ契と思ましかば
 〇つれなきも戀ふる憂身も年をへて心長さは變ざり鳥
 二十七番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 七我中をふるの荒田と打捨てゝ誰に行會のわせ作る覽

八山深み昔の下もる谷水や年ふる戀のなみだなるらむ
 二十九番 左持兼宗朝臣 右 經家卿
 〇いかなりし世々の報のつらさにて此年月に弱らざる覽
 〇一年へにしつらさに堪え長らふと聞れむと今悲しき
 二十九番 左持兼宗朝臣 右 經家卿
 一今はたゞ昔語になりはてゝ戀も我身を離れましかば
 〇一世の人の昔語になりなまし愛に堪たる我身ならずば
 三十番 左持有家朝臣 右 信定
 一我戀はふる野の道の小笹原いく秋風に露こぼれきぬ
 〇戀ひ初めし心はいつぞ石上郡の奥のゆふぐれのそら
 一番 曉戀 左 顯昭 右 寂蓮
 一一夜を深み履なく影は我如く寝ても覺ても戀や術なき
 〇逢見ては憂折節も鳥の音に思出づれば戀しかりけり
 二番 左持兼宗朝臣 右 權大夫
 一物思ふ我が心にもたぐへばや哀をそふる明暮のそら
 〇恨みかね返す衣のしるしにたなき曉はいかゝ悲しき
 三番 左持季經卿 右 家隆
 八後朝に今やならむのあらしに逢ぬ床さへ起ぞ遣れぬ
 〇明ぬとて別し空の鐘の音は音づるゝさへ恨めしき哉
 四番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 二連なみの類迄や曉つらからぬ月をもめでし有明の空
 〇逢ふと見る情もつらし曉の露のみ深き夢のかよひち
 五番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 二面影も別に返る鐘の音にならひ悲しきしのゝめの空
 〇曉の涙やせめてたぐらむ袖に落ちくる鐘の音かな
 六番 左持女房 右 經家卿
 二月やそれほの見し人の面影を忍びかへせば有明の空
 〇終夜若し戀に晴れやらぬ心まごひやあけくれの空
 七番 朝戀 左持季經卿 右 隆信朝臣
 二今朝よりはさらば涙に任せては絞台ふべき袖の雫か
 〇我如く人や戀しき見るまゝに頓てしをるゝ朝顔の花

八番 左 兼宗朝臣 右 權大夫
 九番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 十番 左 持顯昭 右 寂蓮
 十一番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十二番 左 女房 右 隆信朝臣
 十三番 左 女房 右 隆信朝臣
 十四番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 十五番 左 持兼宗朝臣 右 寂蓮
 十六番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 十七番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十八番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣

九番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十番 左 持顯昭 右 隆信朝臣
 十一番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十二番 左 女房 右 隆信朝臣
 十三番 左 女房 右 隆信朝臣
 十四番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 十五番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十六番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 十七番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十八番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣

我戀や衛士のたく火となりぬらむ夜のみ獨燃明す哉
 二十九番 左 持有家朝臣 右 寂蓮
 三十番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十一番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十二番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十三番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十四番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十五番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十六番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十七番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十八番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 三十九番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 四十番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣

九番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十番 左 持顯昭 右 隆信朝臣
 十一番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十二番 左 女房 右 隆信朝臣
 十三番 左 女房 右 隆信朝臣
 十四番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 十五番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 十六番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 十七番 左 定家朝臣 右 隆信朝臣
 十八番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 十九番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣

一聞慣てさても心は慰まず聲の通ふはかひなかりけり
 二睦言の通はぬ中と成ぬれば聲はきけどもかひ無り鳥
 三思ひこそ遠き程だに知べなれ年も通はむ中の隔ては
 四重ねずと思ふばかりぞ小夜衣匂ひは袖に移りぬる哉
 五句ひくる梢ばかりを情にてあるじは遠き宿の梅が枝
 六涙せく袖のよそめはなるれ共忘すやとも間隙ぞなき
 七梅が枝の末こす中の垣根より思ふ心や色にみえまし
 八隔てける籬の鳥の割なきに住かひなしや千賀の鹽竈
 九忍草ならぶ軒端の夕暮に思ひを交すさゝがにのいと
 一〇蘆垣の上吹き越ゆる夕風に通ふもつらき萩の音かな
 一一蘆垣のま近き程に住人のいつか隔てぬ中となるべき
 一二草枕獨りあかしの浦風にいと涙ぞ落ちまさりける
 一三都にて慣にし物を獨寝の片しく袖はなにかさびしき
 一四妹だに待とし開かば小動搖の急舟路も嬉からまし
 一五思ひ置く人ある身には頼て此旅の道こそ戀路也けれ
 一六變り行く涙の色ぞあはれなる草の枕の日敷しられて
 一七旅寝する我をば床の主にて枕にやどるさよのおも影
 一八まばらまぬ其よくを敷ふれば夢路も遠き草枕哉
 一九ささかたや妹戀しらにさぬる夜の磯の寝覺に月傾ぬ

三清見海若しく袖の波の上と思ふも侘し君がおもかけ
 四故郷を出でしにまさる涙哉風のまくら夢にわかれて
 五東路のよはの詠をかたらなむ都の山にかゝる月かけ
 六慰めし月にも果は音をぞなく戀や空しき空に満らむ
 七月よ猶隈こそなけれかき昏す戀の涙は雨と降れども
 八二番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 九三番 左 寄月戀 左 顯昭 右 隆信朝臣
 一〇四番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 一一物思ふと月故ならで月を見て幾夜曇らぬ空も曇りぬ
 一二秋の月妹が面影誘ひきて我が心にもやどすなりけり
 一三物思ふと月故ならで月を見て幾夜曇らぬ空も曇りぬ
 一四五番 左 持定家朝臣 右 信定
 一五休らひに出にしまの月の影我涙のみ袖にまでども
 一六思にも思ひやるかな君も若し獨や今宵月を見るらむ
 一七六番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 一八袖の上になるも人の形見かは我と宿せる秋夜の月
 一九獨すむ宿の氣色を哀とやうき身と共にありあけの月
 二〇七番 寄雲戀 左 顯昭 右 隆信朝臣
 二一八日さす豊旗雲も何ならず月なき戀の闇し晴れねば
 二二八いかなれば心も空に浮雲の斯る戀する身と成にけむ
 二三戀すれば心は空に浮雲の思ひ鎮むるかたなかりけり
 二四人しれぬ恨は空の雲なや積れば袖の雨と降るらむ
 二五九番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 二六戀侘て心空なる浮雲や行くへもしらす果はなるべき
 二七戀死ぬるよはの煙の雲とならば君が宿にや分まで知れむ

十番 左 持定家朝臣 右 中宮權大夫
 十一時の間に消えて翳く白雲の暫しも人に逢見てしがな
 十二あくがる心も空に日敷へて雲に宿かる物思ひかな
 十三我戀や晴行く儘の空の雲よそにのみして消ぬべき哉
 十四おのづから閑洩る月も影消えて獨悲しき浮雲のそら
 十五十二番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 十六君がりとうきぬる心迷ふらむ雲は幾重ぞ空の通ひ路
 十七思ひやる詠めも今は絶えねとや心をうつむ夕暮の空
 十八十三番 寄風戀 左 季經卿 右 隆信朝臣
 十九獨寝の憂身になる、秋風をつれなき人の心ともがな
 二十夕まぐれ吹來る秋の初風は戀せぬ人も身にやしむ覽
 二十一十四番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 二十二獨寝の床に吹きくる秋風の又我戀をおどろかすかな
 二十三六つてにだに訪ぬ君哉吹く風も松にはとに音する物を
 二十四十五番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 二十五心あひの風孰方に吹ぬらむ我には散すとの葉もなし
 二十六色に出でし言の葉も皆枯果てて涙を散す風の音かな
 二十七出でざりし夜深き風の音も似ず手枕疏き秋の此方は
 二十八物思ふ身も習はしの萩の葉にいたくな吹そ秋の夕風
 二十九十七番 左 女房 右 隆信朝臣
 三十いつも聞く物とや人の思ふらむこの夕暮の秋風の聲
 三十一心あらば吹かずもあらなむ宵々に人待宿の庭の松風
 三十二十八番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 三十三九さらでだに恨みむと思ふ吾妹子が衣の裾に秋風ぞ吹
 三十四いかなれば露をば拂ふ風の音に物思ふ袖の濡増らむ
 三十五十九番 寄雨戀 左 顯昭 右 中宮權大夫
 三十六下とほる涙に袖も朽ち果て、さる方もなき嬾衣かな
 三十七戀故に身をしる雨の年をへて心の内にかき曇るらむ
 三十八二十番 左 季經卿 右 隆信朝臣

三十九雨注ぎ人待宵はうかり鳥こや言傳にならむと思へば
 四十頼めぬと絶す音する時雨哉戀しき人の斯らましかは
 四十一二番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 四十二搔痒し降くる雨も君ならばぬるとて更に厭ざらまし
 四十三獨寝の床にしもなど音すらむ長閑にそとく曉のあめ
 四十四二十二番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 四十五獨りのみ聞の坂間も合はずして雨も涙も所せきまで
 四十六深き夜の寝覺に何を思ひけむ窓打ちさす曉のあめ
 四十七二十番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 四十八きはらすば今宵ぞ君を頼べき袖には雨の時分かぬ共
 四十九〇この人を待夜更行秋の雨は袖にのみ降る心地社すれ
 五十二十四番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 五十一深き夜の軒の雲を敷へても猶餘りある袖のあめかな
 五十二三番 寄宿の軒端の夕詠め戀よりあまる雨の音かは
 五十三二十五番 寄煙戀 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 五十四妹が住む遠路の里の煙だになど我方へ靡かざるらむ
 五十五連なさに絶すなりなむ煙をも理故とやは眺しませむ
 五十六二十六番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 五十七戀死なむ後を思へば目にぞたつ其故もなき空の煙も
 五十八戀死なむ後は煙とあがるとも君が方へぞ猶靡くべき
 五十九二十七番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 六十うき人に思消たる、身の程をしらぬは戀の煙也けり
 六十一二十八番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 六十二限なき下の思の行くへともえむ煙の果や見るべき
 六十三藻鹽やく浦、煙を風に見て靡かぬ人の心をぞおもふ
 六十四二十九番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 六十五忍びかね心の空に立煙見せばや富士の峯にまがへて
 六十六富士のねの煙も猶ぞ立ち昇る上なき物は思なりけり
 六十七三十番 左 持定家朝臣 右 隆信朝臣
 六十八なごの煙の燒沙煙空にのみ我名を立てやまむさする

山田る鹿火屋が下の煙社焦れもやらぬ類ひ也けれ
 一番 寄山戀 左持顯昭 右 中宮權大夫
 九年を経て茂る歎をこりもせてなど深からむ物思の山
 君に我れ深く心を筑波山茂き歎きにこり果てぬかな
 二番 左 有家朝臣 右 中宮權大夫
 我が戀に深き比べば外山かな吉野の奥の岩のかけ道
 踏見ても馴ぬ氣色のつれなきや吉野の奥の岩の陰道
 三番 左 兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 戀故に浮世を捨て隠れれば忍の山や栖かなるべき
 夢にだにまだ踏も見ぬ忍山深き戀路をいかで尋ねむ
 四番 左 季經卿 右 隆信
 年月を思ふかひなく過にける君をきませの山の麓に
 吉野山戀の餘りに思入りぬ中々さらば人や訪ふまで
 五番 左 女房 右 經家卿
 末の松待つ夜幾度過ぎぬらむ山こす波を袖に任せて
 人知れず君に心を筑波山ひまなき物は歎きなりけり
 六番 左 兼宗朝臣 右 寂蓮
 足びきの山路の秋になる袖は移ろふ人の嵐なりけり
 今世には吉野の山の奥にも有とはつらき人に知れじ
 七番 寄山戀 左 顯昭 右 寂蓮
 鯨とる畏き海の底までも君だに住まば淡路しのがむ
 石見湯千尋の底も譬ふれば淺き瀬になる身の恨かな
 八番 左 有家朝臣 右 經家卿
 わたの原沖つ汐風に立つ浪のよりこや懸る汀也とも
 わたの原深き契や消なるかたし具ともなりにける哉
 九番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 一思へ共まだ見ぬ程はみつ湖に入ぬる磯の例だになし
 二岩根打荒磯浪の高きこそまだよそながら袖は濡なれ
 十番 左 季經卿 右 家隆
 雲居まで續きて見ゆる渡つ海も行へも知らぬ物思哉
 伊勢の海の潮瀬に騒く小れ石の碎けて物を思ふ頃哉

十一番 左 持定家朝臣 右 信定
 遠ざかる人の心は海原の沖行く舟のあとのしほかせ
 渡つ海の浪のあなたに人はすむ心あらむ風の通路
 十二番 左 女房 右 中宮權大夫
 七よさの海沖つ汐風浦にふけ松なりけりと人に聞せむ
 八波懸るさしでの磯の岩根松ねに顯れて乾くまもなし
 十三番 寄山戀 左 持顯昭 右 信定
 聞渡るありなれ河の水に社影を並べて住まほしけれ
 涙河逢瀬もしらぬみをつくし丈越す程に成にける哉
 十四番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 二いつかさは又は逢瀬を松浦河此川上に我は住むとも
 三水無瀬河淺き契と思へども涙は袖に懸けぬまぞなき
 十五番 左 有家朝臣 右 中宮權大夫
 最上川人の心の稻舟もしばかりと聞かば頼まむ
 飛鳥川淵瀬隙なき世の中に人のつらさぞ變ざりける
 十六番 左 兼宗朝臣 右 隆信
 二つれなしと人をぞ更に思河逢瀬もしらぬ身を恨ても
 三遙なる程とぞ聞し衣河片く袖の名にこそありけれ
 十七番 左 季經卿 右 寂蓮
 七人心さのみはいかに水無瀬河我には淺き契なるらむ
 八いかにして影だに見まし澤田河袖つく程の契也とも
 十八番 左 女房 右 寂蓮
 二吉野川速き流をく岩のつれなき中に身を碎くらむ
 三ありとも他例の名取川朽だに果てよ瀬々の埋木
 十九番 寄山戀 左 顯昭 右 經家卿
 一逢事は苗代水を引止めてとはし果てぬや小山田の關
 二衣手は清見が關に非ねども絶ゆる夜もなき涙也けり
 二十番 左 持定家朝臣 右 隆信
 三身に絶ぬ思を須磨の關するて人に心をなぞ止むらむ
 四逢坂の關の此方に名をとめて是より過る歎せよとや
 二十一番 左 有家朝臣 右 寂蓮

三夜を重ね心の關の難き哉わがねは鳥の虚音ならねば
 六人しれぬ恨に餘る波の上をおさふる袖や須磨の關守
 二十二番 左 持兼宗朝臣 右 家隆
 三先の世に契らざりける身のうさや逢坂山の君が關守
 七頼めてもまだ越ぬまは逢坂の關も勿來の心地社すれ
 二十三番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 三逢見じと思ひかたむる中なれや斯解け難き下紐の關
 四こひしとも斯は人にも知せなむ思ふ心や司の關守
 二十四番 左 女房 右 信定
 一故郷に見し面影も宿りけり不破の關屋の杉間もる月
 二故人戀る我れ詠めよと思ひけり須磨の關屋の有明の月
 二十五番 寄山戀 左 顯昭 右 隆信
 三いさや君に逢ずば渡らじと身を打橋に書附てみむ
 四思ふ濱名の橋の旅人や波に濡ては戀ひわたるらむ
 二十六番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 一人心緒絶の橋に立ち返り木葉ふりしく秋のかよひち
 二思はずに緒絶の橋と成ぬれど猶人しれず戀渡るかな
 二十七番 左 持兼宗朝臣 右 信定
 一斯こそは長柄の橋も絶しかど暫し計の名残やはなき
 二今も猶長柄の橋は造りてむつれなき戀は跡だにもなし
 二十八番 左 兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 一我れが身や長柄の橋の橋柱戀に朽なむ名をば残して
 二くづれ行く板田の橋も遮莫我をこよなき妹ならばこそ
 二十九番 左 季經卿 右 寂蓮
 一葛城やくめちの橋に非ねども絶ぬる中は渡る物かは
 二葛城や渡しもはてぬ岩橋も夜の契はありとこそきけ
 三十番 左 女房 右 寂蓮
 一戀渡るよはの狭筵波かけて斯や待ちけむ宇治の橋姫
 二古の宇治の橋守身をつまば年ふる戀を哀れともみよ
 三一番 寄山戀 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 五忘らるゝ人に軒端のしのぶ草涙の雨に露けかりけり

三戀妻の頼て軒端に成ぬればいと忍の草ぞしげれる
 二番 左 持兼宗朝臣 右 隆信
 七今はさは哀と思へすがの根の長き心の程はみつらむ
 八よと共に乾く間もなき我が袖や汐干 分ぬ波の下草
 三番 左 有家朝臣 右 寂蓮
 一打ち頼む人のけしきの秋風に心の底のかやが下をれ
 二淺ましやなどか思のさしも草露も置敢ず果は萌らむ
 四番 左 持顯昭 右 中宮權大夫
 一昨夜草百夜までなご頼めけむ假初臥の榻のはしがき
 二逢事はいつと伊吹の嶺に生るさしも絶せぬ思也けり
 五番 左 女房 右 寂蓮
 一故人待ちし庭の淺茅生茂り合ひて心ならず道芝の露
 二秋風に靡く淺茅の色よりもかはるは人の心なりけり
 六番 左 持兼宗朝臣 右 信定
 一吟詠めする心の根より生初めて軒の忍は茂るなるべし
 二七番 寄山戀 左 顯昭 右 隆信
 一相思ふ中には枝も交しけり君が梢はいやをちにして
 二人しれぬ心に君を檜柴の暫しもよそに思はずもかな
 三八番 左 持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 一戀死なば苦むす塚に柏ふりて元の契の朽やはてなむ
 二斯計思ふと君も白樫のしらじな色に出ばこそあらめ
 三九番 左 兼宗朝臣 右 信定
 一何となく結ばるらむ君はよも哀とだにも岩代の松
 二人戀ふる宿の櫻に風吹けば花も涙になりけるかな
 三十番 左 季經卿 右 經家卿
 一うかりける我が深山木の契哉連る枝もありと社きけ
 二涙にはうき深山木も朽ぬべし沖の小島の楸ならねと
 三十一番 左 有家朝臣 右 寂蓮
 一山深く種ある岩に生る松の根よりも堅き戀や何なる
 二契りなきまた忘れずよ泊瀬河ふる河のへの二本の杉

十二番 左持女房 右 家隆
 思兼ね打ぬる夜半も有なまし吹だにすさの庭の松風
 思ひ侘び詠むれば又夕日さす軒端の岡の松も恨めし
 十三番 寄鳥戀 左 女房 右 中宮權大夫
 時しもあれ空飛鳥の一聲も思ふ方より来てや鳴らむ
 天の戸をあけぬと告ぐる鳥の音も獨りぬる夜は遠莫
 十四番 左持季經卿 右 經家卿
 人心つねは卯月の時鳥こと語らばむこゑをさかばや
 足引の遠山鳥の一聲は我がつまながら怨めしきかな
 十五番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 鳥の音は戀き人の何なれや逢夜は厭ひ逢ぬ夜ぞまつ
 如何にして空とぶ程の客應の暫も戀に身を休むらむ
 十六番 左 有家朝臣 右 信定
 玉章の絶々なるなくひ哉雲居の雁の見え 見えすみ
 思ひかね夜はの袂に風ふけて涙の河に千鳥なくなり
 十七番 左 顯昭 右 隆信
 山鳥の初尾の鏡かけねども見し像にねはなかれけり
 面影を灰みしまのに尋來て行方も知らぬ鳥の草ぐき
 十八番 左持兼宗朝臣 右 寂蓮
 鳴の居る入江の波を心に胸と袖とに騒ぐこひかな
 さほ川の霧の紛ひの程だにも妻を求むと術なくよを
 十九番 寄獸戀 左持兼宗朝臣 右 經家卿
 打ち頼む人の心は荒熊の恐しきまでつれなかりけれ
 戀をのみすがの荒野に食む熊のおちらにけり身社つられ
 二十番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 如何がして強面き中を渡るべきあの聲しめ駒は有とも
 道遠み妹がり急ぐ其駒に草取飼はむなづみもぞする
 二十一番 左持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 羨ます臥猪の床は安くとも歎もかたみねぬも契りを
 如何で我臥猪の床に身をかへて夢の程だに契結ばむ
 二十二番 左持有家朝臣 右 家隆

唐國の虎伏す野へに入るよりも迷ふ戀路の末ぞ危き
 我宿は人も枯野の淺茅原通ひし駒のあととどめず
 二十三番 左持顯昭 右 寂蓮
 身を捨て思へと云はく唐國の虎伏溪に世をもすさむ
 唐土の虎伏す鳥も隔つらむ思はぬ中の疎きけしきは
 二十四番 左持女房 右 信定
 此のころの心の底をよそに見ば鹿鳴く野への秋の夕暮
 暮れ掛る裾野の露に鹿鳴きて人待つ袖に涙そふらむ
 二十五番 寄蟲戀 左 顯昭 右 中宮權大夫
 起さるゝ年ふる戀は自ら常世の神や驗しむすべき
 獨臥す長々し夜の悲しきを語らひ明すきりくす哉
 二十六番 左 有家朝臣 右 隆信朝臣
 さりとも待つべき程の情かは人頼めなり蜘蛛の振舞
 儂くもさも有らましに待れぬる頼めぬ宵の蜘蛛の振舞
 二十七番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 蟲の音も秋を限と恨むなり堪ぬ思やたぐひなるらむ
 夏蟲も美ましくは秋の夜の露にもえぬ思なりけり
 二十八番 左持季經卿 右 信定
 哀にも鳴き明すかな蟋蟀我のみしほる袖かと思ふに
 露深き哀れを思へきりぎりす枕の下の秋のゆふぐれ
 二十九番 左持女房 右 經家卿
 つらからむ中こそあらぬ萩原や下待蟲の聲をだにきけ
 終夜人まづ蟲の鳴く聲を我身の上になぞへてぞ聞く
 三十番 左持兼宗朝臣 右 寂蓮
 忘れじの契恨むる古里のこゝろも知らぬ松蟲のこゑ
 來ぬ人の秋のけしきや更けぬらば怨に弱る松蟲の聲
 一番 寄笛戀 左 顯昭 右 家隆
 獨寝をいまは何にか慰めむ隣の笛も吹きやみぬなり
 一夜なくは枕に馴し笛竹も如何なる床に臥變るらむ
 二番 左持有家朝臣 右 信定
 よそにのみ隣の笛を聞來しに我身の上になぞこ絶せね

終夜よそに聞つる笛の音の片しく袖に移りぬるかな
 三番 左持兼宗朝臣 右 寂蓮
 さらぬに身にしむ夜はの笛の音を憂人故に聞ぞ悲しき
 我故と思はぬ夜はの笛の音も藻に棲む蟲と袖は濡けり
 四番 左持季經卿 右 經家卿
 美しわたり胡竹と笛の音を憑める中の人はいきくらむ
 五番 左 定家朝臣 右 中宮權大夫
 竹の唯一ふしの契にて夜々の怨みを残せとや思ふ
 遙々と浪ち分ける笛竹を我が戀妻と想はましかば
 六番 左持女房 右 隆信朝臣
 笛竹の聲の限を盡しても猶うき節やよゝにのこさむ
 我戀はまだ吹馴ぬ横笛の音に立つれ共逢ふ方もなし
 七番 寄琴戀 左持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 昔聞君が手馴の琴ならば夢に知れて音をも立てまし
 吾妹子か心も引かぬ琴の音は我が松にこそ通はざりけれ
 八番 左 季經卿 右 寂蓮
 戀妻は非ぬ調の琴の緒かあふと難き音のみたえせぬ
 松風に通ふと聞し琴の音も物思時は身にぞしみる
 九番 左 兼宗朝臣 右 經家卿
 逢ぬ間は琴も知ず引琴の聞惜き迄音にや立ててむ
 松風も琴の調に通ふなり我が獨寝ぞ逢ふよしもなき
 十番 左持顯昭 右 隆信朝臣
 哀として聞知る人はなけれ共戀しきとの音こそ絶せぬ
 等閑に傳くすさむ琴の音も松には通ふ物とこそきけ
 十一番 左持女房 右 家隆
 君故も悲き琴の音は立てつ子を思鶴に通ふのみかは
 よそにならぬ人たにつらき琴音に子を思ふ鶴も心知れて
 十二番 左持有家朝臣 右 信定
 すみ馴れし人は梢に絶果て、琴の音にのみ通ふ松風
 聞かじ唯 なき人の琴の音に厭はず通ふ松の風をば

十三番 寄繪戀 左持兼宗朝臣 右 寂蓮
 主や誰見ぬ世の色を寫し置く筆のすさびに浮ぶ面影
 水ぐさの跡にせきおく瀧つ瀬を誠に落すわが涙かな
 十四番 左持有家朝臣 右 隆信朝臣
 殊更に誰に心を移すらむ我とすみえはかき絶にけり
 跡もなく色に成行く言の葉や墨繪をとむる木立なるらむ
 十五番 左持兼宗朝臣 右 家隆
 思ひ餘り繪にかきとめて慰むる妹が上にも涙落けり
 かき止めて變らぬ色も女郎花哀と見れば露ぞこぼるゝ
 十六番 左持季經卿 右 中宮權大夫
 人知れず盡す心はかひなきこや繪に書ける姿なるらむ
 いざさらば難面き人を繪に書て見てだに戀の慰めにせむ
 十七番 左持女房 右 經家卿
 ます鏡寫しかへけむ姿影絶え果てし契りをぞしる
 戀妻に似てや書らむ見つるより繪にも心を移しつる哉
 十八番 左 顯昭 右 信定
 厭はれて胸安からぬ思をば人の上にぞかき寫しつる
 如何にせむ繪にかく妹にあらねども誠少き人心かな
 十九番 寄衣戀 左 顯昭 右 家隆
 戀衣いつか干るべき何やしろ臉もなみに最と萎れて
 争で尚よはの衣を返しても重ねし程の夢をだに見む
 二十番 左持有家朝臣 右 信定
 夢絶えて返すかひなき小夜衣怨計りを重ねつるかな
 ぬる人の夢は幾度さめぬらむ返すかひなき小夜衣哉
 二十一番 左 女房 右 經家卿
 うち解て誰に衣を重ぬらむまろが丸ねも夜深き物を
 思侘びぬる夜の床の露繁み身のしろ衣かす人もが
 二十二番 左持兼宗朝臣 右 中宮權大夫
 戀そめし思のつまの色ぞ其れ身にしむ春の花の衣手
 淺かりしその移衣戀をすゝむる妻にぞ有ける
 二十三番 左持兼宗朝臣 右 寂蓮

九ぬるにこそ夢も見ゆらめ小夜衣返すは浅き思也けり
 六夢路までうき身の程は小夜衣返すも向や人知れぬ戀
 二十四番 左 李朝臣 右 隆信朝臣
 六唐藍の八潮の衣いろ深くなごあながちにつらき心ぞ
 六衣々に移りし色はあだなれど心ぞ深き忍ぶもぢずり
 二十五番 寄 席戀 左 持顯昭 右 經家卿
 六出にける君が淀野の小庭に獨寝してや膚をふれまし
 六綾立寄る人は無れ共あらましにのみ敷てこそまて
 二十六番 左 有家朝臣 右 中宮權大夫
 六君故に我さへ疎くなりはて、塵のみゐたる床の小庭
 六ささ葉も哀と思ふ有まじに來ぬ君まつを打拂ふをば
 二十七番 左 持兼宗朝臣 右 信定
 六憂身故夜枯るゝ床の小庭は敷忍てもかひやなからむ
 六戀侘びぬ空しき床の小庭に幾夜幾度ねざめしつらむ
 二十八番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 六君とわがねし小庭の塵なれば形見がてらに打も拂す
 六獨寝の床の小庭朽ちにけり涙は袖にかさるものは
 二十九番 左 持女房 右 寂蓮
 六人待つとあれ行く間の小庭に拂はぬ塵をはらふ秋風
 六夜もすがら涙流るゝ小庭は拂はぬ塵も積らざりけり
 三十番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 六忘れずば慣れし袖もや誘らむ寝夜の床の霜の小庭
 六分けてこそなかり塵は積りけれ戀の病に沈む小庭
 一番 寄 遊女戀 左 顯昭 右 中宮權大夫
 六芦間わけ月に歌ひて舟に心ぞまづは乗り移りぬる
 六浪の上を下す小舟のむないして月に歌ひし妹ぞ戀き
 二番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 六浪の上に浮れて過ぐる戯れぬ契人には頼れぬかは
 六涙の上に結ぶ契の果よりも戀に沈まむ身社うからめ
 三番 左 季經卿 右 隆信朝臣
 六浮舟に一夜ばかりの契だになど有難き我身なるらむ

〇誰となき浮ねを忍ぶ蟹の子も思へば浅き恨なりけり
 四番 左 持有家朝臣 右 信定
 六舟 中にさしも浮たる契まで美む程のえにぞ有ける
 六其人とわきて待つらむ妻よりも哀は深き浪の上かな
 五番 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 六心通ふ往來の舟の眺にもさしてかばかり物は思はじ
 六舟の内浪の上なる浮ねには立歸ると袖ぞ濡れける
 六番 左 持女房 右 寂蓮
 六誰となく寄せては返る浪枕浮きたる舟の跡も留めず
 六孰方を見てか忍はむ難波女の浮寝の跡に消る白波
 七番 寄 傀儡戀 左 顯昭 右 經家卿
 六頼むなる浅き神しも幣はせむ君が心や我になびくる
 六鏡山君に心や見つるらむ急ぎたれぬ旅ごろもかな
 八番 左 兼宗朝臣 右 信定
 六心ゆく道の旅の友ならばいと都や戀しからまし
 六立宿る一夜計りの契だにさて長らふる人もある世を
 九番 左 季經卿 右 中宮權大夫
 六浮れ女の浮れてありく旅館住みつき難き戀もする哉
 六東路や往來の人に打解けて宿かりそめの契すらしも
 十番 左 持兼宗朝臣 右 寂蓮
 六一夜貸す野がみの里の草枕むすび捨てける人の契を
 六恨むべき方こそなけれ東路の野がみの塵の暮方の空
 十一番 左 持有家朝臣 右 隆信朝臣
 六東路やかやつ原の朝露に置き別らむ袖は物かは
 六さまくくに移る心も鏡山影みぬひとをこふるものは
 十二番 左 持女房 右 家隆
 六一夜のみ宿かる人の契とて露結びおく草まくらかな
 六結びけむ契もつらし草枕待つゆふぐれの宿を憑みて
 十三番 寄 海人戀 左 持女房 右 中宮權大夫
 六風吹きこす海人のとま庇下に思のくゆる頃かな
 〇みささ居るいそが崎にあざりする蟹もみるめは向求けり

十四番 左 持兼宗朝臣 右 經家卿
 〇我戀は海人のさかてを打返し思解きてや世をも怨む
 〇衣手は鹽たれれ共みるめをば被かぬ蟹と成にける哉
 十五番 左 顯昭 右 隆信朝臣
 〇藻鹽燒蟹のまくかたならぬ共戀の染木もいと無りけり
 〇思ふには類ひなるべき伊勢の蟹も人を恨ぬ袖ぞ濡ける
 十六番 左 持季經卿 右 寂蓮
 〇連や志賀津の蟹に成に身みるめは無くて袖の萎るゝ
 〇伊勢の海の底迄潜く蟹なれや見るめに人を思ふ心は
 十七番 左 持有家朝臣 右 信定
 〇よそにやは釣する志賀の蟹を見む枕の下を知せだにせは
 〇鹽たれゝ袖にあはれの深きより心に浮ぶあまの釣舟
 十八番 左 持兼宗朝臣 右 隆信朝臣
 〇袖ぞとは小島の蟹もいきりけり干さぬ類ひに思ける哉
 〇戀をのみしだの浮島浮き沈み蟹にも似たる袖の波哉
 十九番 寄 樵夫戀 左 持女房 右 中宮權大夫
 〇戀路をは風やは誘ふ朝夕に谷の柴舟行きかへれども
 〇真柴こる賤にも非ぬ身なれ共戀故我も歎きをぞつむ
 二十番 左 持季經卿 右 經家卿
 〇美し賤も妻木をたてつめり休むべき戀にかあるらむ
 〇思出るかひも無れば山人の逢ぬ妻木に戀やしぬらむ
 二十一番 左 兼宗朝臣 右 信定
 〇朝夕に深山に通ふ賤だにも歎きはこらぬ物こそ聞け
 〇賤夫よ思語は我もこりぬべし己苦しき妻木ならねど
 二十二番 左 持顯昭 右 隆信朝臣
 〇斧の柄を何か怪しと思ひけむ暫しの戀も袖は朽けり
 〇浅ましや心をしる山人も身に負ふ程の歎きとぞみる
 二十三番 左 持有家朝臣 右 寂蓮
 〇我戀は繁き深山の山人の流石に得しもこり果ぬかな
 〇秋懸て妻木こりつむ山人も燃ゆる思の程は知らじな
 二十四番 左 持兼宗朝臣 右 家

〇山深き歎きこるをの已れのみ苦しく感ふ戀の道かな
 〇山人の歸る家路を思ふにも逢ぬ歎きぞ休むまもなき
 二十五番 寄 商人戀 左 顯昭 右 隆信朝臣
 〇逢初て後は飾磨の市にても夜枯かちをば變じとぞ思ふ
 〇尋ばや仄に三輪の市に出でて命に代ふる驗ありやと
 二十六番 左 持兼宗朝臣 右 信定
 〇戀しさに逢と代へむ市もがな難面き人の心をらみむ
 〇あき人の舟の昔を思ふにもうらみは深き涙なりけり
 二十七番 左 持季經卿 右 經家卿
 〇倭路や輕の市女にこそ問はむ逢につらさないか代べき
 〇立暮す市女もさこそ歎くらめ心を變へて思ひ知る哉
 二十八番 左 定家 右 中宮權大夫
 〇辰の市や日を待賤の其ならばあす知ぬ身に代て逢まし
 〇志あへの市路にたつ人はこひに命をかへむとやする
 二十九番 左 持有家朝臣 右 寂蓮
 〇よそにても君を三輪の市ならば行交ふ賤に立も後れじ
 〇住侘て世をふる路は知らぬ難波の芦の假にだにみむ
 三十番 左 女房 右 隆信朝臣
 〇三年深き入江の秋の月見ても別れ惜まぬ人やかなしき
 〇ともすれば別を知ぬ浪の上に擽なすねをも人は問けり
 〇判者入道判書の奥に書きつけて云ふ
 〇住吉の松は哀をかけやせむ八十路過ぬる和歌の浦浪
 〇和歌浦の知べとなれる老の波げに住吉の松も知るらむ

和泉式部集

和泉式部集第一

春 春霞たつめ遅きと山河の岩間をくぐる音きこゆなり
春日野は雪降積むとみしか共おひ出る物は若菜也鳥
引連て今日の子日の松に又々千年をぞ野へに出つる
春は唯我宿にのみ梅咲けば枯にし人も見にときなま
花にのみ心を懸て自ら人はあだなる名を立ちぬべき
春の目をうらぐ傳ふ蟬はしぞあな徒然と思しめせし
春夜はい社ねられね起居つ守るに止る物ならなくに
梅が香に驚かれつ春夜の闇社人はあくがらしけれ
秋迄の命も知らず春の野の萩の古枝をやきとやく哉
見るまに下枝の梅も散果ぬさも待遠に咲く櫻かな
人もみぬ宿に櫻を植たれば花もて簀す身とぞ成ぬる
我宿の櫻はかひも無りけり主からこそ人も見にくれ
春雨の目をふるまに我宿の垣根の草は青み渡りぬ
狩人の暇もいらし草若みあさる雉子の隠れなければ
徒然と物思ひをれば春の日のめにたつ物は霞也けり
みにとくる人だにもなし我宿のはひりの柳下拂へ共
隠沼もかひ無り鳥春駒のあされば蕪のねだに残らず
河邊の所は更に老かるををるでにしもさく山吹の花
岩躑躅折もてぞみるせこがさし紅染の衣に似たれば
花は皆散りはてぬめり春深き藤だに散るな今暫しきむ
夏

夏の夜は横のと敲き門たき人頼めなる水鶏也けり
山川の垣根に見えし卯花はみさきの盛也けれ
かざしと誰か思はむ千早振神のまれし許す葵を
己がみな思ひくしに神山のこのて柏と手毎にぞとる
常夏に起臥す露は何なれやあつれてせこが問遠なる覽
手に掬ふ水さへぬるき夏の日は涼き風もかひ無り鳥
眞菰草同じ汀におふれども菖蒲を見てぞ人も引ける
夏夜は照射の鹿のめかだにも合せぬ程に明ぞしにける
螢火は木の下草も暗からずき月の闇は名のみ也けり
人の身も戀には替つ夏虫の顯はにもゆと見えぬ計ぞ
七詠には袖さへ濡ぬ梅雨におりたつ田子の裳裾ならねど
七花こそあれ花橋を宿にうゑて山時鳥まつぞくるしき
蚊遣火の烟けふたき阿武隈に夜は暑さも覺えざり鳥
聲聞けば暑さぞ増る蟬の羽の薄き衣は身にきたれ共
思事皆つきねとて麻の葉を切り切ても拂ひつる哉
秋
朝風にけふ驚きて數ふれば一夜の程に秋は來にけり
一日だに休みやはする七夕に貸ても同と戀社はすれ
うしと思ふ我身の秋に非ね共萬につけて物を悲しき
七根こじにもほらばらなむ女郎花人に後る、名をば殘さじ
八秋の田の庵に暮る苦を粗みもりく露のいやはれらる、
九風吹けばいつも靡けど秋くればとに聞ゆる萩の音哉
十里人の衣うつなる穂の音にあやなく我も寢覺ぬる哉
十一雁がねの聞ゆるなべに見渡せばよもの梢も色附に鳥
十二鈴虫の聲ふりたつる秋の夜は哀に物のなりまさる哉
十三白露のかけて置きたる藤袴綻ひにけり露や立つらむ
十四人もがな見せも聞かせむ萩の花咲く夕かけの朝の聲
十五秋吹けば常磐の山の松風も色づく計り身にぞしきけり
十六入る迄も詠つる哉わがせこが出るにいいでし有明の月
十七さき鹿の秋たち集く萩原に心のしめはゆふかひも無
十八まつ垣にはひくる葛をとふ人はみるに悲き秋の山里

ありととも頼むべきかは世中を知する物は朝顔の花
頼めたる人も無れど秋夜は月みてぬべき心社せし
晴すのみ物ぞ悲き秋霧は心の内にたつにやある覽
おちつもる紅葉の色に山河の淺さも深き流とぞみる
兔も角も散さぬ葉はしてまじを一夜許りの紅葉せば
冬
紅葉の此木の本に有をみて神名月とは云にざりける
白ながら露の置たる白菊をけき初霜に見ぞ紛へつる
秋はてゝ今はとかる、淺ぢふは人の心にてたる物哉
世間に猶もふる哉時雨する雲間の月のいでと思へど
外山なる正木の蔓冬くれば深くも色の成にけるかな
夏のせし蓬の門も霜がれて菘のしたに風もたまらず
置く霜を拂はぬ程は押なべて鴨の上毛の衣手ぞする
閨の上に霜や置らむ片しける下こ痛くさえ上るなれ
宿は荒て敷しふれば白玉をしけるが如もみゆる庭哉
ぬる人を起すともなき埋火を見つ、憐く明すよな
冬の池の番はぬをしはさよ中に飛立ぬべき聲聞ゆ也
天の原搔睡がりて降雪を夜めには明き月かとぞ見る
あ見たせばまきの炭焼けをぬるみ大原山の雪の村消
わがぬれば煙をだにもた、こて柴折焚ける冬の山里
水凍る冬に來ればうき草の己が心とねざし顔なる
氷みな水といふ水はとちつれば冬は孰くも音無の里
下もゆる雪間の草の珍しく我思ふ人に逢見てしがな
せこがきてふし、傍寒き夜は我手枕を我ぞしてぬる
被け共みるめは風も溜らねば寒さにわぶる冬の盤人
敷ふれば年の殘もなかり鳥老ぬる計り悲しきはなし
戀
徒に身をぞすてつる人を思ふ心や深き谷となるらむ
徒然と空ぞみらる、思ふ人天降りこむ物ならなくに
見えもせむみもせむ人を朝毎に起ては向ふ鏡としかな
田子の浦によせてはよする浪の如立やと人を見由もがな

よそにては戀し増れば鴛る磯による舟指てだにせず
遮莫雲の乍らも山端に出入ゆる夜半の月をだにみめ
黒髪を亂れも知ず打ふせはまづかき遣し人ぞ戀しき
夢にだに見えもやすと敷妙の枕動さくいだにれられす
をしと思ふ命にかへて恐しく戀しき人の魂かはる物
逢事を思のをにする身にしあれば絶るも如何悲しと思はぬ
渡つみに人を見る身の生ませは孰の浦の蟬とならまし
君戀る心は千々に砕くれど一つも失ぬ物にぞ有ける
斯戀ひば堪ず死べしよそにみし人こそ己が命也けれ
涙川同身よりは流るれど戀をばけたぬ物にぞ有ける
我袖は水のなる石なれや人に知れで乾くまもなし
山蔭にみかくれおふる山草のやまらず人を思ふ心は
彼をきけ小夜更行けば我ならで妻呼ぶ衛社鳴なれ
世中に戀といふ色は無れ共深く身にしむ物にぞ有ける
孰れの宮にかおはしけむ白河院まる諸共におは
してかくかきていへもりにとらせておはしぬ
我が名は花盗人とた、ば立て只一枝は折て返らむ
日ごろみてをりて左衛門のかみ返し
山里の主に知れで折人は花をも名をも惜まざりけり
とあるふみをつけたる花のいとおもしろきをま
ろがくちらずさびにうちいひし
折人の其なるからに味氣なくみし山里の花の香をする
さゑもんのかみの返事又宮せさせ給ふ
知れぬぞかり無りける飽さりし花に換つる身をは惜ます
また左衛門のかみ
人しれぬ心の中を知ぬれば花のあたりに春は過ぎむ
一日御ふみつけたりし花をみてまろなむさいひ
しと人のかたりければかくぞのたまひし
知らぬや其山里の花の香はなべての袖に移りやはする
かへし
知れじとそこら霞の隔しにぞ尋て花の色はみてしを

また左衛門のかみみちのくのかみのくだりしこ
 ろそれにうちそへたることしぞみし
 今更に霞のとづる白川の關をしいでば尋ぬべしやは
 まろかへし
 行春の留まほしきに白河の關を越ぬる身ともなる哉
 いなりまつり見しにかたはらなるくるしきさま
 のちまきなどとりいれてまろかくるまにとり
 れしとさんのぶの少將くら人の少將いひけると
 聞きしを一日まつりみると車のまへをすぐる
 ほどにゆふかけてとりいれさせし
 稻荷にもいはると聞き無事をけふは糺の神に任する
 かへし
 何としらぬ人にはゆふ禰なにか糺の神にかくらむ
 といひたればみてぐらのやうにかみをしてかき
 てやる
 神懸て君はあらがふ誰かさは寄べに溜る水と云ける
 かつさことのよたへぎみのとうをかりてながえ
 をかけたまへりし人ことにははさらにとらせねど
 もとていひやりし
 こと人は許さざらまし木綿襷かくる車の轆なりとも
 まさみちの少將などのり給へりしそれやよみけ
 む
 ゆふだすきかくる車の轆こそけふの葵の印とはみれ
 雨いたうふる夜よひと夜思ひて侍るに
 徒然と古屋の内にあらね共おほかる雨の下ぞ住うき
 夕ぐれのしかのこえ
 山よ山の茂きをみれば悲しくて鹿鳴ぬべき秋の夕暮
 あかつきがたにたきのおとのきこゆれば
 哀にもきこゆなるか 曉の瀧は涙のおつるなるべし
 繪に山寺法師のゐたる所にきこりとりやのかへ
 る所に

一 栖ぞと思ふも悲し苦しきをこりつゝ人の歸る山邊に
 田まばる家に入ゐたる所
 二 ともすれは引驚す小山田のひたすら寝ぬ秋の夜なく
 八月ばかりにいとおもしろき雨の降る日
 三 うしと思ふ我手觸ねど萎れつゝ雨には花の衰ふる哉
 あきころたふときとする所にまうでたるにむし
 のこえくなげば
 四 心には一つみのりを思へども虫の聲々聞ゆなるかな
 遠くにおこなひするおとを聞きて
 五 悲しきは同じ身ながら遙にも佛によるの聲をさく哉
 有明の月をみて
 六 限あれば且住渡る世間に有明の月をいつまでか見む
 又十題、七月七日
 七 年毎にまつもすすも怪しきは秋の始の七日也けり
 風
 八 ふきとだに吹立ぬれば秋風に人の心も動きぬるかな
 九 みる人も心に月は入ぬれどいでと出にし空は曇らす
 露
 一〇 玉かとしてそれは消ぬる白露を置乍ら社見べかりけれ
 霧
 一〇 夕ざりにあれたちぬればあちきなし
 虫
 一〇 其事と云ても鳴かぬ虫のねも聞なしに社悲かりけれ
 雁
 一〇 守るとて山田の庵に住人のほになく雁の聲を聞く哉
 萩
 一〇 萩原を朝立ぐれば枝はさも折れば折れよと花咲に鳥
 女郎花
 一〇 花よりもねぞみま欲き女郎花多かる野邊を掘求つゝ
 きくいはいとぞ

長月と云にて知ぬ君か代はけふして菊のとかれしと口
 又、七月七日
 天川こよひ眺めぬ人ぞなき戀の心を知るもしらぬも
 風
 秋吹はいかなる色の風なれば身にむ計哀なる覽ゆれば
 曇なき月とはみえて塵もぬ鏡に向ふ心地社すれ
 露
 葉に宿り枝には懸る白露を白く咲たる花とみるかな
 秋霧に行方も見えず我のれる駒さへ道の空に立つゝ
 鳴虫のひとつ聲にも聞えぬは心々にもものやかなしき
 物思へば雲居にみゆる雁音の耳に近くも聞ゆなる哉
 はぎ
 みる毎にあたら物をと覺ゆるは鹿立野邊の萩の花哉
 をみなへし
 女郎花咲るが野の野へに出て妹に心は置れぬる哉
 又七月七日たなばた
 美しけふを契れる七夕やいつとも知ぬ人もある世に
 風
 ほり植しかひもある哉我宿の萩葉の風ぞ秋も知する
 月
 小倉山入にし人は秋の夜の月は名をこそ聞渡るらめ
 霧
 秋霧の立田の山にあふ人は立田の山に行や過ぐらむ
 露
 白玉のしける庭とておりつれば露に衣の裾は濡しつ
 女郎花
 うしろめたわがしめし野の女郎花花かる人に心移るな

はぎ
 一〇 さをじかは秋になりけり萩の上の露紅に道
 二 小蟹のすがく糸をや秋の野に機おる虫の経緯にする
 雁
 一〇 けり返り孰くも旅の雁音は長閑き折もなしとなく也
 九日
 一〇 君かへむ千代の始の長月のけふ九日の菊をこそつめ
 播磨の聖のおもとに結縁の爲にきこえし
 一〇 暗きより暗き道にぞいりぬべき遙に照せ山のはの月
 物の哀に覺ゆれば物へなむ詣つると聞きていづ
 くへぞそこへなむとだにいへと人のいひたるに
 一〇 いか計心深くも非身もうければ谷の底へこそゆけ
 世の中はかなき事を聞きて
 一〇 忍べき人なき身はある時に哀々といひやおかまし
 石山より歸るに遠き山の櫻をみて
 一〇 都人いかにとと見せもせむこの山櫻一枝もがな
 同じ道なる寺にいりて見ればこの花はさかさ
 りければ知りたりし僧のありしをとはするもな
 ければ
 一〇 咲ぬらむ櫻狩とて來つれ共此木の本の主人だになし
 一〇 くれまでの命たへたるものならば必花の折に又見む
 同 頃人の許より櫻の花をまだみすべき人もな
 ければ御料にとて唯一枝をなむ折りたるとて
 一〇 又見せむ人もなければ山櫻今一枝ををらすなりぬる
 かへし
 一〇 徒にこの一枝はなりぬめり残りの花を風にまかすな
 春ごろ久しく音せぬ人の山吹に日ごろの罪はゆ
 るせといひたるに
 一〇 へととも思ぬ八重の山吹を許すといはば折にこんさや
 雨いたくふる頃ものむつかしうて

いかにせむ雨の下社住うれば袖のみまじく濡つ、
 物へいく道に瓦尾に火屋といふもり作るをみて
 歸りてその夜月のうちくもりたるを以て
 哀この月こそ曇れ晝見つる火屋の煙は今やたつらむ
 又人のさうさうするを見て
 いたち上る煙につけて思ふかないつ又我を人の斯見む
 歎くとありと聞きて人のいかなるをぞととひた
 るに
 〇と角いはいなべてに成ぬべし音に泣て社見せま欲けれ
 つれなくのながめ
 〇徒然と詠め暮せは冬の日も春のいくかに異ならぬ哉
 あれたるやぞ
 〇中々に我は人かと思はずば荒たる宿も寂しからまし
 ねさめのとこ
 〇語らはむ人を枕と思はばやね覺の床にあれと頼まむ
 あかつきの月
 〇曉の月みすさびにおきて行人の名残に眺めしものを
 うづみび
 〇ぬる人を起すさし埋火を見つ、儚く明す夜なく、
 あしたの霜
 〇片敷てねられぬ間の上に霜いとあや憎に置る今朝哉
 神の水
 〇朝毎に氷とちつる現袖はたが瑞おける池ならなくに
 庭の雪
 〇待人の今も來たらば如何せむ踏まくをしき庭の雪哉
 夕ぐれ
 〇夕暮など物思の増るらむ待人の又ある身ともなし
 うたねの夢
 〇抄もなき世を頼む哉宵の間の轉寝にだに夢はみすやと
 か々に語らふ男のもとより女のがりやらむうた
 とこひたるやるとて

〇語らへば慰むともある物を忘れやしなむ戀の紛れに
 あやしきとに人のいみじくいひしにそのをりは
 ものいはずとめていひやる
 〇理におちし涙は流れての憂名をすくぐ水とならまし
 二月のさくらの遅きころ
 〇待せつ、遅く櫻の花によりまの山邊に心をぞやる
 ものいみじうおもふころ風のいみじうふくに
 〇身にしみて哀なる哉いか也し秋吹風をよそに聞けむ
 露よりも世のはかなきを人のいふを聞きて
 〇草の上の露に喩へし時だにもこは頼まれし幻の世か
 かたらふ女ともだちの世にあらむかぎりは忘れ
 じといひしが音もせぬに
 〇消果る命ともがな世中にあらばとはまし人の有やと
 法師のきて扇おとしていきたるにやるとて
 〇儚くも忘れにける扇かな落たりけりと人も社みれ
 三月ばかり人のこむとてたやにあかしたるつと
 めていひにやる
 〇夜の程も後めたなき花の上を思ひ顔にて明しつる哉
 九月ばかりとりのねに唆されて人のいでぬるに
 〇人はゆき霧は離に立とまりさも中空に眺めつるかな
 あかぞめが許より
 〇行人も止るもいかと思ふらむわかれて後の又の別を
 さりたる男の遠き國へ行くをいかとくといふ
 人に
 〇別ても同部に有りしかばいとこの旅の心ちやはせし
 世中騒がしき頃語らふ人の久しう音せぬに
 〇世間はいかになり行く物とてか心長閑に音信もせぬ
 ものいみにてある近き所に人のきてえ出ですと
 いひたるに
 〇隔てたる垣のき渡る月ならは語はず共影はみてまし
 人の屏風の哥よまするにはるの

〇春毎の花の盛りは我宿にきて來る人の長居せぬなし
 野の花を馬にのりたる人三人ばかり見ですぐる
 所
 〇ある限心をとめて過ぐる哉花もみしらぬ駒に任せて
 山花をかすめらん
 〇花は猶人に見せなむ隔てたる霞の内に風もこそふけ
 いで井あり女なでしこを見る
 〇咲しよりみつ、日頃に成ぬれぞ猶床夏にしく花は無
 松に藤かゝりたる車より人々をりてみる
 〇藤浪の高くも松に懸る哉末よりこゆる名残なるべし
 遠き山を人こゆる
 〇こし方を八重の白雲隔てつ、いと山ぢの遙なる哉
 海にのぞみたる松に鶯の紅葉のかゝりたるを
 〇紅葉する鶯し懸れば自ら松もあだなる名ぞ立ぬべき
 琴引き笛ふきあそびする所
 〇さく人の耳さへ寒く秋風にふき合せたる笛の聲かな
 山のふもとに家ありもみぢ散りて人なし
 〇散り散する人もなき山里のみぢは關の錦也けり
 人山をこゆるに前に橋あり
 〇橋朽てよくべき道も無り舟峯より渡る雲ならなくに
 はまの松原にふるさあまの家あり
 〇孰方の風に障りてあま人の濱 苦屋を荒しはつらむ
 海づらに應すえたるたび人雪降りたる
 〇空に立鳥だに見えぬ雪もよにすゝるに應を据てける哉
 雪のしろきつとめて人のもとより
 〇けさばしと思む人は訪てまし妻なき閨の上は如何容と
 返し
 〇妻無といふはまろやは敷ならぬ聞にしも社心置るれ
 いさかひする事ありてをこの家をさるとてつ
 ねにするまくらにかきつくる
 〇變りぬむ塵計だに忍ばじなあれたる床の枕みるとも

和泉式部集第二

つらき心ありし人のみなかよりきて音もせぬ
 〇來たりともいはぬぞつらき有物と思はば社は身をば恨む
 わが心のつらきをみてたえにし人に心ちあしき
 ころいひやる
 〇ある程に昔語もしてしがなうきを是非ぬ人と知さで
 思ふとはいへごとくもすればうちえじつといいで、
 ゆくほかにゐてしぬばかりおぼつかなしといひ
 たるに
 〇今はとていく折々し多かれは死ぬ計思へともみす
 雨の降る日つれなくと詠むるにむかしあはれな
 りし事などいひたる人に
 〇覺束な誰ぞ昔をかけたるはふるに身をしる雨か涙か
 心にあらでよそくになりたる人に雨のふる日
 〇己かじ、降れども天の下なれば袖計社わかず濡けれ
 あぢなき事のみいでれば人の返り事をたえ
 てせねばいかなればかくおぼつかなきぞといひ
 たるに
 〇夏草のかりに立名も惜ければ唯其駒を今は野飼ふぞ
 こよひく、とたのめて人のこぬにつとめて
 〇今宵さへあらば斯社思ほえめけふ暮ぬ間の命ともがな
 人にあひて物いひしところを日ごろはかにあり
 てきてみればいたうちりばみたるを見ていひや
 〇逢との有し處を來てみればさしも思はぬ塵ぞぬける
 人のもとにわすれ草しのぶ草つゝみてやるとて
 〇物思へは我が人かの心にも此と此とぞ著くみえける
 人の久しうおとせぬに

理や且忘れぬ我だにも有かなきかに思ふ身なれば
 心變りたる男の枕しはしおもひかはるなとなむ
 いふに
 梅の散りたるをながめて
 人のいまさくらもさきなむといへば
 正様に櫻もさかむみにはみむ心の梅のかをば忍びて
 遠所へ行く人よのなかなのはかなき事といひて
 九月ばかりにいとつれづれにて人にいひやる
 秋深き哀を知らば知らむ人もこゝをぞ尋きてみむ
 なくならむ世までもおもはむなごいふ人の煩ふ
 ころ音せぬに
 忍ばれむ物ともみえぬ我身哉有程をだに誰か問ける
 みわたしなるところにみゆる人々にいひやる
 顯はにもみゆる物哉玉垂の見透し顔は誰もかゝるな
 しのびてもいふ人のあるにこと人のあればい
 そぎて出づるにあふぎかほりにけるやるとて
 語はむ人もなかりつ取かふと思ひしにやる扇也けり
 ものよりなつごろさなるをとおとせぬに
 夏衣きてはみえねどわがために薄き心の顯はなる哉
 月のあかき夜人に
 石山にこもりたるを久しうおともし給はでそち
 の宮
 せせきこえてけふぞとふやと人はしる思絶せぬ心使を
 かへし
 近江路は忘ぬめりとみし物を關打こえてとふ人や誰
 またいつかかへるとあれは
 山乍らうくばうくと都へは何か打出の濱も見べき

みやの御かへし
 ありきよりの屋籠りと思へ共近江の海は打出てみよ
 ある人のあふぎをとりてもたまへりけるを御ら
 んじて大とのたがごと問はせ給ひければそれが
 とまこえたまへければとりてうかれ女のあふぎ
 と書きつけさせたまへるかたはらに
 六こえもせむこさすもあむ逢坂の關守ならぬ人な答を
 帥の宮たちばな枝を給はりたりし
 二熏かよそふるよりは時鳥聞ばや同じ聲やしたると
 返し
 三同しえに鳴つゝおりし時鳥聲は變らぬ物としらなむ
 大雨のあした宵はいかゞと宮よりある御返事
 終夜なに事をかは思ひつる窓うつ雨の音をきつゝ
 かへし
 我もさぞ思やりつる終夜させる妻なき宿はいかにと
 石山にありけるほご宮よりいつかはいづるなど
 のたまひけるにや
 六心みよ君が心も心みむいざみやこへときて誘ひみよ
 みやよりもみぢ見になむまかるとのたまへりけ
 れどその日はとまらせ給ひてその夜風のいた
 くふきければつとめてきこゆ
 六紅葉は夜はの時雨に非じかし昨日山邊を見たらましかば
 十月ばかり帥宮よりいかに徒然にとのたまへれ
 ば
 六花見つゝ暮しし時は春の日も最長き心地やはせし
 そちの宮うせ給ひてのころ
 六刺藻かき風猪の床のいを安み社ねざらめ斯らずもがな
 おなじころふのとのに
 六さるめみてよにあらじとや思らむ哀なれる人の訪ぬは
 ふのとのより
 七袖濡て泉といふ名は絶にきと聞しを敷多人の汲なる

返し
 影みたる人だにあらじくまね共泉てふなの流計りそ
 又おなじ殿より東宮のなをたゞにかゝせて
 三音にのみならしの岡の時鳥と語はむきくやきかすや
 その御ふみをかへしたればま
 八人ゆかぬ道ならなくに何しかも板田の橋の文返す覽
 かへし
 七猶やめよふみ返さるゝ小幡田の板田の橋は毀れもする
 あふぎはらせてはらからたち志ざすとて
 六今ぞ斯離島なる我なれば張束めたるかはほりぞこは
 ある人のこむといひたるに
 七若も來ば道のまぞなき宿は皆淺茅が原に成果にけり
 つのくにより人のいひおこせたる
 八忘草つむ人ありと聞しかばみにだにも見ず住吉の岸
 かへし
 九忘草つむ程とこそ思ひつれ覺束なくて程のへつれば
 はるつかたの人のきたりければ花もみな散にけ
 れば、みちなりなどにか
 徒に歸らむ事を思ふかな花の折こそつくべかりけれ
 返しとこ
 散にけむ花をば今は如何せむみで過しけむ人に問ばや
 この同じ男又山吹のちりはてにたるに
 八けふは又何にかさるゝ一重に散も残らず八重の山吹
 かへし
 九散にきと云てややまむ山吹の折枯したる枝はなしゃは
 むらさきのおり物のひたれを置きたりけるを
 やるとてよりのふに
 八色に出て人に語るな紫の根摺りの衣きてねたりきと
 七月八日大將殿よりありしは忘れて御返に聞ゆ
 七夕のけふのよはひのちり返り又待遠に物や思はむ
 六彥星は思ひもよらむ中々に秋は昨日の無らましかば

正月七日親のかうじなりし程に若菜やるとて
 八こま／＼に逢はせけど無名をば執らばけふ人の積ける
 返し、おや
 八無名ぞと云人もなし君がみに老のまつむ聞ぞ苦しさ
 いなりにまうで、御前なるほとに鹿のなげば
 八思事鹿だになくはいとどく高きみ山のかひよと思む
 まさみちの少將、ありあけの月を見ておぼしい
 づるなるべし
 八ねざめして獨有明の月みれば昔見なれし人ぞ戀しき
 かへし
 八ねられねど八重葎せる横の戸に押明方の月をだにみず
 知りたる人の馬にのりて前わたりするを
 八いはましを我が手馴の駒ならば人に従ふ歩みすれ共
 知りたりし人の月あかき夜きて返りにしにつと
 めていひやる
 八床、上の枕も知らで明してき出し月の影を眺めて
 又和泉のかみみちさだがめの下るひわが下る同
 じひなりければ
 八中々に己が舟出の旅しもぞ昨日の淵を瀬とも知る
 語らふ人のきたりけるを清まはる事ありとてか
 へしければつとめてかう云ひやりたる
 八契しを逢ふべしやはいつくしき荒忌眞忌清まはる共
 かへし
 八すさののを祈るまなしに越てぞみまし浪の八重垣
 ある人のものいひにきてひとへのなりければぬ
 ぎ置きて出でにけるつとめて
 八昔せぬに苦しき物をみに近くなるとて厭ふ人も有鳥
 しのびて語らふ人の煩ひてこよひはえずぐすま
 じといへりければまたの日つとめて
 八覺束な夜のまの程も白露の起居やすらむ死やしぬ覽
 一日も忘らず音せむと契りし人の心ちのあしく

置けば且消ぬる霜をみる儘に草付とに虫ぞなくなる
いかに計り秋は悲しき物なれば小倉の山の鹿鳴ぬべし
明からぬ心のくまを尋ねれば清瀬川の月もすみけり
みちさださりて後帥の宮に参りぬときとて

赤染衛門
移ろはで暫し信太の森を見よ返りもぞする葛の裏風
返し

秋風は凄く吹とも葛の葉の恨顔には見えじとぞ思ふ
皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて色々の
玉めしたるに参らすとて

霜のしろき朝寒
手枕の袖にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

霜の上にも霜は置けるをけき打みれば白妙に露して
人のかへりごと

和泉式部集第三

例の人に物いふ所にたちよりたれどおともせ
ねばかへりてうらみたるに

三聲だにも通はむとは大鳥やいかに鳴門の浦とかほみし
物へいく人いましてはしの命のしきを

いひたるに
三惜むらむ人の命はありもせよ待にも絶ぬみ社無らめ
久しうおともせぬ人に

三怨べき心計りはある物をなきになしてもとはぬ君哉
人によのはかなきとをなごいひて

三いかにせむいかにすべし世中を背けば悲しすめば住憂し

御返し
我さらば進みてゆかむ君は唯法の心を廣むばかりぞ
梅は早咲に鳥とてをればはちる花とぞ雪のふるはみえける

御返し
冬の夜はめさへ氷に閉られて明し難きを明しつる哉
猶世にもありはつまじきとのたまはすれば

御返し
三吳竹のよりのふると思はゆる昔語りは君のみぞせむ
橋につけて人に
三誰にこは猶みせましや我をれば山時鳥更にさなきはず
物にまわりたるにだづねむかたもなきとといひ
たる人に
三いきて又歸りきにけり郭公しての山路のとも語らむ
ともかくもいへといふをここに
三其方とさしてもよらぬ浮舟の又こぎ離れ思ふとなし
けさうするをこびんなきをりきて歸るとてさ
りぬべからむをりおどろかせといふに
三難波海折ふす芦の芦のねにまだねぬ人を驚かすやは

高瀬船早漕出よ障るとてさし返りにし蘆まわけたり
人のかへりごと

其夜より我床の上は時雨れどするに非ぬ旅ねをぞする
人に

今に君やきませや戀してなも有物を我れ行めやは
人のかへりごと

恨むらむ心はたゆな限なくたのむよをうく我も疑ふ
雨風はげしき日しも音づれば給はねば聞えさする

霜枯は侘しかりけり秋風の吹くには萩の音信もしき
人に

徒然とけふ敷ふれば年月に昨日ぞ物は思はざりける
夕ぐれにきこえさする

慰むるさみも有とは思へども猶夕暮は物ぞかなしき
人のためてこそ侍りければつとめてつかはす

起乍明しつる哉とねせる鴨の上毛の霜ならなくに
おなじ心にとあるかへりごと

君は我は我ともへだてねば心々にあらむものかは
心ちあしき頃いかゞとのたまはせければ

絶し比絶ぬと思ひし玉の君により又惜まる哉
雪のつとめて

初雪と眺の雪とみる儘に珍しけなき身のみふりつゝ
ふみ作るとて人々あれはと宣はせられたれば

遅なみ君来まさすば我ゆかむ文作るらむ道を知ばや
霜いと白きつとめていかゞ見ると宣はせられたれば

近よの敷かくとは我なれば幾朝霜を起居みるらむ
雪もふり雨も降ぬる此冬は朝霜とのみ起居ては見る

つくづくとなくけしきを御らんじて
等閑のあらましことに終夜落つる涙は雨とこそふれ
とのたまはすれば心ほそきとのたまはせつるを
と心みだれて

現にて思へば云む方もなし今宵のとを夢になさばや

うへのきぬを張りきりていとをしき事といひて
露草に染ぬ衣のいかなれば現し心もなくしつらむ

十一月菊の色したるきぬおやおのものにやるとて
此きぬの色白たへになりぬとも静心ある毛衣にせよ
やむことなきをここに

白浪のよるには靡く靡く靡かじと思ふ我ならなくに
心にもあらずあやしき事いできて例すむ所もさ
りてなげくをおやもいみじうなげくと聞きてい
ひやるかみのもじはよのふるとなり

古や物思ふ人をもときむ報はかりの心ちこそすれ
外にもや又憂とは有けると宿かへてこそ知ま欲けれ
残しても何にかはせむ朽にける袖は身年捨てまし

涙にも浪にもぬるゝ袂かな己が舟々なかぬと思へば
悲しきは此世一つか憂よりも花さへ物を思ふ也けり
濁江のそこにすむ共聞えずば流石に我を君戀しやは

過にける方ぞ悲しき君をみてあかしくしを月日と思へば
二睡まば憂世夢とも見るべきに孰らは更にねられざり身
三花咲ぬ谷の底にもすまなくに深くも物を思ふかな

五隠れつゝ斯てや止まむ垂乳根の惜みしけむ可憐命を
六春雨のふるにつけてぞ世中の憂も哀と思ひしらるゝ
十二月つとめての歌とて口の男のよませし

極樂をねがふ心を入々よむに
七願くば暗き此世の闇を出て明き蓮の身ともならばや
みやの御殿のさくらを

八花もをしちらで千年をすくさなむ君が都に匂ふ櫻を
世のはかなき事などいひて泣くに近く臥したる
人の袖のぬるゝをあいなのわざやといふに

九大方 哀をしるに落つれども涙は君に懸てこそ思へ
或る所に几帳の帷入れて参らせられたれば袋かへさ

せ給へるに
花の時心不静雨の中に松緑をますといふ心を
人のよむに

長閑なる折社なれば花を思ふ心の内に風はふかねど
松は元の色だにある物をすべて緑も春は殊なり
燈の前に花を思ふといふ心

夜の程に散も社すれ明る迄火影に花をみる由もがな
燈の風にたゆたふみる儘に飽で散なむ花をこみみれ
祭の日御前に人すくなにてさぶらふに葵に御手
習をせさせ給ひて

秋霧のへだつる天の橋立をいかなる隙に人渡らむ
御返し

思立つ空こそなけれ道もなくきり渡るなる天の橋立
たいふの命婦にとまる人よくをしへよとて
別れ行く心を思へ我身をも人の上をもしる人ぞしる
人のかへりごと

はなみみの里としきけば物うきき君ひき渡せ天橋立
出門の所にきたる客人にしひびてとらせし
有けりと佐野の舟橋見つるより物うく成ぬ淀の渡りは
こまやかなる人の文を見て

身は行けど留りぬるは先にたつ涙をもく心なるべし
入道殿より尼になりなりなむといひしはいかやとの
たまはせたるに

戀佐と聞にだにき鐘の音に打忘らるる時の間ぞなき
これなきとて僧都の母いかととひたりければ
つづくと落る涙にしづむともきけて鐘の音づれし哉
同じころさがみのもとよりをばのものとに
親を置て子に別れけむ悲ひの中を如何君を見らむ
返し

親の爲人のもことに悲しきを何ぞ別をよそに聞けむ
木幡の僧都の家やけたる人づていひやるはしに
出にける門のほかをしらぬ身は問べき程もまた過に鳥
かへし

とはぬをも恨むる心今はなし車にのらぬ外ぞ憂りし
きぬどもやるとて
かもしほ草やきけむあまの捨衣思の外に有けるをみよ
かへし

藻鹽草くゆらぬ物をあま衣何かくなみの立重ぬらむ
同じ僧都 母の許に故内侍ともろともうの花
見しとなどいひやりたれば
郭公なきかげにても故里の苔の垣根をいかに戀らむ
かへし

古里の垣ねにのみぞ我はなく死出の田長は訪ひませ
宮法師になりてかみのきれをおこせたまへるを
搔撫ておほし髪毎に成はてぬるを見ぞ悲しき
しはすのつごもり方に曉おきてみれば月いりか
たになれば

年くればあけ行空を眺むれば残れる月の影ぞ戀しき
祭主輔親がむすめの花にきじをつけていひたる
春の野に風はふけども
かへし

船に乗ぞ煩ふよさの海に生ひやはす覽君をみるめは
人に

先も過ぬる方も戀しきは道の空にや往止りなむ
丹後よりの程まてばよそにても戀に命を懸てへし也
なほ或る人にのほりて

與佐の海に浪の夜晝眺つし思し事をいふ身ともがな
前栽のちもしるきをみていひあつめたる
荒さじと思し宿を花により萩の原ともなしてみる哉
我心ゆくとはなくて花薄招くを見ればめこそ留まれ
女郎花就こにうまむ我宿の花にてみるに惜くも有哉
いをしねで夜毎にきけば哀にもなき増る哉鈴蟲の聲
我宿を人に見せばや春は梅なつはとこなつ秋は
これを見て二品の宮の相摸

春の梅夏の撫子秋の萩さくの残りふゆぞしらるる
内侍のうせたるころ雪の降りてきえぬれば
なごて君空しき空に消にけむ泡雪だにもふれはる世に
同じ頃殿の中納言失せ給へるにとぶらひたまへ
るに

訪る人も人は斯こそ思はめと嬉しき迄に君ぞ戀しき
宮より露おきたるからぎぬ参らせよ經の表紙に
せむとめしたるにむすびつた

置と見し露も有けり倦てきえにし人を何に喻へむ
留め置て誰を哀と思けむ子は増らむ子は増りけり
内大臣どの、若君をわたし奉り給へて見たてま
つらむとありければこゝにわたりて見奉り給へ
とありければいづみ

戀ひてなく涙に影は見えたるをなか、迄し何にか渡らむ
雪の降る日
身にしみて物の悲しき雪げにも滞らぬは涙なりけり
若君の御送りにおはするころ

鶯の時の花とみるものをとり違へたる心ちこそすれ
流れつゝ水のわたりの菖蒲草引返すべき根やは残れる
同じ日清少納言に
かへし

すさめぬに妬さも妬し菖蒲草引返しても駒返りなむ
石蔵の宮の御許にちまき奉るとて
深澤の菰をぞかれる君がため玉は衣の袖にかくらむ
返し

深澤のこもは形見にかりけれど君が涙の玉ぞ懸れる
いかなる人にかいかで唯一たび對面せむといひ
たるに

世々をへて我やは物を思べき只一度のあふこにより
また人のかへりごと

頼むとて頼ける社修けれ晝間の夢のよとはしらやや
安藝守の婦子うみたる九日の日ちごのきぬや
とて

七日行く濱の眞砂を敷にして九日さへもかぞへつる哉
はやう別れし人のもとに
其乍ら有かなきかと昔見し人に問てや我はしらすし
人の來るをびんなければかへしたるつとめてよ
べはいねとありしかばまできたるといひたるに

云儘にいさける物をいくにても留むべく社有可りけれ
浅からぬと故おつる涙が浮ぶともいふ忍ぶとも云
あきのきたの方になし君が住離の菊の香にをくるはせ
塵ばかり匂だになし君が住離の菊の香にをくるはせ
内侍もうせてのち人のもとに

引かくる涙に最どおぼはれて蟹の刈ける物も云れず
人のかへりごと

玉の緒を見るに傍き笹蟹のいかで暫もかき通はとや
おなじ人に

古はありけるときながら猶悲しさのふり難き哉
 人のかへりごと
 泣わたり雨には最ぞ真菰草誠に其をねになかれにし
 人のかへりごと五月五日
 涙のみ古屋の軒の忍草けふの菖蒲はしられやはする
 おなじ人に
 何事も皆ふりにける君が爲いかなる事をいかにきかまし
 五月五日ちまきを人のもとにやるとて
 深澤田汀隠れの眞菰草きのふ菖蒲にひかされにけり
 柳にみのむしのつきたるをみて
 簑蟲になるを見るく青柳の糸にのみよる我心かな
 雨ふらば梅の花笠あるものを柳につける簑蟲のなぞ
 このかたしたるわりごを祭主輔親かりてかへす
 とてかりのこをいれて
 いか嶋によさの海より飛通ふ上の空にもかひに爲し鳥
 かへし
 飛通ふよさのしまつをよそ人は取も留めばかひも
 石蔵より野老おこせたる手箱に草もちひいて
 奉るとて
 花の里心もしらず春の野に色々つめるはこ餅ひぞ
 との中納言の御返事
 冬の野にかるてふ萱は枯もせよ人の心に霜は置やは
 秋かなかよりきたる人に
 秋風の音につけても待れつる衣重ぬる中ならねども
 やまよりのぼりたりと聞人の音づれぬる
 大和よりきたりときけど唐衣唯唐士の心地こそすれ
 人の返事に
 立歸り心の癖の習にてそはこまほしく思ひなすらむ
 公資がめと諸共にきて枕こへげ出したるにかへ
 すとてかきつけかへしたる
 旅毎にかるもちるさし草枕手枕ならば返さうらまし

かへし
 草枕その結びめの便には千度も千度かさむとぞ思ふ
 人のかへりごと
 かけたるはうしと社思へ邂逅に車は何の心をかやる
 雪いみじうふるひ
 斯しつゝひをのみふれば最どしく往來の道や滞らむ
 僧都の母いとこひたるやるとて
 このふしに絶も社すれ齋籠りいと少くも引でたる哉
 かたらゝ人の來るに粽やるとしてきたるかみに
 夢にだも逢とみるこそ嬉しけれ残りの頼み少けれ共
 冬のはてつつかた雪のいみじうふる日人がりやる
 振はへて誰はたきなむ踏附る跡見まほしき雪の上哉
 五月五日菖蒲の根を清少納言にやるとて
 此ぞ此人のひさける菖蒲草むべこそ聞の妻と成けれ
 かへし
 聞毎のつまにひかるゝ程よりは細く短きあやめ草哉
 またかへし
 さはしもぞ君は見らむ菖蒲草ねみけむ人に引較つゝ
 おなじき人のもとよりのりおこせたりければ
 稀にても君が口より傳ずは説ける法にいつか逢べき
 ひとのもと物忌にてなむと聞きて今日のつれづ
 れに心ばへのいとにくきもよくなむといひたる
 に
 何にとも憂につけつゝ思出で忘るゝ時の間だにあらじな
 卯花みにいきてかへりてつとめて
 折しませきのふ垣の花をみてけふきく物か山時鳥
 小田のなかつかさの内侍口侍けむたき物すこ
 しとこひたるに
 夢計り合せたき物なかり鳧烟となりて上りにしかは
 内侍なくなりて次の年七月に例やるふみになの
 かゝれたるを

諸共に苦の下には朽ずして埋れぬ名をみるぞ悲しき
 いかなる人にか
 浅ましやねぬ共人は見えぬと夢とも夢に人に語るな
 引人も無て昨日は過してき我忘れぬにおふる菖蒲は
 又いかなる人にかいひ侍る
 いとしく物ぞ悲しき定なき君は我身の限と思ふに
 戀しさは其にしも社増りけれあふを限と誰か云ける
 難面さは思しもせじ一日だに争でか過す心地す覺と
 有乍らつらきも苦しなき人を思のみやは思ひ也ける
 契あらば思ふが如ぞ思はまし怪しや何の報なるらむ
 けふしなばあす迄物は思はし思ふにだにも叶ぬぞき
 よそにふる人は雨と思ふらむ我目に近き袖の雫を
 日にそへて憂とのみも増哉暮ては頓て明すもあらむ
 いみじうふみ細かにかく人のさし思はぬに
 藻鹽草やくとかきつむ蟻ならで處多かるふみの浦哉
 羨しきもわが胸の騒ぐ哉いかなる人の身かは動かぬ
 忘なむそれは恨ず思ひむ戀らむとだに思ひおこせば
 幾日ともしられず成ぬ敷にせし泪の玉もほれ落つゝ
 絶果ば絶果ぬべし玉のをに君ならむと思はれけり
 我袖に涙とのみぞ思ひしを心にかゝる君もありけり
 七日にも餘りに鳥な便あらば敷へきかせよ興津島守
 割なくも高くせらるゝ歎哉みそかにと社君も云しか
 守の大和よりのぼりたる日人のもとにやる
 待人はまて共みえで味さなく待人社先はみえけれ
 また人に
 怨むなよ我名たつて見人の何思ふぞと問はひ答へむ
 かけ昏しあめはさ月の心ちしてまだ打とけぬ時鳥哉
 身の憂も人のつらさも知ぬるをこはたが誰を戀るな覽
 あふひをやるとて
 皆人の挿頭にすめる其草の名は何とかや云て聞せよ
 また

くすりてふ葵もすぎぬ今は唯戀忘草ひとりともがな
 夢くすりてふ葵もすぎぬ今は唯戀忘草ひとりともがな
 我魂の通ふ計りの道もがな感はむ程に君をだに見む
 和泉式部集第四
 七よさの海の蟹の所爲と見し物さも我やくさるゝ潮哉
 増鏡いと見苦しやむべこそは影見し人の影は見えけれ
 内侍なくなりたるころ人に
 歎やとなき折ならば何により落る涙と人に云まし
 逢に逢て物思春はかひもなし花も霞もめにしたゝれば
 八つらとも其はひては思ぬに猶身にしむは葛の裏風
 八とへと思ふ人は梶色にして何にこふらむ八重の山吹
 狩人の下にみをのみ焦せども燻る心の盡すもある哉
 憂事も戀しき事も秋の夜にはみゆる心社すれ
 人きてかへりぬる十月ばかりに
 我宿の紅葉の錦いかにして心安くはたつにか有らむ
 怨べき方だに今はなき物をいかで涙の身に残りけむ
 丹後にありけるほごかみのぼりてくだらざりけ
 れば十二月十日より雪いみじうふるに
 待人は往止りつゝ味さなく年のみこゆるよさの大山
 人のかへりごと
 丹後
 丹後をへて物思ふとは習ひにき花に別ぬ春しなれば
 丹後に
 丹後をへて物思ふとは習ひにき花に別ぬ春しなれば
 丹後に
 おなじ人に
 おなじ人に
 大和がいへ出でたるにはよめ諸ともにぞありけ
 るをとこのをりくおこせたる文どもをとりも
 たりけるほかにむたりけるほどその文のうらに

ふみかきてかのはのおこせたりければ
唐衣つまとは君になりはてむ結をとめよあこか玉章
山里にて人に

はよを限る山里にても君をまつ心計りぞ變らざりける
はよきのにふだうのめに
いつか又我身をやらむ山里も最ど物こそ悲かりけれ
夕ぐれにちひさきうりを齋院より給はせたるに
かきつけてまゐらす

夕霧は立を見ましや瓜生山こま欲かりしわたりならでは
なかつたがひたりし尼のけさにむすびつけしる
味きなし我と着べきけきの結はれたるけはせけなむ
かしはのよりなにとかやさがみへやるとて
かしのだにも安くねさせで沖風の吹落したる柏野の露
監物ゆきつねが

打はぶく浪の上をばきぬなるに洲隠れたるか鳥の見えぬは
人の置きたりける鏡のはこをかへしやるとて
影だにも止らざりけり増鏡箱の限はいふかひもなし
現にて夢ばかりなるあふ事を現計りの夢になさばや
雨もよに通ふ心し絶せねば我衣手のかわくまぞなき
そら物は雨にぬれく我袖の風に背から乾かぬやなぞ
限なき物思ふ身とぞ思しをけきは喩へむ方のなき哉
警べき方はけふ社無りければ昨日をだにも暮してしかば
暮してもあくるとだになかりせばな思はまし
逆もかく斯てもよそに歎く身の果は如何は成むと賢
最どしく覺東なきに年月の往返るかとみゆるけふ哉
花も皆夜更る風に散ぬらむ何をかあすの慰めにせむ
ひをだにも幾日に成ぬと思しをけふふ月月に成にける哉

三月三日
賤女の垣ねの桃の花も皆すく人けふはありと社きけ
郭公夢にこゑきつれと現ならひに未だねられず
折て見し人の句の思はえて常よりをしき春の花かな

ありとも今は頼まぬ中なれど只管なくば無名とぞ思
かならずこよひといひたるをどこにえあふまじ
かりければ
むば玉の今宵計りを思つゝ睡まざらば夢にをみえむ
八月ばかりに人のきてあふぎをおとしてけるみ
て竹のはに露いとおほくおきたるかたかきであ
るほどへてやるとて

東雲におきて別れし人よりは久しく止る竹の葉の露
ほかにかよふをといひかにおもふにかありけむ
いまだたいひと月の程わするなといひたるに
其事と云ぬ先よりいつとも憂を忘るゝ時し無れば
世のいとさわがしきころ

疲さにつけてぞ歎く夢のよを見果す成し人によそへて
物をも思ひし程は疲れて淺茅の末のよと成にけり
八月十日の夜夜なればかりに
睡めば吹驚かす風の音に最ど夜寒になるをしぞ思ふ
十月ばかりに物に詣でゝ夜とまりたるに瀧の音
風の音の哀に聞ゆるにか傍なる局にはやうき
し人の音すればいと忍びてさしおかする

憂世には風の風をしるべにてみし山水に袖を濡しつ
人のもとにいくなりときく男の菊の花につけて
かはらぬよしいひたるに
變らじといか頼まむ今はなほ薄紫の色ときく
うらみて久しう音せぬ人のもとに斷りをたびた
びいへごかへりごともせねば
此度は言に出てを恨てむ はずば何のみをか捨べき
霜いと白きつとめて人に
打拂ふともねならねは鴛鴦の上毛の霜もけさは宛ら
田舎なる人のもとより早して國のみなやけたる
とわびたるに
小山田のなどひたぶるに思らむ露の泉手は有もこそすれ

月あかき夜人きて物かたりなどしてかへりてつ
とめてきてやあかしたまへりしとあれば
とこの上の枕もしらす明してき出にし月の影を眺て
互みに忘れじなどいひて久しう音せぬに
さらばいかに我も思ひや堪ぬべき同心に契てきて
こと心つきたる男さすがに時々きてみるに
見る毎になど歎かする君ならむ己が形見に己成つゝ
たのめぬにとたのむる人のおとせぬに
理や且忘れぬ我にても有かなきかに思ふ身なれば
たのめて見えぬ人につとめて

休ひに横の戸を響社ささめ争で明つる冬の夜ならん
もろともにとのみちぎる人の田舎へ行くに
後れしと我をも捨て出立つは涙にのみやきは契けむ
といひやりたる返り事に後るゝがつかさとのみ
いひたる我も流石にいくべきにもあらねば
流行く泪のかはにうき物は後らす人と後れぬる身と
ゆくみちよりとよまるたましひをかたみにはせ
よといひたるに

我魂は旅の空にも惑ひなむとむべき袖の中は朽にき
この人の上を思ふさまにていぬと語るを聞ききて
契しは思ふさまにて思ふとてあらましとを云し也鳥
梅雨は物思ふ事ぞまさりける詠のうちに詠暮れつゝ
男のほかにある夜人に物いふさまにみゆれば
ねぬる夜の夢騒しく見えつるは逢に命を替やしつ覺
久しう逢はぬ人を思ふとて道も絶えずなごいふ
に

今よりは古野の道に草繁み忘行くにはさぞ感ふらむ
雨のいたうふる日涙の雨のなごいひたるに
見し人に忘れられてる袖に社身を知雨のいつもやまね
おなじ男かくてはいきたるこゝちもせずといひ
たるに

花見てもひをば暮しつ青柳の最苦きは夜にぞ有ける
折よくば見にこぬまでも我宿の櫻咲ぬと告まし物を
上よりは萩の下葉の下露の萎れて落る秋にも有かな
隠れなき物にぞありける夏衣薄き心はきてもみね共
忘れぬと罪うる心ちする物をけふの襖に拂へ捨てむ
花薄招く便りのかひもなし心しりなる人し見えねば
我をこそ語らはざらめ足引の山時鳥鳴き聞かせなむ
蔭にとて隠るゝ人はなかり身みを卵花は盛なれども
萬蒲草さ月ならねど我袖に人しれぬねはいつか絶せむ
ぬの前に變りぬめりと見る物を又忘すや有しよとの
小夜中に月を見つゝもたが里に往止りても詠む覺とは
おち積る木葉の上に降る雪の我も獨は詠めざらまし
何事も心に叶ふ世なりせばひとり盛の花を見ましや
岩橋や戀のみ渡る心には絶間ありとも覺えざりけり
君が住渡りと思へば泊瀬河おり立ぬべき心社すれ
入道殿の小式部 内侍子うみたるに宣はせたる
嫁のこの子鼠如何成ぬらむあな美しくと思ほゆる哉
御返し

君に斯よめの子とだにしらるれば此子鼠の罪輕き哉
心にもあらでよそになる男のもとに雨のいとい
たく降る日なみだの雨のとくひたるに女もこと
いできにければ
己がしゝふれ共雨の下なれば袖計り社わかす濡けれ
手箱を置きたるやるとおなじ人に
逢とを今は頼まぬ中なれど又こそあけね鳥の子が箱
人かたらひたる男のもとよりわするなどのみい
ひおこすれば
いさや又變るも知す今こそは人の心を見て習はめ
同じ人常に忘れぬよしをのみいひおこすれば
哀とも思ひやせまじよそになる心のあらぬ心せば

ありとも今は頼まぬ中なれど只管なくば無名とぞ思
かならずこよひといひたるをどこにえあふまじ
かりければ
むば玉の今宵計りを思つゝ睡まざらば夢にをみえむ
八月ばかりに人のきてあふぎをおとしてけるみ
て竹のはに露いとおほくおきたるかたかきであ
るほどへてやるとて

東雲におきて別れし人よりは久しく止る竹の葉の露
ほかにかよふをといひかにおもふにかありけむ
いまだたいひと月の程わするなといひたるに
其事と云ぬ先よりいつとも憂を忘るゝ時し無れば
世のいとさわがしきころ

疲さにつけてぞ歎く夢のよを見果す成し人によそへて
物をも思ひし程は疲れて淺茅の末のよと成にけり
八月十日の夜夜なればかりに
睡めば吹驚かす風の音に最ど夜寒になるをしぞ思ふ
十月ばかりに物に詣でゝ夜とまりたるに瀧の音
風の音の哀に聞ゆるにか傍なる局にはやうき
し人の音すればいと忍びてさしおかする

憂世には風の風をしるべにてみし山水に袖を濡しつ
人のもとにいくなりときく男の菊の花につけて
かはらぬよしいひたるに
變らじといか頼まむ今はなほ薄紫の色ときく
うらみて久しう音せぬ人のもとに斷りをたびた
びいへごかへりごともせねば
此度は言に出てを恨てむ はずば何のみをか捨べき
霜いと白きつとめて人に
打拂ふともねならねは鴛鴦の上毛の霜もけさは宛ら
田舎なる人のもとより早して國のみなやけたる
とわびたるに
小山田のなどひたぶるに思らむ露の泉手は有もこそすれ

語らふ人ありとくところ男のとまりにけれ
 ばつきの曉いひやる
 六めに近き袖に洩すは人のよの月ともよに見べき物を
 いとちかき所に語らふ人の渡りたるにもものいみ
 にてえあはず
 七隔てたる垣の間渡る月ならば語はず共影は見てまし
 八中々にうかり儘にやみにせば忘るる程に成もしなまし
 秋のいとおもしろく咲きたる所に雨ふる日まら
 うごのきて物語して歸るに
 九雨もよに急ぐべしやは秋萩の花見るとは故意もぞく
 いかなる人にかありけむふとさうていひやる
 〇様々に心置きたる露なれば唯に草葉の上とやはさく
 時々くる人の許よりくれゆくばかりといひたれ
 ば
 一詠めつゝ事有顔に暮しても必夢の見えばこそあらめ
 物へいく人にあはむと思ふにえあはで扇にかき
 つけてやる
 二是にのみよふる度は扇てふなには恐れぬ物にぞ有ける
 久しうありてとひたる人のかへりごとと石をつ
 みてたゞこれを見給へとて
 三あふとを有し身乍らある物と思出てや人のとふらむ
 ものへいく人に
 四有程は憂を見つゝも慰めつ懸離れなばいかに忍びむ
 人しもとよりおもしろはむかたにと云ひたれば
 五忘らるゝ時のまもなくしと思ふ身を社人の形見にはせめ
 いと覺束なきまで音せぬ人に十二月つごもりの
 日
 六歎かでは孰のひをか過しゝとけふだに問て人は知れかし
 さくら 花のまち遠なりと云ひて
 七くるゝまもしらぬ命に替つゝも遅く櫻の花を社見の

越路のかたなる人に
 八急ぎしも越路のなごの月はしも綾なく我や歎渡らむ
 つらけれど忘れじと思ふ人に
 九うしめて人を忘るゝ物ならば己が心に非ぬと思はむ
 時々うらめしき人のいまは音せぬに
 〇其かみはいかに云てか恨けむ憂こそ長き心なりけれ
 たび／＼やるかへりごとせぬ人に
 一波返る跡も見えねば水の上に数かき果る心ち社すれ
 十月ばかり年頃久しう音せぬ人に
 二音もせで秋の過行く年毎に浮雲かともしらず顔なる
 夜ごとに人のこむといひてこねばつとめて
 三今宵さへあらば斯こそ思はえめけふ暮ぬまの命ともがな
 長柄の橋を見て
 四有けりと橋はみれ共かひぞなき船乍にて渡ると思へば
 水のほとりに千鳥のたゞ一つたてるを見て
 五友をなみ河せにのみぞ立るける百千鳥とは誰か云けむ
 あしおほくつみあげたる船にいさあひて
 六芦わくる程にきにけり立浪の音に聞てしこや難波海
 しほみちぬとてふね出す所
 七己唯みちる沙も有けるを思人とぞわれはふなづる
 くるまがはにて
 八軍河云名やなどて流れけむ恐ろしげにも見えぬ波を
 あみひかせて見るにあみひく人ぞものいと苦し
 げなれば
 九あみだ佛と云にもいはれ救れぬや助くとは譬ひなる覽
 風にさはりて船とめたる所に貝拾ひてもてき
 たるを見て
 〇見人も活にをればかひなしと思はぬ蟹の所爲なるべし
 そこに風も止らぬ浦にきて蟹ならなく長むつる哉
 かりやして濱づらにふしてきけば都鳥鳴く

事とはゞありのまに／＼都鳥都の王を我にきかせよ
 いもねられぬまゝに探ればきぬのぬれたるも哀
 なり
 一淺茅生に宿る露のみ起居つゝ蟲のねられぬ草枕かな
 さくら 井こゆる日
 二越くればたゞち也けり櫻井となのみぞ高き所成ける
 月おもしろきに京をおもひやりて
 三見るらむと思ひおこせて古郷の今宵の月をたれ詠らむ
 又
 四都にて詠めし月を見る時は旅の空とも覺えざりけり
 しのびたる人の厭ふなるきぬをきてかしがまし
 とてぬぎ置きたるやるとて
 五音せぬは苦しき物を身に近くなるとて厭ふ人も有り
 いとかくつらきをもしらでなむ頼むといふ人に
 六心をは習はし物ぞ有よりはいざつらからむ思知やと
 われも人もつゝむことある中にならずつねにうら
 もかなはぬ事といひけるにかならずつねにうら
 みらるゝがむづかしければ
 七己が身の己が心に叶はぬを思はぬ物を思ひしりなむ
 いづもへいく人に
 八めも遙に斯村雲は隔つとも推量りには思ひおこせよ
 夕ぐれにとほきさくらを見やりて
 九句ふらむ色も見えねば櫻花心あてにもながめやる哉
 秋の夜の月いといたうくもりたるに
 一〇詠れどめちにも霧の立ぬれば心遣なる月をだに見ず
 とほききぬうつおときこゆれば
 一一徒に明す月かなうらやましせよか衣を人はうつつなり
 久しうとはぬをいかに思ふらむといふ人に
 一二岩の上の種に任せて待程はいかに久しき物とかは知
 物おもふころあるやうある人に
 一三身のちさをしるべき限り知るを猶歎るゝ事や何事

心うきをみる／＼たのむはわが心にもあらぬに
 やといふ男に
 一我も我心もしらぬ物なれば如何途にはなるこそ見の
 よのはかなきころ夢ばかり人にあひて
 二有程に訪見てしがな絶にしいか計憂世とか有しと
 あるやうある人にすぎにつけて
 三見てはきは尋ねけりやと心みむ印にたてる杉の下門
 つねなきころ見はてむとてなむこのよにかく
 てあるといふ人に
 四ありぬべき人も有ける世間に我社夢とみねば頼まね
 わりなくうらむる人に
 五〇つの國のこやとも人を云べきに隙社なけれ蘆のやへぶき
 田舎なる人に時鳥にむすびていとながきしやう
 ぶのねをくはせて
 六〇そこ迄は聞えしもせじ郭公袂に懸るねをみてをしれ
 人に
 七類なき浮身也なり思知る人よにあら 訪もしてまし
 かたらはむといふ人に
 八〇心みにいざ語らばむ世間のこれに慰む事やあるとも
 四月ばかりにたちばなのさきたるを
 九〇橘の花さく里にすまへども昔をきとふ人のなきかな
 おなじころしやうぶのかのすゝろにすれば
 一〇郭公忍びの聲も聞えぬにまだきこゆるあやめ草哉
 物おもふころ卯のはなを見て
 一一〇時鳥むべもなきけり卯花の折は物こそ哀なりけり
 遠き所へいぬる人をおもひやりて月に
 一二〇天の原いづも詠むる月なれど今宵は空に宿りぬる哉
 人しれず思ふ事あるをはらからにかなむいふ
 とて
 一三〇岩躑躅いはねば疎し懸ていへば物思増る物を社思へ
 例のものへいにし人をおもひ出で

〇いかならむせこ旅ねの草枕最斯露は起居しもせし
 〇何事も心にしめて忍ぶるをいかで涙の先知りにつむ
 〇聞えしも聞えず見しも見えぬよに哀いつ迄有むとす覽
 〇三月つごもりに
 〇中々に咲て散ぬる花ならばひをへて物は思ざらまし
 〇草のいと青やかなるを遠くいにしへ人を思ふ
 〇浅茅原みるにつけてぞ思遣るいかなる里に菫摘らむ
 〇たれわけむたれかてなれぬ駒ならむ稍茂行庭の村草
 〇その程のよはのね覺の時鳥まつ一聲を仄かにもがな
 〇雁のこを人のおこせたるに
 〇幾つづ、幾つ重ねて頼ま、し假のこのよの人の心を
 〇忍びて人にもいふ戸ぐちにて
 〇著ければ枕だにせぬる物を横の戸口や云んとす覽
 〇橋を見てむかしの人をおもひ出で、
 〇薫る香はそながら其にあらぬ哉花橋のみなりけり
 〇九月つごもり久しうおとせぬ人に
 〇秋深き哀をしらばしらすらむ人も心ぞ尋ねきてみむ
 〇語らふ人ひさしうおとせぬに
 〇よの人は怨みもやせむ我は唯斯るしもこそ哀也けれ
 〇たびにたつ人のもとよりたきのはむといひし物
 〇のありしたまへといひたれどうせにければ
 〇徒にあれば我身もある物を離れむまとして人宿りけむ
 〇をかしと思ひし男のけさうせしが音せぬにあり
 〇しふみにかきつけて
 〇三跡をみて忍ぶも怪し夢にても何事の又有しともなく
 〇雪のふるひいかやなど人のいひたれば
 〇三かきくもる中空にのみ降雪は人目も草も枯々にして
 〇わざと怨むべき事もなき人の久しうおとせぬに
 〇味さなく思ぞ渡る恨べき事どもなき人のとはぬを

忍びて語らひたる人の唯哀れに顯るゝを斯るを
 〇ばいかと思ふと人のいひたるに八月ばかりに
 〇風を痛みしたばのうへに成しより怨て物を思ふ秋萩
 〇物へまうづときとてもし其所へかといひたるに
 〇さなれば
 〇いか許心深くも非ぬ身もいければ谷の底へこそゆけ
 〇おやはらかななどおなじ所にはかに外々になり
 〇て後たふときことするにいひやる
 〇其中に有しにも非ずなれるみを知ばや何の罪の報と
 〇物思ふころおもふとある人に
 〇更に又物をぞ思ふさなくも歎かぬ時の有身ともなし
 〇つれづれに夕ぐれにながめて
 〇夕暮に物思ふ事は増るか我ならざらむ人に問ばや
 〇雪いといたう降る日はどかる事ありてなむとい
 〇ひたるに
 〇三忘草包むくんとつけてしのぶる雪の音もせじとや
 〇三稻荷に詣でたる人ならばよそに見過て歸ましやは
 〇三逢々も尋てきたる人ならばよそに見過て歸ましやは
 〇日頃ほかにてはらからのもとにきたるにふとも
 〇えあはで異方にゐたるに
 〇三よそなるを何歎けむ逢とのある所とてあはし社あらめ
 〇人の夜ふけてきたりけるをききつけてねたりけ
 〇るなごつとめていひたるに
 〇三臥に身さしも思はで笛竹の音をぞせまし夜更たり共
 〇つねにわがうへいふときく人のあふきのいとわ
 〇ろきをもちたるをとりてかきつく
 〇三大方は妬さも妬し其人に扇てふなを云ひやたてまし
 〇久しう音せぬ人のもとより時鳥は聞きたりやこ
 〇には二度三度なむききたるといひたるに
 〇三一弊も我こそきかね郭公こと語らばで人のへぬれば
 〇正月一日はなを人のおこせたれば

〇春やくる花や咲くとも知ざりき谷の底なる埋木なれば
 〇草々に生ふとはきけど無名をば執らけふだに人は摘やは
 〇同じ頃せうとにせむといひたる人の久しう音せ
 〇ぬに
 〇三いつのまに幾重霞の隔つれば妹背の山の方はみえぬぞ

〇梅津川井關の水ももる中と成にける身を先ぞ恨むる
 〇いくところなごある人雨のふるつれづれと物が
 〇たりなどして
 〇三見る儘に思ふや軒の玉水も漏さぬ中と誰かするらむ
 〇つの國といふ所に薄をうゑ置きて京にきたるに
 〇かの國よりおひにたりといひたる返り事に
 〇三植置し我や見べき花薄芦のほにだに出さずもがな
 〇諸共に田舎へなどいひし男さりとてと女わていく
 〇ときとて
 〇三中々に己ふなづるひしも社昨日の淵をさもと知ぬれ
 〇いくかさねといひたる人に
 〇一とと思ふ心ぞ絶ぬ忘るゝを且三熊野の浦の濱ゆふ
 〇うたこひし人のなくなりにけるをとかうして又
 〇のひいかいとひたるに
 〇三思ひやる心は立ち後れじを唯下道のけふりとやみし
 〇月いとあかき夜女のもとより男のもとにうたよ
 〇みておこせたりければいかむとていでたつ程に
 〇雨ふりければつとめてやるに
 〇三こてふかと思ひ立しまにさし曇にし月の通ひし
 〇こちあしきころ人に
 〇三あらざらむ此世の外思出に今一度のあふともかな
 〇七月七日人のもとに
 〇三七夕に劣る物かは物をのみ思ひぞ渡るかささきの橋
 〇ものへいくとて人に
 〇三何方へ行と計は云てまし訪べき人のある身と思は
 〇又人に
 〇三我のみや思ひおこせむ味さなく人は行方も知ぬ物から
 〇親なごいふとありければ忍びてはらからどもな
 〇ど昔ありしやうにて物語する哀に覺ゆれば
 〇三古のありしなごらにある人も心のなしに物ぞ悲しき
 〇男のもとよりきえぬ水の泡かなどいひたるに

和泉式部集第五

〇いかにいひたる人にかありけむ
 〇三素盞鳴尊を祈ともなきに最しく久かるべき床の上哉
 〇おなじところなる人のとかたにおきてからなで
 〇しこを大和ならぬなむあるとておこせたるに
 〇〇かひなきは同垣はに生れ共よそふるからの撫子の花
 〇五月五日くすだまおこせたる人に
 〇三引出たる程を思へば菖蒲草つくる袂のせばくも有哉
 〇またあるやうある人に奉るとて
 〇三心ねの程を見するぞ菖蒲草々の縁りに引懸けねども
 〇また人に
 〇三身の憂に引る菖蒲の味氣なく人の袖迄ねをやかくべき
 〇しのびくる人のつとめて人のあらはれぬる事と
 〇いよにおなじ五日
 〇三引けばこそ軒の妻なる菖蒲草たが淀野にかねを留らむ
 〇おなじあさがほのはなを人のもとより
 〇三霧のまに見し楳の花をこそけふの菖蒲は最ど分れぬ
 〇そのよはやうみたる人々きあひてあはれなるも
 〇のがたりなごするを人のもとよりいかにあやめ
 〇のねによそふらむといひたるに
 〇三あやめ草其根ならねど時鳥なき社しつれ元の人として
 〇こゝろうしとあもふ人のもとより梅をおこせた
 〇れば

〇いかにいひたる人にかありけむ
 〇三素盞鳴尊を祈ともなきに最しく久かるべき床の上哉
 〇おなじところなる人のとかたにおきてからなで
 〇しこを大和ならぬなむあるとておこせたるに
 〇〇かひなきは同垣はに生れ共よそふるからの撫子の花
 〇五月五日くすだまおこせたる人に
 〇三引出たる程を思へば菖蒲草つくる袂のせばくも有哉
 〇またあるやうある人に奉るとて
 〇三心ねの程を見するぞ菖蒲草々の縁りに引懸けねども
 〇また人に
 〇三身の憂に引る菖蒲の味氣なく人の袖迄ねをやかくべき
 〇しのびくる人のつとめて人のあらはれぬる事と
 〇いよにおなじ五日
 〇三引けばこそ軒の妻なる菖蒲草たが淀野にかねを留らむ
 〇おなじあさがほのはなを人のもとより
 〇三霧のまに見し楳の花をこそけふの菖蒲は最ど分れぬ
 〇そのよはやうみたる人々きあひてあはれなるも
 〇のがたりなごするを人のもとよりいかにあやめ
 〇のねによそふらむといひたるに
 〇三あやめ草其根ならねど時鳥なき社しつれ元の人として
 〇こゝろうしとあもふ人のもとより梅をおこせた
 〇れば

吉野河己がみの泡に非ね共岩うつ波はいがく砕くる

また人に

眺むれば思知らるゝ世間のうきも哀れも知人ぞしる
人のつとめてのかへりごと

物にまで籠りたる局の傍なる人の語らばむな
どいふにあすはいでなむとてかくいふ

尋ずは待にも絶じ同じくばけふ暮ぬまの命ともがな
系にはなみといふところをかきたるに

よさの海の蟹の數多の眞手形にをりやさりけむ浪の花波
はしだてにうまにのりたる人あるところに

こまならむ人はなれたり行方なく船流したる天橋立
つくしなりける女京なりけるをここにかならず

あはむとたのめてこと人かたらひたりとさゝて
男のいひやる

頼むとて頼難きは此よ哉いかきの松に浪はこゆとも
八月つごもり人のもとはぎにつけて

限あらむ中は修く成ぬとも露けき秋の上をだにとへ
人のかへりごと

いづとなくさみ露けき花の上を何かは風に知せしむむ
ほうりんに籠りたるに傍なる局よりくだ物を扇
に

いか計り務むるもなき物をこは誰爲に拾ふ木實ぞ
おもはずにこゝろうき事ありければなむこゝろ
もゆかぬとおやだつ人のいひたるに

慰めにみづるにこすばつきませず憂身をのみやみぬ
山よりきたる人のよそながらはえなむとほるま
じきといひたるに

秋霧はたち隠すとも妹がすむならの都の道は忘れじ
人にたのめておもひにあはれなればいふ

頼めても修くのみぞ思復ゆるいつをいつとも知ぬ命を

たゞにある男のとかくあらむには必きてみむと
いひたるがそのほどになるにおそくきければ

徒に物をぞ思ふまづほどの命もしらざればや
おなじころとふべしとおもふにおとせぬに

ゆく末と契りしとは違ふとも此計りとふ人もがな
とかくあらむにはとはむといひし人のおとづれ
でやみにしかばほどへてかくといひやる

契しは飛鳥の淵の水なれやいつか此世に問人もなし
同じ人常に此方にも久しう見えねばかくいふ

我故に人の中さへたゆめれぞその報さへ恐ろしき哉
二月つごもりがたに人々きて物がたりなごして
花のちりにけるさうくしなどいふに

徒にかへらむ事を思ふ哉花の折にぞつくべかりける
靡げに惜し花の散にける枝にさへこそめは止りけれ
これを聞きて人さくらはいまさきなむちりにけ
る花をばなにかおもふといひけるに

まさ様にもさかばみにはみむ心に梅のかをば忍て
ものへいく人にあふぎたひとつとらすとて
二つなき心はみには見えじとて印し計にそふる扇ぞ
また

立歸り都の方へ急がすばいつあふとの有むとすらむ
おもへども思はずとのみうらむる人に

も草まことに我は思へどもさみ浅ましき淀の澤水
雨のいたうふるひ同じ心に眺むといひたる人に
人にだに問ふぞ怪しいか計眺續くる我とこそみれ
たちながら人のものなごいひて歸りぬる風めて
涙さへ出にし方を詠つゝ心にもあらぬ月をみしかな
かへされてなまねたうおもひけむよはくやし
かりけむかしなどいひたる人に

歸べき跡だに見えず繁ければ入ぬる人は惑ふ山路を
ものへいく人にまくらばことらすとて

人に頼めて思に哀れなれば宵に物にいきて曉方
にかへりて物がたりなどしてとほる人に
誰となく月をみつるをけきは先思おこせよこも彼處も
つらき事なきにしもあらぬ人のあぢきなくうら
みたるに
我爲に人の憂かとつらからば何事にかはつけて忍ばむ
なま心うしとおもふ人おほかたにきたるに
憂をせる心也せば世中に有鳥とのみ見てやみなまし
ちぎりしをなむたのむといひたるに
人をこそ思も出の身のうさにつけて計は忘れやはする
九月ばかりに人おそくあくとてかへりぬるに
秋夜も明てはやむきなきなばまてかしまきの計をだに
まわりたりしかど人のおはすとさゝしかば返り
にしといひたる人に
厭へ共限有けるみにしあれば有にも非で有を有とや
物思ふころやまでらにてかへるとて
何しかは又はきてみむ最どしく物思ひ増る秋山寺に
いみじものおもはむとちぎりたりし人のと人
かたらひたりといひつけておとせぬに
云しをぞ頼むやさらば人との恨はとふも有ぬ可れど
唯竹のまに人のきてとくかへりぬるつとめて
休らはでたつに立ちき横の戸をさし思ぬ人も有けむ
雪のいといたうふりてきえがたにはじめて人の
思ふ事のつもりぬる事などいひたるに
いっしかと譬ふる雪も消ぬるに上の空にも思ほゆる哉
かみまつる日人々きてかしのあをとりて歌
かきてとせむれば
神山の正木の蔓くる人ぞ先やひらでの數はかくなる
はかなうてたえにしをよここのもとよりあはれな
ることいひたるかへりと
頼べき方もなければ同世にあるは有ぞと思てぞふる

忘らるな浦島のか玉匣あけて恨みむかひはなく共
さしぐしのはこにかきて
様々に神をぞ祈るさし櫛のさしはなるゝが心細さに
三月晦方にちりはて方なる枝につけて人に
散にしはみにもやくると櫻花風にも當て惜みし物を
なま心うかりける人のもとへゆく
ある程の憂を見だに憂物をつらき心は留めてやゆく
すまよしにまでたりける人いとほごへていか
などいひたるに
忘草つむほとゝ社思ひしか覺束なくて長らへつれば
つものくになる人たびくふみやりしかば見ぬか
といひたるに
なには人何はの事をかけりけむ唯此度ぞみつの濱松
四月ばかり人きて夜更けて
夏夜を明も果てて行月をみにこむとだに思おこせよ
なごいでゆくとしてまづ戸を推したつれば女
斯計堪難くうきまきのとをさして行方ありげなる哉
梅の花ちりてくちをしかりし人のまた四月廿四
日の程にきたるに
今日も又何かはきつる一重だに散も残らず八重の山吹
をりからしたる枝はおかずやといひたれば
かさてのみはやまじと思へ枝をさへ折枯してぞあでの山吹
語らふ人多かりなごいはれける女の子生みたり
けるたれが親といひたりければ程へていかやさ
だめたる人といひければ
此世にはいかゞ定めむ自ら昔をとほむ人にとへかし
こむとたのめて見えずなりにけるつとめて
水難だに敲く音せば横のとを心遣にもあけて見てまし
語らふ友たち二三人きあひたりとさくにいひや
る
語はと劣らじ物を何事をいふともいふと云交すらむ

くらき夜ほととぎす待つころ
 〇暗き夜は見れども見えず郭公孰く計に鳴てきぬらむ
 たちばなのもとにて
 一こゝにして待ち心みむ時鳥花立花のかをにくしとや
 ほととぎすの聲を山べにたづねにいくを聞きて
 一時鳥きつときかばその山の麓に我は家居しつべし
 物いみにてこもり居たる人のもとよりことづて
 やらむほととぎすのこゑきけといひたるに
 二心してきくべかり時鳥その一こゑに通ひけりやと
 かならずこむとたのめしをそこそひ
 一暮ぬまの命もがなぬぬる夜は忘に鳥さあすこそはいへ
 けさうする人のきて物などいひたる程にこと人
 のきぬればこれかたれち分るゝ程に扇を互みに
 とり更へてけり風めて始の人にいひやる
 一語はむ人もなかりつとるかふと思しはゝや扇なる扇
 をとここれなどはかすてつるとりにたまへと
 かへなく鳥も無らむ島にては此かはほりも君も尋む
 一六人もなく鳥も無らむ島にては此かはほりも君も尋む
 あめいといたうふりうらめしきことやありけむ
 みをしるなごいひたりければ
 一うかる身の雨の下にもふれば猶人は身をさへ知せてしがな
 五月ばかりきよみづにこもりてかたはらのつば
 ねをかたらひていへとて御前にあたるにいひお
 こそたる、あめうちふるほどなり
 一やがてこそかき曇りぬれ郭公なき別れつる東雲の空
 男おもひしりなむとおもひしにつれなきことな
 一どいひたれば
 一哀をばしらぬならねど如何せむ只思へかし懲ずまにやは
 月いとあかき夜人のもとよりその人ともわきて
 一またじかしといひたるに
 〇宵事に君をこそまてこと人は

人のふみのあるを見て六月はかり
 二庭の儘生ふる草葉をわけきたる人も見えぬに跡社有けれ
 いまはほかにとくく人のもとに夕暮にいひやる
 一夕暮は人の上さへ歎かれぬまたれし頭に思ひ合せて
 七月一日人に
 一今宵より誰を待たまし早晩と萩の葉風は吹むとす覽
 秋花どものさきたるに山菅のさきたるをみて
 一音きけば人の物思ひ山すげの心み顔にさける花かな
 人のもとにその夜
 一唯にしも星合の空を詠めじな天の河風さむく吹く也
 いと徒然なる夕暮にはしにふして前なる前裁ご
 もを唯にみるよりはとて物にかきつづけたればい
 とあやしうこそみゆればばれ人やはみる小き松
 一に
 一後々もまつ計りこそ忍はめと恨むるよりも頼しき哉
 一たけ
 一有し人あらばきなまし風吹けば上打戦く竹のよ事に
 かしは
 一柏木は宿に堀植えむ下草をかりに人くるなのみ也見
 一はき
 一今かば人もきてみむ秋萩の下葉の色は我のみぞみる
 やまぶさあやしう咲きたるところなり
 〇蛙なく井手に習へる山吹は蟲の聲する秋も咲きけり
 一まゆみいろつきたり
 一開よりもまたき檀の色づくは秋に入日に露や置らむ
 一あちすち
 一三木傳ひし梅をば置きて此たにも鶯の木と人しいふ覽
 一のきのくものい
 一思はじを荒たる宿に搔弄す蜘蛛のいかきに風し溜らは
 七月七日たなばたまちとほにおもふらむと人の
 いひたるに

一彦星は思ひもすらむ中々に秋は今宵の變、ましかば
 この頭ものいふこゑを立ちきゝて人の聞えむな
 一どいひたるに
 一萩の上に露置そへし、鴈音の上の空にも聞てけるかな
 一なき事負ひてなげくと聞きてわれをあまがつに
 一せよといひたるに
 一あまがつにつくと盡し憂事はしなごの風ぞ吹も拂はむ
 一をさなきちこの病みけるをあはれとおもふべき
 一人の聞きていかゞといひたる
 一いか計思ひ置くと見えざりし露に色へる撫子の花
 一いまよりはちよぞへむといひたるに
 一あちよふべき小松ときけは今よりは唯朝夕の草と頼まむ
 一ぬれ衣をのみきるといまはよらへすてゝむと人
 一にいひてのちいかなるとかありけむなほこりず
 一まのわたりなりけりといひたるに
 一三重ねつゝ人のきすれば濡衣をいさほしたに思おこせよ
 一このころ袖の露けきなどいひたる人に
 一秋は猶思ふとなき萩の葉も末挽むまで露は置きけり
 一人にしたくづれたるといひたるにそなたなむ疑
 一がはしきといひたるに
 一其方より涙かく共今はよに我かたききの松はこせせ
 一うしろめたき心あるをわかこころそへてみてし
 一がなといひたるに
 一引かへて心の内はなりぬとも試みならば試みてまし
 一はりまのひじりのもとに
 一舟よせむ岸の知べも知ずしてえも漕よらぬ播磨海哉
 一しぐれいたちふる日はやう見し人に
 一ひまもなくしぐれ心ち降難く覺ゆる物は昔也けり
 一こぞの春いし山に詣てたりし山中にとまりて
 一休みなごせしを又の年の秋前を渡るにさぞかし
 一と思ふに哀にてとはすれば人なしすゝさぞなき

けなげにすくみてたてるにかきてむすびつづ
 一すきゆけ、招く尾花もなかりけり哀也しは花の折哉
 一みちのくにのかみにてたつをきつて
 一諸共にたゝましものを陸奥の衣の關をよそにきく哉
 一うめさくらいづれおもしろしと人のいふに
 一櫻より色はさこそはふかからめ香さへとなり紅の梅
 一さりにけるをこのとほきところへゆくをいか
 一とおちふといひたれば
 一別れても同じ都に在しかばいと此度の心ちやはせし
 一雨のいといたらふころ
 一いかにせむ雨の下社住れば袖のみまなく濡つゝ
 一權中納言の屏風のうたさくらさきたるいへにま
 一らうどおほかり
 〇植、植ば斯れとぞかし櫻花々にと社は人のきつらめ
 一まつにふちかゝりたる所人々おほくよりて見る
 一とは藤散で千年を過ぎなむ松の常磐にきつゝ見へく
 一人の家にきんひきふえふきてあそびしたり
 一笛のねは紅葉をふくに非ねど響に枝も動くつき哉
 一いとほかなきところにて人に物いひて
 一現こそ儂かりけれ夢をだにいで社人は見ると云なれ
 一花山院哥合七月七日
 一天の原今宵眺めぬ人ぞなき戀の心をしるもしらぬも
 一人のかへりとに
 〇よの常のとも更に思ほえず始て物を思ふあしたは
 一ゆふぐれにきこえさす
 〇眞玉しもか計社は有ましか思ひもかけぬけふの夕暮
 一鳥の聲に課られて急ぎ出て、憎かりつればこころ
 一しつとてはねにふみをつけてたまへれば
 〇如何とは我社思へ朝な／＼なほ聞せつる鳥を殺せば
 一月あかき夜あるやうあり
 〇一夜みし月ぞと思へど詠れば心は行ずめは空にして